

東アジアの知識交流と歴史記憶



동북아역사재단  
NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION



동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

東北亜  
歴史財団  
学術会議  
資料集

# 東アジアの知識交流と 歴史記憶

東北亜歴史財団 編



동북아역사재단  
NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

## 刊行の辞

2008年12月5～6日の二日間にわたり、東アジア歴史研究フォーラムと東北亜歴史財団が共同開催する「東アジア知識交流と歴史記憶」国際学術会議がソウルで開催されました。日本、韓国、中国、台湾の地域から計60名の研究者の方々にご参加頂き、4つのセッションと8つのパネルに分け、計35編の論文を発表しました。

会議では東アジアの知識交流の歴史を確認し、歴史に対する集団記憶が形成され作動するメカニズムに対し議論しました。これは東アジアの歴史の経験と記憶を共有することで、終局的には東アジアに内在している歴史の葛藤問題を解消する努力の一環でした。参加者の多くはこのような主催者側の主旨に共感し、大変ハードな日程の中、真摯な発表と討論が行われました。

東アジア歴史研究フォーラムと東北亜歴史財団は今後もこのような大規模な国際学術会議を引き続き開催する予定です。今年は“歴史の視角からみる‘東アジア世界’のアイデンティティと多様性”をテーマに国際学術会議を開催します。

東アジア地域の歴史研究者がこのように一堂に会し、東アジアの歴史を議論し、コミュニケーションをとることは、これまでの歴史の葛藤を解消し、東アジアの歴史を正しく再認識するためです。このような学術活動を通じて、歴史の和解と東アジアの平和の確固たる基礎を築けると信じております。

東北亜歴史財団は2008年度の国際学術会議の成果を広めるため、発表された35編の論文の中から13編を選び、単行本の出版に至りました。日本語、中国語、韓国語の3か国語で同時に出版します。単行本の出版に快くご参加下さり、お忙しい中、玉稿の手直しにご尽力くださいました筆者の皆様に深く御礼申し上げます。紙面に限りがあるため、一冊の単行本に適切な13編の論文を掲載することになり、大変残念なことに、素晴らしい原稿を断念せざるを得ませんでした。何卒、ご了承くださいますようお願い申し上げます。

東北亜歴史財団は、今後も財団の研究成果だけでなく、学界の優秀な研究を持続的に支援し、より多様な結果を出し、東アジアの正しい歴史認識を高揚すべくリードして参りたいと存じます。この小さな実がどうか東アジアの歴史研究を活性化させる一つの土台となることを願ってやみません。

2009年 10月 28日

東北亜歴史財団 理事長

鄭在貞

## 目 録

### 第1部 海外情報と知識の流通

- かわら版(木版印刷物)にみる江戸庶民に 田中葉子  
とってのペリー来航
  - 1. はじめに—本稿の課題 13
  - 2. かわら版とは 13
  - 3. ペリー来航経緯と研究史の整理 17
  - 4. 黒船かわら版の製作と板行 19
  - 5. 黒船かわら版の内容分類 22
  - 6. 蒸気船図 26
  - 7. アメリカ人物図 28
  - 8. 結び 36
  
- 漢訳洋学書と19世紀日本の出版文化 八耳俊文  
—ホブソン書を中心に
  - 1. はじめに 38
  - 2. ホブソン書の成立 39
  - 3. 漢字文化圏への広がり 43
  - 4. 日本への広がり 50

- 日本からの近代技術・知識の受容, 許東賢  
 そしてもの変容  
 -1876~1884年間の遣日使節を中心に
  1. 序論 62
  2. 東道西器論者の近代技術受容論 65
  3. 近代知識・技術の受容による国民国家樹立論 72
  4. 岩倉使節団との比較からみた朝士視察団の限界 79
  5. 結論 86
  
- 近代における早稲田大学の中国人留学生 楊寧一  
 -1899~1931年を中心に
  1. 近代中国の留日運動における早稲田大学の位置づけ 90
  2. 『校友会員名簿』が映し出す早稲田大学の中国人留学生の基本状況 93
  3. 早稲田大学の中国人留学生の各領域における中国近代化に対する貢献 96
  4. 早稲田大学の中国人留学生の後進地域発展に対する推進 107
  5. むすびにかえて 110

## 第2部 アジア主義の連鎖

- 「小日本主義」、「中帝国主義(財界提携による戦争抑止論)」、「大亜細亜主義」 松浦正孝  
 -近代日本におけるアジア主義の3つの可能性
  1. はじめに 115
  2. 「小日本主義」―「旧外交」的な三浦鏡太郎から「新外交」的な石橋湛山へ 119
  3. 「大日本主義」から「大亜細亜主義」へ―宇都宮太郎と松井石根・大亜細亜協会 141

4. 「中帝国主義(財界提携による戦争抑止論)」	163
5. おわりに	175
●柳泰慶と『亜細亜公論』 羅京洙	
- 東アジア知識交流史の新たな発見	
1. はじめに	178
2. 知識人「柳泰慶」：その人物と活動	179
3. 雑誌『亜細亜公論』：東アジア知識人の交流空間	188
4. 『大東公論』という雑誌	202
5. おわりに	204
●大正期在京台湾人留学生とアジア 紀旭峰	
- 雑誌『亜細亜公論』を手がかりとして	
1. はじめに	206
2. 戦前台湾人の「内地日本」留学	209
3. 専門部政治経済科と近代台湾の啓蒙運動	216
4. 『亜細亜公論』にみるアジア知識人の対話	223
5. むすびに代えて	233

### 第3部 歴史上の相互認識と歴史記憶

●近世日本の朝鮮認識 宮嶋博史	
- 壬辰倭乱の記憶を中心に	
1. はじめに	239
2. 壬辰倭乱に関する各種記録	241
3. 徳川幕府と大名による公的記録	245
4. 新井白石の認識	251

5. 明治維新以後への展望	254
6. 現在の問題	256

● 清末中国における“アジア”論によって引き継がれた“歴史の記憶” 章清

－“他者”としての日本と朝鮮を併せて論じる

1. 「天下」：居場所を欠いた「アジア」	259
2. 世界構造の中の「アジア」	266
3. 日本由来の「東洋史」	275
4. 「アジア」としての中国	283
5. 「他者」としての日本・朝鮮	290
6. 余論	307

● 安重根と中国 王元周

－程済『安重根』を中心として

1. はじめに	311
2. 編者と出版時期について	315
3. 主旨と意義	327
4. おわりに	342

● 日中戦争直後における植民地朝鮮人の「満州」および「中国」認識 柳時賢

－崔南善の紀行文を中心に

1. はじめに	344
2. 日中戦争と植民地朝鮮人の「国境越え」	347
3. 北東アジア国際関係における植民地朝鮮（人）の位置づけ	356
4. 満州と中国東北地域に暮らす朝鮮人の活動に対する認識	365
5. おわりに	375

● 植民地経験のなかの「個人的記憶」と 李承機  
「集合的記憶」

－戦後台湾の「歴史的記憶」の形成と変遷

1. 『海角7号』が喚起する「記憶」 378
2. 「被抑圧」の「集合的記憶」から抗日の「歴史的記憶」へ 383
3. 戦後成長した「集合的記憶」から多元対立の「歴史的記憶」へ 391
4. おわりに—隠喩の植民地「歴史的記憶」 400

● 歴史対話論 齋藤一晴

－日中韓共通歴史教材開発の成果と課題を例に

1. はじめに 403
2. 東アジアにおける共通歴史教材作成の到達点と課題 405
3. 『未来をひらく歴史』という歴史対話 410
4. 共通歴史教材の作成から歴史対話論へ 415
5. おわりに 420

# 第1部

## 海外情報と知識の流通





동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

# かわら版(木版印刷物)にみる 江戸庶民にとってのペリー来航

田中葉子(東京大学)

## 1. はじめに—本稿の課題

嘉永6年(1853)および翌7年の2回にわたり、ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊が日本へ来航した。今日「黒船来航」と呼ばれているこの出来事は、当時の日本人、特に江戸庶民にはどのように捉えられたのだろうか。本稿では、この点について、19世紀半ばの日本人庶民が新しい海外情報を獲得していった事例として、ペリー来航に際して板行されたかわら版から考察する。

## 2. かわら版とは

かわら版とは、近世期には「摺りもの」「読売(よみうり)」などと呼ばれており、火事や地震などの災害情報

や珍しい事件など主に時事的な内容を記事にして廉価で販売した、1枚摺りまたは23枚綴りの木版印刷物である。<sup>1</sup> その嚆矢は、元和元年(1615)の大坂夏の陣に際して板行された「大坂卯年之図」であるといわれる。1680年代に火事の焼場所や心中事件のかわら版が多数板行され、以後、落書や錦絵(木版の浮世絵)とともに都市部のメディアとして定着していった。ペリー来航当時の出版物には検閲制度があったが、かわら版は板行許可である「改(あらため)」を受けていない違法出版物であり、たびたびの禁止令が出されていた。しかし、ペリー来航の頃、このような違法出版に対する刑罰は主に罰金刑であり、かわら版を板行する側には板行が露見した場合でも罰金さえ払えばよいとの見込みもあったものと推測される。

かわら版の定義としてしばしば引用されるのが、中山榮之輔による以下の4点の指摘である。<sup>2</sup>

1. ニュース性をもっていること。
2. 即製に摺られたものであること。
3. 無届け出版であること。
4. 有料であること。

- 
- 1 かわら版に関する研究は、小野秀雄『かわら版物語』(雄山閣、1960年)に代表されるように、新聞前史としての位置づけから始まった。1990年代には都市におけるメディアとして、その情報伝達の形式が注目され、1990年代後半から2000年代にかけては、情報史研究での一素材として取り上げられることが多い。近年、同じく木版印刷のメディアである錦絵の時事性が指摘されており、かわら版とは何かということが再検討される段階にきている。
  - 2 中山榮之輔『江戸明治かわら版選集』(人文社、1974年)。

本稿では3点目に重点をおいて、改をうけていない木版印刷物をかかわら版として検討する対象とした。

かわら版の史料的特質として、次の3点を指摘することができよう。

一点目は、中山定義の4と関わるが、商品であったという点である。個々のかわら版に販売値は記載されていないが、当時の諸記録から「6文」「8文」「2枚で16文」などの値段が確認でき、非常に廉価なものであったといえよう。また、記述には平仮名が多用され、当時の都市部における識字率を考えれば、購買層として庶民が想定されていたことが伺える。売り物として利益をあげるためには、かわら版の製作者は、買い手である庶民が何を求めているのか、何に興味を示すのかということを見捨てるわけにはいかず、かわら版の内容は買い手の受容し得るもの、彼らの嗜好や興味関心を反映しているものといえる。かわら版でどのように記されたかは、その出来事が庶民にどのように認知されたかを示しており、歴史史料として、当時の庶民の意識や情報のあり方を考える格好の材料といえるだろう。

二点目は、木版印刷物であった点である。印刷物として同内容のものが複数製作されるため、多数の人が目にすることになる。その分、販売地域の庶民への影響も大きく、また、より多くの庶民の意識が反映されているとも考えられるだろう。

三点目は、中山定義の3と関わるが、板行者が明記されていない点である。改を受けて板行された出版物には、その版元(出版者)・著者・絵師・板行年とが明記されるが、かわら版にはこのよ

うな板行者の情報は記されていない。当時、時事的な内容を1枚摺りなどにして出版することは認められておらず、庶民が欲した時事的な情報は、その匿名性ゆえに表現できたと考えられる。逆にいえば、かわら版となった時事的な内容は当時の庶民の好奇心や関心、情報に対する欲求を反映させているといえよう。ただし、この匿名性がかわら版による幕政批判を可能にしたかという点については、否であろう。かわら版紙面に板行者が明記されなくとも、販売の際に売り手と買い手の接触があるため、捜査されれば板行者は判明することとなる。かわら版板行者は、その内容によってどの程度の処罰を受けることになるか当局の対応を見ながら板行したのと考えられ、幕政批判は、かわら版よりもさらに匿名性の高い肉筆の落書に現われることとなる。

このような1枚摺りまたは数枚綴りの民衆の読み物は、ヨーロッパでは15世紀末から17世紀後半にかけてドイツのフルッグブラット Flugbratt (1482年のものが最古といわれる)、イギリスのブロードサイド broadside など各国で発行されたが、東アジアでの同種の印刷物の板行については筆者は未見である。中国清朝末期に新聞『申報』(イギリス人商人メイジャー兄弟 Ernest Major, Frederic Majorにより同治11年(1872)創刊)から発刊された画報『点石齋画報』は、その内容はかわら版と通じるものがあるが、新聞社からの正規刊行物ということから、日本近世のかわら版よりも明治期の『錦絵新聞』に近いものといえそうである。

### 3. ペリー来航経緯と研究史の整理

つぎに、ペリー来航経緯について概観しておく。

東アジアでの軍務、特に日本遠征のため1852年11月24日にアメリカのノーフォークを出港したマシュー・C・ペリー Matthew C. Perry 提督は、喜望峰、香港、那覇を經由し、嘉永6年6月3日(西暦1853年7月8日。以下、日付は日本暦で記す)、アメリカ東インド艦隊の軍艦四隻で江戸湾の入口に位置する浦賀<sup>3</sup>に來航した。艦隊の編成は、汽走軍艦が2隻、帆走軍艦が2隻であった。ペリー艦隊が江戸近海に現われると、直ちに沿岸の警備を担当する大名家4藩(忍・川越・彦根・会津藩)や浦賀奉行から幕府に報告が入り、江戸の人々は浦賀と江戸との間をあわただしく使者が行きかう様を目にすることとなった。翌4日、老中らが登城して衆議をおこない、江戸市中に対しては、諸物価高騰や噂話の禁止、船を持つ者には見物船をだすことの禁止が触れられたが、異国船見物に出かける者は跡を絶たず、江戸庶民の耳目を集めた異国船の噂はかわら版の板行を促すこととなる。來航から6日後の6月9日、ペリーは久里浜でフィルモア大統領からの国書を日本側代表(浦賀奉行戸田氏栄・井戸弘道)に渡し、翌春の來航を伝え、6月12日、滞在9日間で退帆した。6月22日には將軍家慶が

---

3 江戸から約70キロメートル南方に位置する港。船番所が置かれており、ペリー艦隊以前にもアメリカ捕鯨船マンハッタン号(1845年)、アメリカ東インド艦隊コロンバス号・ピンセンス号(1846年)が來航している。

死去するが、幕府は翌年の来航に備え矢継ぎ早に行動していく。大名・幕臣へのアメリカ大統領国書の回覧と意見の諮問(6月26日から)がなされ、これには大名だけでなく江戸町人にいたる約800通の建白書が出された。また、将軍の居城である江戸城に近い江戸湾内の警備を強化するため、11の台場を造ることを決定し、8月から建設を開始する。11月14日には台場築造に合わせて江戸湾防備の比重を江戸湾内海に移し、警備担当藩の大規模な配置換えが行われた。これらの動向は江戸市中の関心を集め、その都度かわら版に取りあげられている。翌7年1月16日にペリー艦隊が浦賀に7隻で再来航した。この時の編成は、汽走軍艦が3隻、帆走軍艦が2隻、輸送船が2隻であった。のちに帆走軍艦1隻と輸送船1隻が加わり、計9隻の編成となった。2月からは横浜村での交渉が始まり、日米での贈り物の授受が行われた。3月3日に横浜で日米和親条約が調印されると、ペリーは開港が約束された下田と箱館を視察し、5月に下田で和親条約附録を調印した。ペリー艦隊は約半年間の日本滞留を経て6月4日に下田を出港し、琉球との修好条約も締結して帰途についた。

ペリー来航に関する研究はすでに明治期からの蓄積があり、ペリーがアメリカ議会に提出した報告書『ペリー艦隊遠征記 Narrative of the expedition of an American squadron to China seas and Japan, in the year of 1852, 1853, and 1854』や浦賀奉行の書簡をはじめ、日米双方の資料も多数翻刻され、事態の具体的な推移が明らかにされてきている。近年では、江戸湾警備に関わる諸藩や近郊の村の動向に関する研究や、ペリー来航情報伝達の様相を検討した研

究がさかんである。<sup>4</sup> ペリー来航から幕末維新时期という変革期を庶民自身がどう捉えたのか、また彼らの生き方がどの様なものであったかを、庶民自身の記録した書簡や日記、あるいは錦絵やかわら版などのメディアから考察する研究も進められつつある。<sup>5</sup>

本稿で取り上げるかわら版は、江戸庶民が手にしたペリー来航情報がどのようなものであったのかを具体的に知ることのできる歴史史料といえる。しかし、当時出回ったかわら版の全貌は、いまだ明らかになっておらず、歴史史料として十分に活用されているとは言いがたい。以下、本稿では、黒船かわら版の全体像を捉えたうえで、蒸気船図とアメリカ人図について具体的な検討を行うこととする。

#### 4. 黒船かわら版の製作と板行

本稿では、ペリー来航に際して板行されたかわら版を黒船かわら版と総称する。「黒船」と冠したが、かわら版の内容はペリー艦隊の船に限定されるものではない。ペリー来航当時、ペリー艦隊の船に対しては主に「異国船」・「亜墨利加(あ

- 
- 4 近年の研究書のみ挙げる。三谷博『ペリー来航』(吉川弘文館、2003年)、加藤祐三『幕末外交と開国』(ちくま新書、2004年)、岩田みゆき『黒船がやってきた』(吉川弘文館、2005年)、岩下哲典『幕末日本の情報活動(改訂増補版)』(雄山閣、2008年)。
  - 5 佐藤誠朗『幕末維新の民衆世界』(岩波新書、1994年)、高橋敏『幕末狂乱』(朝日新聞社、2005年)、若水俊『江戸っ子気質と鯨絵』(角川学芸出版、2007年)。

めりか)蒸気船」との呼び方が用いられており、「黒船」と表現することはごく稀であった。本来「黒船」という語は、近世日本ではヨーロッパの船を指して使われた言葉であって、ペリー艦隊のみを意味する言葉ではない。「黒船かわら版」という語はペリー来航当時の用語ではなく、研究史上で「黒船」の語がペリー来航を指して使用されていることによるものである。

現存する黒船かわら版は個人および諸機関によって所蔵されているが、ペリー一行が訪れた地域の博物館や資料館での所蔵が多い。管見では370種、1000点あまりに及ぶ。日本国内の諸機関に所蔵されているかわら版のデータベースである東京大学史料編纂所附属画像解析史料センターによる「摺物総合編年目録(2稿)」(2000年)には、ペリー来航の際のかわら版が271点採録されている。目録に採録されたものには、筆者が未調査のものもあり、管見のかわら版と目録採録だが未調査のかわら版とを合わせると、400種類以上の黒船かわら版の現存が確認できるものと推定される。仮に1版本から1杯<sup>6</sup>(2百枚)刷ったとして総数約8万枚、現存しない版が存在することも考慮すると、ペリー来航当時は10万枚を超えるかわら版が出回っていたものと推測される。ペリー来航以前のかわら版の板行量と比較すると、黒船かわら版の板行量は10倍を超えており、量・種類とも著しく増加している。このことは、庶民がペリー来航に高い関心を寄せていたこと、また、かわ

---

6 錦絵の1回の刷り出し量。通常2百枚。墨単色刷りのかわら版の場合は、もっと多く刷り出された可能性も高い。

ら版が当時の庶民の情報源として盛んに用いられていたことを示しているといえるだろう。

当時の記録類から、かわら版の板行時期、板行方法、板行地域について確認しよう。

江戸神田の古本屋藤岡屋由蔵の情報記録「藤岡屋日記」には、すでに1回目のペリー来航中である6月11日の晩にかわら版販売がなされた記載が見られ、<sup>7</sup> 他の日記類からも、第1回目の来航中から2回目の来航期にかけて継続的に黒船かわら版の製作・板行がされていたことが確認される。<sup>8</sup> また、出版物の改を担当していた絵草紙掛名主から江戸町年寄へ提出された嘉永6年11月の伺書からは、<sup>9</sup> 黒船かわら版の製作や販売の様子がうかがえる。それによると、正式な板木彫職人ではない武士が内職で板木彫りにたずさわり、板行許可を得ない無改のかわら版が本屋で隠売され、或いは人通りの多い往来での販売がなされている。違法出版物であるかわら版だが、江戸の本屋がその需要を見込んでかわら版の板行に関わっていた様子が伺える。なお、板行地域は江戸を中心としているが、江戸を訪れた旅人が地元へ持ち帰るなどして、黒船かわら版は日本各地に流布していったものと推測される。

---

7 『藤岡屋日記』第43冊「嘉永6年 海防全書 上」。

8 江戸の国学者喜多村信節の随筆「ききのまにまに」嘉永6年10月の条や、土浦の商人色川三中の日記「片葉雑記」嘉永七年4月29日の条に、黒船かわら版板行の記載がみられる。

9 『市中取締類集 書物錦絵之部』第273件(626)「絵草紙掛名主伺書」。

## 5. 黒船かわら版の内容分類

黒船かわら版の内容は、ペリー一行に関するアメリカ側情報、幕府の対応に関する日本側情報、ペリー来航に関連するさまざまな事柄を使った娯楽的なものとに3分される。

1つ目のアメリカ側情報は100種余りみられ、蒸気船をはじめとするペリー艦隊の船、ペリーやその一行の風貌、持ち物、言葉、横浜上陸の様子、アメリカから日本へ贈られた物などの解説である。

艦隊の船についてのかわら版は約50種類。ボートや帆船についてのももあるが、ほとんどは蒸気船に関するものである。V章で検討するように、1回目のペリー来航直後のものと2回目の来航時のものとは、その画像に大きな変化が見られる。ペリー一行の風貌に関しては人物図が20種。ペリーと副官アダムスH. A. Adams中佐など個人名を記した肖像画と、個人名の記されないアメリカ人兵士像が見られる。衣服や帽子、持ち物の図解もあり、特に服装や帽子に関しては、それらの形が階級により違うことが記されている。特に帽子についての紹介が多く、これは装飾的で絵にしやすかったためでもあろうが、日本人が帽子を被らないため異国性を感じさせるものであったことが大きな要因であろう。人物図と異国性についてはVI章で検討する。「アメリカ言葉和解」として単語を紹介するかわら版も10種が現存している。単語には正確な英語のものは少なく、かわら版でのアメリカ言葉は、その単語をアメリカ人との会話に実際に使用するためのものではなか

った。単語集には「めでたい事を きんば」「うれしい事を さんちよろ」と紹介しているが、言葉の意味ではなく耳慣れない音の響きが楽しまれたものと思われる。アメリカ言葉のかわら版は異国紹介の一環であり、異国趣味を満たすためのものだったのであろう。かわら版に紹介されている言葉は、父親・母親・米・酒など日常生活に関わる単語ばかりである。かわら版に紹介された身の回りにあるものの名を異国的な言葉で確認するとき、かわら版の買い手にとって異国アメリカは身近にイメージできるものとなったのではないだろうか。幕府への贈り物も、物品名の一覧や図解を伴ってかわら版に紹介された。2回目の来航の際には模型の蒸気機関車(1853年、フランス・ノブリス工場製作)が贈られ、何種類ものかわら版が作られている。この蒸気機関車は実物の4分の1の大きさであったため車のなかに人が入ることはできなかったが、日本側役人たちが屋根の上に乗って楽しんだことがペリーの日記に記されている。かわら版に描かれた蒸気機関車は大きく、人が内側に乗った状態で描かれている。客車に「遊山屋形船」と記されたかわら版もあり、ペリー自身は西洋の工学の先進性を誇示する意図で贈った模型が、江戸庶民には屋形船や御輿の様に受け止められていることが伺える。

2つ目の幕府側情報は130種余りだが、その約4分の3~100種余りが浦賀や江戸湾周辺の防備に関するものであり、ほかに、幕府とペリーとの交渉に関するものが20種、町触を刷りものにしたものが10種ほどである。

江戸湾の海岸防備は当時「御固(おかため)」といわれ、浦賀奉

行ら諸役人の名と海岸警備についた各藩を一覧にした役人付(やくにんづけ)や、それを地図に記した御固図が板行された。各藩の警備担当場所については何度か配置換えがあり、持場の異動から、そのかわら版がいつ頃の状況を記したものがわかるが、2回目の来航後の嘉永七年1月15日から2月迄のものが多く残されている。江戸防備のため内海に建設された台場についても、その予定地や規模などを記したかわら版が作られている。幕府役人とペリー一行との交渉を描いたものとしては、上陸した横浜での応接の光景や、食事の接待の様子などが紹介された。幕府からアメリカ大統領らへの贈り物の一覧も作られたが、それらには日本人武士に平伏するペリーの図が頻出する。

3つ目の娯楽的なものは約120種あり、ペリー来航に関連するさまざまな事象を主題あるいはモチーフとして、言葉遊びや見立て(パロディ)としたものである。

言葉遊びは、版の多い順に、狂歌、端唄、鎖文字、<sup>10</sup> 吉原言葉、<sup>11</sup> 芝居の台詞のもじり、川柳、謎掛け問答、小噺などがあり、約80種。娯楽もののかわら版の七割以上が言葉遊びであり、種類数・点数とも特に狂歌が多いことが確認できる。狂歌にはその

---

10 一見ばらばらに並べられたように見える漢字をある順序に従って読むことで意味が読み取れる仕組みとなっている漢詩。原形は、吉備真備が唐からもたらしたという難読の予言詩「野馬台詩」であり、ペリー来航時には縦3字・横3字の9字を使った変形版が作られている。

11 遊女が客に話しかける艶っぽい言葉に続けて、時事的な言葉を取り合わせたもの。その取り合わせの意外性が眼目のため、一読して判りやすいものとなっており、一言一言は短い。

時々には噂になっている事物が取り上げられており、1回目のペリー来航直後である嘉永6年6月頃には蒸気船を詠みこんだ狂歌が、8月頃からは台場築造を詠んだものが多数作られている。<sup>12</sup> 見立てものは、証文、大小暦、武鑑、<sup>13</sup> 寺仏の縁起書、艶書(恋文)、引札(広告)、番付などに見立てたものがあり、約20種。身近にあったものを元に、技巧に凝ったものが作られている。この他に、戯画やアメリカ人を捕縛・撃退する読み物なども見られる。

以上、黒船かわら版の内容について概観したが、多種多様なものが板行され、ペリー一行や幕府側の対応に関する情報だけでなく娯楽性の高いものも多数板行されたことがわかる。

先述したように、現存する黒船かわら版には、ペリー艦隊について説明するものが100種余りみられる。その半数の50種類は蒸気船を主として艦隊の船を描いたものであり、ペリーの肖像をはじめとする人物図が20種、アメリカ言葉の単語集が10種みられる。ペリー来航以前の日本において、異国に関する情報は船・人・言葉をセットとしていることが多く、黒船かわら版においても同様の関心が現われている。船・人・言葉を知る事で異国を知る、という意識の枠組みが存在していたということもできるだろう。Ⅵ章・Ⅶ章では黒船かわら版でのアメリカ船図・アメリカ人物図について検討していこう。

---

12 拙稿「娯楽ものが作る「ペリー来航」—黒船かわら版の言葉遊びと見立てものの検討」(『日本史論集』10号、立教大学日本史研究会、2006年)。

13 武家の姓名・紋・居城・家臣名などを記した書。

## 6. 蒸気船図

図1「アメリカ蒸気船之図」は、嘉永6年の1回目のペリー来航に際して作られたかわら版である。ずんぐりとした黒い船体をもち、三本マスト1杯に張られた帆は風をはらんでいる。ロープをつたう黒ン坊や遠眼鏡を覗く人物、オランダ東インド会社のマークであるVOCもどきの旗が描かれており、当時の江戸庶民が抱いていた南蛮船・オランダ船のイメージを下書きに描かれている。しかし細部をみていくと、長崎絵<sup>14</sup>などのオランダ船図に見られないものが描きこまれている。1つは、船体に付いた2つの車輪であり、紙面の記述には、「アメリカ蒸気船」には10間の「水車」が4つ或いは2つ付いているとされている。1回目のペリー来航後の蒸気船図では、外輪の形や数はまちまちであり、多いものでは6つもの車が描かれている。オランダ船図と異なるもう1つの点は、甲板上の煙突から激しく噴き上がる煙である。オランダ船図には甲板に短い煙突と白い煙が描かれているものがあるが、それは船内での炊事用の煙である。それと比べて、蒸気船図に描かれた煙突と煙は大きく、黒煙を上げているものも見られる。煙突と煙とが強調されており、当時の江戸庶民にとってペリー艦隊の蒸気船は、オランダ船に車が付き煙を噴きあ

14 近世日本では長崎においてオランダ東インド会社との交易が行われており、オランダ人図・オランダ船図などを色刷りの木版画にした長崎絵が土産物として作られた。

げている船として認識されたことがうかがえる。

しかし2回目のペリー来航時には、この蒸気船イメージが大きく変わることとなった。図2「外輪車・黒船図(仮題)」を見てみよう。長く伸びた船体は、実際の船型に似ているようだが、図1と見比べた際に大きく異なっているのは、その形体の違いよりも、画面から受けるスピード感であろう。黒々とした船体の周りには砕ける波が描写され、覆いのある外輪も波しぶきをあげている。煙突からはもうもうたる黒煙が後方へたなびき、星条旗もどきの旗を連ねたロープは後方へ弧を描いている。まさに蒸気船が疾走している様が絵にされている。注目すべきは、すべての帆がたたまれたままである点だろう。図1は後方からの風を帆に受けて進む帆船の図であり、旗は船首側へなびいている。逆に、図2では旗や煙は後方になびき、帆を張らず風を切って疾走する船の図となっている。イラストレイテッド・ロンドン・ニュース The Illustrated London Newsなどに描かれたペリー艦隊の船は帆を張った状態で描かれ、特に汽走の要素を描くものではないことと比較してみれば、図2の蒸気船図は、帆を張らず、つまり風向きに左右されずに高速で進む船として、蒸気船の機能面を絵として強調したものであるといえよう。紙面上部には「1時30里1昼夜360里ヲ走ル、風雨[逆]浪ヲ不厭、発ル時ハアタカモ大海ヲ龍ノ渡ルガ如シ」との記述もみられる。

このように、1回目のペリー来航直後、外見上の特徴が強調された蒸気船像がかわら版となり、江戸の人々は既存のオランダ船のイメージをもとに蒸気船を理解しイメージしようとしたことが

確認できる。そして2回目の来航後には、汽走という機能面が強調された新しい蒸気船像が広まった。このような画像の変化をもたらした情報源は未だ不明だが、新たな蒸気船像には大海を龍が渡るようであるというイメージが伴なわれているといえよう。黒船かわら版の蒸気船図は、より新しい知識が情報として積極的に盛り込まれること、そしてそれは何らかのイメージとともに江戸の人々に受容されていくことを示しており、蒸気船図以外のかかわら版についても個々の内容の検討を行えば、ペリー来航という出来事が、海外情報としてのみならず、国内情勢とともに、またその意味付けやイメージを伴って認識されていった様相を追うことができるだろう。

## 7. アメリカ人物図

黒船かわら版に最も多く描かれたモチーフはアメリカ人物であり、蒸気船図に描き添えられたり狂歌の挿絵として、ほぼ半数のかかわら版に描かれている。それらの人物表現には似た形の画像が多く、あるパターンが形成されている。アメリカ人の具体的なイメージが、実際に浦賀沖に浮かぶ蒸気船や上陸したアメリカ人の姿を目にしている人にもかわら版を通じて広まっていったことが推測される。前章では、2回目のペリー来航後に新しい蒸気船図が成立したことを確認したが、アメリカ人像についても新しい人物表現が創出されている。アメリカ人の描

かれ方を分析し、当時のアメリカ人イメージを検討していこう。

ペリー提督や副官アダムスは半身像の肖像画として多数描かれているが、もっとも多いのは図3「北亜墨利加洪和政治洲上官真像之写」のタイプの画像である。

顔面描写をみると、髪・眉・髭は黒くはなく、短く、細かく渦を巻いている。毛質・毛色・髪型ともに壮年の日本人男性と異なっている。帽子や髪型は所属する社会を象徴するものであり、絵の中では異国性を強調するポイントとなるところでもある。当時の日本人男性の多くは剃る或いは抜くなどして髭をたくわえないため、髭も異国性を示すものである。また、大きく丸い飛び出したような眼(かなつぼ眼)や多数の皺は、豪傑や異人を表現する際に用いられるものである。装束をみると、黒い帽子を被り、肩に飾りの付いた前ボタンの黒い上着を着、胸の前で白いバンドが交差している。当時の日本人が頭を覆う際には笠や頭巾が用いられており、長崎絵などでオランダ人がしばしば広いつばの付いた帽子を被った姿で描かれたり、日本人が異国人に扮する際にしばしば帽子を被ったように、帽子は異国性を示す効果的な道具であった。右手には青龍刀を連想させる剣を掲げているが、肖像に添えた小物で像主の属性を示すことは肖像画の伝統的な手法であった。像主の身分や職業を象徴するものが添えられることが多いが、日本では武士像に刀を添えて描くことが常套であり、図3が剣を携えた図であることからペリーは武人であることが読み取れる。

黒い上着と白いバンドの表現はペリーの肖像画以外のアメリカ人像においても使用されており、しばしば剣付きの鉄砲を持った

姿で「北アメリカ人物」として紹介されている。新しい人物像の創出である。ペリーに随行した画家ハイネの絵には、紺地の上着に白いバンドを交差させたアメリカ水兵が描かれている。この実際の水兵の服装を元に、描き手にも見る側にも分かりやすい黒い上着に交差したバンドという形体がアメリカ人を示すシンボリックな服装となったものと推測される。

図4「欽差全権国王使節」もペリーを描いたものであり、図3と同じ構図であるが、印象は大きく異なり中国的である。

中国的という印象を生んでいる最も大きな要素は、毛髪と目の描き方であろう。毛は長く、縮れていない黒毛となっている。髪は後頭部の上方でまとめられており、三ツ又の簪をさしている。眉は太く垂れぎみである。髭は豊かに蓄えられているが口元を覆い隠すものではない。目はアーモンド形の釣り目で2重であり、目尻や目の下には皺が描かれている。このような目元や髭の表現は、孔子像や関羽像など、当時の庶民には見慣れた中国人像の形体の1つであった。

服装では首周りの白い襷が目に付く。襷襟は、帽子同様、近世日本では異国人を描く際にしばしば見られる表現である。白いバンドは描かれていないが、襷より下は図3と近似している。右側の脇の線は体の中央に寄り過ぎており頭部とのつながりがやや不自然ではあるが、腹が太く突き出た体形に見える。中国の偉人像には腹部が大きく張り出した図像のものが多く、この体型も中国的印象を与える一因となっている。

図3・4に用いられているような異人表現・異国人表現を伴った

人物像は、「唐人(とうじん)」の表現である。唐人とは、字義的には古代中国人を指す言葉であるが、近世日本においては、異国人を指して用いられた言葉である。美術史研究者からは、異国を表現するときにしばしば中国杓形体が使用されることが指摘されている<sup>15</sup>。そうして出来上がったのが現実の中国人とは異なる、イメージとしての異国人、或は象徴としての異国人、「唐人」である。唐人イメージは、中国人イメージを基礎としつつ、鬚・襜襟・帽子など非日本人としての要素を強調することで作り出された異国人像であり、近世日本においては伝統的で一般的な異国人表現であった。黒船かわら版でのアメリカ人像には、黒い上着と白いバンドの兵士像という新しい人物像と、それに唐人表現を組み合わせたもの、あるいは伝統的な唐人イメージによる人物像とがみられ、新しい異国人像が生み出されても従来からの唐人イメージが並存していたことが確認できる。

ここまでのアメリカ人像の検討から、当時の庶民によるペリー来航の捉え方について以下4点を指摘したい。

一点目は、当時の庶民にとって、ペリー一行が憎い敵として捉えられていたのではないこと、恐怖心を抱いていたわけではないということである。顔面の描写には異人表現が用いられているが、

---

15 坂本満は、古来、日本の最大の関心の的であった外国は中国なので、中国に関して日本画家たちが持っている形体のレパートリーは多く、他に依拠するものがない場合に画家たちが見も知らぬ南蛮人たちの国や風俗を描くときにも中国的な情景として表現するのはむしろ当然としている。坂本満『日本の美術・南蛮屏風』(至文堂、1977年)。

天狗や鬼として描かれてはいない。近世日本の画像では、悪・敵役の描き方には長く尖った爪・牙・尾など動物的要素を用いることが普通であったが、黒船かわら版のアメリカ人像にはそのような表現はほとんど見られない。異人表現を用いつつも、ほとんどは自然な人間の姿である。また、持ち物の描写に注目すれば、武器が多く描かれていたことはアメリカ人が兵士として認識されていたことを示しているが、それらの武器は大筒のような破壊力を感じさせるものとはなっておらず実際に使われている状態でもない。ただ持っているだけの状態で描かれており、武器としての機能や攻撃性にあまり関心が寄せられていないといえよう。ペリー来航の4年前、嘉永2年(1849年)にアヘン戦争の概要を記した読本『海外新話』(嶺田楓江著、五雲亭貞秀画)が板行されたが、そこでは、イギリス人による激しい攻撃の様子が描かれている。黒船かわら版での顔面描写・武器の描写はそれとは対照的であり、江戸庶民がペリー一行を自らに害成す者と捉えていない意識の現われといえるだろう。

二点目は、ペリー一行やアメリカに対する関心の強さである。ペリー提督の半身像の個人肖像が多数描かれたことは、それまでの異国人報道とは異なる点であった。肖像画の構図からは、歌麿の美人画や写楽の役者絵など、錦絵の大首絵が連想される。ペリーは役者絵や美人絵と共通する受けとめられ方がされたと考えられる。大首絵は、役者や美人といった当時の庶民にとってアイドル的な存在について、より詳しくその人物を知らせ、そこに描かれた対象を見るものに身近に感じさせる効果を持っていた。また、

当時の錦絵は単に眺めるものではなく、そこに描かれているものから情報を積極的に読み取ろうとする見方が存在していた。半身像の多さは、ペリー一行に対する興味や好奇心の強さを示すものであり、庶民は役者絵を見るように、肖像画を通してペリー像が体現するアメリカというものを読み取ろうとしたのではないだろうか。

三点目は、アメリカを既知の異国とは区別して意識したことである。帆をたたんで疾走する蒸気船図が新たに生み出され、黒い軍服姿の新しい人物像が出来上がっていったことから、それまで来航した異国船・人とは違うアメリカ船・人を描こうという意識、新しさに注目する意識が確認される。ペリー来航以前の異国人物表現を確認すると、最も多いのは中国人(唐人イメージも含む)、ついでオランダ人(ペリー来航の3年前、嘉永3年にオランダ商館長の江戸参府があった)、琉球人(同じく嘉永3年に慶賀使が江戸に来ている)、朝鮮人(通信使が江戸まで来たのは明和元年(1764)家治襲職の賀が最後であり、後は対馬止まり)が多く、それは江戸の庶民が実際に目にする機会のあった異国人でもあった。しかし、それ以外の国々の人物も描かれ、当時の異国人像は、長崎絵に限らず、見世物、祭礼行列、皿の絵柄、煙草の根付といった工芸品にも描写されている。また、歌舞伎や読み物としての異国物語も多く、明朝の再興を目指す国姓爺と藤内・琉球へ渡る鎮西8郎為朝・蝦夷から宋へ渡る義経・小人嶋へ渡る朝比奈などの異国話が人気を博し、ペリー来航の頃には多くの世界地図が異国人物図を伴って板行されていた。しかし、アメリカ人については、

ペリー来航の7年前、弘化3年(1846)のビートル来航がアメリカを意識する初めての機会であり、それほど日本人に知られていた異国ではなかった。18世紀末からしばしば日本に来航していたロシア人の姿は、オランダ人像を元にして長崎絵に描かれたものが数種類残されている。ペリー一行の人物像も長崎絵に基づけばオランダ人に似た人物像になったはずである。しかし、黒船かわら版でのアメリカ人像は長崎絵のオランダ人やロシア人像とは異なる姿となった。長崎絵の表現では、オランダ人やロシア人の髪は巻毛として描かれ、髭は描かれていないものが多いが、ペリーらの肖像には縮れた毛の表現が用いられ、髭が描かれた。また、オランダ人やロシア人像は髪や服が白く、全体的に白っぽい印象を与えるものであったのに対して、アメリカ人像は髪も服も黒の占める割合が多い表現となっている。服装も、オランダ人やロシア人像とは異なる軍服姿で描かれている。かわら版の描き手が、中国人・朝鮮人・オランダ人・ロシア人といった既知の異国人像と違う画像を作ろうと試みたことがうかがえる。船についても、帆をたたんで疾走する蒸気船像が作り出されている。黒船かわら版は、新しいアメリカ船像・人物像によって庶民にアメリカと既知の異国とを区別して認識させるとともに、さらにその違いの認識を広める役割を果たしたといえることができるのではないだろうか。

四点目は、三点目で述べたような、異国「アメリカ」の目報しさに注目する意識が見られた一方、伝統的な異人表現、特に中国的形体が多く用いられたことから、アメリカ人を日本人と違う人物、「唐人」として捉える意識も根強かったということである。唐

人として描かれたアメリカ人像は、実際のペリー一行とは異なる姿であるが、逆に異国人らしい姿でもある。唐人として描かれたアメリカ人像からは、アメリカと他の異国との違いが消え、アメリカは日本以外の国々、異国の一つに過ぎないものとなっている。新しく認識されたアメリカという国が従来からの世界観の枠内へ取り込まれて認識されていることは、言い換えれば、日本とそれ以外の異国という枠組みでの世界観の上にアメリカとして国別に捉える意識が存在していたことを示している。この意識は、「唐人」という語を素材とした狂歌問答を記した黒船かわら版からも伺える（一部仮名表記を漢字表記に改めた）。

問「日本はきりも言葉も知らぬのか あめりか人を毛唐人（とうじん）とは」

（アメリカ人を唐人と呼ぶなんて、日本人は言葉を知らないのか）

答「唐人はから人ばかり言うでなし 外異10州は皆10人（とうじん）」

（唐人とは中国人のみをいうのではない、異国の人は皆トウジンだ）

この狂歌の前提には、当時の日本人がアメリカ人を唐人として表現している、という認識がある。そして、答える狂歌では、「唐人（とうじん）」と「十人（とうじん）」の音を掛けて、唐人とは「から人」つまり中国人だけを指すのではなく、外異10州、異国の人はすべて唐人だと詠っている。当時の庶民は黒船かわら版を通じて、アメリカについて情報を取り入れてその目新しさに注目しつ

つ、従来からの世界観を放棄することなく、むしろアメリカ人も唐人なのだと、従来からの世界観の枠内にアメリカを嵌め込むことでペリー来航を認識していったといえるだろう。

## 8. 結び

江戸庶民はかわら版という媒体を通じて、ペリー来航に関する様々な情報・知識・イメージを手にした。蒸気船図と人物図の検討を通じて確認したように、それらはペリー来航以前からの海外情報・知識・イメージを下敷きにしつつ、新たな蒸気船・アメリカ人イメージを作り出している。かわら版の画像は、より目新しいイメージを買い手に提示することに力点が置かれ、また同時に、伝統的な世界観を覆すものではなかった。かわら版では情報の正誤よりも、いかに「それらしいか」、つまり、



図 1

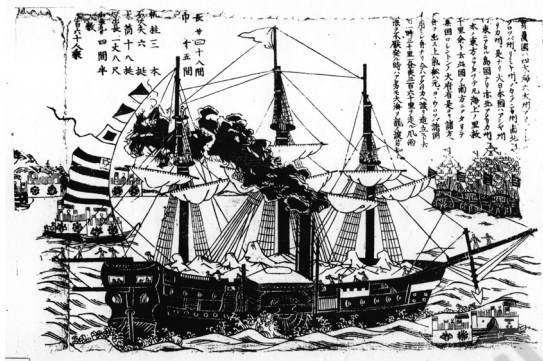


図 2



図 3



図 4

どれだけ異国船・異国人らしいかが重視されている。黒船かわら版は、江戸庶民が手にしたペリー来航情報を現在の我々に伝えるだけでなく、彼らが身につけていた海外情報・知識・イメージをも示す史料であるということができるだろう。

※ 注記：参考図四点の所蔵機関は、財団法人黒船館（日本新潟県柏崎市）。転載不可。

# 漢訳洋学書と19世紀日本の 出版文化

－ ホブソン書を中心に

八耳俊文 (青山学院)

## 1. はじめに

筆者の手元には「京城帝国大学図書章」の蔵書印が捺されたベンジャミン・ホブソン (Benjamin Hobson, 1816~1873) の中国語医書がある。『西医略論』(初版1857年)、『内科新説』(初版1858年)、『全体新論』(初版1851年)、『婦嬰新説』(初版1858年)の4点で、いずれも中国書である。刷りの状況から後印と判断されるが、「医 774」から「医 777」のスタンプと、「薬 1639」から「薬 1642」のシールが貼られ、かつて同大学医学部図書室あるいは医学部薬学講座の所蔵であったことを想像させる。

本発表は漢訳洋学書とくにホブソンの書物を取りあげ、漢字文化圏に流布するさまを述べ、そのあと日本で種々の関連本が刊行されたことを、幕末から明治初期の19世紀の出版文化にあわせて論じるものである。

## 2. ホブソン書の成立

金沢大学附属図書館は教育掛図を多数所蔵するが、その中にロビンソン動物掛図というのがある。<sup>1</sup> 大きさ約85×60cmで、「哺乳類」「鳥類」「両生類・爬虫類・魚類」「軟体動物・有関節動物・放射相称動物」の4軸からなる。多種多様の動物を彩色で表し、これらの分類の中に配置し一望したものである。画工フレデリック・ロビンソン (Frederick Robinson) が描き、1855年にロンドンで刊行された。「第4高等中学校図書」の印があり、金沢に19世紀終わりにあった第4高等中学校で使用されたと思われる。

これと同じ図がホブソンの『博物新編3集』にも見ることができる。「胎生類」「卵生類」「鱗介類」「昆虫類」と分類された図である。<sup>2</sup> 『博物新編3集』の初版は1854年刊行であり、前述のロビンソン動物掛図より古いため、後者をもとに前者が作成されたことにはならないが、同一の原図があり、それをもとに『博物新編3集』の図がつくられ、他方でロビンソン動物掛図がつくられたと考えるか、ロビンソン動物掛図はそれ以前にも作成されていて、1855年版はその新版とみなして、その古い版を直接であれ間接であれ原図にして『博物新編』の図が作成されたとも考えることができる。いずれにせよ同掛図の存在は『博物新編』の図は独自に作図されたので

- 1 松田清・益満まを編『金沢大学所蔵近代掛図目録一印刷図編』（京都：京都大学大学院人間・環境学研究科、2008年、11～14、109頁）。
- 2 『博物新編3集』（広州：恵愛医館、1854年、1甲～1乙）。

はなく、当時としてはよく使用された教育図であったことを示している。

ホブソンは1816年、イングランドの中部ノーサンプトン州のウェルフォードに生まれた。<sup>3</sup> 父は同地の会衆派の牧師であった。現在でも父がかつて勤め、ホブソンが育った教会が同地に残っている。1830年代前半、ホブソンはバーミンガム総合病院附設の医学校で医学教育を受けた。さらに1835年にはユニバーシティ・カレッジ・ロンドンに進学、専門的に医学を学んだ。同大学では医学の基礎として科学を、医学については薬学、産科学、解剖学、外科学、内科学などを広く学んだことが知られている。1838年にはロンドン王立外科医師協会の試験に合格、1839年にはユニバーシティ・オブ・ロンドンの学位試験にも合格し、医学士の学位を取得した。1838年にロンドン伝道会から広州の医療宣教師となるよう指名を受け、1839年7月英国を出航し、同年暮れマカオに到着した。

マカオでは1843年1月まで診療を続け、その後は南京条約締結にともない英国に割譲された香港へと移り、新設された病院の経営にあたった。ここで医療をおこなうとともに布教活動をおこなった。中国で活動する中で、中国医学は解剖学の知識が欠落しているとの認識に至り、西洋医学を修得した中国人医師の養成を考えるようになった。これを実現したのが次の広州時代で、だいた

---

3 ホブソンの生涯は、八耳俊文「ウェルカム図書館蔵ホブソン文書を用いたベンジャミン・ホブソン(合信)伝」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第11号、2003年、99~120頁)に拠る。

ちまち次の4つの困難に出会った。1つは中国語で授業することの難しさ、1つは解剖や実験器具の不足、1つは医学の基礎を教える中国語テキストの欠如、1つは横行する誤った医学理論と処方である。ホブソンは出身のイギリスでは最新の医学の学習に努め、成績も上位にあった。伝道の情熱に満ちた若い医者ホブソンには異教国で文化伝統の異なる中国の医学に理解を示す余裕はなかった。1849年に香港の商人を通じ、石版印刷機械を購入したことを契機に中国語によるテキスト作成に取りかかった。一番はじめに著述したのは『天文略論』で医学というより伝道の一環として作成したもので、西洋人が運営する学校で教科書として使用された。

1850年冬に医学講義を病院内で週3回おこなうようになり、図入りの解剖学と生理学の本をホブソンの中国語の教師である陳修堂の協力を得て完成させた。これが『全体新論』である。複数の医学書から図をトレースして掲載された。印刷部数は初刷が1200部、2刷が2000部で、出版にあたっては中国内外の西洋人から財政的支援を得た。中国側でも関心を招き1852年には潘仕成編纂の『海山仙館叢書』に加えられた。また1853年には両広総督葉名琛の父、葉志詵が『全体新論』の図の部分だけを8幅に収めた『全体分図』を作成、両広総督署から刊行した。人体図の掛け図である。葉志詵は『全体新論』の翻刻もおこなっている。ホブソンも図を石版から木版に変え、以降、たびたび増刷された。

『博物新編』はこの広州時代に作成された。この『博物新編』の成立の経緯は未明部分もあるが、『全体新論』と同様、陳修堂の協力を得て1853年に著述がおこなわれ、1854年には第3集が2000部

印刷された。初集と第2集についても同様に1854年のうちに印刷予定であったが、広州では排外気運が高まり印刷を続行するのは危険と判断されたため、印刷は上海へと移し、1855年に全3集をまとめ当地の墨海書館より発行された。

ホブソンも1857年に上海に活動の拠点を移し、時間的余裕を得て執筆活動に励んだ。この年は西洋の医学書をもとに『全体新論』の続編で、中国での治療例も豊富に載せた『西医略論』を、エドキンスの推薦のあった文人、管嗣復の協力で完成させ、上海の仁済医館よりこの年500部出版した。<sup>4</sup> さらに700部の印刷も保証された。<sup>5</sup> 翌年には産科と小児科の書物である『婦嬰新説』を、内科と薬物を説明した『内科新説』を同じく管嗣復の協力により著述し、1858年に上海仁済医館から刊行した。ホブソンは1858年12月に上海を離れ、帰国の途についたが、外国人商人からホブソンの書物の予約購読代として2000ドルの支払いが約束され、ホブソンが帰国後も印刷は続けられることになった。ホブソンの書物は確かに中国でも需要が高かったが、彼の活動を支持する西洋人社会から財政的援助があり、需要に応じて供給されるというのではなく、需要とは関係なく大量に印刷されたのである。

---

4 『西医略論』英文序、Wellcome Library, Hobson Papers, MS.5852/16.

5 A Short Report of the Hospital at Canton, December 1857, Wellcome Library, Hobson Papers, MS.5852/18/1-3.

### 3. 漢字文化圏への広がり

#### 1) ベトナム

ホブソンのこれらの医学書は、彼の科学入門書であった『博物新編』（初版1855年）とともに、19世紀後半において時には20世紀はじめにまで漢字文化圏の人々が西洋医学や科学を学ぶのに使用された。まずその例をベトナムにみてみよう。ベトナムの国家図書館は古典籍を多数所蔵するが、そのうち「古典」「歴史」「哲学」「文学」に分類される歴史資料（刊本が主）をウェブ上で公開し始めた（<http://www.nomfoundation.org/nlvnpf/index.php>）。その「哲学」分類に『博物新編』が含まれている。嗣徳30年（1877）に誌された陳仲恭による「重鐫博物新編序」が付き、表紙には「維新己酉（1909）孟夏／博物新編／觀文堂蔵版」とする2冊本である。1冊目には「博物新編」初集を、2冊目には2集と3集を翻刻する。同図書館の古典籍の医学関係書については既に茨城大学の眞柳誠の調査があり、この『博物新編』もその中で報告されており、1877年のハノイ版に基づく1909年のベトナム觀文堂蔵版の刊本と眞柳誠は記している。<sup>6</sup> 中国書の出版後の20年を経てベトナムで翻刻が試みられ、20世紀に入ってから刊行されているのはベトナムで本書の存在意義が20世紀になっても失われていなかったことを示している。

6 眞柳誠「ベトナム国家図書館の古医籍書誌」（『茨城大学人文学部紀要』人文学科論集』第45号、2006年、1～16頁中15頁）。

## 2) 中国

中国では『全体新論』が注目を浴び、『海山仙館叢書』に収録されたり、葉志詵による翻刻がおこなわれたりした。ホブソンは例言の中で坊本(民間出版物)も多く出ているが、図に誤りが目立ち注意が必要と述べており、正確度の欠く俗本まで流布したようである。

医者たちの中には『全体新論』の知識を自らの中に取り込もうとする人たちも出現した。ホブソンの書の前後に現れ、中国の伝統医学と西洋の近代医学の両理論に通じようとした「中西医匯通派」と呼ばれる医家で、彼らの著述物を検討した松本秀士によると、彼らの医書のほとんどは『全体新論』などの中国語による西洋医学書を参照しており、人体解剖図については『全体新論』や『婦嬰新説』からの引用が多く、中には『博物新編』に言及するものもあるという。<sup>7</sup>

魯迅も読者の一人であった。彼は南京の江南水師学堂で木版の『全体新論』を目にしたことがあると『呐喊』自序(1922)で述べている。<sup>8</sup> 彼が見たのは19世紀末のことであったが、1929年10月22日の江紹原宛の手紙の中で「全体新論」のあとに「等5種」の3文字追

---

7 松本秀士「中華文明上に組み込まれる西洋医学」(『或問』第10号、2005年、29~46頁)。

8 魯迅「呐喊・自序」(丸山昇訳者代表『魯迅全集2』呐喊・彷徨)、東京：学習研究社、1984年、9~17頁)。

加を依頼している。<sup>9</sup> ホブソンの代表作が上記5種であったことを魯迅は知っていたということである。ホブソンが中国にいた1858年当時すでに『博物新編』から『内科新説』の5種は評価を得ていた<sup>10</sup> 魯迅はホブソン書をどの程度読んだのか記録に残していないが、中国の伝統ではなく西洋の新しい文化の書物としてとらえていたことは確かであった。

### 3) 韓国

韓国では2005年に延世大学の全寅初主編で『韓国所蔵中国漢籍総目』(学古房)全6冊が刊行された。その子部・西学類を見ると、中国で発行された伝道団体の漢訳洋学書や宗教書、江南製造局の科学技術書などが多数、韓国内に所蔵されていることがわかる。<sup>11</sup> 筆者はかつて日本の国内に所蔵される同種の書の所蔵目録を作成したことがあるが<sup>12</sup> それと比較するなら、韓国に所蔵される種類の多さは日本を凌駕しており、特に江南製造局の出版物はソウル

9 魯迅「江紹原 宛」(竹内実訳者代表『魯迅全集114書簡I』、東京：学習研究社、1985年、458～45頁)。

10 王韜はこれら5種を「筆墨簡潔、講論精核、真伝作也」と高く評価している(王韜日記、咸豊8年10月4日乙酉)。方行・湯志鈞整理『王韜日記』(北京：中華書局、1987年、55頁)。

11 全寅初主編『韓国所蔵中国漢籍総目』3(学古房、2005年、子部西学類、592～647頁)。

12 八耳俊文「清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録」(『化学史研究』第22巻第4号、1995年、312～358頁)。

大学校奎章閣の蔵書を中心に、遙かに日本より揃っているということが出来る。<sup>13</sup>

ホブソンの書を『同総目』から見ると、ソウル大学校奎章閣や高麗大学校華山文庫ほかで所在を確認することができる。<sup>14</sup> 実際、筆者は2006年3月に高麗大学校中央図書館内で『婦嬰新説』と『全体新論』を閲覧したことがあるが、後印ではあるがいずれも和刻本ではなく中国書であった。『同総目』によれば2点とも医学校旧蔵書とするので、ホブソンの中国語による医書は韓国でも西洋医学書として注目されていたのであろう。一方の奎章閣は「朝鮮王朝期の1776年に王室の各種記録や朝鮮の古典籍・中国書籍の収蔵・保存などを統括する機関として設置されたもの」<sup>15</sup>で、日韓併合にともない、一時期、李王職の管理下に置かれたのち、朝鮮総督府の所管となり、京城帝国大学成立後、1928年から30年にかけて京城帝国大学附属図書館へ移管されたとされる。<sup>16</sup> 現在はソウル大学校奎章閣に至る。

この朝鮮総督府時代に、奎章閣文庫中に含まれていた朝鮮図

---

13 李漢燮「ソウル大学奎章閣蔵漢訳西学書について－1880年代以降集められたものを中心に」（沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成－創出と共有』、吹田：関西大学出版部、2008年、311～333頁）。

14 全寅初主編『韓国所蔵中国漢籍総目』3(603～604、610、612、633～634頁)。

15 宮本正明「解題」（加藤聖文・宮本正明編『旧植民地図書館蔵書目録』第1巻・京城帝国大学附属図書館和漢書書名目録、東京：ゆまに書房、2002年、417～423頁中418頁）。

16 宮本正明「解題」（加藤聖文・宮本正明編『旧植民地図書館蔵書目録』第1巻・京城帝国大学附属図書館和漢書書名目録、東京：ゆまに書房、2002年、417～423頁中418頁）。

書と中国図書については『朝鮮総督府古図書目録』が作成されている。<sup>17</sup> 同目録の中国図書の子部に特に兵家類、農家類、医家類、天文類、訳学類、芸術類に多くの西学書の所蔵を確認することができるが、ホブソンの書にしても医家類に『内科新説』を3点、『西医略論』を3点、『婦嬰新説』を4点、『全体新論』を2点、芸術類に『博物新編』を5点、見出すことができる。高宗を中心に朝鮮王朝は盛んにこれらの洋学書を購入していたのである。これらがのちに京城帝国大学に収まったはずであるが、筆者が冒頭に紹介した書がそれに該当するかはわからない。京城帝国大学には『附属図書館和漢書書名目録』が1933年から編纂されているが、これには医学部あるいは理工学部の図書が含まれておらず、この部分の行方を追うことができないからである。<sup>18</sup> それでも『同目録』第2輯(1935)には『婦嬰新説』と『内科新説』が、第3輯(1936)には『博物新編』が2点収載されている。これらがどのように利用されたかは不明だが、中国で発行されたホブソンの書が朝鮮に持ち込まれ、それらがいくつかの経路を経て同大学図書館に収められたことは違いない。

中国で刊行された書物がさまざまな経路を通じて朝鮮時代の知識人の手に渡っていた例として丁若鏞(茶山、1762~1836)の『麻科会通』補遺に収められた「新證種痘奇法詳悉」がある。<sup>19</sup> これは1805年に

---

17 加藤聖文・宮本正明編『旧植民地図書館蔵書目録』第11巻・朝鮮総督府古図書目録／朝鮮総督府古図書目録補遺(東京:ゆまに書房、2006年)。

18 京城帝国大学附属図書館和漢書書名目録第1輯(1933年)、凡例。

19 「新證種痘奇法詳悉」奎光齋刻本(『麻科会通』補遺所収、京都大学附属図書館)

英国東インド会社商館医ピアソン (Alexander Pearson) が種痘をマカオで実施し、その体験をもとに作成した種痘の解説 (英文) を現地で中国語に堪能なスタウンソン (George Thomas Staunton, 1781 生) が中国語に翻訳したもので、<sup>20</sup> 広州を中心に頒布され、版も重ねた。1828 年には北京の瑠璃廠で奎光斎により重刊本が作成されたが、『麻科会通』に収録されるのはこの奎光斎刊本である。『麻科会通』の補遺が丁若鏞の手によるものか、後世の人による追加なのか不明であるが、<sup>21</sup> 「新證種痘奇法詳悉」は『英咭喇國種痘奇書』ともいい、日本には 1805 年に中国で刊行されたのち伝わるのが遅れ 1841 年に伊藤圭介が、1849 年に広瀬元恭が翻刻し、知られるようになった。それ以前に北京版が朝鮮に伝わっているのは興味深い。北京の瑠璃廠の古書街は燕行使に随行した文人が好んで立ち寄る場所であったといい、<sup>22</sup> 瑠璃廠での珍しい出版物ということで朝鮮に持ち帰ったのであろうか。

ホブソン書の朝鮮における使用例としては崔漢綺 (1803~1877) の「身機踐験」をあげるべきであろう。<sup>23</sup> 崔漢綺は思想家と呼ぶにふさわしく万学に関心をもち人間の身体についての理解を深めるた

---

館蔵富士川文庫)。

20 田崎哲郎「『英咭喇國種痘奇書』について」(有坂隆道・浅井允晶編『論集日本の洋学』Ⅱ、大阪：清文堂出版、1994年、203~220頁)。

21 三木栄『朝鮮医書誌増修版』(大阪：学術図書刊行会、1973年)。

22 姜在彦『西洋と朝鮮—異文化の出会いと格闘の歴史』(東京：朝日新聞社、2008年、155頁)。

23 崔漢綺「身機踐験」(『増補明南楼叢書』4、成均館大学校出版部、2002年、263~507頁)。

め、西洋の医学書としてホブソンの書を読破している。「身機実践」は全9巻から成り、巻1・2は『全体新論』、巻3・4は『内科新説』巻上、巻4の終わりから巻7のはじめまで『西医略論』巻上中、巻7の残り大部は『婦嬰新説』、巻8は『博物新編』初集、巻8続は『内科新説』巻下と『西医略論』巻下を抄録し、要所に独自の論を立てている。

ホブソン書を手にした人は多くあっても、このように5点すべてを読むことのできた環境にあった人は少なかったはずで、崔漢綺はどのようなルートで本書を読んだのか興味が惹かれる。彼が独自に立てたのは序、凡例、目録以外の本文では巻1冒頭の「脳為一身之主」、巻2末の「身機総論」、巻3冒頭の「中西医学」、巻8冒頭の「諸気致用」、巻8末の「万物運化皆攝医学」でいずれも総論的内容となっている。『博物新編』については全3集のうち初集のみ取り上げているのは偶々なのか、あるいは崔が読む機会をもったのがこの初集のみであったということかわからない。

朝鮮における牛痘種痘の創施者かつ普及者として知られる池錫永もこのホブソン書の読者であった。三木栄は池錫永所蔵の医学関係書として、『博物新編(唐本)』1冊、『全体新論(唐本)』1冊、『内科新説(唐本)』1冊、『内科新説(和刻本)』3冊、『婦嬰新説(唐本)』1冊、「婦嬰新説(池錫永自筆本)」1冊があったことを報告している。<sup>24</sup> 同じく三木栄によれば、池錫永は1885年に『牛痘新説』を著し、私家版をつくり頒布したが、本書にはホブソンの種痘論が掲載されてい

---

24 三木栄『朝鮮医学史及疾病史』(京都：思文閣出版、1991年、267～268頁)。

るという。<sup>25</sup> これは『婦嬰新説』にある「種痘論」をさすと思われる。ホブソンはこの項で牛痘法の劇的な効果と、まだ中国で広がらない現状を述べていた。池錫永自筆本の「婦嬰新説」とは同書を書写したものであろう。

#### 4. 日本への広がり

日本の特徴を言うなら、中国書の輸入は体系的ではなかったかもしれないが、入手して有益と判断したなら中国書をもとに速やかに日本版を作成し、日本における普及を積極的に進めたという点でろう。朝鮮王朝は中国の文化動向に敏感で、絶えず新刊本の購入に努めていたが、その普及には熱心ではなかった。これに対しホブソンの書を例にとるとすべて和刻本がつくられ、とくに『博物新編』にいたっては幕末期から明治初期にかけて藩校・郷校・小学校の自然科学の教科書としては最も使用されるまで至った。<sup>26</sup> 筆者はこのことを指して1860年代・1870年代の20年間を「博物新編の時代」と表現したことがある。<sup>27</sup>

これらの書の日本への伝わりかたには種々のルートがあった

25 三木栄『朝鮮医学史及疾病史』（京都：思文閣出版、1991年、263頁）。

26 新家浪雄「『博物新編』—幕末の自然科学教科書」（『図書』第411号、1983年、60～63頁）。

27 八耳俊文「幕末明治期に渡来した自然神学的自然観—ホブソン『博物新編』を中心に」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第4号、1996年、127～140頁中136頁）。

が、幕末になると外国人が入国できるようになり、直接、中国から持ち込まれる例がみられるようになった。1859年1月に上海から長崎にきた米国人マッゴウアンの場合、彼は寧波で13年間にわたり医療宣教師として活動した体験をもち、筆談にて日本人知識人と交流した。<sup>28</sup> そして1858年に上海仁済医館から出版されたホブソンの新刊である『婦嬰新説』と『内科新説』を長崎の医者・福地苟菴に贈っている。また大村藩医の尾本公同には1858年に上海で刊行された『植物学』を贈っている。福地苟菴は受領した本の翻刻を決意するが、途中で挫折し、京都の医者安藤桂洲(天香堂)に出版を委ねた。安藤桂洲は安政6年(1859)のうちに幕府に出版の許可を得、安政6年に『婦嬰新説』が、安政7年に『内科新説』の日本版を刊行している。<sup>29</sup> 表紙に「平安 天香堂蔵版」とあるのがそれである。

一方、『婦嬰新説』と『内科新説』の2点については江戸の外科医・3宅良斎(桃樹園)によっても安政6年のうちに翻刻された。安藤桂洲は『内科新説』を出版するにあたり、「東都すでにこの挙あり」と江戸にて和刻本が刊行されていることに言及している。<sup>30</sup> しかし価値ある書は普及させること(「東西両挙」)に意義があると述べ、<sup>31</sup> 京都での出版を推し進めた。安政5年暮れには、3宅良斎は江戸で

---

28 八耳俊文「D.J. マッゴウアンと中国、日本 1843-1893」(『洋学』創刊号、1993年、43~87頁中57~60頁)。

29 『婦嬰新説』(京都：天香堂、1859年、序、1ウ)。

30 『内科新説』(京都：天香堂、1860年、序、2オ)。

31 『内科新説』(京都：天香堂、1860年、序、2オ)。

『西医略論』も翻刻している。三宅良斎が翻刻した書は表紙に「桃樹園蔵梓」とあるので区別することができる。このようにホブソンの5点のうち3点をいち早く入手し、翻刻した背景として、「良斎は恐らく長崎を経てであらうが、上海方面とも可成り密接に書籍薬品等の購入に関しては交通のあったことゝ思はれる」と曾孫の3浦義彰一が「三宅良斎略伝」の中で推測している。<sup>32</sup> 上海で出版されたホブソン書がほぼ1年の間に日本に舶載され翻刻までされているのである。

『全体新論』は1851年に広州の恵愛医館で刊行され、1857年にホブソンが上海に転居すると仁濟医館の蔵板となった。洋学に詳しい儒者、古賀謹一郎の旧蔵書にこの恵愛医館蔵板の『全体新論』が含まれており、<sup>33</sup> 日本には1850年代前半のうちに伝わった可能性がある。本書の翻刻を企画したのは大洲藩侍医・山本節庵で、安政4年暮れに出版申請をおこない、許可まで得ていたが、翌年5年(1858)2月、伊予の人で当時、京都で医業を営んでいた越智崧に蔵版を譲渡し、「越智蔵版」として『全体新論』が誕生した。<sup>34</sup> この経緯から『全体新論』の和刻本の成立は見返しに「安政4丁巳晩冬」とあるが安政5年(1858)であったと考えられる。本書の見返し

---

32 三浦義彰「三宅良斎略伝」(『文久航海記』、東京:冬至書林、1942年、167頁、22頁)。

33 古賀謹一郎の蔵書は宮内庁書陵部に所蔵される。

34 出版の経緯は、都立中央図書館特別買上文庫中の「開版見改元帳2」に記されている。なお同資料は、日本科学史学会編『日本科学技術史大系・第1巻・通史1』(東京:第一法規出版、1964年)に活字翻刻されており(61~66頁)、該当箇所は62頁参照。

には「越智蔵版」とするもの、「2書堂発兌」とするものの2種類が存する。本文の版は同じである。2書堂は京都にあって明治のはじめ教科書販売を手がけた書店である。越智崧も京都で開業しており、京都での刊行物として引き継いだものと想像される。

『博物新編』の和刻本の出版は幕府自ら、開成所によっておこなわれた。<sup>35</sup> 官板であるため、出版申請の記録には現れず、出版の時期や経緯ははっきりしないが、販売を担当した老皂館(萬屋兵4郎)の元治元年の「発兌書目」が奥付にある刊本があることから、元治元年とされたりその前の文久年間(1861~1863)の刊行とみなされたりしている。<sup>36</sup>

ホブソンの書のうち科学書である『博物新編』がなぜ幕府の出版となったのか、そして『全体新論』から『内科新説』までの4点の和刻本が出揃ったあと出版されたことになるが、広範囲な読者層が期待される『博物新編』の和刻がなぜ最後となったのか、考察に値する。

まず、第1の問題に関して、当時の幕府の出版物でこのような中国の洋学書を翻刻したものをあげると、『博物新編』の他に『六合叢談』『中外新報』『中外襍誌』『重学浅説』『数学啓蒙』『鴉片戒』『万国公法』がある。<sup>37</sup> これらの共通点をあげるとそれぞれの分野の基本文献とまとめられる。はじめの3点については世界情勢を伝え

---

35 福井保『江戸幕府刊行物』(東京：雄松堂出版、1985年、228~229頁)。

36 福井保『江戸幕府刊行物』(東京：雄松堂出版、1985年、228頁)。

37 福井保『江戸幕府刊行物』第9章(「蕃書調所・洋書調所・開成所の刊行物」、第10章「陸軍所の刊行物」)。

るもので、原本の記事を取捨選択して翻刻されており、海外ニュースは幕府が管轄するとの意思を読み取ることができる。『鴉片戒』はアヘンの危険性と対処法を記したもので、幕府のアヘンへの危機意識の現れと理解される。『万国公法』は国際法を説明するもので、幕府が政治的判断を決するに参照する重要な文献であった。このようにみていくと新知識の管理と普及という基本的態度を指摘できる。<sup>38</sup> 科学分野における新知識の普及に重きをおいたのが、幕府による『博物新編』の翻刻であったといえよう。

次、第2の問題である翻刻の時期の遅れはどのように解釈できるであろうか。『博物新編』の中国書が1850年代後半、日本に伝わらなかったのであろうか。ホブソンの医学書は舶載されていることから『博物新編』のみ伝わらなかったとは考えにくい。高知県の牧野文庫には『博物新編』の最初の出版物である『博物新編3集』（広州恵愛医館、1854）が所蔵されており、<sup>39</sup> 伝来していたと考えるのが自然であろう。また幕府の刊行についても筆者はかつて『官板博物新編』の調査にもとづき安政6年（1859）遅くとも万延元年（1860）には出版されたと推論したことがある。<sup>40</sup> この推論にしたがうなら、

---

38 松方冬子は幕末、幕府の、漢籍の和刻・普及を含む情報・知識輸入に対する態度について、「西洋近代」知識の確保は「国益」と認識し、積極的に広報する、それを担うことが正統性の証であったと指摘している（松方冬子「近世後期『長崎口』からの『西洋近代』情報・知識の受容と翻訳」『歴史研究』846号、2008年、68～76頁）。筆者の理解も松方のこの解釈に負っている。

39 高知県立牧野植物園編集発行『牧野文庫蔵書目録（和書・漢籍の部）』（1986年、136頁）。

40 八耳俊文「幕末明治期に渡来した自然神学的自然観」（133頁）。

1851年から1858年にかけて順次、中国で刊行されてきたホブソンの代表作5点は日本で数年から早いものは1年以内に、1860年の時点にはすべて翻刻され、日本で普及することになったとなる。

ホブソン書の和刻本は木版を用いた整版でおこなわれ、いったんつくられた版木は繰り返し印刷に使用された。このため印刷はのちになると刷りが鮮明でなくなった。逆に不鮮明な印刷物でも流布した事実は、需要が途絶えることのなかったことを示している。この増刷の過程は連続的であり、印刷物に違いを見出すのは容易ではない。

ところが漢訳洋学書の中には木活字版で和刻本がつくられたものがある。木活字による印刷は活字を組み印刷する、これで完結しており、印刷が終われば活字はもとに戻される。本を求める人がいれば再度、活字が組まれて印刷がおこなわれることになる。活字の組み直しがあればそこに誤植が生まれる可能性がある。この点に注目すると、誤植の違いから版面の違いが指摘され、流布する過程を追うことができる。ホブソン書ではないが、ホブソン書の和刻本作成のきっかけをつくった前述のマッゴウアンの中国書『航海金針』で、この方法を用い、普及の様子を再現してみよう。<sup>41</sup>

『航海金針』は入華医療宣教師で米国人のマッゴウアン (Daniel Jerome Macgowan、中国名、瑪高温) が、英人リード (William Reid, 1791~1858) の『航海実用』暴風・種々の風の法則』(1849) 中の東アジアから東南

---

41 八耳俊文「『航海金針』の成立と流布」(『一滴』第14号、2006年、4164頁)。

アジア海域の台風の箇所をもとに、中国語で著した航海気象学書であった。1853年に寧波でマッゴウァンの住居兼診療所であった愛華堂から刊行されている。この本は1年もたたないうちに上海や香港などの開港地で知られるようになり、まもなく日本にも伝わることになった。本書を入手したのが薩摩藩で、同藩は木活字版で一部宗教的の字句を削除して翻刻している。木活字版は百から数百の部数しか印刷できず通常の出版物扱いを受けない。薩摩藩は府学版つまり藩校による出版物として作成しており、せいぜい藩内の教育用に供するつもりであったと思われる。

ところがこの出版を江戸でおこなったため、蕃書調所関係者の間で注目されることになり、同関係者のみならず洋学者、洋学に関心をもつ藩主、藩校が読者となった。最初の版は安政3年(1856)に公刊されたが、まもなく第2版が作成され、安政4年(1857)の第3版からは江戸の大書店の1つ、岡田屋嘉7に販売が委ねられ、より広範囲に広まった。第4版まで作成され、現在、日本国内に50以上の刊本の所在が確認されている。国外でもオランダのライデン大学図書館や米国議会図書館にも所蔵されており、韓国でも前述の『韓国所蔵中国漢籍総目』に国立中央図書館蔵として1本が収録されている。<sup>42</sup>

---

42 和刻本とは記載されていないが、『総目』3の643~644頁の説明文にある「聚珍板」という文字(これは活字版の雅称であって日本版にある文字で、中国書にはない)、「26.0×17.7cm」との大きさ、これも和刻本の大きさであることから(中国書は29.7×17.5cm)、同図書館蔵本は和刻本であることは間違いないであろう。

マッゴウアンは1859年に長崎に来日したとき、本書に出会っている。彼はのちにこの体験を次のように述べている。「私は上海から長崎を訪れたが、そこで私は全くの見知らぬ人でないことを知った。長崎の書店では『航海金針』が販売されていたのである。それは薩摩侯が名誉にも私の名前で鹿児島にて翻刻してくれていたものであった」。<sup>43</sup> 薩摩侯とは島津斉彬のことである。

マッゴウアンは日本を訪れるさい、日本ではこれら漢訳洋学書が歓迎されるとの情報を得ていて、ホブソンの『内科新説』や『婦嬰新説』やウイリアムソンらの『植物学』を用意していったのであろう。このほかには中国語訳の聖書も持参したと述べている。ワイリの『入華プロテスタント宣教師記録：著作と生涯』(1867)の「6合叢談」の項では日本で幕府により宗教的文章を除いて翻刻されたことを書誌情報として記載している。<sup>44</sup> ではホブソンは自著が日本で翻刻版がつくられるほど読まれていると知っていたのであろうか。これについての記録はないが、ホブソンの旧蔵書が現在、ロンドンのウェルカム図書館に所蔵されており、その中に三宅良齋が翻刻した『西医略論』が含まれている。<sup>45</sup> 宅による翻刻が安政

---

43 *The Rising Sun and Nagasaki Express* (January 18, 1893, p. 3).

44 Alexander Wylie, *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: giving a list of their publications and obituary notices of the deceased*(Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1867, p. 173).

45 Hartmut Walravens (Introduction by Nigel Allan), *Catalogue of Chinese Books and Manuscripts in the Library of the Wellcome Institute for the History of Medicine*(London: The Wellcome Institute for the History of Medicine, 1994, p. 10).

5年の暮れ(1859年1月)になされたとする、ホブソンはすでに1858年12月に上海を離れており、中国滞在中にこの和刻本は入手できなかったが、帰国後、誰かからか贈られ、ホブソンは承知していたと思われる。

ホブソンの書物はこのように日本でも読むことができるようになったが、これらの解説書も著されることになった。最も早い試みは、「開版見改元帳」の万延元年(1860)の部に記録の残る、正月、広瀬元恭が申請した「婦嬰新説釈義」3冊をあげることでできる。<sup>46</sup> これは同年正月11日に改済みとなった。現在、この書を確認できず、実際に刊行されたか不明である。しかし安政6年(1859)に刊行された『婦嬰新説』をテキストに京都の医者、広瀬元恭が1年もたたないうちに解説書を著し、出版申請しているのは注目すべきことである。広瀬元恭の養子となった広瀬元周は明治7年に『婦嬰新説和解』を刊行している。この題言(明治6年)によれば広瀬家の家塾で本書が講義され、その講義録が塾生により作成された。そのまま家蔵していたところ京都寮病院教師ヨンケルに学んだ友人林得3の勧めがあり、出版を決意したとする。<sup>47</sup> 家塾とは広瀬元恭の時習堂をさすならば、「婦嬰新説釈義」の原稿がもとなっている可能性がある。

幕末期にはまだホブソン書の原文の翻刻にとどまっていたが、明治に入ると、これらは漢文であったため、解説を加えた邦訳書

---

46 「開版見改元帳」(日本科学技術史大系・第1巻通史1、63頁)。

47 広瀬元周『婦嬰新説和解』(京都：文明書楼、1874年、題言、1ウ)。

が刊行されるようになった。『博物新編』については大森惟中(秀3、解谷)訳の『博物新編訳解』全5冊が慶応4年(1868)から明治3年(1870)にかけて出版されている。『全体新論』については明治6年から7年にかけて、高木熊三郎訳の『全体新論訳解』が大阪の文栄堂から、明治7年には石黒厚訳の『全体新論訳解』が名古屋の静観堂から出版された。明治11年には松井惟利抄訳の『通俗全体新論』初編が東京で刊行されている。これは『全体新論』の本文の前半を抄訳し、養生の勧めを随所に挟んだものである。『西医略論』については明治10年、山本義俊訳の『西医略論訳解』が東京の萬笈閣から刊行されている。『婦嬰新説』については広瀬元周の『婦嬰新説和解』が明治7年に上梓されたことは前述した。『内科新説』の邦訳版の存在は確認していない。ただ『内科新説』の1節でコレラの症状と対症法を記した「霍乱證論」を抜粋して、『内科新説伝染霍乱説コレラ病』のタイトルにて安政7年の序で刊行されてはいる。この翻刻は尾張藩医師柳田政矩によりおこなわれ、彼の門人である信濃の医者関島良致が製本担当した。一方、原文であるテキスト自体も明治になっても繰り返し印刷された。『博物新編』などははっきりと再刻(明治5年)、3刻(明治7年)を明記した版がつくられ、より広く流布した。

『博物新編』の普及にともないこの補遺版の体裁をもった科学入門書も著された。小幡篤次郎訳述の『博物新編補遺』で明治2年に尚古堂から発売された。<sup>48</sup> 序の日付は慶応4年8月とされており、

---

48 小幡篤次郎訳述『博物新編補遺』(東京：尚古堂、1868年、再刻、慶応義塾

明治に改元される1ヶ月前に原稿が準備されたことになる。小幡篤次郎は中津出身、慶応義塾のメンバーの一人で、のち教育者、英学者、啓蒙思想家として活躍した。本書はロバート・チェンバーズの *Introduction to the Sciences* を翻訳したもので、『博物新編』を「窮理ノ端倪ヲ示シ之ニ由テ物理ヲ推究シテ漸ク大知ノ域ニ進ム可キ門戸ヲ開ケリ」と評価し、本書を「珍藏スルモノ少ナカラス」とし、「西洋文明開化ノ由テ来ル所ノ原アルヲ知ラシムヘキ宝鑑」として刊行したと説明している。全3冊で松永俊男の研究によれば1860年代前半の版(1861年版か)を翻訳したものだ<sup>49</sup>。書名の一部に「博物新編」がつくが、科学入門書という点で一致するものの直接には関係ない。もはや幕末には「博物新編補遺」の書名が起案されるほど、『博物新編』は流布していたことを示している。

明治9年(1876)に東京の大角豊次郎が出版した『博物新編2編』2冊も、科学入門書ではあるが『博物新編』との繋がりはない。本書で興味深いのは清国広東省香山県の容兆倫(槐圃)の著作とされている点である。序文には中国の南屏氏紹雲が明治8年に東京に遊んだおり、郷土の人で博聞多覧の容兆倫先生に出会い、本書の原稿を見たところ、事理を窮め尽くしていることに感動し、貴重な著述が湮没しないためにも刊行することにしたとの経緯が記されている。内容は、人類総論からはじまり地学、力学、植物学、化学、人体論の順となっている。力学は棹や滑車や斜面などを扱い、原

---

出版局、1873年、巻上中下)。

49 松永俊雄「チェンバーズ著『科学入門』と小幡篤次郎訳『博物新編補遺』」(『桃山学院大学人間科学』第24号、2003年、149~168頁)。

本はチェンバーズの『国民百科』(*Information for the People*) のようにも  
思えるが、このように西洋の科学に通暁していて、広東省香山県  
出身で明治8年に東京に居た容兆倫とはどのような人物であった  
であろうか。容という姓、広東省香山県というと中国最初の米国  
留学生容闳が浮かぶが(彼はさらに香山県南屏村出身である)、<sup>50</sup> 彼自身は  
日本に居住しておらず、彼と何らかの関係がある人物なのであろ  
うか。本書に関する研究はないが、今後の研究が期待される資料  
である。

以上、ホブソンの著書が中国のみならず、ベトナム、韓国、日  
本と広く漢子文化圏で、特に日本でどのように歓迎されたのか述  
べた。和刻本の出版地は東京(江戸)、名古屋、京都、大阪と各地に  
わたる。出版者もあるいは出版に関与した人も開成所という幕府  
から、民間の医者、教育者と多様である。これはホブソン書に限  
らず幕末維新期の漢訳洋学書の出版に携わった人々についても同  
様に指摘できる。これらの普及に貢献したのは特定の人物という  
より日本における出版文化の広がりであった。もし漢訳洋学書の  
出版に意義を認めるとするなら、日本ではこの事業に携わった人  
々の多様さが、その意義を強めたといって間違いのないであろう。

---

50 百瀬弘訳注『西学東漸記—容闳自伝』(東京:平凡社、1969年);石霓訳注『容  
闳自伝—我在中国和美国的生活』(上海:百家出版社、2003年);管林主編『広  
東歴史人物辞典』(広州:広東高等教育出版社、2001年、第634頁)。

# 日本からの近代技術・知識の受容,そしてその変容

-1876~1884年間の遣日使節を中心に

許東賢 (慶熙大学)

## 1. 序論

中国を中心とする東アジアの国際秩序が支配的であったころ、アジアの辺境にあった日本は、西勢東漸の時代を迎えて「ウエスタンインパクト」に素早く対応し、日本型国民国家を達成して同地域の中心へと生まれ変わった。<sup>1</sup> 新興勢力として浮上した日本は1876年、門戸開放の契機となった米国の砲艦外交をそのまま朝鮮に用い、鎖国の旗幟を下げさせることによって、東アジアにおいて中国に代わる新たな文化供給者として急浮上した。<sup>2</sup> これ

1 西川長夫「日本型国民國家の形成—比較史的観点から」(西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』、新曜社、1995年、3~42頁)。

2 Key-Hiuk Kim, *The Last Phase of East Asian World Order : Korea, Japan and the Chinese Empire, 1860~1882*(Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1980年、328~351頁) ; 金基赫「開港을 둘러싼 國際政治」(『韓國史市民講座』7、一潮閣、1990年、1~23頁)。

以降、文化の川は、日本から朝鮮へと逆流しはじめた。当時の朝鮮は、日本人の目に否定的な他者イメージとして刻印されたが、世界の新潮流に対応せんとする開化派知識人の目に映る日本の姿は、以前とは逆転しはじめた。

1876年の開港は、朝日両国文化において、受恵者と供給者の地位を逆転させた文化交流史上の逆転現象をもたらしたが、同時にそれは帝国主義の侵略を告げるものであった。日本は不平等条約である江華島条約を武力強要し、朝鮮経略に必要な数々の特権、貿易権、租借権、治外法権、8%の協定関税、駐使権、駐兵権などを確保した「帝国主義的侵略者」であった。だが日本は、小銃をはじめとする近代兵器を朝鮮に寄贈する一方、留学生の派遣を誘導しつつ、朝鮮を日本式の制度改革へと誘導した。また折に触れて朝鮮朝廷にロシアの侵略に対処するよう警告し、1880年には朝鮮と米国の修交をとりもった。一言でいうなら、1876年以来、日本は朝鮮に対し、表向きは「開化と独立の擁護者」であったが、その仮面の下に「帝国主義的侵略者」をひそませるといふ、両面性を持っていた。<sup>3</sup>

朝鮮政府は1876年と1880年の2度にわたって修信使を派遣し、1881年には朝士視察団を日本に派遣して西欧化した文物・制度や施設を見聞、報告させた。朝鮮政府は修信使の報告を受け、西欧列強の東漸に対抗し、国家存立の政策を講じる必要性を痛感した。

---

3 유영익「한·미관계 전개에 있어서의 일본의 역할」(『한·미수교 1세기의 회고와 전망』、한국정신문화연구원、1983年、136~142頁)。

そこで朝鮮政府は1880年12月、統理機務衙門を創設し、本格的な開化・自強政策の推進をはかった。1881年の朝士視察団は、朝鮮の本格的な門戸開放と富強策の推進に先立ち、統理機務衙門と税関の組織・運営、そして軍制改革に必要な人材の確保と参考資料収集などを目的としていた。視察団は、朝鮮政府が明治日本を近代化の手本とするための本格的な試みであり、韓国の近代化において、日本の岩倉使節団に比肩される歴史的イベントであった。<sup>4</sup>

第1次修信使であった金綺秀(1832~1894)は『日東記遊』を、第2次修信使の金弘集(1842~1896)は『修信使日記』を、第4次修信使は朴泳孝(1861~1939)は『使和記略』を著し、朝士視察団の姜文馨(1831~?)、閔種黙(1835~1916)、朴定陽(1841~1904)、沈相学(1845~?)、魚允中(1848~1896)、嚴世永(1831~1899)、趙秉稷(1833~1901)、趙準永(1833~1886)、李元会(1827~?)、李金憲永(1835~1907)、洪英植(1855~1884)らをはじめとする朝士は、90冊余りもの「視察記」類と「聞見事件」類に大別される結果報告書、視察活動に関する日記・紀行録などを残している。<sup>5</sup> これらは、日本が明治維新以降、西欧の近代文物を受容・導入し、政治・経済・軍事・産業・外交・通商・社会・文化・教育など多方面にわたる成果としての知識と情報を、広範

4 岩倉使節団と朝士視察団に関する比較については許東賢「조사시찰단(1881)의 일본 경험에 보이는 근대의 특성」(『한국사상사학』19, 2002年, 525~532頁)を参考されたい。

5 朝士視察団が残した各種文献に関する詳しい解題は許東賢「朝士視察團(1881)의 日本見聞記錄總攬」(『史叢』48, 1998年, 23~53頁)を参考されたい。これらの文献は拙篇『조사시찰단 관계 자료집(以下「資料集」とする)』1~14(國學資料院, 2000年)に影印・収録されている。

に把握・叙述したものであり、開港～1880年代初めにかけて、日本から得た近代知識とその変容の諸相を解明する上で欠かすことのできない貴重な史料と言えよう。

遣日使節は、日本の文物と制度を視察した後、近代技術と知識の受容姿勢において、儒教道徳を守りながら近代技術の長所の獲得を唱える東道西器論者と、近代知識と技術を全面的に受け入れ、国民国家の樹立を唱える国民国家樹立論者の2つに分かれた。本稿では、開化初期の遣日使節らが残した諸記録を通じ、2つの対照的な近代技術・知識の受容とその変容の諸相、特に朝土視察団側に焦点を当てて分析を加えてみたい。

## 2. 東道西器論者の近代技術受容論

朝鮮政府は1876年、江華島条約の締結を旧来の交隣関係の回復として認識した。しかし修信使(1876、1880)と朝土視察団(1881)がもたらした明治維新以降の変化に関する情報と知識を得た後、儒教文明観に立脚した従来日本認識に変化が見られはじめる。儒教文明観を打ちのめした衝撃音は、第1次修信使の金綺秀(1832～1894)の言葉によく表れている。<sup>6</sup>

---

6 김기수『日東記遊』(국사편찬위원회 편『修信使記録』、국사편찬위원회、1971年、103頁)。

これほどの技巧があろうか！一本の火輪をもって天下のあらゆるものが作られるとは、これほどの技巧があろうか！孔子の語らなかつたものを、私は見たいとは思わない。先般、私の遊覧に反対した者は正しかった。私に遊覧を勧めた者は間違っていた。正しい言に従わなかつた私の遊覧は、間違いだったのか。聞くところによると、この奇技淫巧を利用厚生するという。利用厚生ならば、これを学ぶべきである。まして見るだけならなおさらであろう。

日本は今や、文明論的見地から見て野蛮ではなく、利用厚生ユリコウオンの技術と産業という長所を持った、明確な他者として認識されつつあった。道徳を基準に文明と野蛮を分別した従来の文明観は、圧倒的な技術文明の前に揺らぎはじめた。<sup>7</sup> 金綺秀は視察後、渡日の前に抱いていた日本への夷狄観を脱したが、<sup>8</sup> 帰国後地方官に左遷されてしまう。それほどまでに、当時は「倭洋一体」を唱える衛正斥邪論が、ほぼすべての儒教知識人の脳裏をとらえて放さなかつた。<sup>9</sup> 明治日本が受容した西欧近代技術に接した朝鮮の知識人の中から、華夷論的な倭洋一体観を捨てて近代技術の受容を唱える者が登場するのは、第2次修信使であつた金弘集の『朝鮮策略』に影響されて開化政策が進められ、<sup>10</sup> 朝士視察団が明治日本の近代文物

7 許東賢『근대한일관계사연구：朝士視察團의 일본관과 국가구상』(국학자료원, 2000年、24~28頁)。

8 하우봉「개항기 수신사의 일본인식」(김용덕·宮嶋博史 共編、고려대학교 아세아문제연구소, 2001年、248~249、256~257頁)。

9 한철호「제1차 수신사(1876) 김기수의 일본인식과 그 의의」(『사학연구』84、2006年、157頁)。

10 金弘集は、国王に献上した報告書において、王政復古と門戶開放の過程

と制度を調査して以降である。<sup>11</sup>

朝士視察団の中には、日本を改革のモデルととらえて文明観の転換を経験した者もいたが、ほとんどの朝士にとってこの4か月という視察期間は、生涯かけて身にしみついた儒教の価値観・世界観を払拭するにはあまりに短かった。<sup>12</sup> これは、日本が孔子廟の祭享を廃止したことに朝士が慨嘆し、儒学の衰残を惜しんだことからよく分かる。<sup>13</sup>

李鏞永：近頃の利益ばかりを求める国家間の競争には、誰に教わるまでもなく、心底慨嘆しております。もし、このようなことが絶えず続いたならば、周公と孔子の教えと礼樂の風俗を、将来どこで明らかにすればよいのでしょうか。本当に、取るに足らない物事のように憂い、嘆くだけではすみません。  
姜文馨：百濟人の王仁が書籍をもたらして以来、經典の教えが始まった。中世においては学問が隆盛し、孔孟を重んじて程朱(宋の儒学者程顥・程頤と朱熹を指す-引用者)を論じる者

---

を紹介し、これを時勢に合った「自然之勢」として肯定しており、明治維新以降の富国強兵策を好意的に評価している。하우봉「개항기 수신사의 일본인식」(김용덕·宮嶋博史 共編, 고려대학교 아세아문제연구소, 2001年, 250~251頁)。

- 11 許東賢「조사시찰단의 일본 경험」(514~520頁)。
- 12 許東賢「1881년 朝鮮 朝士 日本視察團에 관한 一研究」(『한국사연구』52, 1986年, 135~137頁)；許東賢「1881년 朝士視察團의 明治 日本 社會·風俗觀」(『한국사연구』101, 1998年, 148頁)。
- 13 이현영『일사집략』(許東賢『資料集』14, 46頁)；강문형『聞見事件』(許東賢『資料集』12, 14頁)；민종목『聞見事件』(許東賢『資料集』12, 124~125頁)；엄세영『聞見事件』(許東賢『資料集』12, 338頁)；심상학『일본견문사건초』(許東賢『資料集』12, 232~233頁)。

が登場し、中国の経書と史書が将来して以降は、経書や文章に秀でた儒者が多く登場した。だが近頃は、西学が大きく栄え、各藩の文廟はほとんど官署に取って代わるか廃棄されており、5経や4子(孔子・曾子・子思・孟子)は無用物となってしまった。漢文を学ぶ儒者は零落して立志がかなわず、ただ嘆き、むせび泣いている。

関種黙：明治以降、新たに取り入れた書籍の十中89は西洋のものである。学ぶ者の4~5人がときおり図書館を訪れる程度で、学生がいない。最近祭享を廃止したというが、ある者の話では、これを断行したのは、恐れ多くも要職にある者だったという。これほど恥知らずで嘆かわしいことがあるのか。

巖世永：孔子の文廟には書籍館(今の図書館)が設けられ、中国・日本・西洋の書籍をすべて収め、読書に訪れる者は1日に数百人である。嗚呼！かつての聖人から賜った学問を、どうして経書ではなく雑多な書籍から始めようとするのか。

沈相学：孔子の文廟を訪れたが、孔子の塑像は無事に安置されていた。建物の名は大成殿といい、最初の門は仰高門、第2の門は入徳門、正門は杏壇門と記されていた。左の建物内には4書5経と百家子書が卓上に並べられ、経書を尊重する節度はあったが、右の建物には様々な国の諸本が無造作に置かれ、不敬きわまりない。

彼らは儒教的価値基準にもとづき、明治日本で見聞した多くを批判的に評価した。そのため西欧の近代知識には特別な関心を示さなかったが、利用厚生に益だと判断した近代技術については積極的な受容の構えを見せた。李金憲永は「あらゆる厚生の方法と富強の術策において、見習うべきものは見習い、変えるべきものは変えるべきだ」とし、趙準永は「軍制・兵器・船・機械・農法な

ど、国を強固にし、民を豊かにするに値するもの」は見習うべきだとしている。<sup>14</sup> また閔種黙は、日本の産業振興の経験を選別的に受容するよう示唆している。「中国は人が多く国土も広いが、西洋人に害され、強いとは言えない。日本は小国だが、富強之術に努めて勢力を拡張しているため、弱いとは言えない」。<sup>15</sup> こうした考え方は、部分的に実践された。趙秉稷の随行員であった安宗洙は、耕教学舎の設立者であり日本を代表する農学者だった津田仙や官僚から近代農学の知識を習得した後、朝鮮に帰国して『農政新編』(1885)を編集し、1884年には「農務牧畜試験場」を設置した。<sup>16</sup> 朝士の金鏞元は、日本滞在時に大阪造幣局で「金銀分析法」を研修し、1882年8月ごろからは鉱山の採掘技術と養蚕学を学んだ。魚允中の随行員であった金亮漢は、造船所で航海術を学ぶ一方、釜石鉱山で鑄鉄技術を身につけ、1882年11月に日本政府の技術資格証明「器械図卒業証章」を取得した。孫鵬九は当初、東京大学で西洋医学の学習を志したが、日本語力の不足から入学を果たせず、品川ガラス工場に見習工として入り、ガラス製造技術を学んだ。<sup>17</sup>

このように、視察団員の大多数は、生涯かけてしみついた儒教的価値観からの脱脚、文明観の変革を経験できなかったが、伝統

---

14 이현영 『聞見事件』(許東賢『資料集』12、513頁); 조준영 『聞見事件』、許東賢『資料集』12、610~611頁。

15 『承政院日記：高宗篇』辛巳9月初1日條。

16 李光麟「安宗洙와 農政新編」(『(改訂版)韓國開化史研究』、一潮閣、1969年、223~224、226頁)。

17 許東賢「1881년 조사시찰단의 활동에 관한 연구」(『國史館論叢』66、1995年、33~35頁)。

文化・制度を温存させる範囲内で国家の富強と民の厚生に役立つ西洋の制度・技術を受容するという、いわゆる東道西器論にもとづく国家改革を構想した。東道西器論者の国家構想は、大きく四つに要約される。<sup>18</sup>

第1に、彼らは明治日本の国家統合システムから、王政復古、集権的政府形態、三権分立の権力構造、そして行政体系と官僚制度の効率性に深い関心を示したが、民権の拡大には否定的だった。特に司法制度、警察制度、軍制、軍事力に大きな関心を見せた。

第2に、彼らは「節用愛民」という伝統的な経済観から日本を見ており、明治維新以降の経済成長を高く評価していたが、これらもたらず国家財政と民間経済の破綻を大いに憂慮していた。彼らの構想は、日本式の産業振興政策を選別的に採択、推進するというものだったが、利便性と財政収入の増大効果をもたらす交通・通信施設、優れた近代式鉱山採掘設備と工法、技術人材の養成、国民啓蒙と技術自立のための博物館と産業博覧会の開催、農民啓蒙事業をはじめとする農業振興政策の受容には積極的だった。

第3に、日本の社会・風俗上の変化には概して強く批判的であった。だが商工業の振興のためには職業・身分制度の変化が必要だと認識しており、利用厚生面においては新聞の啓蒙機能や西洋医学、盲学校といった社会福祉施設を肯定的にとらえた。要するに彼らの立場は、西洋の社会制度や技術を選別、受容するという

---

18 許東賢「1881년 조사시찰단의 활동에 관한 연구」(『國史館論叢』66、1995年、97~126、149~166、186~207、219~232頁)；許東賢「조사시찰단의 일본 경험」(522~524頁)。

ものであった。だが彼らは、西欧近代思想こそがまさに明治維新以降の文明開化の原動力であった点を看破できず、西欧近代技術の優越性のみを認め、技術文明を開花させた基礎の重要性を認識できないという結果をもたらした。彼らの国家生存戦略は、いまや不可避となった西欧への門戸開放と西洋勢力の進出に対応し、近代技術や兵器体系を受容しつつ、伝統的な体制や価値を維持・強化していくというもので、近代国民国家の創出には限界があり、所詮は弥縫策であった。

だが東道西器論者が提起した近代技術受容論は、改新儒学者に影響を及ぼし、開化上疏運動の契機となった。特に壬午軍乱の後、1882年8月には国王による近代技術受容論が国家の政策として明言され、東道西器を主張する前職官僚や在野の儒者の開化上訴が続けられた。<sup>19</sup> 東道西器論の論理は、尹学善の上訴(1882年12月)にもよくあらわれている。<sup>20</sup>

嗚呼！西法の登場により、その機械の精密さと富国の法は、周を興した呂尚や、蜀を治めた諸葛亮といえども、論じることはいけません。君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の倫理は、天から本性に与えられ、天地に通じ万古に広がるがごとく、不変の理致の上に道となったものであります。一方、車・船・軍事・農業・機械は、民を安んじ国に益するものであり、器として外

19 권오영「동도서기론의 구조와 그 전개」(『한국사시민강좌』7, 1990年、86~96頁)。

20 『日省録』 고종 19年 10月 7日條(譯文 권오영、前掲論文、92~93頁より再引用)。

面に表れるものです。私に変化をはかるのは器であり、道ではありません。

このように、西欧や明治日本の近代文物のうち儒教道徳を損なわない技術・兵器などの受容をはかる採長補短の東道西器論に立脚した近代技術受容論は、1880年代前半を風靡した。物質と精神を分離し、儒教文明の本質を損なわない技術のみを受け入れるとする排除と受容の論理は、時代と状況の変化を受けて次第に受容へと傾いていき、その内容も技術・制度から精神へと拡大していったのである。<sup>21</sup>

### 3. 近代知識・技術の受容による 国民国家樹立論

西勢東漸の時代を迎えた日本は「ウエスタンインパクト」にいち早く対応し、明治維新によって日本型国民国家を達成し、地域の中心として生まれ変わった。弱肉強食の世界で生き残るため、「力」の育成を深刻に受け止めた開化派知識人の目に、日本は野蛮ではなく、文明の象徴として映りはじめた。もはや日本は「倭」という蔑視の対象ではなく、見習うべき「和」として認識された。こうした文明観の変化は、1882年の第3次修信使として日

---

21 장인성「근대 조선의 일본관」(180~181、193~194頁)。

本に赴いた朴泳孝の紀行文のタイトル『使和記略』からも理解できよう。開化派知識人は、西欧中心の新国際秩序の中で朝鮮が生き残るにためは、明治日本を理想の改革モデルとして学ぶべきだと考えた。<sup>22</sup> このような変化は、朝士視察団の洪英植(1855~1884)や魚允中(1848~1896)が、帰国後国王に復命した際の対話によく表れている。<sup>23</sup>

高宗：日本の制度は壮大で、政治は富強だと聞くが、いかがであったか。

洪英植：日本の制度は壮大ではありますが、それらはすべて、結集と蓄積の成すところでございます。財力に至っては、様々な事業を推進しているため、そこからくる不足を常に憂っております。その軍政は、強くないとは言えません。ですがこれらはすべて、昼夜を問わず懸命に心と力をひとつにし、成し遂げたものです。日本が、その努力によって現在を達成したことを思えば、それは難しいものではありません。

高宗：ただ富強のみをはかった戦国時代と同じであるか。

魚允中：まことにそうでございます。春秋戦国は小戦国、現在はまさに大戦国であり、あらゆる国は、ただ知識の力によって競争しております。……現在の形勢を見るに、富強でなければ国家を守ることはできず、上下が志をひとつにして努力

22 許東賢「개화기 한국인의 일본관」(222~225頁)。『사화기략』에 대해서는 최덕수「『사화기략』(1882) 연구」(『사총』50, 1999年、31~53頁); 한철호「개화기 박영효의 『사화기략』에 나타난 일본 인식」(『한국학논집』44, 2008年、95~124頁)を参照。

23 『承政院日記』1881年9月1日條; 魚允中『從政年表』(許東賢『資料集』13、194頁)。

すること、まさにこれに尽きます。

魚允中は、当時の国際情勢を洞察しつつ、弱肉強食の春秋戦国時代よりも生存競争の激しい当時において、国家生存の道は富国強兵以外にないと結論づけた。国力とはつまるところ国が保有する知的能力の総合であり、国の富強は知識力の規模にかかっているというのである。彼のいう「知識」とは、西欧の近代国民国家が作り上げたあらゆる制度と科学技術を意味している。そのため彼は「各国の貿易とは、単に物貨のみの交易ではない。才芸によって互いに助け合うことでその知識と技を身につけ、良いものを受け入れて長所を実践する。これが才知と知識の貿易であり、その益は物貨よりさらに大きい」とし、情報と知識の交流を盛んにするよう提案した。<sup>24</sup>

儒教的価値観のくびきから逃れた魚允中と洪英植は、日本視察を機に近代知識と技術受容の必要性を痛感した。魚允中は儒学崇拝の弊害を痛烈に批判し、その最大の弊害であった科举制度を廃止し、海外留学などを通じて近代知識と技術を受け入れるよう提案した。<sup>25</sup>

我が国は、日頃から儒教を崇拝し、柔弱かつ懦弱に陥ることを人徳とするため、勇猛をもって名を馳せる者が皆無である。ゆえに、風俗の変革をするには、まず彼らの旧習を痛烈に廃すべ

---

24 어윤중『수문록』(許東賢『資料集』13、56頁)。

25 어윤중『수문록』(許東賢『資料集』13、15、24、25、56頁)。

きである。

近頃、各国が外国留学に熱を入れているが、行き先のほとんどは大国である英国やフランスであり、小国に行かないのは、思慮が行き届いていないためである。大国が行うところは、総じてその物質の富裕に基盤を置いているため、浪費に過ぎ、財物の消耗も少なくない。我々のような小国は容易に到達できないばかりか、これにならえば国民を疲弊させ、財を減らすのみである。現在西洋には、英国・フランス・ドイツ・ロシアだけでなく、ベルギーやスイスなどの国においても法や規範に学ぶべきものが多く……逆に優れた点もある。

科挙を廃止すれば、功名進取を目指す者が先を争って外国に行き、才知と技芸を学んで帰ってくるであろう。もし科挙を廃止しなければ、人材を得るのは難しく、皆が過去の学問に安住し、精進しようとしないうらう。

古人はみな貧窮を樂、安貧を徳と考えてきたが、これは誤りである。人々に貧困を樂と思わせるだけで、生きる術を見いだす努力をしなければ、どうしてその口と身体を支えられようか。

さらに彼は「日本人は、ことの利益や損を考えず断行してきたため、失うものがあったても、国体を立てることができた。清国人は、旧習に延々とし、虚しく歳月を過ごしている。これをもって天下を見れば、利害を顧みず実践する者が成功する」として、明治日本の近代化政策を高く評価した。<sup>26</sup>このような認識は、朝士視

---

26 어윤중『수문록』(許東賢 編『조사시찰단관계자료집』13(국학자료원, 2000年, 7頁)。

察団の随員として日本に留学した尹致昊(1865~1945)の言にも見いだせる。<sup>27</sup> 彼は1884年6月1日、高宗に次のように進言している。<sup>28</sup>

清国は人が多く、土地が広く、日本の11倍にもなります。ですが日本は、30年余りの更張・振作によってその文明と富強が人々に語られるようになり、60年も外国と通商してきた清国より百倍もましです。それはいかなる理由からでしょうか。清は古きを守ってきたに過ぎませんが、日本は古きを改め、新しきを学んだためです。我が国には、この2つの手本があります。新しきを求めること、古きを守ることの利害は明らかであり、疑う余地がありません。

このように、魚允中と尹致昊は、日本視察と留学経験から、日本型国民国家を朝鮮における実現可能な国家モデルとする改革構想を立てることができた。<sup>29</sup> 日本型国民国家は、彼らの中で、朝鮮における実現可能な国家モデルとしての地位を占めるようにな

---

27 彼の中国への嫌悪感は、知人に宛てた書簡にもよく表れている。「中国に対する私の意見を話します。中国という国は、あたかもこの上なくよどんだ汚水の溜まり場のようなものです。……よどんだ水は腐り、雑草におおわれ、泥と虫が満ち、汚濁するのが常です。中国はまるで老いた家のようなものです。……その屋根は、いまにも現代を吹き飛ばそうとする強い暴風が吹けば真っ先に飛んでいこうと準備しているのです。中国はまったく馬鹿な老人と同じなのです」。윤치호「T. H. Yun's Letter to Anonymous Person, June 5, 1885」(윤경남 역『(국역) 좌옹 윤치호 서한집』, 효산문화, 1995年, 32~33頁)。

28 송병기 역『국역 윤치호 일기』一(연세대학교출판부, 2001年, 150~151頁)。

29 許東賢「어윤중(1848~1896)의 개화사상 연구: “온건” 개화파 내지 친청사대파 설에 대한 비판적 검토」『한국사상사학』17, 2001年, 442~467頁; 許東賢「개화기 윤치호의 해외체험과 문화수용」『한국문화연구』11, 2006年, 123~124頁)。

る。魚允中による国家の設計構想を見ると、その事実はより明白となる。<sup>30</sup> まず彼は、日本の国家統合システムの導入を考えていた。彼は日本同様、君主が国家統合の求心的役割を果たす象徴としてのみ君臨し、実質的な権力は近代的改革をはかる勢力で構成された集権政府に持たせる構想を持っていたようである。また富国強兵策の実施と国権の確立、そして民が近代国民に生まれ変わり君民同治を担う主体へと成長するまでは、立憲政体を保留すべきだと考えていた。こうした「上からの富国強兵政策」の成功の妨げは、何よりも官僚制の効率的な整備であった。魚允中は、官僚が国政運営の主体となり、国家資源と国民の力を効率的かつ合理的に配分・組織する案を示した。科举制度の廃止や成果給制度の導入、官吏の商工業への従事などがそれである。そして対外自主権の確保と産業振興に必須だと考えた近代司法体系の受容、特に西欧に不平等条約締結の口実を提供する残酷な封建的行刑制度の改革を主張した。また彼は近代的な軍事体制の確立にも積極的意思を示した。実際、非民主的集権政府として特徴づけられる日本型国民国家の国家統合システムは、多元化した近代市民社会の創出には根本的な限界があった。だが西欧の制度を部分的に模倣した当時のそれは、立憲制に向かう過渡期的なものであり、三権分立が整備されていたため、少なくとも外形的には近代政治体制への発展と一致していたと言えよう。そして日本の統治・支配機構

---

30 許東賢「어윤중(1848~1896)의 개화사상 연구: “운건” 개화파 내지 친청사대파 설에 대한 비판적 검토」(『한국사상사학』17, 2001年, 442~467頁)。

は、日本同様、市民階層が存在しなかった当時の朝鮮にとって、模倣可能な発展モデルであった。<sup>31</sup>

次に、経済統合のための鳥瞰図が挙げられる。彼はその手始めとして、物的・人的交流と情報・知識交換の通路となる交通・通信網を近代化し、さらにこれを基盤に、日本と同じ政府主導の近代産業を振興し、民間部門の商業を育成できるよう、計画していた。そして財政調達案として財政管轄権の中央集権化、税制の近代化をはじめ、財閥の育成による資本の集中、関税自主権の回復による財源調達、外資導入を模索した。彼は、韓国史上において組織的な借款の導入と政府主導の経済開発計画を立案、推進した最初の人物だったと言える。

最後は、国民・文化の統合案である。彼は朝鮮社会の遅滞要因を儒学の崇拜に見だし、日本のような「上からの改革」を牽引する精神的支柱として、儒学に代わる西欧の近代思想とキリスト教の受容を考えた。また近代国民の形成のため、身分制の打破と教育の振興によって革新的な社会改革論を立案し、新知識と情報を積極的に受容し、西欧諸国への留学生派遣によって先進文明を吸収することが肝要と考えた。

こうした革新的な国民国家樹立論は、急進開化派の金玉均・洪英植・朴泳孝らの理想にも通じ、後に彼らが作成した甲申政変政綱の原形をなすものであった。魚允中は福沢諭吉に宛てた1881年12月20日付の書簡で、金玉均と朴泳孝、徐光範を自身の「懇意な

---

31 許東賢「조사시찰단의 일본 경험」(509~512頁)。

友人」だと紹介し、彼らの訪日にあたって便宜をはかるよう、依頼している。<sup>32</sup> また金玉均が日本周遊中、魚允中が著した日本と中国の紀行録『中東紀』を肌身離さず持ち歩いたという逸話や、朴泳孝の「1882年に修信使として渡日したことが、甲申政変の大きな契機となった」という回顧談などは、魚允中が急進開化派に多大な影響を与えたことを示唆する。<sup>33</sup>

#### 4. 岩倉使節団との比較からみた 朝士視察団の限界

朝士視察団は、韓国の近代西欧文物受容の歴史において特筆すべき歴史的イベントであった。視察団には、この経験が近代知識と技術の受容の必要性を自覚する契機となり、彼らの国家構想は、その後の朝鮮における政治・社会に少なからぬ影響を及ぼした。また視察団は、韓日文化交流史における交流のあり方の転換期であり、日本を近代化の発展モデルに見立てた最初の動きでもあった。12人の高官が日本の各地を訪問、視察し、その見聞を朝鮮の改革に活かそうとしたことや、留学生を派遣して日本の学

32 「魚允中書翰(明治14年 12月 20日)」「福澤宛書翰」、慶応義塾編、『福澤諭吉全集』21(岩波書店、1964年、374頁)、「弊邦金玉均朴泳孝徐光範3君皆中(魚允中)之切友也 又此航渡貴邦先以先生之名誦之 當即往拜矣(?) 乞隨事周旋 無有艱窟之患」。

33 許東賢「조사시찰단의 일본 경험」(520~521頁)。魚允中が親清的な穩健開化だとする説への批判は、上述の「어윤중의 개화사상 연구」を参照。

問と技術を学ばせたことは、歴史上、初の試みだったのである。

韓国史という枠組に限っていえば、1881年に中国に派遣された領選使や、1883年に欧米を周遊した報聘使といった海外使節団が特に記録を残さなかった半面、朝士視察団の成果は、近代知識・技術に対する理解の深さと幅において傑出したものであった。だが、幕府末期の西欧派遣使節団や、明治維新後の岩倉使節団など、朝士視察団に似た性格の日本使節団に比べれば、朝士視察団の脆弱さが露呈する。両者を比較すると、朝鮮における近代知識・技術を受容する努力の限界が見えてくる。

西欧先進文明の受容を目指した日本の努力は、公式使節団の派遣や海外留学生の動向からうかがうことができる。日本では、幕末～明治維新直前までに6つの欧米使節団が派遣されているが、1860年の米国派遣使節団は80人、1862年の西欧歴訪使節団は38人であった。また1862年にはオランダ、1865年にはロシアに留学生を派遣しており、さらに明治維新を主導した長州・薩摩も、同時期に英国に留学生を密かに派遣している。各国の政治・学制・軍制などを把握する使命を帯びた使節団は、代議政治、軍事制度、政府専売制度、社会保障制度、医術、病院経営法、各種学校、電信、郵便、土木技術、埠頭、保税倉庫など、近代西欧文明が作り上げたあらゆるものに探求の目を向けた。特に1862年における使節団の西欧文物調査は、非常に組織的で徹底していた。下級調査員が毎日、活動報告書を提出すると、上級書記官はこれをもとに『英国探険』、『フランス探険』、『ロシア探険』という冊子にまとめた。<sup>34</sup> なかでも福沢諭吉の旺盛な活動は群を抜いていたという。

初めて目にする汽車に同僚が感歎し、車両の大きさ、速度、レールの幅や高さを測定して日記に記録している間、彼は鉄道会社の構成と経営法、銀行業、英仏のエジプト鉄道分割支配などに目を向けていた。この経験をもとに、福沢は西欧近代文明の構造を体系的に記述し、新たな国家構想のビジョンを示す書を著した。それが『西洋事情』である。当時15万~20万部が売れたというこのベストセラーは、日本人に、西欧近代の産物である国民国家樹立の夢を効果的に伝える最高のメディアであった。<sup>35</sup>

朝士視察団が日本に派遣される10年前に、明治日本は大規模な海外使節団を派遣する。右大臣岩倉具視を特命全権大使とするこの海外使節団は、4人の特命全権副使(参議木戸孝允・大蔵卿大久保利通・工部大輔伊藤博文・外務少輔山口尚芳)と政府機関の中堅実務官吏41人からなる46人の公式使節をはじめ、18人の随行者、留学生43人で構成されていた。廃藩置県の断行からいまだ4か月、近代国家への第1歩を踏み出した新生政府は、政府首脳を半分を使節団の代表として送り出すとともに、彼らの下に幕末の使節参加者を書記官として配属し、さらに政府機関から派遣した専門理事官を参加させるなど、総勢100人余りとなる岩倉使節団を派遣したのである。<sup>36</sup> 岩倉使節団の性格と目標は、当時の彼らを送り出した太

34 田中彰『開国と倒幕：日本の歴史』15(集英社、1992年、223~225頁)；芳賀徹著、손순옥 역『명치유신과 일본인』(예하、1989年、125~136頁)。

35 芳賀徹著、손순옥 역『명치유신과 일본인』(예하、1989年、138~140頁)。

36 田中彰『岩倉使節団：講談社現代新書』487(講談社、1977年、8~9頁)；田中彰『岩倉使節団『米欧回覧実記』：同時代ライブラリー』174(岩波書店、1994年、2~3頁)。

政大臣、三条実美の送別の辞によく表れている。<sup>37</sup>

外国ノ交際ハ国ノ安危ニ関シ、使節ノ能否ハ国ノ榮辱ニ係ル。今ヤ大政維新、海外各国ト並立ヲ図ル時ニ方リ、使命ヲ絶域万里ニ奉ズ。外交・内治、前途ノ大業其成其否、実ニ此挙ニ在リ。豈大任ニアラズヤ。大使天然ノ英資ヲ抱キ、中興ノ元勳タリ。所属諸卿皆国家ノ柱石、而テ所率ノ官員、亦是一時ノ俊秀、各欽旨ヲ奉ジ、同心協力、以テ其職ヲ尽ス。我其必ズ奏功ノ遠カラザルヲ知ル。行ケヤ海ニ火輪ヲ転ジ、陸ニ汽車ヲ輾ラシ、万里馳駆、英名ヲ四方ニ宣揚シ、無恙帰朝ヲ祈ル。

岩倉使節団は、1871年11月から翌年9月までの1年10か月間、米国・英国・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・ロシア・デンマーク・スウェーデン・イタリア・オーストリア・スイスなど欧米の先進諸国を公式訪問し、帰路においては中東とアジアの惨状を視察した。<sup>38</sup> 三条の送別の辞のごとく、岩倉全権大使と大久保・木戸副使は、明治維新の主役であり、帰国後の政権を掌握した中心人物であった。視察から得た知識と情報にもとづき、大久保は『立憲政体に関する意見書』を、木戸は『憲法制定の建言書』を提出したことから分かるように、自らの国家構想、換言すれば日本型国民国家の創出を直ちに実践することができた。<sup>39</sup> そして使節団の中堅官吏や留学生も、諸分野において頭角をあらわし、

---

37 田中彰『岩倉使節団：講談社現代新書』487(講談社、1994年、44頁)。

38 田中彰『岩倉使節団：講談社現代新書』487(講談社、1977年、46~194頁)。

39 田中彰『岩倉使節団：講談社現代新書』487(講談社、1977年、210~212頁)。

日本型国民国家の形成を実質的に支えた。さらに岩倉使節団の成果は、久米邦武の著書『米欧回覧実記』にそっくり盛り込まれ、全国民が共有できる知識と情報となった。久米は同書において「この使節が得たあらゆる成果を、国民の一般的利益と開発のために編集・刊行」と記しているように、岩倉使節団員は、天皇ではなくまさに国民の代表と考えており、こうした考えを実践し、自らの経験を国民と共有したのである。<sup>40</sup>

一方、これより10～20年後、近代の文物を学ぶ途に就いた朝鮮の朝士視察団は、日本の使節とは違い、非公式の視察団だった。当時の朝鮮と日本の、近代文物受容の姿勢を間接的に示すものと言えよう。視察任務を帯びた12人の朝士と随行員は、およそ4か月間、日本の制度と文物を調査・視察したが、彼らの経験が朝鮮の近代化政策に全面的に活用されるのは困難であるという限界を、当初からはらんでいた。まず彼らは、個人的に高宗の密命を受け、視察に赴いた。当時の衛正斥邪派の力は強く、それ以外に方法がなかったのである。このような性格を持った視察団と、幕末・明治維新後の使節団とを比較すると、次のような視察団の限界が指摘できよう。

第1に、近代文物の受容を開始したのは、日本が1860年以降、朝鮮はその20年後であり、しかもそれは日本の視線によって変

---

40 田中彰『岩倉使節団：講談社現代新書』487(講談社、1977年、46頁)；松本健一『日本の近代：開国・維新』1(中央公論社、1998年、347～355頁)；福井純子『米欧回覧実記の成立：米欧回覧実記を読む』(法律文化社、1995年、429～430頁)。

容したイメージの間接的経験であった。4か月～1年余りという視察・留学は、日本型国民国家や西欧近代の知的成果を十分に消化・理解するには極めて短く、不十分であった。留意すべきは、視察団が受け入れた西欧の近代知の多くが、日本の知識人による「訳された近代(translated modernity)」―「誤訳」、「誤読」された近代―によるものであった可能性が高い点である。これによって彼らは、西欧と日本の相互作用によって日本的に変容した「三重に訳された近代(triple-translated modernity)」をさまようことになり、そこからくる知的混沌は、当代における日本の知識人よりもさらに大きかったと思われる。<sup>41</sup> 近代の西欧から移入した概念―日本人の手による造語、訳語―に初めて接した視察団にとって、文字の背景にある概念の差を克服することは容易でなかった。<sup>42</sup>

第2に、福沢の言葉のように、日本使節団は西欧の近代が成し

---

41 現在はfreedom and people's rights movementという訳語が定着した自由民権運動も、明治時代の日本人が個人の個別的な(individual)権利を集合概念として民権(people's right)と誤訳したことによるや、Herbert SpencerのSocial Statics(1851)の翻訳において書名を『社会静学』ではなく『社会平権論』と誤訳することにより、同書が自由民権運動の聖典に位置づけられたというエピソードが、その代表例である。丸山真男・加藤周一著、임성모 역『번역과 일본의 근대』(이산, 2000年、54、88~89、107頁)。「翻訳された近代」の概念についてはLydia Liu, Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900~1937, Stanford University Press, 1995; 임성모 역『옮긴이의 말』(『번역과 일본의 근대』(이산, 2000年、219~226頁)を参照。

42 秋月望「스에마쓰 지로(末松2郎)의 필담에 나타난 '근대': 1881년의 '신사유람단'과의 교류를 중심으로」(『근대교류사와 상호인식』I, 고려대학교 아세아문제연구소, 2001年、25~34頁)。

遂げた精神的・物質的成果の要を把握し、これを日本に適用することによって西欧諸国と肩を並べるという明確な目的意識を共有しており、その構成員の多くは、進取の志を抱いた明治政府の中心人物であった。一方で朝士視察団は、優れた資質と能力を有する精鋭官僚ではあったが、魚允中と洪英植を除けば、国王の命を理由とする「受け身的」参加者であり、封建君主の家臣という枠組を抜けきれてはいなかった。随行員の選抜も朝士との私的な関係によるもので、尹致昊や兪吉濬(1856~1914)など日本留学の予定者を除けば、ほとんどは官職経験を持たない専門性に欠ける人物だった。このほか20人余りからなる訳官出身の通訳や従者も、近代文物制度に対する朝士の理解を支えるに足る意識の高さはなかった。

第3に、日本の使節団は自らの経験を活字化し、国民との共有に努めたが、朝鮮の朝士は、それを行わなかった。朝士は帰国後、王の密命をいかにうまく遂行したかを報告するため、約2か月間、書写に優れた衙前を使って『聞見事件』と『視察記』形式の報告書を作成し、絹で装丁された手書本が、高宗に献上された。つまり朝士の報告書とは、国王や一部の為政者が政策を決定する際の参考資料として利用される程度であり、その影響が民衆にまで及んだと考えるのは困難である。<sup>43</sup>

---

43 朝士らの手による日本見聞報告書の大部分は、高宗の個人蔵である集玉齋に保管されてきた。이태진『고종시대사의 재조명』(태학사, 2000年、300~303頁)。

## 5. 結論

本稿では、1876~1884年にかけて、遣日使節の日本を介した近代技術・知識の受容とその変容について見てきた。これによって得られた内容は、次の通りである。第1に、1880年代における政府の開化政策推進に支えられ、西洋や日本の先進技術・農法などの受容を唱える東道西器論を支持する改新儒学者が増加し、明治日本に対する華夷論的認識は儒教知識人の間で次第に力を失っていった。彼らは、明治維新によって達成した日本の富国強兵と産業化を高く評価し、利用厚生、近代技術、産業面における長所を有する文明の他者として日本を認識した。こうした儒教道徳を損なわない技術・兵器のみを受容するという採長補短の東道西器論に立脚した近代技術受容論は、1880年代前半を風靡した。物質と精神を区分し、儒教文明の本質を損なわない技術の選別的受容という排除と受容の論理は、時代や状況の変化にともなって次第に全面的な受容へと傾きはじめ、その幅も、技術や制度から精神へと拡大していった。だが、日本の侵略が表面化するにつれ、排除の論理も継続して提起されていた。儒教文明と近代文明の折衷を目指した東道西器論者は、儒教的信念を手放さなかったことで、明治日本の帝国主義的侵略を批判することができた。<sup>44</sup>

---

44 장인성「근대 조선의 일본관의 구조와 성격: 자기·타자·상황의 함수적 표상으로서의 일본관」(김용덕·宮嶋博史 共編、고려대학교 아세아문제연구소, 2001)

第2に、国民国家樹立論者は、日本をモデルとした国民国家を朝鮮に樹立しようとした。彼らにより、伝統的な日本夷狄観が払拭され、日本を前近代から見習うべき優れた文明と認識する、他者イメージの逆転現象がもたらされた。魚允中と尹致昊は、日本視察と留学をもとに、朝鮮における実現可能な国家モデルを日本型国民国家に求める改革構想を作り上げた。特に魚允中は、明治維新以降に日本が成し遂げた国家、経済、国民、文化統合のシステムをモデルに、改革推進の主体となる集権政府形態の導入、借款の導入と政府主導の経済開発計画の立案、西欧の近代思想・キリスト教の受容、そして近代的国民形成を目的とする身分制の打破と教育の振興など、革新的な国民国家樹立論を掲げた。これは、後に甲申政変を主導した金玉均・洪英植・朴泳孝などの改革構想の原型というべきものであった。しかしながら、日本を改革モデルとする認識は、固定的ではなかった。尹致昊や朴泳孝、徐載弼などは、力を重視する現実主義的文明開化論者であり、社会進化論に立脚した黄色人種主義やアジア連帯論の影響を受け、当初は日本を独立の擁護者と考えたが、日本が次第に侵略者としての容態を見せはじめると反感を示し、反日姿勢をあらわにした。尹致昊や朴泳孝らの明治日本認識は、国際政治・国内政治の情勢とともに変化したが、その好悪・肯否の基準は、一貫して祖国と民族の生存にあった。彼らの対外認識には矛盾も見られるが、民族を

---

年、180~181、193~194頁)。

主語とする際には一貫していたのである。<sup>45</sup>

第3に、巨視的に見ると、衛正斥邪派の知識人と異なり、西欧文物の受容に柔軟な姿勢を示した東道西器論者も、日本視察によって得た近代文物と制度の知識に支えられ、考えが大きく転換し、朝鮮における国民国家樹立の必要性を自覚する可能性が高かった。一例として、福澤諭吉は1862年のヨーロッパ周遊時において、西欧近代の産物である民主主義の基本制度と慣行を理解できなかったが、<sup>46</sup> そこから得た新たな見聞にもとづき、近代的啓蒙思想家へと生まれ変わることができた。西欧の近代文物に接し、習得した知識と情報が即座に理解できなくとも、長期的に福沢の世界観の変化に大きな影響を与えたのは確かなようである。朝鮮においても、東道西器論を掲げた朝士の数人が、10余年の歳月の後、本格的に日本志向の近代国民国家樹立をはかった甲午更張(1894~1895)に参加している。当時、朴定陽は学部大臣と総理大臣、李金憲永

---

45 장인성 「근대 조선의 일본관의 구조와 성격 : 자기 · 타자 · 상황의 합성적 표상으로서의 일본관」 (김용덕 · 宮嶋博史 共編, 고려대학교 아세아문제연구소, 2001年, 163~164頁; 許東賢 「개화기 윤치호의 해외체험과 문화수용」 (123~148頁)。

46 福澤諭吉 「福翁自伝」 (慶應義塾 編 『福澤諭吉全集』 7, 岩波書店, 1970年, 107~108頁)。「ソレカラ又政治上の選挙法と云ふやうな事が皆無分らない。分らないから選挙法とは如何な法律で議院とは如何な役所かと尋ねると、彼方の人とは只笑て居る、何を聞くのか分り切つた事だと云ふやうな訳け。…… 又党派には保守党と自由党と徒党のやうなものがあつて、双方負けず劣らず鎬を削つて争ふて居ると云ふ。何の事だ、太平無事の天下に政治上の喧嘩をして居ると云ふ。サア分らない。…… 彼の人と此の人とは敵だなんと云ふて、同じテーブルで酒を飲で飯を喰て居る。少しも分らない」。

は内部大臣、巖世永は農商工部大臣として活躍した。甲午更張の改革推進機構であった軍国機務処は、彼らのような東道西器論者が肯定的に受容した日本の集権政府に類似した集団指導体制の性格を帯びており、当時地方制度改革の一環として進められた選挙による郷会の構成も、彼らが高く評価した日本の府・県会に似た制限的自治制度であった。こうした点からすると、彼らもまた、長期的に国民国家樹立の必要性を自覚していたものと考えられる。だとすれば、国民国家樹立を唱えた魚允中の理想は、なにゆえ水泡に帰すよりほかなかったのか。理由は多々あろうが、その1つは、皮肉にも魚允中と同じ理想を夢見た急進開化派が、日本の力を借りて無謀に起こした流血クーデター（甲申政変、1884）に、そしてもう1つは、甲申政変の失敗によりさらに激しくなった中国の干渉と保守勢力の反動に求められよう。

※ 和訳：篠原啓方（関西大学）

# 近代における早稲田大学の 中国人留学生

- 1899~1931年を中心に

楊寧一(北京師範大学)

清朝末年より、中国では日本留学ブームが起こり、中国の近代化という社会構造の転換を大きく促進させた。中国の留日運動に対し、学界では数多くの研究がなされてきた。本稿は『早稲田大学校友会員名簿』を基本的な手がかりとして、1899年から1931年にかけての早稲田大学の中国人留学生について事例研究をおこなう。対象とする時期を1931年までとするのは、1931年に日本が中国侵略戦争を起し、留日学生が明らかな減少傾向を見せるため、モデルとしての意義を持たなくなるからである。

## 1. 近代中国の留日運動における早稲田大学の位置づけ

中国人留学生を受け入れた学校を研究する際、よく取

り上げられるのは、主として弘文学院・東京同文書院・法政大学および陸軍士官学校である。近代中国の留日運動において、多くの学校はそれぞれに重要な役割を果たしているが、なかでも早稲田大学は特別な地位を有していると筆者は考えている。

当時、中国人留学生を受け入れた学校は主として2種類ある。ひとつは言語学習を主とする速成学校で、弘文学院・東京同文書院がこれに属する。弘文学院は1902年に開設し、校長は嘉納治五郎、その前身は亦楽書院である。学院の修業年限は3年制で、日本語および中等レベルの普通学科を教授し、第3学年で文科と理科の2部に分かれる。1909年に同校は閉鎖された。東京同文書院は、中国人留学生のために、同文会が1902年に創設したもので、主として日本語と普通中等学科を教授したが、政治的目的が顕著で、1926年に閉鎖された。明らかに、この類の学校は運営期間が短く、中等教育と大学予科教育に注意を払っており、高等レベルの人材を養成できなかった。

もうひとつは法政大学・陸軍士官学校など。正規の大学あるいは専門学校である。陸軍士官学校は軍事的人材を養成する専門学校で、1898年にはじめての中国人留学生が入学した。士官学校を卒業した留学生は、清末から民国初年にかけての中国軍隊現代化過程において主たる役割を果たし、そのなかでも数人は中国の軍事や政治の舞台において大いに活躍した。法政大学は1904年から中国人留学生を大量に受け入れ始めた。20世紀初期の留日学生は、その多くが法律を学習することを希望し、なかでも法政大学に入学した人数が最も多かった。しかし、法政大学は成立してからし

ばらくの間は法律専門学校であり、夜間の授業が主体で、1904年  
によようやく実業科を設けた。1920年、新たな大学令に基づいて総  
合大学となり、昼間の授業が主体になった。<sup>1</sup>

上述の学校と比べると、早稲田大学は次のような特色を持つ。

1. 早稲田大学は予科と補習科を備えていたのみならず、本科  
と研究生教育を有し、しかも後者を主としていた。

2. 学科の設置について、早稲田大学は比較的完備しており、  
政治・法律だけでなく、文学科や商学科も備え、さらに理工科や  
師範科も有していた。

3. 留学生を受け入れた期間が長い。早稲田大学は1882年に創  
設され、1899年から中国人留学生を受け入れはじめ、近代を通じ  
て途切れることがなかった。

4. 早稲田大学の創立者である大隈重信は「東西文明の調和」を  
掲げたが、歴史的背景と主観的意図があるとはいえ、文明論の観  
点からは高く評価されるべきもので、「ある意味では、大隈の創立  
にかかる早稲田大学の学問を支えるバックボーンとなるべきもの  
を有している、ということができ」、「早稲田大学という特色ある  
私学の学問のあり方に対しても、その根本原理となりうる根源性  
を秘めているものである」。<sup>2</sup> したがって、早稲田大学はアジアを、  
とくに中国の伝統を重視していたのである。1905年、中国人留學  
生のために、教育機構である清国留學生部をわざわざ設立したこ

---

1 法政大学編『法政大学80年史』（法政大学、1961年、49～68頁）参照。

2 峰島旭雄「従比較文化的的角度来看」（大隈重信『東西方文明之調和』中国国際広  
播出版社、1992年、298頁）。

とは一つの実例である。該部には本科・予科・補習科が設けられた。本科は2年制で、その下に師範科・政治理財科・商科を設け、師範科はさらに物理化学科・博物学科・歴史地理科に分かれた。

5. 早稲田大学の建学の趣旨は「学問の独立」で、学校を自由な研究と教育の場所とした。この趣旨のもと、早稲田大学には真理を追究し、現実に関心を持ち、さらには反骨精神を持つような学者たちが集結した。たとえば浮田和民・安部磯雄・佐野学・久米邦武・津田左右吉・大山郁夫などである。身をもって伝え言葉をもって教える彼らの態度は留学生に対して、学問の点のみならず人格の点においても、知らず知らずのうちに感化する影響力を生じた。

それゆえ、近代中国の留日運動において、早稲田大学に入学した留学生は数多い。実藤恵秀氏の『中国人日本留学史』の統計によると、1902～1931年にかけての早稲田大学の卒業生は1272人で、統計中に列挙された各種学校のなかで第3位である。さらに、早稲田大学の中国人留学生は帰国後、中国の各領域の近代化過程において重要な役割を果たした。

## 2. 『校友会員名簿』が映し出す早稲田大学の中国人留学生の基本状況

早稲田大学図書館には現在、大正元年、2年、3年、4年、13年、15年、および昭和2年、3年、4年、5年、6年の各年に出版

された『早稲田大学校友会員名簿』（以下『校友会員名簿』と略記）が保存されており、これらは早稲田大学の中国人留学生を研究するうえで貴重な史料である。以下、こわらの『校友会員名簿』に対して初歩的な整理をおこなう。

1902年に第1期の中国人留学生が卒業してから1931年にいたるまでの、早稲田大学の中国人留学生の卒業生の状況は次の通りである。<sup>3</sup>

卒業年	1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
人数	1	2	4	4	12	6	228	196	209	98	32	58	10	13	39	21	27	15	43	22	53	30	30	18	17	15	12	9	20	28

この表によると、1908～1911年におけるの卒業生数は他の期間のそれよりも明らかに多い。主な原因は清国留学生部の学生がおおむねこの時期に卒業したからであろう。このほか、注意を要するのは、一定数の卒業生は『校友会員名簿』に登録されておらず、実際の卒業生数は『校友会員名簿』に記した人数よりも多いということである。

早稲田大学がどれくらいの中国人留学生を受け入れたか、現在のところ信頼できる数字は明らかではないが、ただ、卒業生数をよりどころとして、おおむね推測することができる。実藤恵秀

3 実藤恵秀『中国人留学日本史』（三聯書店、1983年、113～115頁、「歴年畢業於日本各校之中国留学生人数一覧表」より）。

氏が指摘するように、1908年における大学専門学校の卒業生数は、彼らと同時期に来日した留学生総数のおよそ10分の1を占め、1927～1937年の11年間の卒業生平均数は、同時期における毎年の留学生平均数の3分の1にあたる。<sup>4</sup> このように、1908年と1927～1937年という2つの時期においては、卒業生数と同時期の留学生数との比率の差はあまりに大きい。一方、学界では通常、近代中国における日本留学者数は7万人前後と考えられており、記載されている卒業生の人数は11966人である。この両者の間の比率はおよそ6対1から7対1で、ちょうど実藤恵秀氏が指摘する比率の中間値である。はひとまず6対1の比率に照らして推計すると、1899年から1931年にかけて、早稲田大学は合計8000人近くの中国人留学生を受け入れたことになる。これは少なくない数字であると言えよう。

留学生は卒業後、多くが帰国して就職した。帰国後における居住地域の分布は次のとおりである。

地区	北京	上海	浙江	広東	直隸	四川	湖南	江蘇	江西	山西	福建	湖北	安徽	山東	広西	遼寧	河南	貴州	陝西	吉林	甘肅	雲南	黒龍江	台湾	総数
人数	99	17	166	83	57	51	50	42	39	33	26	24	22	21	18	18	13	11	10	6	3	3	2	1	815

北洋政府時期の行政区域に照らすと、早稲田大学卒業生の帰国後における居住地域には2つの特徴がある。第1に、モンゴル・青

4 実藤恵秀『中国人留学日本史』（三聯書店、1983年、117～118頁）。

海・新疆・チベット以外の全国の大部分の地区に及んでいる。第2に、分布は不均衡で、経済・文化先進地域の人数が多い。

卒業生が中国で従事した職業はおおむね4種類に分けられ、具体的状況は次の表のとおりである。

職業	政界	教育界	経済界 (実業・金融界を含む)	自由業(弁護士・ 記者などを含む)	総計
人数	79	32	20	17	148

表によると、卒業生のなかでは政界に入った者が最も多く、教育界がこれに次ぎ、同時にまたある程度の人数が実業および金融業に従事している。もちろん、『校友会員名簿』には、147人分の職業しか記載されておらず、こわは卒業生総数の8分の1にすぎないため、8分の7の卒業生の職業はなおも不明である。このなかには共産主義運動に従事した者やすでに死去した者を含むが、大多数はおそらく社会の最末端で働き生活する、社会的低層に属しているとみられる。言葉を換えていえば、『校友会員名簿』に職業が記載されている卒業生は社会のエリート層に属しているとみてよからう。

### 3. 早稲田大学の中国人留学生の各領域における中国近代化に対する貢献

上述のとおり、早稲田大学の留学生教育水準は比較的

高く、専攻の設置も比較的完備していたため、中国人留学生は帰国後、各領域に分布し、大きな影響を及ぼした。以下、それぞれ個別に紹介していきたい。

政治の分野では、表に示したとおり、早稲田大学の中国人留学生で帰国後政界に入った者は非常に多い。そのなかには、卒業生のみならず中途退学者もいる。これは単に早稲田大学で受けた専門教育と関係があるだけでなく、当時の中国の情勢にもよっている。周知の通り、共産主義運動に身を投じた陳独秀・李大釗・澎湃・廖承志といった人物はみな早稲田大学で学習した。そのほか、楊度・張繼・馮自由らは、みな中国の政界で一時大いに名を上げた。中国の政界で活躍した早稲田大学出身の留学生は多くの部門に及んでおり、国会議員もいれば、財政部・司法部・交通部・外交部の官吏もいおり、中央政府に奉職する者もいれば、地方政府の要人もいる。なかでも、幾人かは中国の政治建設に対して多大な貢献をなしており、景耀月はそのような1人である。景耀月は1882年に山西省芮城に生まれる。1904年に山西ではじめての官費留日学生として、早稲田大学に入学して法律を専攻し、卒業時に法学士の学位を得る。日本留学中、景耀月は孫中山が創立した同盟会に参加して組織幹事を担当し、また留日学生の学友によって中国留日同学会の主席に推挙され、胡漢民・宋教仁・黄興らとともに、中国に民主共和国を創立するために奔走した。

帰国後、彼は上海で于右任とともに『民吁日報』を創刊し、さらにしばしば新聞に時評や文章を発表して、宣伝して民衆を動員し、反帝反封建の革命運動に参加させた。辛亥革命前夜、彼は北

方地域における武装蜂起の準備工作を担当した。武昌起義後、彼は山西省代表として各省代表会議に参加して議長に推挙され、苦心さんたんしつ、多くの仕事を適切に処理した。彼は『臨時約法』や『臨時政府組織法』を起草し、民主体制を確立する立法事業に対する貢献は非常に大きい。大統領の就任宣誓の儀式を直前控え、就任宣言がいまだ適切に準備できていなかったところ、彼はかたわらの部屋に入、ほとんど一気呵成に『臨時大總統就任宣言』を完成させた。彼は参議会参議長の肩書で、孫中山の就任を支持する演説を発表し、孫中山に印綬を手渡した。南京臨時政府の成立後、彼は臨時政府の教育次長に就任し、南京政法大学の校長を兼任した。彼は全国初の民主的教育法規の立案を主宰し、男女が平等に教育を受ける権利を有することを主張し、孔子祭祀や読経を廃止するなど、中国近代における民主的教育のために基礎を定めた。彼はいつも「国父」孫中山とともに国家の大計を討議し、かつて孫中山は「高遠」と自ら書いた掛け軸を彼に贈ることで、彼のかくかくたる功績を表彰した。

彼は袁世凱の帝制復活に反対し、北洋政府の時流に逆行したふるまいを糾弾したため、彼は総統府懐仁堂に十数日拘留された。袁世凱は帝制復活という目的を達成するため、大金をつかって景耀月を手なづけ自分の役に立たせようとしたが、彼は手厳しい言葉で拒絶し、帝制賛成の証書署名しなかった。張勳復辟においては、彼は義憤にかられ、ひそかに山西に帰ると、山西・陝西・河南の各省の革命勢力に働きかけて「兩河討伐軍」（兩河は黄河・渭河を指す）を組織し、総司令に推挙され、逆賊を糾弾した。また、曹錕賄

選においては、彼は病気のため入院していたが、それでも旧友に親筆の手紙を託して曹錕に送り、その恥ずべき行為を厳しく非難した。東北軍閥の張作霖が中国共産党指導者の李大釗らを逮捕した際、彼は張作霖に手紙を送り、文化界の愛国人士を殺害しないように忠告した。

景耀月は日本に留学したとはいえ、民族的気骨を保ちつづけた。「918事変」を聞いて驚き、彼は机に向かって慟哭し、3日間床についたきり食事をとらなかった。彼は偽滿州国総理の鄭孝胥に手紙を送り、「祖国を裏切り、甘んじて呉3桂・洪承疇にならい、敵を味方と取り違え、……」と、厳しく責めた。1935年、「華北事変」後、日本は長い間下野していた呉佩孚が出馬して「華北自治」を計画準備することを支持したが、彼は呉佩孚と面会し、止めるよ忠告した。1936年、「西安事変」が発生した時、彼は張学良・楊虎城の両将軍および毛沢東・朱徳にそれぞれ手紙を送り、「必ずや蒋介石に内戦を停止させ、党派間の争いを止め、大局に気を配り、団結して外国の侮りに抵抗し、祖国の滅亡を救って生存をはかり、内戦を避け、敵につけている隙を与えてはならない」と伝えた。1937年、「77事変」後、日偽政府は景に対して硬軟両様の態度で、華北教育総署の事業を主管するよう求めた。彼は「私は文人であり、政治に関心を持たない」と拒絶した。日偽政府は景が北平図書館館長に就任したというニュースを新聞に発表した。彼はただちに新聞で、「この事を私は事前に知らなかった。私はいま年をとって体が衰え、さまざまな病がかかっており、まことにその任に堪えがたい」と声明した。彼は自らが危うい立場に置か

れていることを重々承知していたが、いささかも恐れることなく、なおもつねにこう語っていた。「私は文文山(文天祥)なることができなければ、ただ史可法にならいたいものだ。現在は民族興亡の大事であり、国内の紛争をともにせず、決して一時逃れをしてはならない」と。また、「餓えて死ぬことは小さな問題だが、節操を失うことは重大事だ。蘇武は私の模範である」とも語った。抗戦期間中、彼は長らく危険な状況にあり、収入がなく生活は困窮し、病気を治療する金銭もなく、病状は日に日に悪化し、ついに日本の侵略者に迫害されて死に至った。

景耀月は、中華民国の創立における不朽の功績と、抗戦期間中の身をもって国に殉じた忠義あふれる行為によって、重慶の国民党政府は彼のために盛大な追悼会を開き、褒揚撫恤令〔生前の功績を表彰し、栄典を授与する令〕を頒布した。また、中国共産党も『新華日報』に彼の逝去のニュースを報道した。<sup>5</sup>

外交界で活躍した富士英もまた取り上げるに値する人物である。富士英(1880~1926)、浙江省嘉興の人。1898年に日本へ留学し、早稲田大学に入学する。4年後に卒業して帰国すると、総理各国事務衙門および北洋大臣公署で外交関係の任務に従事した。1913~1919年、駐朝鮮総領事をつとめる。この時期、朝鮮はすでに日本の植民地に成り果てていたが、富士英は着任後、中国系住民のために子弟学校を創設し、愛国教育を実施した。総領事館は

---

5 高勝恩「景耀月と民国初創」(『文史月刊』2007年第10期); 高勝恩「民国風雲人物景耀月的家世後裔」(『文史月刊』2007年第11期)。

ソウルの市街区中央に位置し、敷地が広がったため、日本人は垂涎してすみやかにこれを奪い、改築して総督府にすることを計画した。そこで、富士英は大金の賄賂を贈り、総領事館を買い上げようとたくらんだが、彼に厳しい言葉で拒絶させた。富士英が離任して帰国した後、日本人はまた同じやり口で後任者を買収し、ついで富士英に大金の賄賂を贈って、これ以上異議を出さないよう求めた。こわ対して富士英はまたも拒絶したうえ、当局に上書し、このように主権と国威を失うような事は絶対に行ってはならないと力説した。結局、日本人は目的を達成できなかった。この後、富士英は外交部参事となった。あるとき新疆の伊犁を巡視したが、現地の官吏が不正をはたらいていたので、官吏はひそかに財物を贈って、庇護を得ようとたくらんだが、富士英は手厳しく断った。北京での任期中、交通費や交際費などはみな自分の給料から支払った。経済状況が逼迫すると、家中の使用人を解雇して、彼の妻が家事をつとめた。彼は長年奉職したが、清廉潔白で、8人の子女はみな苦勞し、試験を受けて公立学校に入学した。<sup>6</sup>

教育の分野は、早稲田大学の中国人留学生から人材が輩出した分野である。

蹇念益(1876~1930)、貴州省遵義の人。8カ国連合軍が中国を侵略し、清朝政府が主権を失って国を辱められ、志ある青年が次々と出国して留学し、強国化への道を探求しようとする潮流のなかにあつて、蹇念益は日本に渡って早稲田大学に入学し、法政を専

---

6 浙江省人物志編纂委員会編『浙江省人物志』(浙江人民出版社、2005年)参照。

攻すると、抜群の組織力によって中国人留学生総会の幹事に当選し、梁啓超と交わりを結んだ。蹇念益は梁啓超より3歳年少で、政治的主張が近かったため、きわめて親密な間柄となった。学問を修めて帰国した後、清朝政府のもとで勤務した。辛亥革命後、梁啓超にさらに接近した。ある一時期、梁啓超の計画は、みな蹇念益が決断したため、「梁謀蹇断〔梁が計画し蹇が決断する〕」と言われていた。袁世凱の帝制活動がますます激しくなったころ、蹇念益は蔡鍔とともに北京・天津の間を往来し、梁啓超とひそかに袁世凱反対を画策した。護国戦争後、各地の軍閥が依然として割拠して雄を唱え、いまだ国事が軌道に乗らながた。蹇念益は政府の職に就こうとせず、ただ議員の資格のみで共同して国家の大計を定めようとした。

教育の分野における蹇念益の貢献は、1912年、法学界の著名人とともに北京に朝陽大学を創設したことである。これは法律・政治・経済などの学科を主体とする著名な私立法科大学で、世に名声を博した。また、同大学は中国における法学の揺籃の1つで、世間では「南有東呉、北有朝陽〔南に東呉大学あり、北に朝陽大学あり〕」「無朝不成院〔朝陽大学がなければ裁判所が成りたたない〕」と称された。1949年、もとの場所に中国政法大学が設立され、翌年2月には華北大学・華北人民革命大学と合併して中国人民大学となった。<sup>7</sup>

任凱南もまた教育の分野で貢献した早稲田大学の中国人留学生

---

<sup>7</sup> 熊先覚・徐葵『法学揺籃—朝陽大学』（北京燕山出版社、1997年9月第1版）。

である。彼は湖南省湘陰に生まれ、青年期から聡明で学問を好み、官費生に採用されて日本に留学し、早稲田大学に入学して学問を深めた。日本留学中、黄興と交流をもって同盟会に加入し、辛亥革命のために奔走し、また文章を執筆した。辛亥革命後、イギリスのロンドン大学で、経済学を専攻し、経済学の博士号を取得して帰国した。

彼は教育によって亡国の危機を救うことができると深く信じていた。1921年、雷夢強とともに長沙大麓中学校を創設し、また湖南省立図書館館長を兼任した。1922年、さらに湖南商業専門学校の創設をとりしきり、校長に就任して革新に励み、教師と学生の素質に注意を払った。1926年、同校は工業専門学校・法政専門学校などと合併して省立湖南大学となった。任凱南は経済学教授を担当し、1928年に校長に就任当選した。1927年、国立武漢大学の準備委員会委員および同大学経済学教授に招かれた。1932年、武漢大学経済系主任となり、のち武漢大学法学部研究所経済学部主任を兼任した。その後、任凱南は招きに応じて湖南大学に戻って教務長を担当し、大麓中学の理事長などの職を兼任した。抗日戦争中、彼は湖南省参議院に招かれたが、1945年、「参加しても議論せず、議論しても決定せず、決定しても実施しない」ことを痛感し、ついにその職を辞した。のち、湖南省教育庁の庁長に任命されたが、固辞してその地位に就かず、次のように言った。「教育事業をするのは役人になるためではない、役人になりたがる人には教育事業をすることはできない」と。彼の収入は大半が書籍の購入にあてられ、書籍を天下公共の財産とみなしていた。彼の死後、

その子孫は彼の遺言にしたがい、一万冊余りの蔵書を湖南大学と  
大麓中学に寄贈した。

任凱南はその一生を教育事業にささげたと見えよう。彼は淵深  
な学識を備えていたが、経済学の分野において造詣がもっとも深  
く、経済学界では、「南任北馬〔南の任凱南、北の馬寅初〕」と賞さ  
れる両大家の一人であった。<sup>8</sup>

文化の分野では、早稲田大学の中国人留学生はきら星のごと  
しと言えよう。蘇曼殊・杜国庠は中国の文化界では誰もがその名  
を知っているが。ここで紹介すべきは、章太炎門下の「5大天王」  
と称されるなかの4人、すなわち黄侃・汪東・錢玄同・朱希祖で  
ある。彼らはみな早稲田大学出身で、帰国後に北京大学・輔仁大  
学・北京師範大学・国立中央大学(現在の南京大学)といった名だたる  
学校で教員を務めた。黄侃は国学大師とたたえられ、錢玄同は国  
語改革活動家・文字音韻学家にして5・4新文化運動の唱導者の1  
人である。また、朱希祖は中国の大学の文科に歴史系が設置をわ  
て以来、初めて歴史系主任を担当した。

早稲田大学の中国人留学生には、記者や弁護士など自由業に従  
事した人物もいる。林白水はジャーナリストのなかでもすとくに  
優わぐれた人物である。彼は福建省閩侯の人で、新聞界の先駆者  
である。彼は若いころから新聞業に従事し、のちに日本に留学し  
て、国外で新聞学の課程を学習した最初の中国人と称される。帰

---

8 汨政文整理「任凱南先生伝略」(政協汨羅市委員会文史資料研究委員会編『汨  
羅文史資料』第1輯、政協汨羅市委員会文史資料研究委員会、1987年)所収。

国後、いちど政界に入るも、その後長期にわたって新聞の編集発行にたずさわり、『公言報』・『社会日報』・『平和日報』などを創刊し、つねに政論に関する文章を発表して、軍閥・政客の内幕や醜聞を暴いた。中国の新聞事業に対する林白水の大きな貢献の1つは、口語で書かれた新聞を創刊し、新聞の文語から口語使用への転換を推進したことである。1923年1月25日、『社会日報』に文章を載せ、軍閥の張宗昌の腹心である潘復の所行を暴いて、次のように書いた。「こちらの潘の旦那について言えば、彼の役人としての成績は実に驚くほどだ。彼はあわせて1年と数ヶ月ほど財政次長兼塩務署長を務め、北京に大家屋を2軒購入し、装飾品も込みでおおよそ10万元を費やした。また天津のイギリス租界では大洋館を建て、敷地だけでも10畝もの広さ、工事や地価をひっくるめ、合計15万元も費やした」。分かりやすい言葉でつつみ隠さず真実を語ったのである。まさにこのようであるため、社説でしばしば軍閥の張宗昌を論難したことによって、1926年に張に逮捕・殺害されてしまうのである。<sup>9</sup>

唐宝鏢は弁護士〔中国語では律師〕界における優れた人物だといえる。唐宝鏢は上海に生まれ、中国近代の著名人である唐紹儀の甥である。唐宝鏢は中国ではじめて官費で日本に派遣された13人の留学生の一人で、亦楽書院に入学し、卒業後、清朝によって駐日本長崎領事館の副領事代理に任命された。このとき21歳であ

---

9 王仲莘「白話報的鼻祖 通俗化の大師—謹以此文紀念林白水先生英勇就義80周年」(『炎黄縱横』2006年第8期)。

る。2年後、駐東京公使館の館員へ転属した。

唐宝鏢が駐日公使館で通訳を担当していた時期に、同時に東京の早稲田専門学校の行政科で国際法を学び、卒業後はさらに早稲田大学政治経済部に進学した。彼は中国で初めて日本で学士号を取得した留学生である。唐宝鏢は早稲田大学を卒業後に帰国したが、役人としての出世に関しては大きな進展はなかった。1924年に政界を離れて以後、天津に定住し、弁護士業に専念するのである。

唐宝鏢は天津できわめて有名な弁護士であるのみならず、中国国際法学科の創始者でもあり、中国律師協会の創設者にして、長期にわたって中国律師公会の会長を務めた。これらの肩書きは中国の弁護士業に対する彼の貢献を証明するに十分である。<sup>10</sup>

このほか、早稲田大学を卒業した中国人留学生のなかには、実業に従事した者もいる。たとえば、『校友会員名簿』の記載によると、明治41年卒業の程良楷は上海中国銀行の総稽核をつとめ、明治42年卒業の汪振声は済南中国銀行に就職し、大正6年卒業の楊繼灝は中国電気股份有限公司という会社に就職している。残念なことに、彼らに関する他の史料は現時点ではいまだ見つからない。

---

10 唐培堃「中国最早的留日学士唐宝鏢」(政協珠海市委員会文史資料研究委員会編『珠海文史 第7輯』、1988年)。

#### 4. 早稲田大学の中国人留学生の後進地域発展に対する推進作用

中国は領土が広大で、地域間における発展水準に大きな差がある。早稲田大学の中国人留学生は帰国後、経済・文化が比較的発達している地域に相対的に集中し、後進地域で就職した人物はやや少ない。とはいうものの、これらの少数の留学生が後進地域発展に対して及ぼした推進作用は大きなものである。我々は次にあげるいくつかの具体的事例によって、この点を見ることができよう。

浙江省は近代における経済先進地域であり、『校友会名簿』に記載されている中国人留学生の卒業者が最も多い省である。早稲田大学の中国人留学生が浙江省の近代化過程において重要な役割を果たしたことは、疑念の全地がない。たとえば、科挙廃止後、浙江省では新式教育に適応した教員がきわめて不足していたため、浙江巡撫は1906年に浙江兩級師範学堂を設立した。同学堂は浙江省の新式学堂のなかで規模が最も大きく、小中学の教員を専門に育成した。

浙江兩級師範学堂は当初から、日本留学経験を有する者の招聘を重視し、教員のなかで早稲田大学の中国人留学生は一定の割合を占めていた。楊乃康は、1908年に早稲田大学清国留学生部師範科を卒業し、招聘に応じて博物科を教授し、いちど教務長も代理した。朱希祖は1908年に早稲田大学清国留学部歴史地理科を卒業後、1909年に同学堂の歴史教員を務めた。葉正度は早稲田大学を

卒業後、同学堂で外国歴史および外国地理を教授した。易周宗は1906年に早稲田大学専門部政治経済科を学習し、同学堂で法律制度と財務管理を教授した。張宗緒は1908年に早稲田大学師範科を卒業後、博物学と植物学を教授した。彼らが教授した科目はほとんどすべて日本で学んだものであり、内容や教育方針も斬新で、両級師範学堂の水準を高めた。両級師範学堂の水準向上は、すなわち浙江省の新式教育を担当する小中学教師の水準向上を意味しており、浙江の長期的発展に対して大まな影響があったことは疑いない。<sup>11</sup>

当時、貴州省は比較的後進的な地域であり、浙江省のように留学後帰国してきた大量の人材を集めることはできなかった。清代において、貴州省は3人の状元と1人の探花を輩出し、「三鼎甲一探花」と称された。民主主義革命者で遵義出身の楊錫謨は、若い頃に「公車上書」に署名したが、科挙試験の合否に影響することを恐れ、楊兆麟と改名し、1903年に第1甲第3名(探花)となった。のち、日本に留学し、早稲田大学の法学博士号を取得した。日本では同盟会に加入し、民主革命に参加した。辛亥革命後、政局が動揺したため、1914年に遵義に戻って定住し、地方政府や土地の長老・同郷人の招きに応じて、郷里のために事におたった。彼は地方志『続貴州府志』の編纂をとりしきる一方で、袁世凱らの北洋軍閥を極度に憎み嫌っていたため、北京での国史編纂の招きに対

---

11 呂順長「清末における浙江省留日学生の帰国後の活躍」(大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶水の書房、2002年)。

して婉曲に断った。袁世凱が皇帝を称し、蔡鍔が最初に武装蜂起すると、彼は貴州省の民主派の同志と積極的に連絡して呼応し、自ら電文を起草し、全国に電報を発信して袁世凱を糾弾した。その後、地方の先哲を顕彰するため、祠堂を修築したり文集を編纂するなどの事業に参加した。1919年、5・4運動が起こると、遵義はあまり開けておらず、情報が届くのがやや遅かったため、6月下旬になってようやく各界が次々と呼応しだしたが、彼は自ら現場に赴き、演説を発表した。<sup>12</sup> 楊兆麟の活動は貴州省における民主革命の発展をおおいに推進したのである。

教育の分野では、1905年前後、貴州省は2回に分けて20人の学生を日本に留学させたが、そのなかの一人である王佩芬は早稲田大学に入学した。彼らは帰国後、積極的に新教育を推進し、また貴州大学堂で教員を務め、学校運営の中堅勢力となった。1928年、貴州大学堂の基盤の上に貴州大学が設立された。王佩芬は中国語を教授する一方、1930年には貴陽県立中学を創設した。民国初期、貴陽県の教育は発展が緩慢で、1920年代にはただ普通中学が一カ所あるのみであった。王佩芬は校長を務めたがその学校運営は誠実で、社会から好評を得た。ある人が評して言うには、貴州省には軍事・政治・教育文化および科学技術に関する事業にたずさわる者が多数いるが、それらはみな彼の門下から輩出され、まことに「桃李満天下〔門下生が天下に満ちている〕』」と言うべきだ、と。<sup>13</sup>

12 韋敦「清探花貴州遵義楊兆麟生平」（『貴州文史叢刊』2001年第1期）。

13 楊適「民国時期貴陽普通中学教育簡介」（および熊先煜「憶貴陽県中校長王夢淹先生」、ともに政協貴陽市委員会文史資料研究委員会編『貴陽文史資料選

また別の後進地域である福建省龍岩にも一生涯を教育事業にささげた早稲田大学の中国人留学生がいる。林会嘉は、1891年に龍岩に生まれ、1918年に日本へ留学し、1921年に早稲田大学政治経済科を卒業した。帰国後、彼は「仕官せず、商人にならず、教育に専念する」という精神で、1903年に設立された省立第9中学校で教職に就き、のちに学監および事務主任を担当し、同時に曹溪萃英小学校の校長を兼任した。1929年、彼はインドネシアに居留したが、依然として学校経営を生業とし、郷里の教育事業を気に掛けていた。1947年に帰国し、中学校で教員を務めつづけ、また教育のために資金を寄付して校舎を建てることを何度も取り仕切った。<sup>14</sup> まさに林会嘉ら教育事業に献身する何世代もの人々の努力のもと、第9中学(現在の龍岩一中)は人材を輩出し、「赤い土地上の教育の真珠」と讃えられている。

## 5. むすびにかえて

早稲田大学の中国人留学生の個別事例から見いだせるのは、早稲田大学で受容した近代教育を受容した中国人留学生は、帰国後、受容した新知識・新思想を中国社会の実際

---

輯』第26輯、政協貴陽市委員会文史資料研究委員会、1989年)。

- 14 林栄照「畢生為教育事業服務的林会嘉先生」(政協龍岩市委員会文史資料研究委員会編『龍岩文史資料』第13輯、政協龍岩市委員会文史資料研究委員会、1986年、89~90頁)。

の中で運用していることであり、これは留学が知識の交流と伝播における1つの重要な形式であり、大学が国際的な知識交流の重要なルートの一つであることを証明している。ただ、あらゆる大学が国際的な知識交流の作用を生じたわけではなく、あるいはその作用には大小があった。早稲田大学の事例から見いだせるのは、これが少なくとも2つの条件によって決定されることである。1つは高水準の教育、1つは学校運営が国際化に向かっていることである。

留学におけるこの種の特殊な知識交流と転移の作用を研究する際、従来は少数のエリート層に比較的注意が払われ、社会の末端の状況がおろそかにされてきた。たとえば、著名な学者である安藤彦太郎が、早稲田大学と中国との関係を研究した著作において、重点的に研究された中国人留学生は、李大釗・彭湃・廖承志のみであった。<sup>15</sup> 実際のところ、留学生は末端あるいは地方において、立身出世を求めず黙々と働き、人から敬服され、そのうえ彼らは世故にたけ、高等教育を受容してきたため、その土地において必然的に大きな影響力を持ち、中国社会を支える基礎を構成したのである。このため、彼らに対する研究によって、社会変遷の本当の状況をより明らかにできるのである。当然のことながら、彼らに対する研究には大きな困難さがあり、ほとんど手がかりのない状況下で史料を収集していくことが必要なのである。

---

15 安藤彦太郎『未来にかけの橋—早稲田大学と中国』成文堂(2002年、第4部分、早稲田で学んだ中国留学生)参照

このほか、留学生の作用を評価する際、突破しなければならぬ方法上の問題が存在する。現在にいたるまで、一般に留学生の作用を論証するに当たり、多く採用されている方法は、留学の経歴と帰国後の活動を紹介することである。この種の方法にはひとつの盲点がある。すなわち、留学の経歴と帰国後の活動との間に必然的関係があるのかどうかということであり、もしもあるのならば、それがどこに体现されているのか、ということである。たとえば、本稿で取り上げた「5大天王」のうちの4人は、みな早稲田大学を卒業したとはいえ、みな国学大師である章太炎の弟子でもある。彼らの業績は、どれほどが早稲田大学から恩恵を被り、どれほどが章太炎から恩恵を被ったものであろうか。これは具体的に分析する価値のある問題である。このほか、同様に日本に留学しながらも、本稿で紹介してきた人物を含め、中国近代化に対して重要な役割を果たした人々が存在する一方で、殷汝耕のような売国奴も少数ながら存在する。これまでの研究方法はあまりにも単純化さすぎていた。今後、留学生が受容した教育内容、思想発展の変遷過程、帰国後の活動の指導的思想など、多方面に対して深く研究を掘り下げなければならず、それによってはじめて留学生の作用に対して適切な評価を下すことができるのである。

※ 和訳：宮原佳昭(京都大学)

## 第2部

### アジア主義の連鎖





동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

# 「小日本主義」、「中帝国主義 (財界提携による戦争抑止論)」、 「大亜細亜主義」

- 近代日本におけるアジア主義の3つの可能性

松浦正孝 (北海道大学)

## 1. はじめに

第1次世界大戦以降の「新外交」時代以降において、日本を中心に存在したアジア主義の可能性を考えると、筆者の整理では、主に3つの可能性が影響力あるものとして考えられる。但し、本稿では、今回の会議の共通テーマが「東アジア知識交流と歴史記憶」であるにもかかわらず、これまで日本のアジア主義を論ずる際に必ずといって良いほど言及されてきた、「京都学派」や3木清など、思想史研究者が重視してきた知識人をほとんど扱わない。むしろ、軍人やジャーナリスト、財界人といった、当時の日本社会においてかなり高い程度の知識・教養を持ち、同時に現実社会に対する実際の影響力をを持った人々を扱う。それは、1つには、筆者が現実の政治史における影響力を重視すると共に、これまで、日本思想史が重視してきた、実際の政治的影響力に疑問のあるこれら思想家たちの思想自体を議論することに、興味を

覚えなからでもある。しかし、もう1つには、本稿で扱う人物は、当時の日本帝国やアジア秩序が如何にあるべきか、という秩序観やイデオロギーを持っていた教養人であり、広い意味では「知識人」と呼べるのではないかと思うからである。また、彼らの間では、様々な形の「歴史記憶」が大きな役割を果たしていた。

なお、本稿が「アジア主義」を論ずるにあたって、強調し過ぎるほど強調しておかなければならないことがある。それは、日韓両国では、「アジア主義」という言葉の意味が大きく異なることである。これは、日韓両国のみに限らず、アジアで「アジア主義」を語る際に常に気をつけなければならない点である。極端な言い方をすれば、「アジア主義」には、それを語る人の数の「アジア主義」の内容があるとさえ言えるのにも関わらず、そのことがほとんど認識されていない。日本では、侵略と連帯との両方の側面を持つかなり幅広い含意を持つ言葉として、そして、朝鮮半島の植民地化や「東亜新秩序」、「大東亜戦争」、「大東亜共栄圏」を含む日本の過去の侵略の歴史及び、戦後から最近にかけての東アジア共同体を含む議論をも含む言葉として、「アジア主義」という言葉は使われている。しかしその反面、日本で使われる「アジア主義者」の中には、尾崎秀実などを除けば、例えば延安などで中国側の捕虜となって中国共産党などと連携した反戦同盟や、戦時期日本の体制外で活動した野坂参三などの「左翼」は通常含まれない。<sup>1</sup> 日本に

---

1 その典型的なものとして、竹内好『日本とアジア』（筑摩書房、1993年）所収の「日本人のアジア観」、「日本とアジア」、「日本のアジア主義」、「方法としてのアジア」などの諸論文を参照。

における「アジア主義」には、冷戦が影を落としているのである。一方、韓国では、「アジア主義」という言葉は、「大東亜共栄圏」などの1930年代・1940年代を中心とした日本による侵略という特定の歴史事象を指すものであり、1990年代以降の東アジア地域を中心とした地域的連帯主義については、「東アジア論」ないし「東アジア言説」という言葉を使う方が適切だという。<sup>2</sup> とするならば、本稿が、小日本主義から大亜細亜主義までを「アジア主義」のカテゴリーとして扱うことは、そもそも大きな誤解を招く危険性を持つ。この点について、ここではまず、日韓両国で使われる言葉の意味の違いを確認し、そして本稿では、「アジア主義」を、日本で使われているかなり広い意味で使うことを強調しておかなければならない。もちろん、日本における「アジア主義」という用語のこのような使われ方、即ち、連帯と侵略との連続性を含意する使われ方自体を批判すること自体は、1つの立場として十分理解できる。

本稿では、韓国併合や朝鮮半島の植民地支配が日本による侵略行為であるということを明確に認めた上で、その時代の日本の置かれた国際環境や当時の政治環境の場の中において、侵略と連帯という2つの要素の結びつき方をめぐって幅広い立場のあり方があったこと、その2つの要素が時に表裏一体であったり密接な関係にあることを含め、様々なヴァリエーションがあったことを、論じていきたい。かつて、日本帝国の朝鮮植民地(特に南総督下での

---

2 姜東局「韓国におけるアジア主義とナショナリズム：相関関係の形成と持続」(日本国際政治学会2008年度研究大会、部会7「アジア主義の比較—歴史的文脈と現実的意味」、10月25日)。

「内鮮一体」における言語政策を分析したイ・ヨンスクは、日本の植民地政策の同化主義に批判的であった同時代の植民地政策学者矢内原忠雄が、日本帝国同様、地理的に隣接した領土を「同化」しようとしたフランスの植民地政策の根拠に啓蒙哲学とフランス革命があることを指摘したことを評価した。そしてその上で、矢内原が気付かなかつた、朝鮮人を「国語ヲ常用セサル者」と見なす日本の言語政策における「差別的同化」の持つ、政策化・可視化されない、しかし巧妙・精緻かつ強力な、「同化」と「差別化」との相互補完構造を鋭く指摘した。<sup>3</sup> 実に見事な、日本帝国の植民地政策の複眼的な構造分析である。

現代の価値基準の高みから、過去の歴史的人物達の限界や欠陥を指摘することは、研究者の取りうる1つの立場である。しかし、本稿では、すべての日本人が常に侵略的であったという立場も、日本は「侵略国家」であったことはないという立場も、いずれもとらない。当時の様々な時代的制約の中で、どのような可能性があったのか。そして、それぞれの主体は、「連帯」及び「同質性」と「侵略」及び「支配」・「搾取」という2つの要素をどのように考えていたのか。本稿は、そうしたを、概ね3つの立場—小日本主義、民間経済交流に基盤を置いた戦争抑止論(現状維持主義、あるいは仮に「中帝国主義」と呼んでも良い)、大亜細亜主義—に即して、整理しようとする試みである。

---

3 イ・ヨンスク『「国語」という思想』(岩波書店、1996年)第12章「『同化』とはなにか」。

## 2. 「小日本主義」

—「旧外交」的な三浦鍊太郎から  
「新外交」的な石橋湛山へ

さて、まず第1に、日本では有名な「小日本主義」について、簡単に説明していきたい。周知のように、評論家石橋湛山は、第1次世界大戦後のワシントン会議に際し、「帝国の時代」の終焉を見据え、「一切を棄つるの覚悟」<sup>4</sup>の下に、「満洲を放棄し朝鮮台湾に独立を許し其の他支那に樹立している幾多の経済的特権、武装的足掛かりを捨ててしまえ、そして此等弱小諸国と共に生きよ」と呼びかけ、日中提携を論じた。<sup>5</sup> 石橋の立場は、1つの理想主義ではあるが、経済的リベラリズムに立脚したアジア主義の一類型と言いうことができよう。石橋は、1921年(大正10)、次のようにすら述べている。

「朝鮮・台湾・樺太・満州という如き、わずかばかりの土地を棄つることにより広大なる支那の全土を我が友とし、進んで東洋の全体、否、世界の弱小国全体を我が道徳的支持者とするは、いかばかりの利益であるか計り知れない。もしその時においてなお、米国が横暴であり、あるいは英国が驕慢であって、東洋の諸民族ないしは世界の弱小国民を虐ぐるが如きことあらば、我

4 「一切を棄つるの覚悟」(松尾尊兌[公の下に]編『石橋湛山評論集』岩波書店、1984年)。

5 増田弘『石橋湛山研究』(東洋経済新報社、1990年)105頁。

が国は宜しくその虐げらるる者の盟主となって、英米を膺懲すべし。この場合においては、区々たる平常の軍備の如きは問題ではない。戦法の極意は人の和にある。驕慢なる一、2の国が、いかに大なる軍備を擁するとも、自由解放の世界的盟主として、背後に東洋ないし全世界の心からの支持を有する我が国は、断じてその戦に破るることはない。もし我が国にして、今後戦争をする機会があるとすれば、その戦争はまさにかくの如きものでなければならぬ」。<sup>6</sup>

注目すべきことに、石橋は、「アジア解放のための戦争」をすら呼びかけている。大学卒業後1年間生活した軍隊において、一生を下士として兵卒の教育に捧げて良かったと考えた湛山<sup>7</sup>は、もちろん非戦平和主義者ではなかった。湛山の「アジア主義」は、『東洋経済新報』歴代の主幹であった植松考昭、三浦鍊太郎らの主張をさらに発展させ、リベラリズムと湛山なりの現実的な功利的・経済合理主義の理論とに基づいた主張であった。<sup>8</sup> 英国流の自由貿易・工商立国主義に立脚した湛山は、資源に乏しく領土が狭小で過剰な人口を抱える日本が、植民地を持つことは経済的に不利益であるだけでなく、植民地を持つことによって軍事拡張競争を生み、戦争の危険を招くことになると述べて、軍備撤廃論を唱えた。

---

6 「大日本主義の幻想」(松尾尊兌[公の下に儿]編『石橋湛山評論集』)121頁。

7 「昭和12年の年頭に当り社員諸君に希望す」(石橋湛山全集編纂委員会編『石橋湛山全集』第10巻、東洋経済新報社、1972年)514頁。

8 増田弘『石橋湛山研究』(東洋経済新報社、1990年)、姜克実『石橋湛山の思想史的研究』(早稲田大学出版部、1992年)、増田弘『石橋湛山』(中央公論社、1995年)を参照。

上に掲げた論考もまた、軍備撤廃論を展開した結びに、植民主義批判・侵略主義批判の覚悟を示すものとして書かれているものであって、戦争を呼びかけているわけでは全くない。論考を虚心坦懐に読めば容易にわかるように、アジアにおける日本盟主論を唱えているわけでもなく、主眼は植民地放棄と軍備撤廃論にあるのである。しかし、有力野党憲政会の総裁加藤高明は、同年9月の憲政会北陸大会の演説において、「もしかくの如くんば、日本は何のために支那と戦い、露西亜と戦ったのであるか、また日本のみ、これを還したりとするも、その他の諸国は果して如何。」云々とした議論を批判し、時の首相原敬もまた同様の意見であった。軍縮論者で「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄も、湛山に向かって直接、「壮丁百万の血をそそぎ、20億の国費を費やした満州を、今日放棄するというがごときことは祖先に対して申しわけない」と述べた。石橋自身、「当時においては、こんな議論は一平和主義者の空論にすぎず、一般には受け付けられなかった」と回顧している。<sup>9</sup>

ワシントン会議に際してのこのような石橋の主張の源流は、石橋の上司であった三浦鍊太郎が第1次世界大戦前夜、それまで朝鮮植民地化や満州確保も含め政府の施策を擁護していた『東洋経済新報』を、帝国主義批判へと転換したことに遡る。特に、1913年(大正2)1月5日号から3月15日号にかけて7回にわけて連載した「満州放棄か軍備拡張か」、及び同年4月15日号から6月15日号に

---

9 石橋湛山著『湛山回想』(岩波書店、1985年、211~212頁)。

かけて6回で連載した「大日本主義か小日本主義か」が、その中心である。三浦は、『東洋経済新報』誌上では、植民地朝鮮の放棄は論じていないが、同年、雑誌『第3帝国』11月10日号に掲載した「減税の絶叫」において、三浦は大陸拡張論を批判し、将来における植民地朝鮮の放棄にまで言及していた。

「日露戦争の結果日本は満鉄を得た、遼東半島を租借した、朝鮮を合併した、外観、威すこぶる調うたわけだが、それがために我が国とこれ等の地方との貿易がどれだけ増したか、統計の上では約2倍の増額を示しているが、これ実は我が国が朝鮮満州経営のために年々数千万金を投じている、その金が貿易額の増加となって表れたものが多い。しからば満鮮を我が領土もしくは勢力範囲に収めたということは徒に国家の財政を膨張せしめたのみで獲るところは費やすところの10分の1にも当らない。それでも日本が今後永久に朝鮮満州を占領してこれを日本の国民生活に利する見込みがあれば幾分忍ぶべしとするも、鮮人は依然として鮮人、彼等を日本の軍隊に容れ、彼等を帝国議会に議員として迎えることは狭量なる日本人の忍ぶ能はざるところであろう。朝鮮には結局自治を許し、満洲は結局支那に還すか、さもなくば露に領せらるる運命にある。[中略-松浦註]大陸拡張論者は常にいう、朝鮮は日本の心臓に向けられたピストルだから占らねばならぬ、朝鮮を守るためには満州が要ると、そんなら満州の保証にはシベリヤがいる、あに啻にバイカルのみならんや。ウラルを超えてピーターズブルグまで行かねば徹底しないのだが、そこまで突っ込んだものもないようだ。ロシアが満洲に来ても、朝鮮に来ても、我が国に

して国力の充実するあれば断じて国家の独立を侵される患いはない」。<sup>10</sup>

当時、三浦が、本当に朝鮮独立まで考えていたのか、満州放棄論のためのレトリックとしてそこまで論を進めただけなのかは、不明である。同年初頭に三浦が『東洋経済新報』誌上で発表した「満洲放棄か軍備拡張か」の要点は、日英同盟を継続することで「支那大陸の保全」を目指し、軍備膨張による破綻を防ぐことを主張すると共に、松尾尊兌氏も指摘しているように、満州放棄を主張することにあつたからである。この論文での三浦の要旨は、つまるところ、下記の部分に尽きていると言えよう。

「それ我が国の陸上国防線を長春の北、鉄嶺線に置くことは、南満洲の掌握を必随条件とす。これ我が国において、將世界の人士が、満洲の名目上支那の一部なるにかかわらず、事実我が国の領土としてこれを公認せる所以にほかならず。この故に今日長春の北に措ける我が国防線を退けて、これを朝鮮の国境および旅順の要塞に措くことに改めんか、これすなわち事実上満洲放棄を意味するものなり。これ吾輩が本論の初めにおいて明白に宣言せるところにして、吾輩の満洲放棄論は要するに我が大陸防御戦を改めて、これを旅順と朝鮮の国境に措かんと欲するものにほかならず」。<sup>11</sup>

---

10 松尾尊兌編『大日本主義か小日本主義か〈三浦鍬太郎論説集〉』（東洋経済新報社、1995年、188～189頁）。

11 三浦鍬太郎「満洲放棄か軍備拡張か」（『大日本主義か小日本主義か〈三浦鍬太郎論説集〉』、東洋経済新報社、1995年、120～121頁）。

朝鮮放棄論まで行くと、三浦の議論は当時の世論から突出する。しかし、上記引用に見られるように、三浦は商工業界に主な読者を持つ『東洋経済新報』では、朝鮮放棄論はおくびにも出さず、満州放棄論に止めている。松尾も指摘する通り、<sup>12</sup> 三浦は「海軍拡張の理由如何」(『東洋経済新報』1913年7月5日号・7月15日号)冒頭でこう宣言する。

「近来、陸軍の拡張に関しては反対論が大分見えてきた。その直接の理由は財政の困難、到底これを許さずというにあるが、この論者は結局少なくとも満洲から蒙古ないし北支那に我が領土を延ばして行こうという大陸発展政策に反対するところまで行かねばならぬ。また現に明晰な頭脳の人々は、その社会的位地や、その他種々の関係から、明言こそせぬが、多くは満洲放棄を是認し、我が国防線を朝鮮国境に引き下げ、同時に陸軍現在の規模の縮小を希望する者も尠くない。而してこの陸軍拡張反対、ないし陸軍縮小論は、近来ますますその氣勢を高めようやく一般の風潮を成しつつあるの観がある」。<sup>13</sup>

この引用に見られるように、財政窮乏や中国情勢などを理由に、植民地朝鮮国境までは撤退すべきであるという多くの賛同者を、三浦は、政財界を始めとする世論に得ていた。朝鮮の植民地領有までは確保しておいて、それ以上は拡張しないというのであ

---

12 松尾尊兌「解説・三浦鍬太郎小論」(『大日本主義か小日本主義かく三浦鍬太郎論説集』、東洋経済新報社、1995年、412~413頁)。

13 三浦鍬太郎「海軍拡張の理由如何」(『大日本主義か小日本主義かく三浦鍬太郎論説集』、東洋経済新報社、1995年、175頁)。

る。それならば、三浦は軍拡競争を憂慮する政財界に多くの支持を得ることができた。実際に、前年の1912(大正元)年12月、第2次西園寺内閣は、陸軍の2個師団増設案を閣議で否決し、これを不満とする上原勇作陸相により単独辞職提出が行われたため、西園寺内閣は総辞職し、憲政擁護運動に始まる多様な勢力の改革要求を包含した大正政変の幕が切って落とされたのである。<sup>14</sup> 軍備拡張を要求する軍閥への反感を内包する大正デモクラシーという時代風潮の中で生まれた『第3帝国』は、この13年に茅原華山らによって創刊され、「民本主義(反官僚主義)」や植民地放棄論・小日本主義を掲げた急進的自由主義の雑誌である。地方青年や朝鮮人学生らをも読者に持つこの雑誌で、三浦は、茅原と共に朝鮮放棄論を一度論じた。<sup>15</sup> 理想としての急進主義的植民地放棄論は『第3帝国』に、現実問題としての軍備拡張・大帝国化反対の満州放棄論は、実業界をその読者層に想定した『東洋経済新報』にと、三浦はその執筆先を使い分けた。<sup>16</sup> 三浦は、その意味で、当時の政財界のある部分の利益・主張を代表する政治的リアリストであったと言うべきかも知れない。

三浦の「満洲放棄か軍備拡張か」にせよ、「大日本主義か小日本主義か」にせよ、いずれもこれ以上の軍備拡張を否定し、植民地を拡大し続けていくことの経済的非合理性を、具体的な数字を以

---

14 坂野潤治『大正政変』(ミネルヴァ書房、1982年)を参照。

15 松尾尊兌『大正デモクラシー』(岩波書店、2001年、第5章)を参照。

16 松尾尊兌『大正デモクラシー』96から97頁でも、こうした点は指摘されている。

て強調するものであった。「大日本主義か小日本主義か」は言う。

「これを要するに、我が国が海外に領土を拡張してこの方、我が国民が直接間接に負担せる額、台湾のために1億6732万円、朝鮮のために1億8316万円、関東州および南満鉄道のために6212万円、樺太のために460万円、その総計実に4億1667万円を費す。これあに本国民の由々しき大負担、大犠牲にあらずして何ぞや。それ我が国は、上は国庫の空乏に苦しみ、借金財政に借金財政を重ね、下は人民国費の負担の重きに泣き、資本の欠乏を訴う。一方、20億の外債(官民共計)を負いて、その利払いに上下額を蹙め、他方、物価の法外なる高騰のために、社会人心の不平はいよいよ鬱積しつつあり。かくのごとき際において、我が政府は4億〔一千一松浦註〕万円の大資本を国民より搾取して植民経営に投下し、而してこれら植民地の人民の9割は朝鮮人、支那人にして、我が本国と毫も喜憂を頒ち、苦楽を共にするの感情あることなし」。

「我が国は領土膨張政策の追行の結果、すでに軍備の拡張のために10億円を投じ、植民地の経営のために、4億1000万円を投じ、しかもなお足りとせずして、今後数年の間に、陸海軍の充実に5億、7億を投下せんとしつつあるなり。世人輒もすれば、2回の大戦によって、台湾を得、朝鮮を得、樺太を得、関東州を得、満洲20万方マイルの領土を掌握することを得たりとして、大いに特異の色ありといえども、この領土膨張のために、過去において、10億円を軍備拡張費に投じ、4億2000万円を植民地経営に投じ、はたこれがために現に年額5100万円を負担し、而して今後いよいよ増加するも断じて減少するの見込みなきこの大犠牲の事実を見

て、知らず、いかにこれを解釈せんとするか。そもそもこれらの新領土の我が国に与えたる経済的利益は果してこの大犠牲を償うに足るものあるか」。<sup>17</sup>

三浦はその後、台湾と内地、朝鮮と内地の間の移民や貿易の状況を検討し、その結果、いずれも格別の効果がないばかりか、新植民地経営のために年々莫大な支出を続けなければならないことを結論づけるのである。

こうして、三浦が『東洋経済新報』誌上で導き出したのが、満州放棄論であり、従前の朝鮮・台湾植民地国境まで撤退するという「小日本主義」の結論であった。現有の植民地である台湾・朝鮮までは守る、ということである。例えば、植民地台湾を放棄せよ、という議論は、当時の三浦の筆からは出てこない。「行き詰れる台湾とその開展策」(1916(大正5)年7月5日号から10月5日号まで9回連載)は、台湾総督府の招待で視察した結果書かれた論文である。表題から期待される植民地主義批判とは異なり、三浦は、このように述べ、さらに第4代の児玉源太郎総督就任後(民政長官は後藤新平)、植民地台湾の発展が如何に顕著であったかを強調する。

「しかしながら、誤解するなかれ、台湾は行き詰れりというも、領台以来今日までの施設経営が、ことごとく間違っ居った、失敗だというのではない。また今後台湾の進歩望みなしということでもない。勿論、今日に至る20年間の施設の中には、間違っこともなかったではなかった。けれども、この間に仕遂げた台湾の大

---

17 三浦鏡太郎「大日本主義か小日本主義か」(158~159頁)。

発展が、大体において、その誤らざりしことを明証して居る。また台湾の富源は、単に農業の上においても、その利用の程度は今なおすこぶる幼稚であるから、従って今後に残され居る発達之余地もなお相応に多大である。ただ余の『行き詰まり』といえるは、従来の経営方針は、すでにその方針の持ち得る本来の働きを仕尽し、今日の台湾はもはやこの上にその効果を望み得ない時期になったその事実を指すのである。<sup>18</sup>

三浦の将来に向かったの提言は、台湾総督専制政治を廃止し、台湾本島人の自治を樹立して本島人を台湾の政治経済の主人公となすことに尽きる。「余は台湾を南支南洋貿易に利用する論者として何人の後にも落ちぬ積りである」が、台湾発展の方向性はそれだけでなく、農業一つとっても、灌漑排水設備・治水設備・道路橋梁を行い、本島人に施肥・種苗・農具などの改善など農業技術を教育すれば、優秀な本島人は自ら、「台湾の富力を今日の2倍にし3倍にすること、期して待ち得べきを信じて疑わぬ」。<sup>19</sup> 要するに、第1次世界大戦勃発前夜の三浦における小日本主義とは、「小軍備主義」であって帝国主義の枠内にあり、産業主義、自由主義、個人主義であったのである。<sup>20</sup>

むしろ興味深いのは、徹底した経済主義をとるが故に、三浦が

---

18 「行き詰れる台湾とその開展策」(松尾尊兌編『大日本主義か小日本主義か〈三浦鍬太郎論説集〉』所収、289~290頁)。

19 「行き詰れる台湾とその開展策」(松尾尊兌編『大日本主義か小日本主義か〈三浦鍬太郎論説集〉』所収、327頁)。

20 三浦鍬太郎「大日本主義か小日本主義か」(136~137頁)。

華人に対する競争意識や警戒心を隠そうとしていないことである。満州放棄論を主張するにあたり、三浦は、「まず第1に問わんと欲する所は、満洲の主人は遂に何人なりやということなり。」という問いを立てる。大陸発展論者であったならば、当然日本人がそうあるべきであると答えるであろう。然るに、三浦は、こう続ける。

「しからばすなわちいかなるものが果たして善く満洲の富源を開拓し、利用し、而して満洲において最も善く繁殖し得る人種こそ、当然その主人たるべきなり。今この見地よりして観察するに、最も多くこの資格を備うるもの誰ぞ。日本人か、ロシア人か、將た支那人か。これ実に我が国が満洲掌握、大陸発展策を採用するに当たって、最先に研究解決を要する根本要点なり。史を按ずるに、満洲は永く支那にも朝鮮にも、無論露国にも属せずして、3国間に介在せる一大間地として、蛮族の跋扈に委せられたる所なり。しかるに愛親覚羅氏満族より起って、支那を征服しこれに君臨して以来、満洲は全く名実共に支那の統治の下に帰せり。而して今日満洲に跋扈するは依然支那人にして、支那人実に満洲総人口の九割九分を占め、従って満洲の富源を開拓し、利用し、盛んに人口を増殖しつつあるはまた実に支那人にして、ロシア人にあらず、日本人にあらず。」

ロシアが東清鉄道を満州に敷設し、ハルビンを建設し、旅順を経営するなど、巨額の資本を投下したにもかかわらず、結局商権を拡張したのは、本来不利なはずの華人であった。日露戦争後、日本が南満州鉄道を継承し満州経営や「満州」確保のための陸軍拡張に年々巨費を投じて、日本人の満州での経済活動は縮小する

一方で、「農業に商業に、独り支那人の発展伸暢を見るあるのみ」と、三浦は喝破する。満州を軍事的・政治的に日本が確保しようとしても、結局その経済的利益を得るのは華人であって、日本が国庫支出金をどれだけ注ぎ込んでも、華人が移住・増殖して反映するだけだというのである。

三浦は、こうした華人の旺盛な経済活動の例を、植民地台湾にも求める。

「台湾が我が領土に帰するや、大小の政治邦人の手によって行われ、渡台邦人は征服者として万事はるかに有利の位地を占めたるにかかわらず、今日までの経過の結果によれば、支那種の人口の増殖盛んなるに反し、在台邦人は繁殖する能わず。また経済上においても、邦人は輒もすれば支那人に比して遜色を示し、なかんづく、商業のごときは支那人のために駆逐せられつつあり。しかして優渥なる保護に浴する砂糖会社を除けば、台湾は全然支那人種の台湾にして、我が国民は自費をもって支那人のために官吏の任を尽くし、巡査の役を務めつつあるというも、決して過言にあらず。」

三浦によれば、華人のためにこうした役割を果たしているのは、日本の台湾統治のみではない。

「香港においてもまたしかり、英国が同地を占領して自由港とせるや、爾来、英人の勢力と文明の知識とは、同地の商権を一手に掌握するを得たりといえども、支那人は同地においても年々その商権を拡張し、近来に至りては、支那人が同地の商売の主人たらんとするの勢いありという。そのほか安南に、海峡植民地に、

経済上の主人は仏人にあらず英人にあらず、実に支那人なりといふにあらずや。かくて支那人の優秀は到る処の事実これを立証せざるなし。支那人は真に恐るべき人種といわざるべからざるなり」。

こうした華人観を持つが故にこそ、三浦は、人口の9割9分を華人が占める満州を放棄すべきであると述べるのである。<sup>21</sup>

しかしながら、先にも述べたとおり、三浦は植民地台湾を放棄せよとは決して述べず、第1次世界大戦中の1916年、それまでの台湾統治を高く評価し、今後は植民地統治の枠内で、最大限に台湾人に政治経済上の権能を付与すべきであると主張している。第1次世界大戦前夜における三浦の議論は、あくまでも植民地としての台湾・朝鮮を保持し、これを日本帝国の版図における限度とした上で、それらの植民地経営の方法を最大限にまで自治領化し、彼らの経済的インフラストラクチャを整え、発展する方向

---

21 三浦鍬太郎「満洲放棄か軍備拡張か」(95~97頁)。なお、こうした議論は満州事変直後の石橋湛山にも引き継がれ、一方で満州に対する日本の既得権益は「鞏固に確保するが宜しい」と満洲放棄論から後退しつつも、他方で石橋は、「いわゆる保疆安民の主義を確立する外、総ての政治および経済施設は同地在住の支那人の意に任せる。すなわち絶対の自治であって、我が国からの顧問を入れる如きも、もしそれが監視人的意味の者であるなら、避けるが宜しい」。と、この時期における主張としては最左派の壘を築き、関東軍内部における満蒙新国家建設論を強く批判するロジックとなる(鴨武彦編『大日本主義との闘争<石橋湛山著作集3 政治・外交論>』(東洋経済新報社、1996年)所収、「支那に対する正しき認識と政策」(1932年2月6日・13日号「社説」)。しかし、湛山の場合には、「記者は、支那国民に同情を有する点においては、恐らく世界の何人にも譲らない」。と述べている(同197頁)ように、三浦に比べて、華人に対抗する色彩が弱い。

に止まった、というのが筆者の見解である。後藤乾一は、『亜細亜公論』復刻版の解説において、『亜細亜公論』第2号である1922年6月号が、三浦の書いた「朝鮮に自治を与ふるべし」と題する論文のために発売禁止・全冊没収の処分を受けたことを紹介し、さらに、問題となった幻の三浦論文を再現している。<sup>22</sup> 正に朝鮮独立宣言が発表された19年の3・1独立運動のすぐ後に発表されただけに、当局によって厳しい処分を受けたことは、容易に理解できる。しかしながら、その前年7月月から8月にかけて、石橋湛山が『東洋経済新報』に発表した「一切を棄つるの覚悟」や「支那と提携して太平洋会議に臨むべし」、「大日本主義の幻想」は、当局によるそうした出版禁止処分にあわなかった。処分の重さの相違の原因として、『亜細亜公論』が在日朝鮮人である柳泰慶を創立者・社長としていたということがあったであろう。

しかしもう一つの原因として、石橋の主張が、主に、ワシントン会議において、中国と提携して英米と対抗すべきことを論じる、という姿勢をとっていたことも大きかった。石橋の背景には、19年のパリ講和会議における日本提案の人種差別撤廃法案の否決や、20年の米国における第2次排日土地法の成立など24年の排日移民法へと向かう潮流に対する、日本国民の間の人種的反感が控えていたためである。石橋は、その意味において、反人種差別的であり反西洋帝国主義的であり、華人に対する警戒を強く持って

---

22 後藤乾一「日本現代史研究と『亜細亜公論』」(後藤乾一・紀旭峰・羅京洙編集解題『亜細亜公論・大東公論』龍溪書舎、2008年)。

いた三浦よりもさらにアジア主義的であり、同時に理想主義的であったと言えよう。そしてそれ故に、恐らく、石橋は、あれだけ大胆な提言をなしたのであろう。石橋は米国の排日移民法を「大気なき事」と批判する一方で、日本側の主張が移民排斥の対象から日本人のみを削れというのは、「支那人はどうあっても、朝鮮人はどうあっても、日本人さえ、白人の間に同等の待遇を受くれば満足なりとする心は利己的であり、卑屈である。世界の尊敬を受くる態度でない。」と批判すると共に、実益からしても同法案によって拒否される日本人の入国がわずかに1年146名に過ぎず、むしろ日本は「区々たる自国の体面の如きに執着せず、友をアジアに求むるの心懸けが肝要だ」と主張しているのである。もっとも、石橋は、日本国内で反米感情が高まり軍拡論が勃興するのを恐れ、米国に対抗するにはまず大軍縮を行い、「我が国民が丸腰になって産業に努力し東洋の諸国民と手を携えて文明の発達を図る」ことを呼びかけている。<sup>23</sup>

中国・インドを含む世界の有色民族国の弱小国と共に生きよ、と呼びかけた「一切を棄つるの覚悟」に続き、『東洋経済新報』1921年7月30日号「社説」で、石橋は、「大日本主義の幻想」1と共に、「支那と提携して太平洋会議に臨むべし」を書いた。そこで、石橋は、日中提携の必要を次のように述べている。後の議論の伏線として引用する。

---

23 鴨武彦編、前掲、所収「米国は不遜日本は卑屈」（1924年4月26日号「社説」）。

我が国が支那と共に、支那の治外法権の撤廃、関税改正問題、人種平等待遇問題等を携えて、太平洋會議に臨むなら、其結果は問う迄もなく、該會議が我国の為に開かれた程、有利なものに好転するに相違ない。

邦人は、太平洋會議を見て、英国と米国とがグルになって、我国イジめの魂胆で出来たのだと齒がみする。吾輩も英米両国にそうした意志の横わり居るを思う。我国は支那に対して、前言した如く、侵略的態度に出た。革命乱に乗じては漢口に兵營を建て、欧州大戦争には、21個条の要求をつき付け、或は金を貸付けては特権を取り、英国が生死の大戦に全力を傾けて支那を留守にした際、日本は此時なりと虚につけ込んで、傍若無人に振舞うた。英人は今に見よ戦争が済んだならと、戦時中不快を忍んで来た。又米国は大戦前から極東政策に熱中し、其政策遂行上、差当っての第一の邪魔者は我国である。英国がグルになって、支那を誘い、日本を袋叩きにしようと、其機会を待ち、或は作りつつあったことは、既に吾輩の幾度か警告した所である。去り乍ら、若し我国が早く悔い改め、今日迄、帝国主義的政策に依て得た一切を棄て、そして支那と提携して進むなら、英米から袋叩きにさるべき理由は消失すると同時に、局面は一転して、印度を領有し、白人濠州を作り、メキシコを圧迫し、有色人種を虐げ、菲律賓やグアムを武装して極東を脅威している英米が、遂に詮議せられる位地に立たねばならぬ。始め太平洋會議は邦人の憤慨する如く、日本イジめの意志で出来たとしても、日本の出様一つで、却って英米を自縄自縛に陥らしむることにもなし得る。而して如斯局面を好転せ

しむる鍵は、一に我国が支那と提携し得るや否やにある。

我政府には、斯うした大局の見えるものが、一人もないと見えて、この大覚悟の必要には一向に思も及ばず、依然として支那を袖にして、英国に縋り米国と諒解を得ようとしている。何たる事大主義の陋態だろう。この遣口で太平洋會議に臨むなら、いう迄もなく巴里會議の2の舞で、又々日支が取組合の茶番(英米から見て)、或は大悲劇(我国から見て)を演ずる他はない。そして其大詰は、英米が出て来て、『此の悪党が』というて日本の頭を打ち、『この勇敢なる青年よ』というて支那の頭を撫でるであろう。そして日支両国とも有色人種として永く白人から虐げられるのが落ちである。[傍線部松浦]

吾輩は巴里會議開催の際、我国は宜しく外政上の伝統を擲ち、歴史的の一切の行懸を捨て、弱小国、即ち謂う所の虐げられている有色人種を代表して、其の解放の旗印を真顔に翳してこの世界改造の大会議に臨むべし、と勧めた。併し我当局にはこの覚悟なくして遂に支那の反噬なる悲劇を引起した。当時吾輩は千秋一会の大機を、かくして宜しく逸去し了ったと、頓足して痛嘆したのであった。然るに天尚お我国を棄てず、今回の太平洋會議は、再び我国に大悔悟の機会を与えて呉れた。併し若し此度を失えば、恐らく3度はなかり。而かも我政府人なし、又々此大機を空逸し了りそうなのを、如何にも惜しまれてならぬ」<sup>24</sup>

24 「支那と提携して太平洋會議に望むべし」(石橋湛山『石橋湛山全集』第4巻、東洋経済新報社、1971年32~34頁)。なお、石橋がパリ講和會議の際に、有色人種のため国策の大転換をせよ、と主張したというのは、同巻の注解

三浦は、1924年(大正13)12月東洋経済新報社の主幹の座を、翌年1月には代表取締役・専務取締役の座を、50歳で石橋湛山に譲った。よく知られているように、『東洋経済新報』には、大正年間、三浦主幹の下、野崎龍七、高橋亀吉、石橋湛山という「三羽鳥」と呼ばれた人材があった。三浦が後継者として、3人のうち最年少の湛山を選ぶのと前後して、野崎は21年ライバル社であるダイヤモンド社へと移って39年(昭和14)にその社長となり、高橋は26年独立して高橋経済研究所を創立し、戦後に至るまで120余冊にわたる経済分析の専門書を出版した。<sup>25</sup> そして、『東洋経済新報』に残った石橋が理念主義的なリベラリズムを推進していくのと対照的に、高橋は、政府系のシンクタンク主宰者として、1933年のカナダ、そして36年の北米ヨセミテにおける太平洋問題調査会議でソーシャル・ダンピング論を中心とした経済摩擦問題を日本側代表として論駁し<sup>26</sup>、「満洲国」財務部・經濟部、朝鮮総督府、台湾総督府などの依頼による視察・調査を行い、天津軍による華北侵略に通貨問題などで加担し<sup>27</sup>、戦時経済下の商工省中央物価委員会委員など<sup>28</sup>各種政府委員会の委員として、帝国政府及び植民地当局や

---

によれば、「人種的差別撤廃要求の前に」(1919年(大正8)2月15日号「社説」)、「国際連盟の中心事業」(同年2月5日号「社説」)(いずれも、『石橋湛山全集』第3巻(東洋経済新報社、1971年所収)である。

25 高橋亀吉については、『証券研究』89号(1989年)「高橋亀吉研究」のほか、鳥羽欽一郎『生涯現役』(東洋経済新報社、1992年)などを参照。

26 酒井哲哉「東重新秩序の政治経済学」(『国際政治』97号、1991年)。

27 松浦正孝『財界の政治経済史』(東京大学出版会、2002年、第5章)を参照。

28 同『日中戦争期における経済と政治』(東京大学出版会、1995年、第3章第2節)を参照。

軍部を擁護する立場で活躍した。<sup>29</sup> 三浦は、第1次世界大戦中から政治関係の社説を石橋に委ねるようになり、代表権を石橋に譲った後も、取締役として石橋を側面から支え続けた。<sup>30</sup> しかしながら、これまでに説いてきたように、三浦と石橋との間には、実は、同じ経済本位の議論にしても、華商・華人に対する態度の違いがあり、また、植民地台湾に対する態度の違いがあった。三浦の議論は、日本の財界穏健派という背景から必ずしも大きく逸脱したものではなかったように思われる。<sup>31</sup> 石橋は、アジア主義や日中提携を最優先に掲げる点において、三浦を、あるいは時代を、大きく超えていた。三浦の下から、その後の日本による東重新秩序擁護の旗手としての高橋亀吉が袂を分かったのは、必ずしも不

---

29 鳥羽欽一郎『生涯現役』第6章。

30 松尾尊兌「解説・三浦鍊太郎小論」(414~418頁)。

31 日中戦争が勃発して後、三浦が解決策として示したのは、「真の相手は英国」と、当時の反英の風潮をスローガンに掲げつつ、実のところは、法幣を中心とする中国における最大の経済権益を有する現実主義的な帝国主義国である英国と手を握り、「英国と戦をして居るのだということをはっきり認識して、今はその英国との戦いは中止すべきであるという徹底した覚悟がなければならぬ」、「結局真の意味の競争相手は英国だが、相携えて極東の国際秩序を両国の手で維持する」(「支那事変処理の方針」(1939年2月16日新経済体制協会講演、松尾尊兌編『大日本主義か小日本主義か〈三浦鍊太郎論説集〉』所収)360~361頁)という、池田成彬ら財界の「親英派」が主張していた路線であった。湛山も同様であり、日中戦争前夜以降日中戦争突入後も、日英提携の論陣を張った(例えば、鴨武彦編、前掲所収、「日本は対支援助を共同にすべし」(1935年4月6日号「社説」)、「不謹慎なる外交論を排す」(36年8月29日号「社説」)、「日英両国提携の必要」(1936年10月3日号「社説」)、「ドイツの背反は何を訓えるか」(1939年9月2日号「社説」)などを参照。

議ではなかったのである。また、三浦鍬太郎と石橋湛山との「小日本主義」には、経済合理主義に裏付けられたリベラリズムがあったことは事実であるが、両者の間には、より現実主義的で「旧外交」的な残滓を残す三浦と、より理想的・道義的で第1次世界大戦において「民主主義」国側が強調した「民族自決」原則に強い影響を受けた「新外交」な石橋、という形で、あくまでも相対的ながら、「小日本主義」の相違があった。三浦の「小日本主義」には、やはり英国の「小日本主義」からの敷衍という側面を強く見て取れるのである。<sup>32</sup>

このような意味において、「支那と提携して太平洋会議に臨むべし」の論文の引用部のうち、筆者が傍線を引いた部分は、重要である。石橋がこの引用部分の最後で述べたように、日本が太平洋会議において3回目の機会を逸し、中国侵略を進めた結果として、満州事変が起こった。三浦と石橋とが主張した満州放棄の対極として起こった満州事変を議題として、日本は中国と、国際連盟の場において、英米を含む西洋諸国の目前で争い、日本の満州撤兵を勧告する決議案が圧倒的多数で可決され、日本が連盟脱退を余儀なくされる、という事態が11年半後に現出するからである。松尾尊兌氏や湛山研究家姜克実氏の指摘するとおり、湛山もまた、満州事変後は満州事変や「満洲国」成立という既成事実を追認し、それ以後は、その上で、日中戦争の全面戦争化や3国軍事同盟には反対の論陣を張るようになった。<sup>33</sup> 湛山は、理念的・

---

32 三浦鍬太郎「大日本主義か小日本主義か」。

33 松尾尊兌編『石橋湛山評論集』「解説」、姜克実『石橋湛山の思想史的研究』第7章。

理想主義的な植民地放棄論から一時撤退し、後に紹介する財界穏健派と同じ親英派の立場から帝国拡張論者を批判するという、新たな防衛線を築いたのであった。もちろん、後世の高みから見れば、これは明らかに「小日本主義」からのリベラリズムの退却であり、屈服である。満州事変を含めて日本の侵略を受けた諸地域から見れば、石橋もまた、日本における軍国主義の膨張を国内で傍観していた1人に見えるかも知れない。確かに、石橋が満州事変を追認したことは明白である。そのことを明記しないのであれば、歴史の隠蔽であると同時に、満州事変及び5・15事件(1932)以後の政治・外交環境の激変、言論の自由をめぐる状況変化を、軽視していることにもなる。しかし、日本の政治史の文脈からすれば、大アジア主義が台頭し、「親英派」に対するテロリズムが頻発する状況の中で、「自由主義者ではあるが、国家に対する反逆者ではない」という立場から体制内で許されるギリギリの抵抗を貫いた自由主義者と評価する見方<sup>34</sup>もまた、不自然ではない。ことに、周到に言葉を選びつつも、彼が論戦の舞台を移した3国同盟批判、議会制擁護などで見せた舌鋒の鋭さは、他の追隨を許さないものであった。また、彼は、自由通商主義の立場から東亜新秩序の論理に否定的で、広域経済建設(大アジア主義)の動きを批判し続けた。<sup>35</sup> 己の主義主張を貫くためにはすべてを犠牲にする以外は認めない、という立場をとらない限り、ジャーナリスト石橋の行動は、当時

34 松尾尊賢編『石橋湛山評論集』解説(308~309頁)。

35 鴨武彦編、前掲所収、「百年戦争の予想」(1941年7月5日・12日・19日号)、「近衛文麿公に与う」(45年10月27日号「社論」)。

の時代状況にあっては最も良質のものであった。しかし、思想家は、その最も輝いているところで評価すべきであろう。ワシントン会議に際しての、石橋の「小日本主義」こそ、それである。

なお、石橋湛山は、1946年(昭和21)4月、戦後初めての総選挙に自由党から出馬した。準備不足のため落選した石橋であったが、米国占領軍の強い意向で成立した第1次吉田内閣に、落選中の身でありながら大蔵大臣として入閣し、積極財政を推進した。しかし石橋は、占領軍の使う終戦処理費が巨額であると反対すると共に、積極財政によって占領軍と対立し、47年総選挙では当選したにもかかわらず、GHQによって公職追放された。その後、石橋は朝鮮戦争に際して強く米国を批判し、その後日中貿易促進論を唱えた。公職追放を51年に解除され、54年鳩山内閣成立と共に通産大臣となった石橋は、中ソ両国との関係改善を推進しようとした。鳩山が56年日ソ国交回復実現を機に辞任すると、後任の自民党総裁として石橋が選ばれ、彼は首相として、積極経済政策や世界平和実現を柱とする新政策を発表した。ところが、その後政権基盤を強化するために行った衆院解散・総選挙による選挙運動の中で、石橋は過労と風邪のため脳血栓に倒れ、僅か2ヶ月で57年2月、石橋内閣は退陣することとなった<sup>36</sup>のである。

さて、アジア主義の選択肢のうち、石橋の主張する植民地放棄・帝国主義的権益放棄を覚悟した対中提携が採られなかったとするならば、残るは、財界穏健派を基盤とした不完全な日中提携

---

36 増田弘『石橋湛山』(第5章～第6章)。

のアジア主義と、西洋帝国主義からのアジア解放を前面に押し出した対決的なアジア主義が残ることになる。まずは、後者から説明することとしたい。

### 3. 「大日本主義」から「大亜細亜主義」へ — 宇都宮太郎と松井石根・大亜細亜協会

三浦鍬太郎が「満洲掌握ないし大陸発展政策を強行せんと欲せば、我が国は必ず日英同盟を放棄するの覚悟なかるべからず。しかも日英同盟を破棄すれば、同時に我が大陸発展政策もその基礎を失わざるべからず。もし日英同盟以外にその基礎を求めんと欲せば、我が国は海軍の大々の拡張を断行せざるべからず。而して我が国はこの無謀の軍備のために、まず自ら倒るるのほかなかるべきなり」。<sup>37</sup> と、大正政変に至る陸海軍軍拡競争のパラドクスを指摘していた時、これら満洲放棄論に猛然と反撃したのが、当時陸軍参謀本部第2部長(情報部長)であった宇都宮太郎陸軍少将である。

折しも三浦鍬太郎による「満洲放棄乎軍備拡張乎」が『東洋経済新報』に連載されていた1913年(大正2)1月、宇都宮は、中国・朝鮮への約2ヶ月にわたる視察旅行を行った。朝鮮に着いた1月19日、

37 三浦鍬太郎「満洲放棄か軍備拡張か」(113~114頁)。

宇都宮は、日記に次のように記した。

「警察署長、憲兵隊長代理等に迎へられ、多数の内地人と共に新築中の棧橋を進みし時の感想は、事物の一変と此多数内地人斯く続々入込みつゝある現況を見ては、多年の宿志今ぞ報て愉快言う可らず。願くは此実況を一日も早く今一步を進めて満州蒙古に実現し度、此際、何物の痴漢ぞ、大陸政策を非難し、甚しきは笑談にも大陸の放棄を呼号するものぞ。謂ふ、彼等来て此実況を目睹且つは熟考し去れ」。<sup>38</sup>

一月22日に安東県を視察した折には、植林や耕作の可能性多きを見て、「朝鮮は前途必ず我一財産たるべき也。」との確信を深め、<sup>39</sup> 満州に入った23日には、朝鮮より岩肌の出た山を見つとも、「然れども大部分は尚植林し得べし。満州は決して棄べきものにあらず」。との感想を持っている。<sup>40</sup> その後、旅順、大連などを視察した後、棧橋増設中の大連港を見、満鉄本社で重役らと意見交換した宇都宮は、28日、こう日記に書いている。

「それより満鉄本社に至り、満蒙の経済上より見ても愈々帝国に有益にして且つ必要なるの確信を深ふし、同時に此種試験所の事業の拡張せられ、諸種産業の案内者と為らざること、満蒙放棄論者、頑迷偏狭なる代議士や新聞記者等に現地を観光、此種試験

---

38 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(岩波書店、2007年、185頁)。

39 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(岩波書店、2007年、187頁)。

40 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(岩波書店、2007年、188頁)。

の成績等を開示するの、彼等の啓蒙に尤も手短なるを感ず」。<sup>41</sup>

朝鮮、満州を日本が保有すべきことを一々強調し、宇都宮が闘志を燃やす相手の「満蒙放棄論者」が、三浦鍔太郎らであることは明らかであろう。1月31日、吉林省の中心である長春の殷賑ぶりに感銘を受けた宇都宮は、こう記す。

「都市の繁昌は勿論、兵略上、政略上尤も重要な都会の一となるべきこと多言の要なし。併し夫れ以上余が心を刺激せしは、南満、中満至る所、将来施政の遣方一にては大発展の資質大なることにて、益々之を併呑するの、我自強自大以て自存せざる可らずと云ふ余が宿論の実現上、必要欠く可らざるの信念を固ふせり」。<sup>42</sup>

宇都宮太郎は、旧佐賀藩出身であり、山県有朋、桂太郎、寺内正毅ら陸軍の主流長州藩閥と対立し、上原勇作前陸軍大臣を擁する薩摩閥・佐賀閥中心の「上原閥」の中心的存在であった。宇都宮ら「上原閥」は、陸軍主流派が、西洋列強による東漸を防御するため彼らとの協調政策を最優先し、日本の対アジア政策が人種的対立へと転化しないよう細心の注意を払いながら、満蒙権益の擁護を慎重に進めているのに批判的であった。<sup>43</sup> 陸軍歩兵少佐時代の

---

41 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(岩波書店、2007年、190頁)。

42 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(岩波書店、2007年、192頁)。

43 宇都宮の桂首相の満蒙対策に対する批判的な意見については、宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(岩波書店、2007年、181頁、1913年1月7日の項)を参照。

1900年4月、宇都宮は、「長州派を以て陸軍の要部を専占」したことに憤慨し、「薩長の消長は強て問ふ所にあらざるも、陸軍の要部に非戦主義者等の跋扈するは実に嘆ずべきなり。軍備拡張の大精神は誰か能く之を支持する者ぞ。」と日記に記して、「長州閥」の対西洋列強協調主義を罵倒しているほどである。<sup>44</sup> 三浦鍬太郎や石橋湛山が中国統一論者であったのと対極的に、宇都宮は一貫して中国分割論者であった。

アジア主義者である宇都宮太郎は、かねて日清戦争後の参謀本部部員時代、台湾、朝鮮・華中・華南への長期出張後に提出した「秘 清韓旅行復命書」において、文明の扶植と東方諸民族の救済を果たし人種戦争に備えるために、清国を分割した上で日清韓同盟を結ぶのが上策であると説いていた。<sup>45</sup> そして、1911年(明治44)10月、これを発展させた「対支那私見」を作成した。それによれば、キリスト教・白人種による帝国主義に対抗し、日本帝国を生存させる自大自強政策のために、まず、表面では清朝を、裏面では革命派を支援して、適当な時期に居中調停により中国を満漢2国家に分立させ、満洲を保護国化し南方政府とは同盟関係を結ぶのを上策とする。そして、もし西洋列強による中国瓜分が不可避の場合にはこれを抑制し、「平昔研究せる南北の諸地方」を獲得(そのうち北の日本分割地には満人、南には漢人の小朝廷を作り、他国分割地内の全人心を

---

44 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻(1900年4月25日の項)。

45 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻(「解題」45頁註17)を参照。

日本に収攬し我天皇に帰向)<sup>46</sup>すべきであると論じるものであった。この案は、腹心の武藤信義参謀本部第4課長<sup>47</sup>と松井石根参謀本部支那班員に内示した上で、福島安正参謀次長を始めとする陸軍上層部や西園寺首相らにも示すこととされた。<sup>48</sup>そして宇都宮は、腹心の松井石根及び井戸川辰3に、三菱財閥の岩崎久弥から当時のお金で10万円の資金を貰い受けさせ(後に5万円を返却)、この資金を孫文による国民革命支援や、満蒙独立工作、東南アジア工作などに運用させたのである。宇都宮は、これらの工作を通じて、中国を分割し、日本主導の形で南北政府の居中調停をして立憲君主国とする予定であったが、英国が主導する形勢となったため、南北講和を妨害しようとした。しかし結局、寺内正毅朝鮮総督ら長州閥陸軍幹部や第2次西園寺内閣の意向により、英国など西洋列強に追随することとなり、袁世凱・孫文の間で妥協が成立、清国皇帝は退位して清朝は滅亡した。宇都宮は、こうした動きに服従せざるを得ず、無念のうちに他日を期すことになったのである。<sup>49</sup>

---

46 『宇都宮日記』に残された「対支那私見」は、上原勇作第14師団長(宇都宮市)宛10月19日付書簡にも記されているが、( )内の部分がさらに加えられており、詳細なものとなっている(上原勇作関係文書研究会編『上原勇作関係文書』東京大学出版会、1976年、55～57頁)。

47 佐賀閥。

48 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻(1911年10月15日の項)。

49 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻、(1911年10月15日の項)から、宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(1912年11月25日の項)に至る記述や、1・2巻の解題を参照。

その後も宇都宮は、満蒙權益を固めると共に、南方政府と満蒙とにより袁世凱を挟撃させて、満蒙は日本の手中に収め、本部は分立させるか南方政府に統一させ、他日日本が独力で支配できるようになるまで保全すべきであるという見通しの下に、南方政府を日本政府による「厳正中立」方針の範囲内で間接的に支援し、満蒙工作を続け、南洋事業にも関与している。<sup>50</sup> こうした宇都宮のアジア主義及び対中政策は、満洲事変後、宇都宮が後継者として期待した松井石根を中心とする大亜細亜協会によって、実に忠実に継承されていくのである。宇都宮はアジア主義者であったが、同時に三浦らの「小日本主義」と対立する「大日本主義」者の典型でもあった。

三浦鍔太郎は、1912(大正元)年11月から12月にかけて『東洋経済新報』において連載していた「諸戦没後の英国と日露戦後の日本」で、こう論じている。

「欧米人の中には、日本の戦争の結果、獲得物の大なりしことと、戦後常に軍備の大拡張を敢行せることとの事実を見て、日本国民は戦勝の獲物に甘酔し、戦争を有利なる商売と心得、遂に最も危険なる好戦国民たるの本性を露わし来れりとて、甚だしく我が国の勃興を嫌悪するもの尠ならず、この論固より欧米一部の偏見たるを免れずといえども、しかれども我が国民の多数が、従来の戦勝の結果に甘酔し、我が国勢発展の根本方針を領土拡張に

---

50 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻(1912年12月17日から1913年4月9日の項)までを参照。

定め、かくて帝国主義ようやく一世を支配せんとするの観あり。以為らく、大陸發展、支那分割。これ陸軍拡張の奥底に潜める目的なり。以為らく、領土を拡張せずんば、我が限りなき人口の増加をいかにして養うべき。吾人は人口の増殖を制限し、島国内に蟄居する小国民をもって満足する能わず。而して南洋諸島はまず第1に指を屈すべき我が国民發展の領土なり。もし避くべからずんば米国との戦争また決して辞するところにあらずと。これすなわち海軍拡張の背後に横たわれる結論なり。この領土拡張論ほど、戦勝の結果に甘酔して、未だ深くその弊害を自覚せざる国民の感情に投合するものあらず。これ実に今日のごとく軍備の大拡張を決行せしめたるころの、最も有力なる理由たらずんばあらず。<sup>51</sup>

小日本主義者の三浦がここで批判する陸軍の拡張論こそ、宇都宮の構想であり、一方、西洋列強の日本に対する猜疑心を警戒するばかりに、余りに軟弱であると宇都宮が批判したのが、当時の陸軍首脳部であった。<sup>52</sup> それぞれ攻撃的が微妙にずれ、立場も

51 松尾尊兌編『大日本主義か小日本主義か〈三浦鍬太郎論説集〉』(84頁)。

52 しかしながら、実際の政局は、宇都宮らの念願だった上原陸相を実現した第2次西園寺内閣が長期政権とならず、宇都宮も当初は望んでいた朝鮮配備のための2個師団増設をめぐり、当の上原陸相が山県・寺内らの長州閥と同調し「統帥権の干犯」に固執して西園寺首相と衝突し、同じ薩摩閥であるはずの海軍の画策などもあって、帷渥上奏による辞職へと突き進んでしまったのである。西園寺内閣の原敬内相らとの妥協の途を探っていた宇都宮は、これを「長閥」の陰謀によるものと見た(櫻井良樹「解題」『宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大將宇都宮太郎日記』第2巻)。陸軍藩閥と政友会との政軍関係における対立と、陸軍藩閥内の西洋列強に対する意見対立とは、別の次元にあり、前者が優越したことは、政友会と藩閥との提携(「1900年体制」)の崩壊の始まりであった(坂野潤治『大正政

異なっていた。

朝鮮・満州の視察を終え、中国へと向かう前に、宇都宮は、2月8日、「近頃満蒙に於ける我地位を軽視するの愚説行はるるにより、之を矯め度」との意図から、「某紳士の言」なる一文を表し、後藤新平逋信大臣や坂西利8郎大佐、伊集院彦吉在清国公使、青木宣純少将、佐藤安之助中佐らに見せた。満州放棄論などに対抗し、新聞や雑誌などの場でこれらへの反論を加えようと、その素地を作り始めたのである。そして、2月24日に漢口から海軍方面に宛てて発したこれらの意見書に対して、3月9日、薩摩閥の山本権兵衛首相の意を承けた、その女婿でもある財部彪海軍次官が、「御来示ノ趣旨ハ大体ニ於テ賛成ナルモ、時期尚早シト認ムルニ付キ、此際実行ノコトハ、見合ハサレタシトノコトナリ。何レ詳細ハ拜眉ノ上ニ譲ル」という電報を返してきた。時の海軍の大立て者でもある首相が、自分の意見に少なくとも心中では同意しているということを表明してきたという、宇都宮にとっては望外の結果に、宇都宮は満足した。<sup>53</sup> 新聞紙上や雑誌上を賑わす可能性のあった、「小日本主義」と「大日本主義」との論争は、残念ながら回避されたのである。

なお、宇都宮太郎のアジア主義において特に目立つのは、アジア人種通婚論や人種の連帯感(ヒトの移動)への強いこだわりである。太郎の子で、戦後自民党の代議士となった徳馬は、父について次

---

変)。

53 『宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第2巻』(209頁)など。

のように回想している。

「おやじと朝鮮との関係でどうしても忘れられない金応善という人がいた。頭のいい少年を弟のようにして育てたのだが、後に李王の武官長になった。伊藤博文の媒酌で日本美人と結婚し、酒のみで、さのさ節などうまかった。父の死後もたびたびたずねてくれて、酔うとおやじの思い出話をして泣くので、私の母は困っていた。

日本人は朝鮮人と結婚しろというのがおやじの持論で、ある日、子供の私をきちっとすわらせて、小さな本を朗読しろというから、声高らかに読んだところが、自分の書いた、日本人は朝鮮人と結婚しろという論文であった。母が傍にいて、そんなものを読ませるのはまだ早いと笑っていたが、おやじは大まじめで、おそらく将来、私の妻に朝鮮婦人をもらいたかったのだろう」。<sup>54</sup>

ちなみに、太郎が心より愛した長男徳馬は、父死去の翌年、陸軍幼年学校を中退した。そして旧制水戸高等学校に入学し、マルクス主義に感化され、京都帝大経済学部に進んでマルクス経済学者河上肇に師事する。その後検挙され、共産党に入党するが逮捕投獄され、獄中で転向し、釈放された徳馬は、株で得た資金をもとに製薬会社ミノファーゲンを設立し、戦後は自由党・自民党の代議士として活躍することになる。その立場は、独自のアジア主義の立場から満蒙權益放棄論を唱え、父太郎によって厳しく批判

---

54 宇都宮徳馬「おやじ(37)宇都宮太郎 弱い者の見方」(『朝日ジャーナル』1964年6月14日号)。

された石橋湛山のリベラリズム、「小日本主義」と同一のものであった。政治的にも石橋湛山や3木武夫らの系統として、単独講和論、平和共存論を唱え、安保改定に反対し中国・ソ連・北朝鮮との友好を唱えると共に、『軍縮問題資料』を発行し、自民党左派の立場から軍縮を訴え続けた。徳馬には、左右の違いこそあれ、父太郎に関わるアジア主義的な歴史記憶が、終生大きな役割を果たしていたと言うことができよう。

なお、宇都宮太郎は、1896年(明治29)より朝鮮人金応善を弟分宇都宮金吾とし、小学校から成城学校に通わせ士官候補生として養育し、韓国太子李垠の侍従武官としたが、当初自分の娘か親族と結婚させようとし、金が別の日本女性と親しくなるとその女性を一度自分の養女とした上で結婚させた。そして、日記に「先づ日韓人の雑婚を見たるは余が理想の一端を充したるものと謂ふべく、将来益々此種の婚姻の続出して両国の関係の改善に資せんことを切望す。」と記している。<sup>55</sup>

古代・中世以来の海域・国土の連続性という意識は、それがたとえフィクションに近い歴史記憶であったとしても、佐賀出身のアジア主義者である宇都宮にとって、ごく自然なものであった。近代の産物である国籍さえも自由に離脱し、アジアの民族は通婚し、国境を希薄化させ、亜細亜連邦(亜細亜連盟ではなく連邦である)へとまとめあげることがアジア主義の「志士」における一大事業であ

---

55 宇都宮太郎日記研究会『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻(1909年1月31日の項)。

ると考えられていた。すでに、1900年(明治33)参謀本部第3部員時代、宇都宮は、日記に次のように記している。

「一旦韓に帰化し、内部より韓国を開発誘導して身を以て日韓の連鎖となり、韓国を日本に引寄(合併、連邦、同盟何れにても漸次歩を進むるにあり。29年の清韓旅行復命書の目的)すること、第1には帝国を強大にし、第2には韓民を救ひ、第3にはアジア連邦の基礎として今日志士の為すべき一事業にはあらずる乎、熟考を要す」。<sup>56</sup>

先にも佐賀藩が朝鮮・大陸との深い関係についての認識を持ち続けたと述べたが、韓国太子李垠の後として選ばれた梨本宮方子の母方の祖父は、最後の佐賀藩主であった侯爵鍋島直大であり、こうした事情もこの婚姻の大きな背景となったと思われる。<sup>57</sup> 朝鮮軍司令官宇都宮太郎は旧主鍋島家に連なる婚儀に際し、日記にこう記している。

「本日は東京麻布御用邸に於て、李王世子李垠殿下と梨本宮方子女王殿下と芽出度御結婚、平生の理想実現、歡喜に堪へず。此上は一日も早く王子女御出生、御両家の御繁栄を加ふると同時に、内鮮の一致同化の益々真実ならんこと切望に堪へざる所なり。此御慶事の為め、朝鮮人政治犯に対し恩赦を發布せられ、歡天喜地の人も少からざるべく、民心に影響する所も多大なるべし。又た

56 宇都宮太郎日記研究会『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻(1900年5月18日の項)。

57 方子の伯父直光映は韓国統監府から農事調査を依頼され、その荒蕪地購入に従事した(小田部雄次『李方子』ミネヴァ書房、2007年、64・244頁)。また、李垠の妹徳恵と対馬の宗伯爵家との縁組み(65頁)も、佐賀鍋島家に連なる方子のそれと同様の意味を持っているように思われる。

兼ねて希望せし旧韓国武官を純然たる日本陸軍将校に任用し、叙位、叙勲の件も本日愈々公布せられ、本人共も歡喜に堪へざるもの如く、実に本懐の至なり」。<sup>58</sup>

彼は、朝鮮ばかりではなく、中国との通婚・同化・統合をも願っていた。やはり朝鮮軍司令官時代、朝鮮人将兵を招いた宇都宮は、「参謀長を(マ)を列席の処にて、余が年来の日鮮日支等の同化合同共存の精神を披瀝し、彼我共に肝胆相照し与に共に大に此主義(日鮮の真実なる同化、合同)之実現に努力せんことを勸説し、彼等も心の真底は分らざれども或程度までは共鳴せり。余は誠心誠意彼等鮮人を感化せん決心なり」。<sup>59</sup>と記している。宇都宮は、1919年3月、日支鮮合同・提携による共存共栄などの内容の年来の抱負をまとめた「本願」を作成し、印刷した『警世危言』などと共に、朝鮮人要人や後途を託す松井石根らに配布し、<sup>60</sup> 帰任後の21年には、朝鮮軍司令官在職中に死没した内鮮双方戦死者追福のために合同提携・共存共栄の趣旨を刻んだ石碑を朝鮮に建てた。

---

58 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第3巻(1920年4月28日の項)。王子出産の際の日記は、同1921年8月19日の項を参照。

59 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第3巻(1919年2月12日の項)。なお、2月10日には旧知の大阪在住者から、百濟滅亡の際に日本に帰化した百濟王族の末裔であるという系図を送られ、「日鮮同化の爲めには大に貴重すべき家柄也。将来一考を要す」と記し、「日鮮同祖論」による同化・統合を推進しようと考えている。

60 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍と大陸政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第3巻(1919年3月9日・11日・4月16日・5月6日・8月27日・10月2日、20年5月28日・9月21日の項)などを参照。

元来、宇都宮の出身地である佐賀(肥前)藩は、かつて秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役、壬辰倭乱・丁酉再乱。1592~1593年、1597~1598年)に、藩祖鍋島直茂が主君龍造寺氏の代わりに大将として参加し、加藤清正らと共に2番隊として積極的役割を果たしたところである。文禄の役の初期、直茂は肥前から高麗もしくは明への転封を強く願ひ、加藤清正から秀吉にその旨を取り次ぐよう強く依頼した。それは、直茂のみならず朝鮮出兵を機に鍋島の指揮下に入った旧龍造寺与力衆の願ひでもあり、肥前の浦々の住民の多くが薩摩・肥後・博多・長門と共に「後期倭寇」として明に渡って生計を立てており、明ないし朝鮮への転封を歓迎する領民の意向を汲んでのものであった。<sup>61</sup> この事実は、中世以来の環シナ海域を跨いで中国・朝鮮・日本を自由に私貿易や掠奪など「倭寇」として行った活動<sup>62</sup>や、朝鮮出兵に積極的な役割を果たしたことと共に、佐賀の人々に誇りを持って語り継がれ、連続した歴史記憶、あるいは自己認識として共有されていた。即ち、朝鮮軍司令官となった佐賀出身の宇都宮太郎は1918年(大正7)各地を視察する途中、会寧で会った佐賀出身の士官候補生らに対し、「直茂公の肥前を返上して咸鏡に代封せられんことを太閤に請はれし故事」を告げて激励している<sup>63</sup>のである。近年の研究では、佐賀を含む9州から中国地方西部に数多く存在する華人系及び朝鮮系の「唐人町」に着目し、華

61 武野要子『藩貿易史の研究』(ミネルヴァ書房、1979年、136~138頁)。

62 村井章介『中世倭人伝』(岩波書店、1993年)。

63 宇都宮太郎日記研究会『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第3巻(1918年9月21日の項)。

人・琉球人・朝鮮人・マレー系・アフリカ系・インド系などの雑居・共生する東シナ海貿易（主に日本の銀と中国産生糸、さらに東南アジアの鹿皮・鮫皮（武具用）、伽羅・砂糖などが交易される）が、明の海禁政策によって逆説的に展開したことも指摘されている。<sup>64</sup>

また、島津氏や鍋島氏が朝鮮出兵の際に連行した朝鮮人陶工や樟脳職人を薩摩や佐賀で陶磁器や樟脳の生産にあたらせた話は有名であり、しかも彼らは明治まで朝鮮姓を名乗り通し、保護されている。<sup>65</sup> 薩摩藩・佐賀藩の人々にとって、朝鮮や大陸、そして朝鮮人は身近な存在であったのである。当時、近代国民国家が持っているような国境の概念はなかった。従って当然のことながら、秀吉にとって島津征服を以て「国内統一」が完成し、次に「海外派兵」に乗り出すという意識はなく、フロンティアを求めて、九州から連続的に琉球、朝鮮、「小琉球」（フィリピン）に服属を要求し、さらに明王朝を倒してこれに代わり、「日本王朝」を大陸に打ち立てるといったシナリオは、連続したものであった。さらに北京に入り、後陽成天皇をここに移して中国皇帝とした後は、天竺（インド）征服に向かうため、寧波へと移動する計画であったという。<sup>66</sup> 国境によって仕切られた近代国民国家が成立するまで、アジアの海も陸

64 荒野泰典「唐人町と東アジア海域世界」（歴史学研究会編『シリーズ 港町の世界史3 港町に生きる』青木書店、2006年）。

65 例えば、安宇植・橋川文3の対談「日本の近代化と西郷隆盛の思想」（『西郷隆盛全集第4巻 月報』大和書房、1978年）4頁の安の発言、小田部雄次『李方子』（ミネルヴァ書房、2007年、64～65・244～245頁）を参照。

66 中野等『戦争の日本史16 文禄・慶長の役』（吉川弘文館、2008年、1～54頁）。

も、世界の地平までひとつながりとして考えられていたのである。秀吉の支配に代わった徳川家康が集権化推進に極めて慎重で、強大な旧族大名を最後まで追い詰めることを避けたため、島津氏と鍋島氏は、主要な旧族大名のうち例外的に、関ヶ原以後もほとんど無傷で残ることができた。<sup>67</sup> そして、中世以来の社会構造や大陸・朝鮮認識が、特に薩摩・佐賀藩に幕末まで残り続けたのである。しかも、徳川政権初期まで、佐賀鍋島藩では、島津・松浦両氏と共に、中国やルソン・安南・シヤムなどとの通商外交に意欲を見せ、長崎貿易を推進し、幕末には「蘭癖」で有名な第10代藩主直正が西洋文明を積極的に導入し、アヘン戦争に際しては、英国軍艦に石炭を売るために松浦郡で採炭事業を開始してそれを長崎で高価に売却して利益を得るなどし、その利益で軍制改革を含む「富国強兵」政策を推進したのである。島津氏同様、戦国時代以来の問題意識が継続していたとすることができよう。

近代日本のアジア主義を考える際、中世以来の日本とアジアとの関わりや日本の国内秩序との連続性や比較を考えることは、大きな助けとなるように思われる。歴史家網野善彦が日本列島を倒置した富山県作成の「環日本海諸国図」を用いて強調してきたように、日本海及び東シナ海は、日本列島、南西諸島とアジア大陸とに囲まれた「内海」であった。中世、そして近世初期まで、「倭寇」「倭人」は「日本人」と同一ではなかった。「倭人」は国家を越え国

---

67 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠3郎『文明としてのイエ社会』（中央公論社、392頁）。

境に関わることなく、朝鮮半島・中国大陸・日本列島などにわたる海域を生活の場とした人間集団であり、アイヌはサハリンやアムール川(黒龍江)上流から北海道・東北地方北部にわたって活動した交易民であった。モンゴル帝国時代には、あるいは清の時代には、アムール河下流域・サハリン・北海道・東北地方北部という広域にわたって、アイヌ・和人・山韃・ウイльтаなどが混交して「北の倭寇」などとして毛皮貿易などを行った。<sup>68</sup> 内田良平らが作った民族主義結社である黒龍会の名称は、黒龍江の向こうへと白人種を追いやろうとしたためとも、シベリアを渡り黒龍江付近に到達した内田がその景色に感動してつけたとも言われているが、彼らの「アジア」像が、アイヌを含むこの周辺の民族が混交し交易して暮らしていた時期のそれを「桃源郷」のようにイメージしていたことは容易に想像できる。「天下布武」を遂げた織豊政権期において「日本国」としての統一意識が強まり、秀吉による朝鮮出兵を経て徳川政権が「鎖国」を行うまで、日本海沿岸や九州地方の人々にとって、「アジアの海」は朝鮮・中国はもちろん、琉球・東南アジアへと連続する生活圏であり、日本は海によって仕切られた「島国」などではなかった。<sup>69</sup>

歴史家網野善彦は、単一民族神話に基づくナショナリズムを批

---

68 佐々木史郎「北東アジアの河川、海上交通とその拠点」(歴史学研究会編『シリーズ 港町の世界史』第1巻、青木書店、2005年)、中村和之「アイヌの北方交易とアイヌ文化」(加藤雄三・大西秀之・佐々木史郎編『東アジア内海世界の交流史』(人文書院、2008年))。

69 特に、網野善彦『日本の歴史00 『日本』とは何か』(講談社、2000年)を参照。

判することで、日本史学界に強い衝撃を与え、逆に「新しい歴史教科書を作る会」などの右派から攻撃されたりベラルな歴史家である。宇都宮太郎と徳馬とに見られるように、アジア主義が左右を超えて通底していることや、リベラリスト歴史家網野の学説と頭山満らのかつての民族主義者らの主張とが国民国家(国家主義)批判という点で似通っていることは、日本におけるアジア主義の議論に見られる興味深い点である。

なお、宇都宮太郎がその「大日本主義」の後継者として期待したのは、名古屋出身の松井石根であった。松井や彼を中心とする大亜細亜協会という「大東亜戦争」を主導していった汎アジア主義のイデオロギー・ネットワークの詳細については、紙幅の関係で別の機会に譲る。<sup>70</sup> 彼は、宇都宮の「大日本主義」を「大亜細亜主義」へとさらに発展させた。その転機は、石橋湛山の「小日本主義」を戦略的に後退させた満州事変である。満州事変後、国際連盟で行われた日中間のそれをめぐる対立と、英米など西洋諸国の圧倒的な多数による「満洲国」否認と日本を批判するリットン調査書の決議であった。当時、陸軍を代表して軍縮会議の日本全権となっていた松井は、こうした連盟の現場を目撃して烈しい憤りを抱き、1932年(昭和7)28月に日本陸軍全権の役目を捨てて帰国してし

---

70 松浦正孝『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか—汎アジア主義の政治経済史』(名古屋大学出版会、2010年刊行予定)や、すでに刊行されている松浦正孝「日中戦争はなぜ南下したのか」1~3(『北大法学論集』57巻1号~58巻2号、2006・2007年)、松浦正孝「解説 雑誌『大亜細亜主義』と大亜細亜協会について」(後藤乾一・松浦正孝編集・解説『復刻版 大亜細亜主義』龍溪書舎、2008年)を参照。

まった。そして、連盟の構成の欺瞞性について、あちこちで激しい批判を加えた。例えば、33年2月に大阪毎日新聞社が主催した講演会で松井は、連盟による日本批判決議はかつての3国干渉の「数層倍の辱め」であり脱退は当然であると述べた。そして、世界は連盟外の米国・ソ連によって支配されており、連盟自体も、加盟国の英国が属国を併せて7票、仏国が小協商国を併せて5、6票、連盟外の米国・ソ連が5、6票の影響力を有し、「アジアの覇者たるわが帝国日本」が一票しか持っていないとの国際認識を示した。そして、中国のみならずインドシナ、ビルマ、印度、ペルシャ、トルコ等アジアの同胞と力を合わせ、「これらを率ゐて真の大アジアの建設」をし、真の世界平等・平和を実現すべきだと述べ、「大アジア主義に還れ」と叫んだ<sup>71</sup>のである。そして松井は、国際連盟に代わる亜細亜連盟を作るべく、「満洲国」建国一周年目の1933年3月に、大亜細亜協会を同志と共に設立したのである。

大亜細亜協会設立の母体となったのは、32年春、中谷武世法政大学教授、下中彌三郎平凡社社長の他、満川亀太郎、中山優、今中11郎、清水董三、中平亮、宇治田直義、ラース・ビハーリー・ボース(インド人革命家)、コンデイ(安南の王族)らの学者・評論家らが、満洲国建国後のアジア問題を、アジア大陸全体の問題や遠く中東問題まで含めて、満洲事変問題より広い文脈で研究するために作った汎アジア学会である。これに、近衛文麿、広田弘毅(外務省待命

---

71 「本社主催特別大講演会の松井大将の熱弁」『大阪毎日新聞』1933年2月28日～3月5日付。

中)らの政治家・外交官、末次信正(海軍第2艦隊長官)、菊池武夫(陸軍予備役中將・貴族院議員)、小畑敏四郎(参謀本部第3部長)、本間雅晴(兵器本廠付新聞班長)、樋口季一郎(東京警備参謀)、鈴木貞一(陸軍省軍務局支那班長)、石川信吾(海軍軍令部第2班第3課参謀)らの有力陸海軍人、村川堅固(東大文学部教授・西洋史)、矢野仁一(京大文学部名誉教授・東洋史)、平泉澄(東大文学部助教授・国史学)、鹿子木員信(九大法文学部長・哲学)、太田耕造(弁護士・国本社機関誌発行者)、徳富蘇峰らの知識人を加えて、大亜細亜協会が成立したのであった。

大亜細亜協会は、機関誌『大亜細亜主義』を33年5月の創刊号から42年4月の終刊号まで、9年間にわたり発行し続け、政治団体ではなく思想文化団体として、大アジア主義を啓蒙・宣伝すると共に、台湾・朝鮮・フィリピンといった海外や、大阪・福岡・金沢・京都・熊本・神戸などに支部を作り、仏教団体・軍隊・在郷軍人会・地方行政組織・町内会・商工業界・在外邦人・植民地などに浸透する、アジア主義というイデオロギーを広めるためのイデオロギー・ネットワークを作り上げた。大亜細亜主義というイデオロギーは、西洋帝国主義を批判し日本にアジアとの提携を呼びかけた孫文の中国における後継者らとの提携を目的として、形成されたものである。そして、日本帝国を「大東亜戦争」へと導く際に、反英運動を中心として大きな役割を果たしていった。

松井らの大亜細亜協会が、松井の直接の「師」であった宇都宮太郎の「大日本主義」から「大亜細亜主義」へと発展していったメルクマールとしては、世界大恐慌と「満洲国」成立後の世界において、国際連盟に代替すべき亜細亜連盟を目指したことのほかに、

アジアを一つの実験場とする一大経済圏を作り、「共存共栄」を図る一大プロジェクトを作り上げようとしたことが挙げられる。まず、「満洲国」と日本、日本帝国の植民地である台湾・朝鮮などを新たな「日満支」ブロック、さらには「東亜新秩序」として新たな分業体制へと組み替え工業化を推進することによって、日本海を「内海」とする一体的な経済ブロックを形成して世界でいち早く景気浮揚を実現した。そして、中国を侵略し、華北・華中・華南などに分治合作させる「中華連省自治国」として解体し、それと日本帝国、「満洲国」・蒙古自治国・新疆自治国・西藏自治国などで、「亜細亜連盟」を形成しようとした。「満洲国」建国により、ソ連との戦争の危険は減少したとして、朝鮮・「満洲国」を一体とした兵站基地を建設した。宇垣一成総督期に始められた朝鮮北部・「満洲国」への朝鮮人の移住政策は、後に日中戦争長期化によって日本の労働力が不足した1939年以降、朝鮮人の日本における強制労働政策や、「大東亜戦争」期におけるインドネシアなどでの労務者動員政策の原型となる。華僑資本とアジア各地における天然資源とを利用して、台湾を拠点とする「南洋」進出を実現し、朝鮮人・中国人・アジア各地の現地人を労務者として行う一大公共事業によって、さらにアジアの経済発展と「共存共栄」、さらには西洋帝国主義国のアジアからの駆逐を図ろうとしたのである。

松井自身は、台湾軍司令官時代に、台湾を中心とした従来からの中国西南部との提携工作を進めると共に、「南洋」進出を目指す大亜細亜主義運動を推進した。その後、日中戦争の勃発に際しては、上海派遣軍司令官及び中支那方面軍司令官として、上海上

陸・首都南京の攻略などを指揮し、大亜細亜協会の理事などを務める同志の陸軍軍人らと協力しながら、反英主義・大亜細亜主義などを軸とする戦争遂行と中国占領地における傀儡政権建設を行った。松井が「南京大虐殺」や英国との関係悪化を理由に最高指揮官を解任された後も、大亜細亜協会役員・会員らは、興亜院を中心に、戦争遂行及び中国占領地における宣伝工作・宣撫工作进行を推進した。

こうした大亜細亜協会の大亜細亜主義というシナリオ作りに大きな力を貸したのが、母体となった汎アジア学会に居た今岡11郎ら知識人による「ツラン主義」<sup>72</sup>や亜細亜連盟論であり、また大亜細亜協会設立にあたって新たに参加し、西洋史を戦争・侵略と有色人種の搾取の歴史として描き、日本民族の優越性を説いた村川堅固東京帝大名誉教授<sup>73</sup>らの知識人であった。大亜細亜協会の会員の中には、京都帝大・神戸商大など関西の有力大学の教授陣も多く参加したが、多くは医学・農学・経済学などアジア開発と関わる実学系の教授らであり、いわゆる「京都学派」と呼ばれるポスト・モダンの知識人は参加していない。

これまで、大亜細亜協会は、政治結社としての活動よりも思想

---

72 「ツラン主義」は、ツラン民族、即ちウラル・アルタイ民族の独立運動を主張する運動で、フィンランド・ハンガリーから中央アジア、モンゴル・満州・朝鮮・日本人などが同一の民族であるとする。例えば、海野弘『陰謀と幻想の大アジア』（平凡社、2005年）第2章などを参照。

73 村川堅固及び、その子堅太郎（戦後東京大学文学部教授）は、戦後においても、長くギリシア・ローマ史の権威として、学界における強い影響力を保ち続けた。

文化団体として、しかも政党・結社としてよりはイデオロギー・ネットワークとして、同協会をハブとする緩やかな浸透力・影響力によって、日本の政治を動かしたため、ファシズム論を含む、マルクス主義史学・ヨーロッパ政治理論・アメリカ政治理論などの西洋由来の「戦争犯罪」責任者探しの網の目からはこぼれ落ちてきた。また、東京国際軍事裁判においても、松井らの弁護人が大亜細亜主義に基づく西洋帝国主義批判を展開しようとしたが、占領軍はこれを全く無視し、「共同謀議」という戦争犯罪の枠組みで裁いた。このため、松井は、南京虐殺事件の最高責任者としての罪状でのみ死刑とされたのである。『大亜細亜主義』には、当時、政治的発言を封じられていた軍人を含む多くの大亜細亜協会会員らによる、極めて貴重な論文や諸情報が掲載されているが、この雑誌は2008年から復刻され始めたばかりで、本格的な研究は、まだ緒に就いたばかりである。しかし、近衛内閣による日中戦争の拡大、東亜新秩序宣言、1939年に昂揚し三国軍事同盟や大政翼賛会成立などを招いた大反英街頭運動、汪兆銘政権の擁立、そして「大東亜戦争」を主導した渦中に居たのは、まさしく彼らであった。

戦後になると、中谷武世・下中彌三郎らの元大亜細亜協会メンバーは、世界連邦運動を起こす一方、岸信介首相と共に東南アジア開発基金構想をアメリカの資金によって実現しようと試みた。また、自民党代議士であった中曽根康弘を擁し、宇都宮徳馬を含む左右各派の政治家・財界人らから成る日本アラブ協会を創設し、エジプトのナセル大統領に対し、アングロサクソンに対抗するため、鴨緑江ダム建設の実績のある日本の技術力・資金力によって

アスワンハイダムを建設する構想を推進しようとした<sup>74</sup>。また、日本はアジアを解放するために「大東亜戦争」を戦ったのであり、搾取を目的とした西洋帝国主義とは違い「共存共栄」を目指したのであって、日本は侵略国家ではない、という、現在の日本に根強く残っている言説も、「大亜細亜主義」イデオロギーが、修正され作られた「歴史記憶」として生き延び続けていることを示している。

#### 4. 「中帝国主義（財界提携による戦争抑止論）」

さて、紙幅も尽きてきたので、戦前日本におけるアジア主義の第3の選択肢である「中帝国主義」について、簡単に紹介したい。3つのアジア主義の中では、いささか座りの悪い言葉であるが、これまで紹介してきた2つのものとは異なり、植民地を含む帝国や国民国家など現状・既存の国家を枠組みとした上で、民間財界を主体に、日本と中国とが中心となってアジアの平和秩序を維持していこうという立場である。元来、日本の財界は、徳川時代に日本が行ってきた貿易及び国内流通抑制政策である「鎖国」時代に、西洋諸国や華商などから取り残されてしまった経済活動を、制度及び勢力範囲などの面で急速に取り戻そうという、明治新政府の政策から始まった。

---

74 中谷武世『アラブと日本』（原書房、1983年）を参照。

薩摩藩(現在の鹿児島県を中心とする地域を治めた大名島津氏の領地)は、「鎖国」政策に反対して琉球を拠点とする密貿易を行って徳川幕府と対立し、秘密裏に英国へ留学生を送ったが、その一人である初代文部大臣森有礼は、「欧米ノ商人ハ前途深ク畏ルヽニ足ラス、支那商人ハ前途日本ヲ痿弊スルノ状アリ」と懸念し、大阪に華商に対抗するための商業学校設立を訴えた。<sup>75</sup> そして、同じ薩摩藩からの留学生仲間であった商人5代友厚ら民間財界の力を借りて、大阪商業学校が設立されたのである。本稿で引用したように、明治・大正期に活躍した三浦鍬太郎らのエコノミストもまた、同様の危機感を持っていた。陸軍士官学校出身の荒尾精や根津一、岸田吟香らのアジア主義者もまた、同じ観点から、書籍・薬材商店である漢口楽善堂や日清貿易研究所、東亜同文書院などの、対アジア貿易振興・諜報などを目的とする修習機関を設立した。

一方、西洋経済の様々な制度や概念を早急に日本に整備しなければならぬと考える明治新政府の井上馨やその側近渋沢栄一、大隈重信に近い福沢諭吉らの慶應義塾関係者らは、初めは政府の財政経済担当者の立場から、続いて、政変による下野(井上・渋沢は1873年、大隈重信や福沢系の官僚は1881年)後は、民間財界を形成して、会社・銀行・保険を始めとする経済制度を日本に定着させ、多くの会社・企業を創立し、日本の資本主義制度を定着させた。渋沢らは、植民地朝鮮に第1国立銀行支店を開設し、1902年(明治35)には

---

75 籠谷直人『アジア国際通商秩序と近代日本』(名古屋大学出版会、2000年、11~12・84頁)。

朝鮮経済開発のための朝鮮協会を設立し、朝鮮総督府と協力しながら朝鮮での経済制度整備や経済開発にあたった。中国に対しては、1907年(明治40)に対中国投資会社の東亜興業、14年(大正2)4月には前年日中合弁会社として設立された中国興業を中日実業として改組し、1920年(大正9)日中親善のための日華実業協会を設立した。

もちろん、日本の対中国・朝鮮を含む対アジア経済政策において、政府や政府系金融機関、植民地当局や軍部などが果たした役割は大きい。渋沢栄一を中心として形成されていった民間財界が、アジア主義において果たした影響も非常に大きいのである。そこには、経済分野における華商の圧倒的な影響力を前に、華商などに対抗し日本側通商力の覇権を確立していこうとするアジアに対する侵略的な側面と、中国などとの提携なしには日本の経済発展はないという友好的な側面との、両面があり、しばしばその両面は切り分け難く結びついていた。

時代は降り、満州事変後しばらく経った1935年(昭和10)半ばになると、満州事変で断絶状態に近くなった日中貿易も復調し始め、中国側が経済提携に前向きな動きを示し始めた。日本側でも、大阪商工会議所が中心になって、外務省の後援を得ながら日支経済連絡委員会設置の準備を進めた。こうした結果、35年10月も蒋介石らのイニシアチヴによって、呉鼎昌中国塩業銀行総経理を団長とする中華民国赴日経済考察団が組織され、来日することとなったのである。呉団長は、紡績や雑貨など、日中間で問題となっている問題について広く意見を交換し、産業別に日中経済提携の可

能性を模索する意向を明らかにしていた。考察団は、日本の銀行業界や商工会議所などの経済団体と交流したほか、紡績工場・電線工場などを視察して親善を深め、その結果、中国側の提案により、経済提携・貿易促進を図るため、中国側に中日貿易協会(会長は周作民金城銀行総経理)、日本側に日中貿易協会(会長は兒玉謙次横浜正金銀行頭取)が常設されることとなった。<sup>76</sup>

その後1935年11月4日、中華民国は英国の派遣したサー・フレデリック・リース＝ロス(Sir Frederic Lieth-Ross)の助言を得ながら、通貨制度改革を断行した。銀を中心とするそれまでの不安定な通貨制度から、ポンドとリンクした法定通貨(法幣)へと切り替えるこの改革について、日本の経済界では、軍部や「満洲国」の華北分離への意向を受けてこの行く末を悲観する観測をなし、法幣に反対する「御用学者」高橋亀吉と、財界穏健派を代表する東亜興業株式会社常務で明治大学商学部教授(外国為替論・支那為替論)の内田勝司とが、激論を交わした。軍部や、強硬なアジア主義者である外交官須磨弥吉郎南京総領事<sup>77</sup>は英国の援助を受けたこの幣制改革案に強く反対し、中国による自力での幣制改革を希望していた高橋是清蔵相もまた、日本への協力を求める英国側の要請を断り、中国は英国の援助を受ける形で、改革を断行した。<sup>78</sup> 中国の幣制改革が、世間における悲観論を裏切り成功する中で、出来軍部である

---

76 以下の日本財界による日中戦争回避の動きと、戦争収拾工作については、松浦正孝『財界の政治経済史』(東京大学出版会、2002年、第5章)を参照。

77 須磨未千秋編『須磨弥吉郎外交秘録』(創元社、1988年、76～78頁)。

78 松浦正孝「再考・日中戦争前夜」(『国際政治』122号、1999年)を参照。

支那駐屯軍(天津軍)の中でもこれに焦慮を覚え、華北現地での新通貨工作(高橋亀吉がこれに協力)、密貿易といった、経済的・非軍事的手段による対抗措置をとり始めた。一方、日本の銀行・商業資本を中心とする財界および、蒋介石や孔祥熙などの南京政府と中国実業界との間で、再び「経済を経済人の手に」という形で民間財界主導の経済提携を推進し、それによって出先軍部を抑えようとする動きが起こってきたのである。日本側でその中心となったのは、陸軍出身の林銑十郎内閣で大蔵大臣兼拓務大臣を務めた、財界出身の結城豊太郎前日本興業銀行総裁であった。

林銑十郎は、満州事変の際に、朝鮮軍司令官として、天皇の「奉勅命令」を待たず、日本本国の統帥部の許可を得ぬままに、関東軍の石原莞爾らを助けるため、独断で越境出兵した「越境將軍」として有名である。また、軍部を抑えるため、政友会・民政党の協力を基盤として陸軍出身の宇垣一成が組閣しようとして失敗した後、成立した、既成政党などの支持を持たない、政治基盤の脆弱な内閣であった。しかし、実際には、日本においてタカ派と見なされている政治家が実際に政権に就けば親アジア政策を取ろうとしたり、自衛隊を違憲としてきた社会党党首が首相になればその立場を180度転換させたりする例に見られるように、林内閣もまた、実質3ヶ月の短い政治生命の中で、結城大蔵大臣と外務省出身の佐藤尚武外務大臣とのコンビにより、華北分離工作を中止し、冀東密貿易を抑制させようとしたり、蒋介石政権による中国統一を認め文化経済を中心に日中国交調整を図ろうとした、極めて対中宥和的な政策を試行した。もし実現していたならば、され

は単なる歴史の一エピソードを超えたものとなったであろう。そして、こうした林内閣による政策転換の裏には、経済界の中でも穏健派を中心とした財界と、外務省内の穏健派があった。

35年10月に来日した中華民国赴日経済考察団に対する答礼として、財界では、兒玉謙次横浜正金銀行頭取を団長として、37年(昭和12)4月、今度は日本側が中国を訪問する実業団を組織した。実に、蘆溝橋事件が起こる3ヶ月前のことである。兒玉訪中団の最大の目的は、日中間の疎隔した意思を通じさせるため、両者が遠慮なく意見を交換することにより、「今後何事ニ付ケテモ話シ合ヒヲナシ得ル糸口」を付けることにあった。そのため、訪問先では、一般問題懇談会及び、砂糖問題懇談会、金融部懇談会、綿業問題懇談会などの個別部会が開かれ、両者の間では、烈しい議論の応酬もしばしばなされたが、概ねその目的は果たされた。軍人が本業を離れて経済に口出しをするのを防ぐため、経済は経済人の間で行い、国交を文化と経済の両面で改善していくべきである、といったような意見が出され、結局両者は、日本側が冀東密貿易を防止するよう努力し、中国側が排日的と見られる高率関税を調整することで合意した。そして特に、兒玉団長(日中貿易協会会長)と周作民中日貿易協会会長とが、将来重要問題が起こった際には、この訪問団実現にも奔走した船津辰一郎在華紡績同業会理事を通じて、正金銀行の暗号通信を「ホット・ライン」として利用することも取り決められた。日中戦争勃発直後すぐに、船津辰一郎によって日中和平工作が模索されたのには、こうした伏線があったのである。また、1938年(昭和13)夏に第1次近衛内閣が大改造され、

3井銀行出身で財界の代表である池田成彬を大蔵大臣兼商工大臣とし、池田の盟友宇垣一成を外務大臣として、英国を仲介とする日中和平工作が行われた<sup>79</sup>のも、こうした動きの延長線上にあった。

兒玉実業訪問団には、もう一つの重要な任務があった。それは、この訪問団を佐藤尚武外相と共に支えた結城豊太郎蔵相から、孔祥熙行政院副院長及び王寵惠外交部長に宛てた、民間財界を中心とした経済提携による日中関係打開への強いメッセージの伝達であった。このメッセージを伝えたのが、訪問団最年少で結城の女婿であった大日本製糖社長藤山愛一郎である。藤山の伝えた結城のメッセージとは、大蔵省を中心とする日本政府は、中国政府との暗黙の了解を前提とした日中経済提携によって、天津軍・関東軍の少壮軍人を段階的に統制し、日中間の危機を打開したいと希望している、というものであった。日本政府は軍部に軍拡予算を認める代わりに、肅軍と政治外交に対する不干渉とを約束させる所存である。その際、敢えて華北に関する政治問題に触れずに経済提携の実績を作って軍部を抑制することで、冀東・冀察政権や冀東密貿易を解消し、中国は統一を促進し、日本は中国への正当な貿易発展により日中間の友好関係を促進する。<sup>80</sup> 藤山の伝えた日中民間財界による経済提携は、両国内での財界・業界内部で

79 松浦正孝『日中戦争期における経済と政治』（東京大学出版会、1995年）。

80 「孔副院長会晤日本経済視察団員大日本製糖社長藤山愛一郎記録抄件」「部長会晤日本経済視察団員大日本製糖社長藤山愛一郎談話記録」（いずれも、『關於改善中日関係』7冊所収、台北：中華民國檔案資訊処）。

の生産自主統制・輸出自主規制を前提としたものであって、結城豊太郎が当時の財界主流が推進していた方針でもあった。これに対し、日印会商や日蘭会商などを通じて、津田信吾鐘紡社長ら大阪産業界の対英強硬論が対立し、彼らは大亜細亜協会などに入って、英国や中国などに対して強硬な態度を取るよう、政府に圧力をかけていたのである。

結局のところ、民間財界を中心とした日中経済提携や戦争抑止の努力は、実を結ぶことはなかった。藤山愛一郎は、戦後、公職追放を解除された後、経済同友会代表、日本航空会長、日本商工会議所会頭として財界に復帰した。そして蒋介石に対し、1952年(昭和27)4月30日、手紙を書いた。財界のあり方をよく示すので、やや長いが引用する。

「蔣總統閣下、私は今閣下にお目にかゝつた時の事を思い出さざるを得ません。1937年の春3月私共日本の実業家はなんとかして両国の意思の疎通を計りたいと一団となつて南京にお伺い致しました。その時私は父〔製糖会社を經營していた雷太のこと一松浦註〕と總統閣下との友誼の為にたゞ一人御面会出来る機会を持つ事も出来色々御意見をうけたまわつたのでありましたが、殊に一行全部をお茶に御招き頂いた其の席での總統閣下の御挨拶をいまでもつて忘れる事が出来ません。閣下は申されました、『あなた方日本の実業家に申し上げたい事は、あなた方日本の実業家の尊敬する大先輩であつた渋澤栄一子爵は、論語の信奉者であられるが其の論語の中に「自らの欲せざることを他人に強いてはならない」と言う言葉がある。あなた方日本の実業家はどうかあなた方の尊

敬する渋澤子爵の信奉する論語のこの意味を充分理解して貰いたい』と言う含蓄のある挨拶をなされたのであります。当時の日本は、ことごとく中国に対して日本自らが受けたら必ず怒るにちがいないことを中国に平気でおしつけて居つたのであります。お別れして帰国してから僅かに3カ月目に、遂に不幸の戦争が始まつたのであります。それをさげさせる力の無かつた事をいまもつて恥しく考えて居ります。私は其旅で総統閣下始め政府の要人の方々にお目にかゝりましたが同時に、20から30代の各界の青年層の人達と南京でも上海でも数回会合をして若い中国の青年の方々が真面目に中国を近代国家に作り上げて行く努力とその意欲に燃えて居られるのにも驚きもし又感心すると同時に私達日本人もその青年の気持を真面目に同感して協力してゆかねばならないと痛切に感じたのであります。そして日本人が新しい中国人についてあまりにも知らなすぎると思ったのであります。そこで出来る限り日本人に其新しい中国のことを知らせる事が私共の重要な責任だと思いましたが、その暇もなく戦争が始つたのであります。当時迄は、我が国の実業家の中にも中国が近代的国家として成長する事は日本の産業の競争者を作るだけに過ぎないので中国は相変わらず近代化しない農業原料国だけに閉じこめて置く方が良いと言う様な狭い見解の人も少くはなかつたのであります。中国が近代国家になり近代的産業も起り中国人の生活水準が高められる事その事が日本の産業にも良き影響を与えると言う事を思わなかつたのであります。この事は現在に於ても単に中国のみならず東南アジアの民族的解放による近代新国家建設の途上にある諸国家に

対しても同じ事が起こり得るのであつてその点私共は今後充分戒心してゆかなければならない点だと思ふのであります。今から考えますればもし日本が過去に於て取つた様な精神と行動と全く反対な考え方で中国と協力して居つたならば今日中国は立派な近代国家に出来上つて居つたかと想像されます。そしてソビエトロシアの中共政権の如きが中国本土を支配することもなかつたかと思われると残念でたまりません」。<sup>81</sup>

当時、藤山の周囲には、かつて日本商工会議所会頭として大きな影響力を持っていた父藤山雷太のように、「財界世話業」になれという声も強かったが、藤山自身は、「かつての郷誠之助さんとか井坂孝さんのような財界世話業というものは、今日の財界ではもはや成り立つとは思っていなかった」ために政治に関わろうという気持ちを持っていなかった。しかし親しい岸信介から外相就任を要請された時、閣内に入らず政治に介入する白洲次郎らの吉田茂に対する「側近政治」の弊害を批判してきた経緯や、生まれながらに恵まれた境遇にあったことへの反省から、藤山は「泥まみれ」になる覚悟をした。日本側民間財界代表の訪中使節団に加わりながら、日中戦争を阻止することのできなかつた反省や中国への贖罪感も大きかつた。また、藤山が私淑する従姉妹の池田成彬から、政治家になるなどということを考えたこともなかつた藤山に対し、「藤山君、こんど衆議院出ないか」「財界人がみんな出なければウ

---

81 「蒋介石総統への手紙」(藤原銀次郎・小林十三・藤山愛一郎『現代随想全集』第32巻、創元社、1954年、386~387頁)。

ソだ。今までのように政治は軍人に任せといちゃいけないんだから、財界人も政治にでるべきだ」と言われたことも、藤山が政治に直接関わるようになった大きな転機であった。<sup>82</sup> 藤山は、こう述べている。

「ご承知のとおり、池田さんという方は3井の総帥でありましたし、あまり政治に関心を持っておられない方でありましたが、戦争中、池田さんが戦争をやめることのために努力をされた。私もそのお使いをしたわけですが、そして日本経済はそんな無茶な戦争をやったらもつものじゃないという考え方でございます。それが身にしみて感じておられたのでしょう、財界人が出て大いにやらなければ政治がだめなんだということでもございました。そのご勧誘があつて私はお断りしたんですが、当時、いろんな財界の方が衆議院と参議院に出ておられます。財界人のなかにもそういう意味でやはりこの終戦を迎えた方がある。

そういうことで、私が身をもって知ったことを申し上げるわけですが、問題がいろいろある戦争をやった。当時財界におりまして、いくぶんかでもそういう経緯を知っている私にすれば、無謀な戦争であったという考えはどうしても拭い去ることはできません。それが結局、今日の状態になって、私が政治に入ってみようかということ、また日中関係も正常化してできるだけやっていかなければならないということ考えた原因です」。<sup>83</sup>

---

82 藤山愛一郎『政治わが道』（朝日新聞社、1976年、27～40・166～180頁）なども参照。

83 藤山愛一郎「戦時下の財界の動き」（赤松貞雄他著『語りつぐ昭和史—激動の

藤山愛一郎は、1957年(昭和22)、東条内閣倒閣運動以来つきあいのあった岸信介の勧めにより、財界出身の外相となって「経済外交」を推進し、翌年には衆院選挙にも出馬した。<sup>84</sup> 特に日中友好には力を入れ、度々訪中し、1973年(昭和48)日中友好議員連盟会長になっている。<sup>85</sup> また、政界入りする以前の1955年(昭和30)には自ら希望してバンドンで開かれた第1回アジア・アフリカ会議に出席し、帰国後はインドネシア・フィリピンとの賠償問題早期解決を各方面に訴えかけ、56年春にはフィリピンとの賠償交渉を自ら手がけることとなった。<sup>86</sup> 目前の損得にとらわれず、植民地から解放された東南アジア・アフリカ(いわゆるA・Aグループ)の経済建設を助けることを日本の経済外交の目標とすべきであると考えた藤山もまた、民間財界を軸足とした、もう一つのアジア主義のありかたであったと言って良いであろう。<sup>87</sup> 理想主義的な贖罪論を基にした藤山の考え方は、アジア主義という点においては、戦前・戦時には大亜細亜協会理事として活躍し、対フィリピン賠償に活躍した村田省蔵大阪商船社長や、岸信介らと共通する面があり、中国・東南アジアなどでの現実的な経済権益を期待する経済人らとも重なるころがあった。戦前は対中政策などで考え方を異に

- 
- 半世紀』第4巻、朝日新聞社、1976年、76~77頁)。
- 84 藤山愛一郎『日本の百人全集 I—私の行き方』(学風書院、1959年、152~174頁)。
- 85 藤山愛一郎『政治わが道』(197~230頁)。
- 86 藤山愛一郎『政治わが道』(49~55頁)。
- 87 藤山愛一郎『社長室にて』(学風書院、1958年)の「『ハンケチを雑巾に使うな』と言われて」15~27頁、「まずアジアから」247~249頁などを参照。

していた彼らが、戦後、どのように交錯していったのかは、まだまだこれから解明すべきテーマである。今後の課題としたい。

藤山は、岸内閣総辞職以後、60年・64年・66年と、3度自民党総裁選に出馬した。藤山派を組織し、その政治資金には、ほとんど私有の株、土地、本邸、絵画などを売り払った。その結果、「井戸堀」を体現し、私財を傾け尽くした派閥は、次第に切り崩され、やせ細り、「絹のハンケチを雑巾に使った」と言われた。彼が政治に注ぎ込んだ私財は、数百億円に相当するという。<sup>88</sup>

## 5. おわりに

以上、1910年代から1940年代にかけての日本を中心に、「小日本主義」、「中帝国主義（財界提携による戦争抑止論）」、「大亜細亜主義」という異なる3つの議論を、アジア主義のタイプとして、筆者なりに整理してみた。「小日本主義」は三浦鍊太郎から石橋湛山へ、第1次世界大戦を境に、少しずつ変化した。「大亜細亜主義」は、幕末の西郷隆盛らによる東アジア主義（日清韓提携論）から出発した。かつての中華帝国の栄華を「豆の如き島帝国」として羨望し、ロシア帝国との戦争に際し、英国大使館付武官として大英帝国と連携して世界戦略をにらんだ経験を持つ宇都宮太郎の中で、徐々にそれは「大帝国」建立の悲願（「大日本主義」）として育ま

---

88 藤山愛一郎『政治わが道』（232～250頁）。

れ、世界恐慌及び満州事変という激変の中、宇都宮の後継者松井石根の下で「大亜細亜主義」として孵化した。<sup>89</sup>

第1次大戦以前は「小日本主義」対「大日本主義」の対立図式があり、満州事変以後は、「大亜細亜主義」対「中帝国主義（親英派・財界を中心とした戦争抑止論）」という対立に、「小日本主義」が「中帝国主義」に合流した。戦後は米国を批判しアジア・アフリカに第1の関心を表明した藤山愛一郎も、戦前は多くの財界メンバー同様、植民地支配を前提とし、英仏米など西洋諸国との協調をまず優先していたと思われる。そして、戦後には、これら3つすべての立場が、中谷武世や下中彌三郎らの旧大亜細亜協会メンバーを中心に、宇都宮徳馬、三木武夫、中曽根康弘、岸信介、藤山愛一郎らをまとめ、一つの動きとして結集するという興味深い側面も見られた。これらについては、筆者の次の課題としたい。戦後、アジア主義がどのような形で日本の政治経済の構造に埋め込まれ、どのような形で再生・変形していったのかは、実はほとんどなされていない作業だからである。

近代日本は、戦前、「大亜細亜主義」の選択肢に最も近い道を辿った。そして日本は、「大東亜戦争」で、英米蘭各国を含む「連合国」と交戦して敗れた。しかし、よく言われるように、日本帝国はこの敗戦と共に植民地一切を喪失すると共に、戦争末期には、原爆投下・大空襲・ソ連による満州侵攻などに対する米国・ソ連

---

89 松浦正孝「汎アジア主義における『九州要因』」下（『北大法学論集』第59巻第2号、2009年）。

とに対する被害者意識を強く持つことになった。その後の冷戦構造の中で、日本は、米国の保護の下に植民地責任・戦争責任を問われることなく、戦争に関する被害者意識のみを残したまま、かつてアジアの諸地域を侵略したことを忘却し、「大亜細亜主義の夢」を美化するようになった。

こうしたプロセスを、まず日本国内で理解し共有していくことが、アジアにおいて「アジア主義」の意味するものを相互に相対化し理解することと共に、現在、最も重要な課題であるように思われる。そして、そのことは、恐らく、そう容易いことではない。

# 柳泰慶と『亜細亜公論』

－ 東アジア知識交流史の新たな発見

羅京洙 (早稲田大学)

## 1. はじめに

ある「無名」雑誌が長い沈黙の眠りから目覚めた。『亜細亜公論』という雑誌がそれであり、この度、後藤乾一の率いる早稲田大学研究チームによって復刻された。<sup>1</sup>

本誌は、同じく無名の朝鮮青年知識人「柳泰慶」が東京で設立した亜細亜公論社という出版社によって1922年5月に創刊された月刊誌である。しかし、本誌は翌年の1923年1月をもって廃刊となる。全9号しか発刊できなかった短命の雑誌であったため、『亜細亜公論』は(ごく一部の研究者による引用を除いて)学界にまったく知ら

---

1 後藤乾一・紀旭峰・羅京洙編『復刻版 亜細亜公論・大東公論』全3巻(龍溪書舎、2008年)がそれであり、本稿はこの復刻版に解題論文として載せられた拙稿「朝鮮知識人 柳泰慶と『亜細亜公論』—移動・交流・思想」に修正及び加筆を加えたものであることをお断りしておく。柳泰慶の人物像と『亜細亜公論』の記事に関する詳細内容は、本復刻版を参照されたい。

れておらず、社長兼主筆の柳泰慶という人物に関する学問的研究も皆無に近い。こうした「無名」の雑誌が、石橋湛山をはじめとする大正デモクラシー時代を風靡した日本の有名論客はもちろん、中国、台湾、インドなどのアジア知識人たちをもその執筆陣として確保できたことは非常に興味深い。

本稿では、これまでベールに包まれてきた知識人柳泰慶と、自ら作った雑誌『亜細亜公論』に焦点をあて、柳泰慶がどのような人物であり、『亜細亜公論』はどのような性格の雑誌であるのか、そして、彼が本誌を通じて一貫して主張する「人類主義」という思想の本質は果たしてどのようなものなのか、それらを明らかにしたい。

## 2. 知識人「柳泰慶」：その人物と活動

それでは、知識人・柳泰慶は果たして誰であり、どのような活動をしたのか。大日本帝国の植民地支配に真正面から抵抗し、内外に広く知られている金九や李承晩を筆頭とする著名な民族指導者と異なり、柳泰慶は支配と抵抗という2項対立的な歴史言説の「周辺に置かれていた人物」といえよう。そのため、氏に関する具体的な史料がほとんどないか、もしくは発掘されていない。幸いなことに、筆者は、韓国の国家報勲処や、そして柳泰慶が留学でたアメリカの大学などに所蔵されている一部の関連資料を該当機関の協力によって入手することができた。とりわけ、柳泰慶の妻である金泰恩<sup>2</sup>が国家報勲処功勲審査課に提

出した自筆証言書類は、柳泰慶の行跡をある程度把握できる貴重なものである。<sup>3</sup> 限られたこれらの入手資料に基づき、知識人・柳泰慶の足跡を「移動と交流」の観点から時代順に再構成してみる。

柳泰慶は1892年8月28日(陰暦)、平安北道寧辺に生まれる。妻の金泰恩は、柳泰慶が日本へ留学をしていたと証言する。すなわち、柳泰慶が1907年に東京の正則中学校<sup>4</sup>を卒業したという。こ

- 
- 2 柳泰慶の妻の金泰恩についても簡単に言及しておきたい。1907年6月29日生まれの彼女は夫とは15歳の差である。2人がどこでどのように出会って結婚したのかは知る限内ではないが、夫の柳泰慶が独立運動のために1938年に重慶へ移動した時は彼女も同行、移動しながら夫と味わった様々な苦労を比較的詳しく回顧している。解放の後は、ソウルに所在する豊文女子中高等学校で講師を務めたりもする。金泰恩は「夫をただ内助しただけで、何もしなかった」と謙遜する。しかし、彼女が自ら書いた自筆証言資料の文章力や言語駆使能力などを総合的に考慮すれば、当時としては相当な女性知識人であったと察することができる。
  - 3 この書類は、夫の柳泰慶が独立有功者と認められるようにするため、妻の金泰恩が1989年6月に提出したものである。同資料を国家報勲処に提出する2年前の1987年6月6日、韓国のMBC(文化放送)は柳泰慶に関する特集ニュースを編成して報じた。同報道によれば「80歳になるまでも、妻の金泰恩は夫の祖国独立運動を当然の道理と考えて周囲に一度も自慢したことがない。国家報勲処が独立有功者を探す時にもあえて申請をしなかった」という。子孫が一人もおらず淋しく生きる金泰恩は、周りの勧誘から夫の有功者認定の申請を遅れてするが、国家報勲処では「立証資料不足」の理由でその有功者認定が成り立たなかった。最近、筆者は、柳泰慶の独立有功者認否について該当機関に問い合わせをしたが、相変わらずその認定が保留された状態であったことが確認できた。こうした状況を考えれば、今回、早稲田大学研究チームによって復刻された雑誌『亜細亜公論』は柳泰慶の独立有功者認定の再審査に重要な史料の根拠になるだろう。
  - 4 当時「正則」という名前を使った東京所在の中等教育機関は2カ所があった。一つは、現在の正則学園高等学校の前身である「正則英語学校」である。前述した石橋湛山・元総理大臣が通った学校として知られている。もう一つ

の時期は柳泰慶が15歳頃である。少年泰慶が正確にいつから、どのような経緯で留学のために玄海灘を渡ったのかは不明であるが、少なくとも数年間以上の期間を東京で送ったという事実は非常に重要な意味を持つ。柳泰慶は自ら設立した出版社の社長でありながらも、「壽泉」という筆名をを使いつつ、雑誌『亜細亜公論』に合計12回にわたって積極的に文を寄せている。<sup>5</sup> 彼の高度な日本語駆使能力は他の日本人知識人の寄稿文と比べても全く遜色がないほどである。これは、やはり、少年時代に経験した東京留学という背景があったからこそ可能になったと言ってよい。柳泰慶は、流暢な日本語を武器とし、当時の日本人知識人層はもちろん、台湾や中国、インドなどから来日した数多くのアジア知識人と幅広く交流を行ったと思われる。そして、彼らとのこうした交流を、出版社の経営および雑誌の執筆陣確保のための「ネットワーク」として最大限活用したと考えられる。そういう意味から、柳泰慶はすでに日本留学の時代から帝都東京を政治活動かつ思想形成の空間として認識していたかもしれない。雑誌『亜細亜公論』が植民地宗主国の中心部である東京で誕生したことは偶然ではなかったのである。

1912年には独立運動のために中国に亡命し、青島大学に入学

---

は、吉田茂・元総理大臣を輩出した現在の「正則高等学校」である。柳泰慶がどちらの学校に通ったのかを把握するためには、今後、学籍記録の調査が必要であろう。

- 5 その主な論考としては「天職を失へる現代の新聞と記者」(1922年6月号)「林長民氏を訪ふ」(1922年9月号)「齋藤朝鮮総督と語る」(1922年10月号)「朝鮮留學生の過去及現在」(1922年11月号)などが挙げられる。

する。1914年には、日本がドイツの租借地であった青島を攻撃することになる。これによって、柳泰慶は北京へ脱出、今度は北京大学に籍を置くようになる。1918年からは満州に移動し、そこで再び独立運動を展開するが、検挙されて投獄されてしまう。

1920年に出獄した後、その活動舞台を東京に再度移す。そして、1922年にはいよいよ亜細亜公論社を設立して雑誌『亜細亜公論』を創刊するようになる。柳泰慶が30歳になる年である。しかし、すでに言及したように雑誌は翌年の1923年1月に廃刊になっており、その後、青年泰慶は渡米する。彼の渡米目的は留学であったが、実際には日本当局の執拗な懐柔と強要による「留学を口実にした亡命」と理解する。野心に満ちて推進した「出版事業」をやむを得ず断念し、アメリカへ向かう青年泰慶の心情はどうだったのであろうか。筆者は、このような柳泰慶の心を少しでも理解するため、2009年5月にアメリカを訪問し、妻の金泰恩の証言を手がかりに柳泰慶のアメリカ留学の行跡を調査してみた。柳泰慶は30代半ばの晩学徒として、ニューヨーク州のコロンビア大学(Columbia University)を経て、1928年にはペンシルバニア州のコロンビア大学(Susquehanna University)で社会科学専攻の学士号を取得する。<sup>6</sup>バージニア州のベサニー大学(Bethany College)では、高年齒の理由から「特別学生(special student)」という身分で暫く滞在する。<sup>7</sup> そうした中、兄弟の訃報を知らせを聞いて1930年に帰国することにな

---

6 Susquehanna University ed., *The 1929 LANTHORN* (1929, p. 51).

7 BETHANY COLLEGE ed., *BETHANY COLLEGE BULLETIN*, VOL. XX, NO. 2 (Marth 1927, p. 91).

る。<sup>8</sup> 筆者が氏のアメリカでの行跡を調べる際に感じたことは、彼がアメリカでは「平穏な日々」を送っていたということである。当時、アメリカでは北米朝鮮学生総会(The Korean Student Federation of North America)が組織されており、アメリカへ留学に来る朝鮮知識人たちは同組織を拠点とし、学术交流や、朝鮮の独立運動を目指すさまざまな活動を展開していた。北米朝鮮学生総会の機関紙としての役割を果たした*Korean Student Bulletin*には自分の卒業と帰国を2回程度知らせるだけで、柳泰慶は在米の朝鮮人留学生コミュニティにはほとんど登場しない。渡米後の柳泰慶は、単に学業のみに専念し、情熱的に推し進めてきた東京での「事業」失敗による失意と屈辱感に関しては不満な心を静め、満足させる自分を取り繕っていたのではないだろうか。

1930年にソウルに戻ってきては、協成実業学校の理事となる。翌1931年には中華民国東省区(ハルビン)の行政長官外交顧問に就いた。1932年の満州国建国により北京へ亡命、1938年には重慶へ移動する。解放後の1946年には韓国の慶尚南道蔚山郡守に就任、1949年には苦学生のための育英事業を展開した。妻の金泰恩が国家報勲処に提出した資料「独立有功者平生履歴書」には、柳泰慶が「6・25(朝鮮戦争)の時に家出をした」と明記されている。ところが、金泰恩の他の自筆証言資料には、「夫を亡くして悲しかった」と書いてある。ここでの「6・25の時」が朝鮮戦争の勃発した1950年を

---

8 The Committee on Friendly Relations Among Foreign Students ed., *Korean Student Bulletin*, Vol. VIII (May 1930, p. 8).

指すのか、戦争の期間である1950年から1953年までの一定時期を意味するのかは定かでない。また、戦争という混乱期に、柳泰慶が行方不明になったのか、あるいは死亡したのかについても不明のままである。1950年は、彼の年齢が58歳になる年である。以上のことが、現在、把握できる柳泰慶の生涯と行跡のすべてである。

これらの略歴を通じて得られる大きな特徴は、柳泰慶が「独立運動家としての姿」を持ったという点である。これは、妻の金泰恩が大事に保管していた夫の身分証明書からも確認できる。この身分証明書は、1945年8月、重慶にある大韓民国臨時政府が発行したもので、臨時政府の外務部長などを務めた申翼熙<sup>9</sup>の名義で発給された。柳泰慶はこの証明書を持ち、比較的自由に国境を越える移動と活動を展開することができたと考えられる。この証明書には、柳泰慶が「光復運動を多年間行ってきた(従事韓国光復運動多年)」という事実が明記されている。一方、重慶市が1945年11月6日に柳泰慶に発給した当時の外国人登録証からも、「独立運動家・柳泰慶」の側面を把握することができる。同登録証の職業欄には「光復運動者」、勤務先欄には「韓国臨時政府」と記されている。<sup>10</sup> このように1940年代の柳泰慶は1920年代とはやや異なる人物像と活動

---

9 大韓民国の国会議長をも歴任する申翼熙は、1917年に早稲田大学を卒業しており、柳泰慶とは東京ですでに知り合っていた可能性も排除できない。

10 一方、妻の金泰恩にも同様の証明書が発給されており、彼女のものにも「光復運動」と書かれている。金泰恩は単に夫の世話のみをしたのではなく、独立運動にも一定の役割と貢献をした人物として捉えられる。柳泰慶に与った金泰恩は愛する「妻」であると同時に、思想と運動を共にした「同志」でもあったに違いない。

ぶりを見せている。1922年に発刊された雑誌『亜細亜公論』の中に映っている柳泰慶の姿は、もちろん反帝国主義と反植民地主義を主張はするものの、民族主義者や独立運動家としての色はそれほど浮き出ていないというのが筆者の見解である。これに比べて、1930年代、1940年代になるにつれ、朝鮮独立運動に関する柳泰慶の「積極性」はより強まっていくのである。内外弘報社が1949年に刊行した『大韓民国人事録』の中でも、柳泰慶のこうした「姿の変化」を見ることができる。同人事録の発刊の辞には、「世界のあらゆる所に亡命し、国家無き民族の悲しみを感じつつ限りない放浪生活をしながらも、絶えず祖国光復にすべての精力を注いできた民族先輩たちの愛国精神！……あらゆる迫害と混乱期の生活苦にも屈せず、単に祖国自立独立のために奮闘・献身してきた政治、経済、文化、教育などの各界各層の愛国同志たち！」という文句がある。柳泰慶もその「先輩」と「同志」の一員として同人事録に名が刻まれている。さらに、同人事録には、柳泰慶が「重慶の中国軍の後援によって金九氏とは共生共死を共にすると誓った」<sup>11</sup>と紹介されている。大韓民国建国人物要覧の人事録にも載せられるほどの柳泰慶は、1945年の解放前後までは「独立運動家」として、世間にある程度知られていた人物であることがわかる。しかし、その後、柳泰慶の存在は徐々に薄れていき、現在はほとんど「忘れられた独立運動家」となってしまった。

前述した略歴事項を基に、柳泰慶が出生から死亡(あるいは行方

---

11 内外弘報社編『大韓民国人事録』(1949年、100頁)。

不明)まで約60年間歩んできた「移動の経路」をまとめると、朝鮮、東京、青島、北京、満州、東京、アメリカ、朝鮮、ハルビン、北京、重慶、朝鮮のような流れである。柳泰慶が比較的短いサイクルで、国境を越える国際的移動を絶えず繰り返していたことがうかがえる。その移動先についても、朝鮮、日本、中国、アメリカなど、多様で広範囲な国家・地域であった。柳泰慶はこうした国際移動を経験しながら、植民地支配下に置かれている民族の現状に悩んでいたに違いない。一方、各地のさまざまな知識人と文化とも接触しつつ、見聞と識見を深め、「国際派知識人」としての姿を持つことができたと考えられる。柳泰慶の国境を越える移動と民族を超える交流は自らの意志によるものでもあるが、他方では、当時、柳泰慶が置かれた時代状況と環境による側面も無視できない。

このように移動と越境の人生を歩んできた柳泰慶は、まさに「ディアスポラ知識人」の典型的な例ともいえる。ディアスポラを、内外的な要因によって本来の故郷と母国から離れざるを得なくなった人々とその民族集団と規定した場合、離散者として辛い経験をしたこれらのディアスポラは母国もしくは他国の体制の中に存在する人々とは似て非なるアイデンティティが形成される。とくに、ディアスポラ知識人の場合は、その思想形成において、こうした独特の境界人アイデンティティがより顕著である。国際移動と知識交流を多様に経験した柳泰慶の離散者的な人生は、「民族主義」と「人類主義」というやや相反する価値の間で苦悩する氏の思想形成に大きな影響を及ぼしたのである。

豊富な国際経験を積んできた柳泰慶は、非常に洗練された知識人の姿をしている。前述した柳泰慶の身分証明書と外国人登録証には、小さなサイズではあるが本人の顔写真が貼ってある。関連資料がきわめて少ない中、この写真は柳泰慶の外見とイメージを把握できる貴重な資料である。いつ撮った写真なのかは正確に判断できないが、証明書と登録証が1945年に発給されたことから、柳泰慶が50代半ば頃であった時のものであると推定できる。<sup>12</sup> これとは別に、柳泰慶が30代半ばに撮ったと思われる写真をサスケエハナ大学から入手できた。上の<資料1>がそれである。



[資料1] 30代半ば頃の柳泰慶

出典：Blough-Weis Library Archives,  
Susquehanna University

この両写真からは、青壮年時代の柳泰慶がいかなる姿をしていたかがある程度想像できる。興味深いことに、これら両写真の中の柳泰慶は眼鏡を掛けていた点である。眼鏡をかけている柳泰慶の姿は知的なイメージを強く漂わせており、顔付きもまた非常に美男子で、相手に好感を与える印象である。これら写真を通じ、柳泰慶が植民地時代の中等教育以上を受けた「インテリ」であった

---

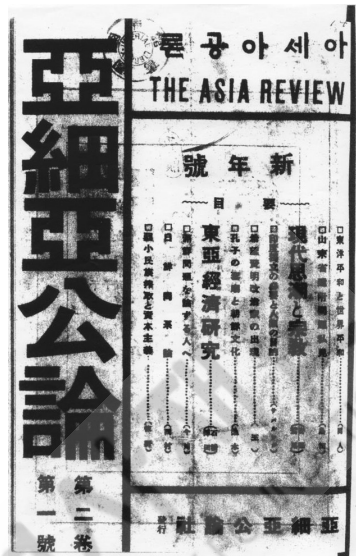
12 同写真は、冒頭で述べた復刻版の中の拙論に掲載してあるため、それを参照されたい。

ことが容易にうかがわせる。植民地宗主国・日本のオピニオンリーダーはもちろん、当時、東京に来ていたアジア知識人との交流を深めるのに、彼らを雑誌『亜細亜公論』の執筆者とする過程で、知を兼備した彼の容貌は相当な魅力となったに違いない。

### 3. 雑誌『亜細亜公論』：東アジア知識人の交流空間

ここでは、国際派インテリの柳泰慶が発刊した月刊紙『亜細亜公論』について論じたい。まず、本誌の持つ形式的な特徴の一つは、何よりも編集上の「破格」である。帝都東京という空間的特殊性があったにもかかわらず、日本語を中心としつつも、朝鮮語と中国語も併用しようとした大胆な編集が目立つ。たとえば、本誌はその表題として、「亜細亜公論/THE ASIA REVIEW/아시아공론」という3言語を同時に表記した号もあり、毎号のように表紙のデザインにかなりの変化を与えている。以下の<資料2>は本誌の創刊号(1922年5月)と最終号(1923年1月)の表紙で、上述した編集上の破格性と変化を一目で分かる。表紙のデザインをなかなか変えない出版業界の常識と慣行を、零細な一出版社が大胆に破ったことは、当時にしては破格そのものに他ならない。

もう一つの大きな特徴としては、優れた事業手腕が挙げられる。『亜細亜公論』には数多くの広告が掲載されている。100ページを超える毎号において、雑誌の導入部と後半部の数ページはさ



[資料2] 『亞細亞公論』の創刊号と最終号

さまざまな企業の広告で占められている。とりわけ、朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行、台湾銀行、東洋拓殖株式会社など、当時の代表的な国策企業の広告が頻繁に登場しているが、これらの広告は知識人・柳泰慶が志向する思想とは相反する点で興味深い。他の有名雑誌に比べて認知度の低い無名誌がどのようにして大企業の広告をこれほど多く獲得し雑誌に載せられたのだろうか。これは、やはり、社長・柳泰慶の人的ネットワークが大きな役割を果たしたと考えられる。言い換えれば、亜細亞公論社の社長・柳泰慶は、当時、政財界などに相当な人脈を構築していたことが読み取れる。1冊50銭の雑誌のみを売っては零細な出版社を維持できないことを誰よりもよく知っていた柳泰慶は、雑誌の持つ思想とは多少衝突しても出版社の経営に自分自身の人的ネットワークを最大限活

用したと思われる。

次に、雑誌の内容を見てたい。本誌は、基本的に思想誌の性格が強い総合雑誌として分類できる。なぜなら、本誌は、「人類主義」をその思想的スローガンとして掲げ、「アジア諸民族の覚醒と弱小民族の解放」をその具体的な実践目標としているからである。これを裏づけているかのように、創刊号と1922年6月号の表紙には「人類主義」という文字が大きく書かれている。また、地球儀を背景に人と人が握手をしているイラストも刻み、雑誌が追い求める思想と性格を明確に伝えようとした。<sup>13</sup> 当時の『東亜日報』もその新刊紹介欄に、「朝鮮青年の柳泰慶氏を主幹とし、中国、台湾、朝鮮、日本などの青年論客が参加しており、その趣旨はアジア諸民族の覚醒を促し、弱小民族の解放を追求することにある」<sup>14</sup> として、本誌の創刊を比較的詳細に知らせている。このように主義主張がはっきりしている『亜細亜公論』ではあったが、執筆者として参加した人々の面々と思想も比較的多様であったことから、さまざまな方面からの主題が寄せられた。社長・柳泰慶が朝鮮青年であっても、朝鮮関連の記事が必ずしも多いわけではなかった。紙幅上、ここでは教育、宗教、文学を中心に論じる。

第1に、「教育」に関して亜細亜公論社は、出版事業のみならず、教育問題にも多大な関心を示した。来日した朝鮮人留学生だけでなく、台湾や中国などからのアジア留学生についても関心を

---

13 どういう理由からか、1922年7月号よりはそのようなスローガンとイラストが表紙から消える。

14 『東亜日報』(1922年7月27日付)。

注いだ。垂細垂公論社が具体的にどのような教育事業を展開したのかは不明であるが、雑誌の毎号には「本社の事業」という留学生関連の特別欄を設け、その詳細な事業内容として、①實費留学生寄宿舎の設立、②留学生の愁情を慰撫する目的にて運動會、音樂會、講演會、演說會、展覽會、活動寫眞會等を開く、③必要品の實費提供、必要に應じ雑誌無代配布、④國情の相違等にて刑事上の問題に觸れた場合又は、病氣、天災等にて困窮せる場合には之れが相談相手となるべきこと、⑤有益なる圖書出版、などの5つが紹介されている。

留学生への格別な関心は、『垂細垂公論』の内容にもそのまま反映される。雑誌の本文には留学生関連の内容がいくつも登場する。たとえば、創刊号には「1922年度在日本朝鮮留學生各學校卒業生一覽」<sup>15</sup>という統計資料が掲載されている。この資料の具体的な出典は明記されていないが、卒業生名と出身校名(小中学校・専門学校・大学)が含まれている。合計87人の卒業生のうち、女子学生は12人しかいなかった。官費留学生は10人で、私費留学生が圧倒的に多かった。そして、専門学校と大学の卒業生が67人で、小中学校の卒業生より遥かに多かった。1922年10月号に載せられた「留日本朝鮮學生統計表人員」<sup>16</sup>という資料には留学生の出身地まで明記されている。1922年現在、日本における朝鮮人留学生の数は2235人であったことが把握できる。一方、1922年の6月号と12月号には、

---

15 『垂細垂公論』(創刊号、1922年5月、117~119頁)。

16 『垂細垂公論』(創刊号、1922年12月、24~35頁)。

それぞれ「1922年度中華民國留學生卒業生一覽表」と「留日本國民學生人員」という中国人留學生の統計資料も掲載し、朝鮮人留學生の規模と比較できるようにした。

前述した「本社の事業」からも分かるように、亜細亜公論社は、当時の留學生たちが抱えていた生活上の困難や民族的差別問題などを的確に把握し、それを雑誌『亜細亜公論』の誌面を借りて問題提起している。たとえば、「東京女高師教授の教育差別」と題した論考では、教育現場で苦勞する留學生の声を生々しく伝えている。教育には国境が無いにもかかわらず、東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）の某教授が日本人學生たちと違って朝鮮人と中国人の留學生を無視していることを強く批判しつつ、その教授の反省を要求している。<sup>17</sup>

それでは、なぜ亜細亜公論社は留學生たちにこれほど関心を持ち、その関連事業を展開しようとしたのか。その理由として、まず場所のことが考えられる。雑誌の奥付を確認すると、1922年11月号からはその住所が「東京牛込區早稲田鶴卷町214」へと変わっており、この時期を前後に移転したと推定できる。新しく移転した「鶴卷町」というところは早稲田大学から至近距離にある。そのため、留學生との接触が非常に容易であったことが考えられるし、<sup>18</sup> 実際にも本誌の執筆者の中には早稲田大学の関係者が相当数

---

17 『亜細亜公論』（創刊号、1922年5月、133～134頁）。

18 1919年までに早稲田大学を卒業した朝鮮人留學生は約100人である。学業を途中で辞めた人々を含めば、約300人の學生が同大学で修学したのである。『亜細亜公論』の創刊を前後して、数多くの朝鮮人留學生が早稲田大学に

含まれている。石橋湛山、永井柳太郎、杉森孝次郎、三浦鍬太郎、高辻秀宣、大山郁夫、西村眞次、坂本義雄、坂本哲郎、武藤直治などは早大を卒業しており、佐野學と安部磯雄などは同大学で教鞭をとっていた。これらの人々の多くは雑誌『亜細亜公論』に頻繁に文を寄せる「常連」であった。亜細亜公論社の社長・柳泰慶は、自分自身が標榜する「人類主義」という思想と、「学問の自由と反骨精神」に代表される早稲田大学の学風が相通じると判断、同大学関係者とは積極的に「縁」を結ぼうとしたのではないか。すなわち、早稲田は、青年泰慶の思想を具現するために無くてはならない大事な「場」であったのである。

他方、在日本東京朝鮮留學生学友会の機関誌であった雑誌『學之光』は、朝鮮人留學生の求心点の役割を果たしたことはすでによく知られている事実である。この雑誌は、『亜細亜公論』が創刊される遙か前の1914年に創刊され、1930年に廃刊となった。『亜細亜公論』が創刊される直前の1920年7月刊の『學之光』を見てみると、その住所が「早稲田鶴巻町62、朝鮮物産商會内」となっている。亜細亜公論社とは同じ町内である。朝鮮人留學生たち(とくに早大留學生)の手によって運営された學之光社と、後発走者の亜細亜公論社が互いに緊密な関係を維持していた可能性は非常に高い。しかし、雑誌『學之光』がすでに学界で多くの注目を浴びているのに対し、雑誌『亜細亜公論』は正反対で、両誌が対照的なコントラス

---

通っていたことが分かる。早稲田大学ウリ同窓会編『韓国留學生運動史—早稲田大学ウリ同窓会70年史』(1976年)を参照。

トを成す。

垂細垂公論社が教育問題に関心を示したもう一つの理由として、社長の柳泰慶自らが留学生に対して特別な愛情を持っていた点が考えられる。前述のように、少年時代、東京で中学生としての生活を送ったことや、長期間にわたって国境を行き来する多様な留学生生活を経験した自分であったため、留学生の生活と悩みを誰よりもよく理解していたに違いない。<sup>19</sup> 柳泰慶は、1922年11月号に「朝鮮留學生の過去及現在」という論文を寄せている。同論文では、日本における朝鮮人留學生の由来、韓国併合と3・1独立運動前後の動静、当時の留學生団体及びその機関紙、留學生の思想的変遷などについて具体的な統計と人名などを取り上げながら詳しく論じている。(日本当局による削除部分があるが)合わせて10ページも割いて書かれた柳泰慶の同論文は、彼の留學生への思いと認識や、その専門性を把握できると同時に、当時の朝鮮人留學生に関する研究の観点からもきわめて有益な資料である。

第2に、「宗教」と関連し、雑誌『垂細垂公論』の毎号には、ハトとイエス=キリストのイラストがあらゆる所に登場しているのが目に付く。平和を象徴するハトは本誌の思想である「人類主義」を表現するためのものと理解できる。では、頻繁に出てくるイエ

---

19 一方、雑誌廃刊の後、柳泰慶が留学したアメリカのサスケハナ大学の学籍記録には彼が早稲田大学でも修学したという簡単な記録が残っている。柳泰慶が早大を正式に卒業したのか、あるいは聴講生程度であったのかについては綿密な学籍調査が必要であるが、同記録や当時の情況から見て、彼が何らかの形で早稲田大学に「籍」を置いた可能性は排除できない。

スのイラストはどう解釈すればよいのか。このイエスのイラストは、『亜細亜公論』がまるで宗教誌ではないかという錯覚と違和感を抱かせる。

宗教との接点を物語るかのように、本誌には、キリスト教や他の宗教関係者の論考がいくつか収録されている。例えば、日本の救世軍の創始者と知られる山室軍平は「弱者の友としての基督」(1922年6月号、一部削除あり)という論考を、キリスト教の人道主義に基づき社会主義運動を展開した安部磯雄は「現代思想と宗教」(1923年新年号)という論文を寄せている。キリスト教のみならず、仏教関連の論文も載せられた。李晦光は「朝鮮佛教界の現状打破」と題した論文を通じ、現実社会とはかけ離れている朝鮮仏教界の無事安逸主義的消極性を厳しく批判しつつ、その覚醒を促している。

1922年12月号では、「亜細亜に於ける宗教問題」という特集欄が生まれ、宗教の視点から当時のアジアを問い直そうとした。前述したイエスのイラストが冒頭に飾られている同特集には、「印度における自治運動と宗教」(武田豊4郎)、「宗教問題の歸趨と亜細亜」(帆足理一郎)、「現今の宗教問題と朝鮮の佛教」(鷲尾順敬)、「朝鮮基督教の今昔」(崔夢齋)の4論文が掲載されている。いずれの論考も、当時の時代的背景のなかで、それぞれの宗教がアジアの民衆たちに果たすべき役割と使命を強調している。とくに、仏教史学者である鷲尾順敬の論文は、当時の「日本には宗教がない」と日本人の宗教観は批判しつつも、「朝鮮には民衆の仏教がある」と朝鮮人の宗教はやや肯定的に捉える比較と分析は興味を引くものである。<sup>20</sup>最後の崔夢齋の論文では、朝鮮におけるキリスト教会の起源、迫

害の歴史、関連人物、そして、キリスト教各派及びその信者数を  
含む統計などが詳しく述べられており、当時の宗教研究を行う上  
でもその史料価値はきわめて高い。

柳泰慶が宗教を信じていたか、そうであるなら、どのような宗  
教を信じたのかは検証の余地がある。しかし、彼が雑誌『亜細亞  
公論』を通して一貫して主張する「人類主義」という思想は、キリ  
スト教の博愛主義と相通じるところが多い。これを勘案すれば、  
柳泰慶が何らかの形で比較的早い時期からキリスト教の影響を強  
く受けていた可能性が高い。能勢岩吉は、創刊号に「柳壽泉君に  
與ふ」という文を寄せている。能勢は、危機に陥ったアジアの諸  
民族と全人類をどう救えるのかを悩む柳泰慶を高く評価している。  
そして、雑誌『亜細亞公論』についても、危機が迫ったのも知らず  
に眠っている人類を起こすためにその思想的警鐘を鳴らす「宣伝  
機関」と言及する。これに加え、能勢は、柳泰慶を「熱烈なキリス  
ト信者」であると明かす。神様が、柳泰慶に命をかけて人類主義  
を主唱し、正義と人道と人類平等を絶叫する力を与えたという。<sup>21</sup>  
柳泰慶がキリスト教信者であったことは、雑誌の廃刊後に持った  
アメリカ留学生活からも判断できる。すなわち、前述したように、  
柳泰慶は当時の朝鮮人留学生がほとんど選ばなかった名の無い「田  
舎」大学であるサスクエハナ大学とベサニー大学に在学する。こ  
の2大学は小さいとはいえ、長き歴史を有するミッション系大学

---

20 『亜細亞公論』（1922年12月、13頁）。

21 『亜細亞公論』（1922年5月、148～150頁）。

であり、とくにサスクエハナ大学では柳泰慶がYMCAの活動をも行った。<sup>22</sup>

このように柳泰慶は宗教と思想の密接な関係性に着目し、キリスト教の博愛主義に自分の「人類主義」思想をオーバーラップさせようとしたのではないだろうか。さらに、そうした自らの思想的信念を実践するための手段として、『亜細亜公論』という民族と国家を超えた「普遍的雑誌」(borderless journal)を作ろうとしたのではないか。

第3に、「文学」と関連して、『亜細亜公論』は論文や評論だけでなく、雑誌の後半部には必ず何本かの文学作品も掲載するなど、一種の文芸誌としての機能も果たしていた。ジャンルにおいても短編小説、詩、翻訳作品に至るまでさまざまである。柳泰慶自身も、数回にわたって中国清代の怪談小説である『聊齋志異』を和訳して載せた「文学青年」である。彼の文学的才能と共に、その中国語能力も日本語のように優れていたことがうかがえる。

『亜細亜公論』に文学作品を比較的多く寄せていた文学者には、坂本哲郎、能勢岩吉、高辻秀宣、金熙明などがいる。雑誌に載った文学作品の大筋は、1920年代の当時に流行した社会主義思想とアナキズムの影響を多く受け、反帝国主義と反資本主義の性格が強い。もちろん、中には文学性の優れた作品もある。1922年7月号に発表された能勢岩吉の「大同江夜話」という作品がそうである。この作品は、ある日本人男性が平壤で朝鮮人女性と一夜を過ごす

---

22 Susquehanna University ed., *The 1929 LANTHORN*, 1929, p. 51.

体験談を描いたもので、この日本人男性は朝鮮と朝鮮人に対する偏見を持つ「内地人」であった。<sup>23</sup> しかし、朝鮮人女性の惨めな人生の話を聞き、男性は多くのことを悟って平壤を去る。「あいつ（朝鮮人女性）の父は日本の鑛山人夫として地獄のやうな監獄部屋に叩き込まれて、追ひ立てられるやうにして使はれてゐるのだ。そしてあいつの兄は獨立運動者として海外に亡命にしてゐるのだ。あとに残つたあいつは…… あいつは斯うした淫樂の巷に身を賣つて生活してゐるのだ」<sup>24</sup>と、男性は伝える。日本の植民地支配下に置かれた当時の朝鮮人ディアスポラ（離散者）の悲惨な「自画像」を内地人の目から描いた文学性豊かな作品である。

さらに、文学との関連で「金熙明」という人物に注目したい。彼は、『亜細亜公論』に「詩調」（1922年10月号）と「平壤感別曲」（1923年新年号）の2点を寄せている。これらの2作品は朝鮮の作品を和訳したものである。翻訳作品ではあるが、この両作品は金熙明が日本で発表した処女作と評価されている。朴庚守の研究によれば、<sup>25</sup> 金熙明は1917年に来日する。1922年から1927年までに日本大学専門部社会科に在籍し、在学時には社会科学研究会の会員として活動しながら社会主義思想の影響を受ける。1928年には東京府の嘱託職員として就職し、それ以降は社会事業運動へと方向を変更、

---

23 『亜細亜公論』（1922年7月、74頁）。

24 『亜細亜公論』（1922年7月、82頁）。

25 朴庚守「日帝下における在日文学人金熙明の反帝国主義文学運動の研究―彼の詩と文学評論を中心に」（日本語学会編『日本語文学』第37輯、2007年5月、295～298頁）。

既存の急進的なプロレタリア文学の活動は展開しなくなる。東京府での経歴は、その後、「金光史朗」と創氏改名する金熙明が「親日派」と呼ばれてしまう契機となる。金熙明の初期作品には、当代の現実を悲観的に認識し、自暴自棄の心情が現われている。しかし、後期になるにつれ、歴史的現実を批判的に省察することにより、それを克服しようとする意思と信念が強く現れている。雑誌の創刊当時、柳泰慶は金熙明より11歳年上であった。亜細亜公論社社長・柳泰慶は、同じ朝鮮から来た若き文学青年・金熙明の、反帝国主義に基づく急進的な文学理念を高く評価し、彼に作品発表の機会を提供していたのである。

以上の内容以外にも、看過してしまうには惜しい論考が『亜細亜公論』には多く収録されている。本誌の執筆者たちの多くが当時を飾った著名人であったため、彼らに関する人物研究も多く為されてきた。しかし、『亜細亜公論』に載った彼らの論考がその研究対象になったことは皆無に近い。このように史料価値が大きいにもかかわらず、本誌がそれだけ我々の記憶から「忘却された雑誌」であることを物語る。<sup>26</sup> 紙面の関係でいちいち挙げられないが、その中でとくに筆者の関心を引いた人物と論考を以下に紹介しておきたい。

まず、日本に亡命し、カレーライスを伝授したことで知られるインド知識人のラース=ビハーリ=ボース (Rash Behari Bose) を挙げ

---

26 後藤乾一「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』—その史的意味と時代背景」(『アジア太平洋討究』第12号、2009年、161頁)。

ることができる。ボースは、「インドの現状とその非暴行的独立運動に就て」(1922年8月号)、「新文明の誕生」(同年10月号)、「世界大戦の責任者」(同年12月号)、「アフガニスタンに就いて」(1923年新年号、本文欠落)という4論文を『亜細亜公論』に寄稿している。何回も文を寄せられたことから、ボースが亜細亜公論社社長の柳泰慶とは非常に緊密な人間関係を築いていたことがわかる。これらのボースの論考は、既存の先行研究ではほとんど紹介されていない。<sup>27</sup>

次に、西村眞次という人物である。早稲田大学を卒業して同大学で教鞭をとった歴史人類学者の西村は、「日鮮同系論」(1923年新年号)という興味深い論文を寄せている。つまり、西村は、体質人類学的な観察と具体的な数式を提示した上で、「日本人が混血民衆であるやうに、朝鮮人もた混血民衆」と述べ、日本人と朝鮮人の両民衆は体質において大差のない同一系統であることを主張する。単に、「朝鮮民衆は他種族との血液混へた量が、日本民衆よりも少かったといふことが仮定せられる。日本民衆と朝鮮民衆の混血量の差は、先づ六と三との割合ぐらみに見てよからうと思ふ」と説明している。<sup>28</sup> こうした西村の主張は、大日本帝国の植民地支配に対抗する強力な論理として作用した朝鮮人の「単一民族」という不変の神話に真っ向から反する。そのため、これに対する当時の朝鮮人読者たちの反応が気になる。西村は、文化人類学の観点から見た自分自身の「日鮮同源論」を『亜細亜公論』に続けて寄稿する

---

27 後藤乾一「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』—その史的意味と時代背景」(『アジア太平洋討究』第12号、2009年、161頁)。

28 『亜細亜公論』(1923年1月、43~46頁)。

と予告しているが、雑誌の廃刊とともに、彼の論理展開をそれ以上確認することはできなくなった。

以上のような雑誌『亜細亜公論』は、結局のところ、創刊の翌年である1923年1月の新年号をもって廃刊となる。創刊から廃刊までの9ヵ月間に全9号を発刊することで、30歳の若き朝鮮青年の野心に満ちた出版事業は幕を下ろすことになる。帝国主義や植民地主義に反するような記事内容はその一部が削除を余儀なくされることはもちろん、はなはだしくは販売禁止処分まで受けるなど、『亜細亜公論』は当時の当局による執拗な統制と監視を受けていた。社会文化の全般における自由主義思潮の影響によって、出版ジャーナリズムが飛躍的に発展し、また、「言論の自由」が盛んに謳われた大正デモクラシー時代に逆らうような言論弾圧であった。たとえば、当時、『東洋経済新報』の主筆を歴任した三浦鍬太郎は、『亜細亜公論』の1922年6月号に「朝鮮に自治を與ふべし」という論考を寄せ、一日も早く朝鮮民族に自治を与えるべきであると強く主張する。三浦のこの論考が当時の日本当局を刺激したのは当然の事で、結局は本文内容の半分ほどが削除されてしまう。

このように日本当局は、柳泰慶を植民統治行為の邪魔になる「不逞鮮人」と、そして『亜細亜公論』を「不逞雑誌」と認識していたのである。こうした日本当局による弾圧は、『亜細亜公論』が廃刊に追い込まれる決定的な契機となった。雑誌の廃刊後、青年泰慶は直ちに渡米する。

#### 4. 『大東公論』という雑誌

1923年7月1日、『大東公論』という雑誌が東京で創刊される。筆者は、この雑誌が『亜細亜公論』を改題した後続雑誌であるという情報<sup>29</sup>を手がかりとし、雑誌の入手を試みた。幸いなことに、東京所在の財団法人・大宅壮一文庫がその創刊号のみを所蔵していた。本誌の創刊号は、その全般的な編集スタイルが驚くほど『亜細亜公論』のそれと似ている。両雑誌を簡単に比較してみると、次のとおりである。

まず、雑誌の編集形式である。本誌の表紙には「大東公論」という表題と共に、*THE ORIENT REVIEW*という英文タイトル、そして「社会主義者檢舉批判號」というやや過激な特集欄の題名が明記されている。『亜細亜公論』の「亜細亜」が「大東」へ、そして、*THE ASIA REVIEW*の‘ASIA’が‘ORIENT’へ変わっただけである。『亜細亜公論』が「人類主義」をそのスローガンとして標榜していたが、『大東公論』は巻頭言で「人類幸福」という用語を掲げている。広告欄においても、両雑誌はほぼ同様であった。『亜細亜公論』に掲載された朝鮮銀行や、朝鮮殖産銀行、台湾銀行などの国策企業の広告が『大東公論』にもそのまま載せられている。但し、『亜細亜公論』に頻繁に登場していたイエスのイラストは見当たらない。亜細亜公論社が大きな関心を寄せた留学生関連の事業も、大東公論社はより積極的に行っている。大東公論社は社内に苦学生職業紹介部

---

29 独立運動史編纂委員会編『独立運動史資料集別集』3(1978年、25~27頁)。

と案内部を置き、留学生の職業相談と宿舎紹介などの事業を展開していることが分かる。両雑誌の異なる点を挙げるなら、その住所が早稲田大学付近ではなく、「東京市4谷區新宿2ノ75」へ変わっており、その発行人も「林漢洙」という人物に変わった程度である。

次に、雑誌の内容である。

『亜細亜公論』の執筆者として加わった人物の何人かが『大

東公論』(創刊号)にも再登場することは、注目すべき点である。坂本哲郎、新居格、布施辰治、金熙明、金琴湖、高辻秀宣などがそうである。前述したインド知識人のボースも再び登場し、論考「印度の現状と使命」を寄せている。『亜細亜公論』廃刊後の6ヵ月という空白期を経て『大東公論』が誕生するが、既存の執筆陣とのネットワークはそのまま維持されていたのである。『大東公論』も同じく日本当局の厳しい検閲を受けており、創刊号を見てもその一部内容が削られていることが確認できた。一方、『亜細亜公論』を創刊した柳泰慶は、『大東公論』には全く登場しない。彼は渡米して「不在中」だったからである。

雑誌『大東公論』の創刊号のみを発掘・分析しただけで、本誌が『亜細亜公論』の後継誌であると断定するには依然として異論の



[資料3] 『大東公論』の創刊号

余地がある。しかし、上述した編集上の形式と内容の類似性を考えると、『大東公論』は『亜細亜公論』から相当の影響を受けていたことは否定できない。<sup>30</sup>

## 5. おわりに

以上、学界にほとんど知られていない朝鮮知識人の柳泰慶と、彼の作った雑誌『亜細亜公論』をいくつかの視点からこれらの考察を通じ。

考察を通じ、知識人・柳泰慶は、思想家であると同時に、教育者、文学者、翻訳家、経営者、政治家、研究者、ジャーナリスト、そして宗教人などの「多彩な顔」を持つ人物であったことが明らかになった。さらに、『亜細亜公論』に注がれている柳泰慶の「人類主義」という思想は、雑誌全体の論調と彼の活動内容を考慮すると、当時の大日本帝国がその秩序再編の核になろうとし、覇権主義的な侵略性を内在する「アジア主義」と戦時期「大東亜共栄圏」の思想論理とは一線を画しているものとして考えられる。柳泰慶は、植民地支配下に置かれた民族の明日を心配する「民族主義者」でありながらも、他方では自らの信念と思想に基づいて国際的普遍性を志した「人類主義者」であった。

---

30 両誌のこうした類似性を考慮し、本稿の導入部で紹介した『亜細亜公論』の復刻版には『大東公論』の創刊号も含めた。

無名の朝鮮青年知識人の、国家と民族を超える「メディア」を通じた思想運動は結局「不完全燃焼」で終わってしまうが、当時を生きた東アジア知識人が互いに疎通できる共同の言論空間を作ろうとしたという点は示唆するところが大きい。最後に、本稿が「東アジア知識交流史」に関する新しい事例研究になると共に、これまで正当に評価されてこなかった知識人柳泰慶と雑誌『亜細亜公論』を再評価する研究の「出発点」になることを期待する。

# 大正期在京台湾人留学生 とアジア

－ 雑誌『亜細亜公論』を手がかりとして

紀旭峰 (早稲田大学)

## 1. はじめに

本稿は、『亜細亜公論 (THE ASIA KUNGLUN)』を通じて、大正期在京台湾人留学生<sup>1</sup>の「知の構築」と彼らのアジア観を考察するものである。大正期の台湾人留学生を対象として検証する理由は大きく2つ挙げられる。第1に、当時の「内地日本高等教育機関」、とりわけ私立大学専門部は近代台湾の文化・政治・民族運動の担い手を多く輩出したのである。<sup>2</sup> 第2に、アジア知識人の連携の一具現である『亜細亜公論』を通じて、当時在京台湾知識人のアジア認識を垣間見ることが可能であるためである。

1 1932年(昭和7)に、台湾人留学生が「内地在学者」に改称されるまでは、「内地日本」に進学する台湾人は「留学生」として取り扱われていた。

2 在京台湾人留学生について、矢内原忠雄は次のように指摘した。「専制政治国に反抗する政治運動はまず国外において組織されることが通常であり、台湾について民族運動の先駆者は東京留学生の団であった」という。矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』(岩波書店、1934年、243頁)。

さて、明治期・昭和期に比べれば、大正期は15年という短期間であったため、明治期と昭和期をつなぐ過渡期というような見方も少なからず存在するが、その反面、こうした過渡期があったからこそ、多様な思想が共存できたという解釈もできるであろう。<sup>3</sup> 大正デモクラシーの最盛期を迎えた日本では、自由主義・人類主義思想のみならず、社会主義・マルクス主義思想なども台頭し、さまざまな思想が咲き乱れる中、アジアの現在・将来をめぐることも頻繁に論じられるようになった。こうした中、『東方時論』（1916年（大正5）9月創刊）と『亜細亜時論』（1917年（大正6）7月、黒龍会機関誌『黒龍』から改題）をはじめ、アジアを大きなテーマとして取り扱う機関誌も相次いで創刊された。

そして、1922年（大正11）5月にいままでに例のない、「一機関誌中に3言語が混在する」といった雑誌『亜細亜公論』が出現した。したがってこの雑誌は、「中日朝3文体にして亜細亜各国名士淑女の意見を発表すると同時に東京に遊学する各国留学生の事情を掲載し且つ一般の政経、外交、教育、宗教、社会、労働、女子界、文芸、其他各種掲載」<sup>4</sup>するという画期的な発想をもった朝鮮人柳泰慶（壽泉）<sup>5</sup>の手によって創刊された総合月刊誌であった（傍線は筆者）。

---

3 大正デモクラシーについて、信夫清三郎『大正デモクラシー史Ⅰ～Ⅲ』（日本評論社、1954年）、太田雅夫『増補大正デモクラシー研究—知識人の思想と運動』（新泉社、1990年）、三谷太郎『新版大正デモクラシー論—吉野作造の時代』（東京大学出版会、1995年）などを参照されたい。

4 「社告」（『亜細亜公論』第1巻創刊号（5月号）、1922年）。

5 柳泰慶は、「本名で壽泉は雅號ですが同氏曾て民國北京に留學の時大陸的に彼の有名な亜太應別宮の所在地なる萬壽山と玉泉山を見てその中文字を採

そこで、蔡培火、林呈祿、王敏川、黄呈聡等在京台湾人は<sup>6</sup>、一部の日本知識人、とりわけキリスト教系知識人の理解と協力を得て、月刊誌『台湾青年』<sup>7</sup>の発行および台湾議會設置請願運動<sup>8</sup>の推進に取り組むと同時に、鄭泰玉(泰信)、柳泰慶などの在京朝鮮人との連携を図った結果、『青年朝鮮』、『亜細亜公論』に論考を発表する機会を得ることができた。実のところ、『亜細亜公論』に寄稿した台湾人は少なかったが、執筆者の殆どは日本留学経験者であったことに加え、彼らの論説は「内台差別待遇の撤廃」とどまらず、国際的排日<sup>9</sup>をはじめアジア全体の問題にも目が向けられていた。

---

つて附けた」のである。「読者と記者」(『亜細亜公論』第1巻第6号(10月号)、1922年、63頁)。柳泰慶は1923(大正)「12年6月20日亜細亜公論ヲ蔡鴻錫外3名讓渡シ米、独、佛、伊ノ經濟状態視察ヲナストシテ横浜港出發米国ニ向ヒタリ」という(『特高警察関係資料集成』第32巻、不2出版、2004年、131頁)。なお『亜細亜公論』の後継誌と見なされる『大東公論』(1923年7月創刊)については、「要視察朝鮮人要覽(大正13年9月調)『権熙国』」には、次のような記述がある。「在京中モ中華民國基督教青年会ニ出入12年3月柳泰慶ヨリ亜細亜公論ヲ讓受ケ同志ト共ニ大東公論ト題シ全年7月発行ス(后資金ノ干係ニテ休刊)」という。「政治運動系要視察朝鮮人権熙国」(146頁)。

- 6 林呈祿と蔡培火の日本留学は大正前期である。これに対し、黄呈聡、王敏川、黄朝琴等は大正後期であった。
- 7 『台湾青年』とは1920年(大正9)7月に創刊した新民会および台湾青年会の機関誌である。1922年(大正11)4月号から、『台湾』(THE FORMOSA)に改題した。台湾総督府警務局『台湾社会運動史』復刻版(初出：『台湾総督府警察沿革誌』第2編領台以後の治安状況 中巻、1939年、龍溪書舎、1973年、28~31頁)。
- 8 台湾議會設置請願運動とは、1921年(大正10)1月から1934年(昭和9)2月まで、15回に亘る本島台湾政治運動である。台湾総督府警務局『台湾社会運動史』復刻版(初出：『台湾総督府警察沿革誌』第2編領台以後の治安状況 中巻、1939年)龍溪書舎、1973年、315~404頁。
- 9 国際的排日の系譜は、坂口満宏「アメリカにおける排日問題と日本人キリス

本稿では、大正期台湾人留学生、とりわけ台湾人の多くが在籍していた早稲田大学専門部政治経済科に着目しつつ、在京台湾人の「知の実践」・「人の交流」を考察し、あわせてアジアに対する彼らの見解についても論究したい。

## 2. 戦前台湾人の「内地日本」留学

### 1) 日本留学のはじまり

明治以来清国(以下、中国と記す)留学生が最初に来日したのが、朝鮮人の日本留学(1881年(明治14))より、約15年遅れた1896年(明治29)4月であった。<sup>10</sup> それまではアメリカ留学が主流であったが、日清戦争に日本が勝利したことによって、中国は西洋のやり方を取り入れた日本に留学生を送るようになった。<sup>11</sup> その後、日本のアジ

---

ト教団体」(宮本盛太郎等『近代日本政治思想史発掘—平和・キリスト教・国家』風行社、1993年)を参照されたい。

10 田中宏「日本留学の中国人」(『歴史公論』4月号、雄山閣、1979年、133頁)。また朝鮮人留学生について、次のような指摘がある。「ところが保護条約の締結を機として、留学生の意識はこうした単なる『開化』のための日本留学から、日本に学ぶ過程の中で、また日本留学で学んだものを通して、『反日』『抗日』に資するという方向へと大きく転換して来るのである」という。阿部洋「『解放』前韓国における日本留学」(『韓』第5巻第12号、東京韓国研究院、1976年、30頁)。

11 さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第1書房(1981年、8頁)。

アへの侵略が加速化した結果、中国からの留学生が次第に減少していき、「彼らの中国社会における活躍はなお続く」<sup>12</sup>という。

これに対して、1897年(明治30)に東京富士見学校5年生に編入した楊世英トルが、おそらく最初の台湾人官費留学生であった。このように一見すると、中国人と台湾人の日本留学の始まりにはそれほど時間の差がなかったかのように思える。しかし、実際、「外国人」として来日する中国人に対し、法政大学清国留学生法政速成科(1904~1908)、明治大学経緯学堂(1904~1910)、早稲田大学清国留学生部(1905~1910)などが次々と設置される一方、「植民地人」としての台湾人には、こうした便宜は図れなかった。また中国人は専門教育・速成教育を求めて日本に留学したが、初期、台湾人の日本留学は小中学校が主流であった。<sup>13</sup>

## 2) 台湾人の「内地日本」高等教育機関への進学

大正期半ばからは、高等教育機関への留学が次第に主流となり、台湾人の高等教育機関への留学生が小学校を凌ぎ、中学校に次いで2位を占めるようになった。<sup>14</sup> なぜこのような現象が生じた

---

12 上垣外憲一『日本留学と革命運動』(東京大学出版会、1982年、213頁)。

13 戦前台湾人・朝鮮人留学生の推移について、佐藤由美・渡部宗助「戦前の台湾・朝鮮留学生に関する統計資料について」(『植民地教育体験の記憶』皓星社、2005年)を参照されたい。

14 台湾総督府民政部学務部『大正6年度台湾総督府学事第16年報』(1919年、16頁)。

のだろうか。安部磯雄、平沼淑郎などの早稲田大学教員も指摘しているように、「台湾に高等教育機関は整備されていない」という、台湾人に対する教育差別が一因としてあげられるであろう。結局、台湾人がより高度な専門的知識を獲得する手段としては、日本留学に希望を託すほかに殆ど道はなかった。

しかし、1922年(大正11)前後の台湾における台湾人の一日賃金の平均は、台湾在住日本人(1.85円)のほぼ半額にあたる0.97円であったため、<sup>15</sup> 生活費のみで最低でも一ヶ月に25円は必要である留学の経済的負担は決して軽いものではなかった。<sup>16</sup>

さて、1918年(大正7)12月6日、大学令が公布された。しかし、「新大学令に抛れば必ず中学を卒業した者でなければ入学を許さない、所が台湾朝鮮は4年の中学で、5年のものはない。斯の如く新大学令は朝鮮台湾の学生の高等教育を受ける道を塞いで了った、如何なる政府の意向か知らぬが、中央政府は兎角台湾人が高等教育を受ける事を好まない傾向がある」<sup>17</sup>という指摘のように、当時、台湾では、台湾人を対象とする中学校は4年制であったため、

---

15 1922年(大正11)において、台湾人の平均賃金は、家作大工が1.8円、左官が2円、雑役人が0.8円、鍛冶が1.3円、鋳物が1.2円、農作男が0.5円、貨物荷捌人が1.5円、漁夫が1.2円などであった。山川均「植民政策下の台湾」(『山川均全集』第7巻、1966年、276~278頁)。

16 東京の下宿生活について、大生川志郎『最新東京苦学案内』(復刻版)近代日本青年期教育叢書・第IV期第6巻(教成社、1921年、日本図書センター、1992年、24~36頁)を参照。また、当時東京留学の費用について、早稲田大学出身の黄朝琴は年間約400~500円が必要だと回想している。黄朝琴『朝琴回憶録—台湾政界耆宿黄朝琴』(台北：龍文出版社、2001年、12頁)。

17 安部磯雄「台湾の教育問題に就て」(『台湾青年』第1巻第4号、1920年、10頁)。

高等教育機関への進学を希望する台湾人にとって、とりわけ学部への入学は困難であった。<sup>18</sup> そこで、選択肢のひとつとして、多くの台湾人留学生がまず、内地日本の中学への編入を余儀なくされた。たとえば、黄朝琴は正則英語学校及び研数学館のような予備校に通い、<sup>19</sup> その後、日本中学3年生に編入するという長い道程を経て、ようやく早稲田大学専門部政治経済科の入学にこぎ着けた。<sup>20</sup>

以上のように、大学部への入学が困難である上に、官僚への選択肢がほとんどないという植民地台湾人知識青年の就職問題(エリート・リクルート)が加わるため、エリート官僚を養成する官立大学よりも、むしろ「法科の明治大学」と「政治経済科の早稲田大学」など、私立大学専門部への進学が多かった。<sup>21</sup>

---

18 教育的差別について、呉三連口述・呉豊山記録『呉三連回憶録』(台北：自立晩報社文化出版部、1991年、34頁)を参照されたい。

19 正則英語学校は、正則予備学校の姉妹校であり、専ら英語を教授した。これに対して、正則予備学校は主として理化学及び数学を教授した。藤井銜編『大正5年版新撰東京遊学案内』(東京集文館、1916年、38頁)。一方、研数学館は、1897年(明治30)に奥平浪太郎が創立した数学の私塾であった。

20 黄朝琴『愛國愛郷—黄朝琴傳』(台北：近代中國雜誌社、1984年、4頁)。

21 「この弁護士試験合格者における明治大学の圧倒的な地位は1920年前後、つまり大正中期まで続き、司法官とあわせて法曹界の人材をより多く輩出していったのである」というように、当時弁護士試験合格者において明治大学法科が圧倒的割合を占めている。明治大学百年史編纂委員会『明治大学百年史』第3巻(通史編Ⅰ、1992年、592~593頁)。また林呈禄の影響もあって、明治大学の台湾人留学生は法科への入学が多かった。明治大学百年史編纂委員会『明治大学百年史』第4巻(通史編Ⅱ、1994年、212頁)。実際、明治大学法科出身の台湾人は、林呈禄のほか、郭廷献、謝介石、呂靈石、葉清耀、蔡式毅、蔡先於、羅萬俔、張龍池などがあげられる。台湾新

### 3) 専門部政治経済科への集中

以下では、『垂細垂公論』に論説を発表した早稲田大学の台湾人留学生を概観するが、「早稲田大学の外地学生・生徒数」(『早稲田大学百年史』第4巻)からは、1920年代半ばから戦後初期までの台湾人学生の推移をみることができるが、1925年(大正14)以前の台湾人留

表1. 大正期における早稲田大学アジア留学生の在学学生推移

年度	地域	台湾	朝鮮	中国	インド	トルコ
1912年(大正元)		1	37	166	1	0
1913年(大正2)		不明	不明	不明	不明	不明
1914年(大正3)		9	50	168	0	1
1915年(大正4)		12	40	180	2	1
1916年(大正5)		13	48	188	2	1
1917年(大正6)		21	61	200	2	1
1918年(大正7)		19	69	205	0	0
1919年(大正8)		24	74	233	0	0
1920年(大正9)		17	59	218	0	0
1921年(大正10)		19	80	201	0	0
1922年(大正11)		22	83	199	0	0
1923年(大正12)		30	92	209	0	0
1924年(大正13)		29	214	113	0	0
1925年(大正14)		31	122	88	0	0
1926年(大正15)		41	136	66	0	0

注) 附属高等学院、工手学校を含む。

出典：各年度「現在学生府県別表」『早稲田学報』より筆者作成。

民報社調査部編『台湾人士鑑』(台湾新民報社、1934年)。



学生の推移を把握することはできない。そのため、本稿は、毎年年末の『早稲田学報』に掲載される「早稲田大学報告」の資料を駆使し、大正期における台湾人留学生の推移を整理したい。

[表1]にみるように、当時、同じく日本の植民地下に置かれた朝鮮からの留学生数はおよそ台湾人の3倍から4倍前後に達している。これに対して、台湾人留学生の推移は微増ながらほぼ横這いであった。

次に、台湾人卒業生ならびに出身学科(学部・専門部・高等師範のみ)についてだが、〈表2〉に示されるように、最初の台湾人卒業生は、おそらく1915年(大正4)の林時珍(専門部法律科)と黄毓材・鄭其芹(専門部政治経済科)の3人と考えられる。その後、専門部政治経済科を中心に、台湾人留学生の数は少しずつ増加していく。というのも、当初、専門部の入学基準は学部より低く定められていたことに加え、「台湾に於いては国民教育のみならず、各方面の教育についてこの政治教育は殆ど考慮されていない」<sup>22</sup>という台湾教育の現状があったため、専門部政治経済科への入学が顕著であった。

また当時、師範学校卒業生が専門部への入学は可能であるため、早稲田大学・明治大学などの高等教育機関に進学する台湾人が台湾総督府国語学校の卒業生に集中していた。例えば、黄呈聡(実業部農業科、1907)、王敏川(元師範部乙科、1909)、劉鳳岐(公学師範部乙科、1911)、黄毓材(国語部、1911)、鄭其芹・巫川(国語部、1912)、彭木發(公学師範部乙科、1912)、何春喜・劉達麟(国語部、1913)、施添福(公学師範部

---

22 王金海「台湾教育に関する私見」(『台湾青年』第3巻第2号、1921年、39頁)。

乙科、1913)、王金海・呉鏡澄(公学師範部乙科、1917)などがあげられる。<sup>23</sup>  
この現象を裏返すならば、当時、台湾人最高教育機関である台湾  
総督府国語学校の卒業生でなければ、直接内地日本の高等教育機  
関に入学しにくいという捉え方も可能であろう。<sup>24</sup>

### 3. 専門部政治経済科と近代台湾の 啓蒙運動

さて、専門部政治経済科での「知の構築」はどのように  
実践されていったのだろうか。「新式教育世代が生み出した社会  
エリートの中で、高等教育を受けた留学生の数が最も多い」<sup>25</sup>とい  
う指摘のように、台湾人留学生の多くが卒業後、台湾社会の中堅  
として活躍した。そこで、「各種の職業に応用自在であるのは政  
治科で官途に就きて行政官又は外交官たるべく、或は野に在りて  
代議士、新聞記者、著述家、商業家、銀行家、会社員たるを得べ

---

23 台湾総督府国語学校『台湾総督府国語学校一覧 自大正6年至大正7年』  
(1917年、210~247頁)。

24 早稲田大学のほか、台湾総督府国語学校出身の台湾人留学生は次のような  
人物があげられる。明治大学の蔡式毅(元師範部乙科、1903年)、林呈禄(国  
語部、1908年)と東京高師の蔡培火(元師範部乙科、1910年)・張耀堂(公学  
師範部乙科、1914年)と黄土水(公学師範部乙科、1915年)などの例がある。  
同上書；吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留學生  
史料』ゆまに書房(2009年、209~212頁)。

25 呉文星『日抛時期台湾師範教育之研究』(台北：国立台湾師範大学歴史研究  
所)、1983年、220~221頁。

く、或は試験によりて判検事、若くは弁護士たる事も出来る」<sup>26</sup>と  
いうように、専門部政治経済科からも多数の人材を輩出した。た  
とえば、1934年(昭和9)に、立身出世の象徴として、出版された『台  
湾人士鑑』をみても、専門部政治経済科出身の台湾人校友の職業  
が多様であったことがうかがえる。具体例としては、歐清石(弁護  
士)、呉蘅秋(石油会社代理店経営・彰化街協議会員)、黄周(台湾新民報社上海支  
局長)、黄呈聡(台湾新民報社社会部長・線西信用販賣購買利用組合長)、楊肇嘉  
(台湾新民報記者取締役・台湾地方自治聯盟常務理事)、劉安紅(万巒庄長・高雄州青  
果同業組合代議員)、呂世明(彰化軽鉄株式会社専務取締役・街協議会員等)など  
があげられる。<sup>27</sup> さらに、戦後も、呂世明、黄朝琴らは、台湾省  
議員として活躍した。<sup>28</sup> しかし、本稿では、彼らの進路というよ  
りも、むしろ『亜細亜公論』への投稿を通じて、政治経済科台湾人  
留学生の「知の実践」を検証したい。<sup>29</sup>

---

26 「就中早稲田の政治経済科は、同大学の中堅として、将た亦最も古きもの  
として好評噴々たるものがある」という。高橋都素武『全国学校案内』(復刻  
版・近代日本青年期教育叢書・第V期第11巻、日本図書センター、1992年、  
20~21頁)。

27 「就中早稲田の政治経済科は、同大学の中堅として、将た亦最も古きもの  
として好評噴々たるものがある」、『台湾人士鑑』と岡本真希子『植民地官僚の  
政治史—朝鮮・台湾総督府と帝国日本』(三元社、2008年、320頁)を参照さ  
れたい。

28 聞懷徳編『台湾名人傳』(台北：商業新聞社、1956年、40頁と~55頁)。

29 『台湾』、『6合雑誌』、『亜細亜公論』等雑誌へ継続的に投稿することに加え、  
翻訳および講演を通じて、台湾人留学生たちを「知の運搬者」として、捉え  
ることも可能であろう。たとえば、王敏川などの留学生たちが「和文から  
漢文へ」という形をもって、『台湾青年』・『台湾』に掲載した日本人の寄稿  
を漢文に訳し、『台湾青年』・『台湾』に再掲載するという作業を繰り返して  
いた。拙稿「大正期台湾人『内地留学生』と近代台湾—早稲田大学専門部政

## 1) 専門知識の獲得

多言するまでもないが、学生の知識の獲得は、読書、講演会、サークル活動など、さまざまなルートを通じて構築することができる。しかし、最も基本的な土台作りは、おそらく学校での勉強にはほかないだろう。例えば、「行政法各論」、「財政学」、「金融政策」、「商業政策」、「国際公法」、「国際私法」などの科目を登録した台湾人留学生劉安紅の「選択課目届」(図1)からは、台湾では、政治学、法学、社会学など、高度な専門的知識を習得する機会がない台湾人留学生にとって、政治経済学科の授業がいかに有益であったかは想像に難くない。また後年、政治経済科出身の楊肇嘉は、安部磯雄、高橋清吾、大山郁夫の講義について、「特に、政治学関連の授業に毎回必ず出席するに加え、時々政治学担当の教員の宿舍を訪れ、指導を受けた」<sup>30</sup>と回想している。

さて、『早稲田学報』の卒業生名簿によれば、王敏川、黄呈聡、黄朝琴の3人は共に、1923年(大正12)に、専門部政治経済科を卒業した同級生であった。そこから、逆算すると、彼らが入学したのは、おそらく1920年(大正9)であったと考えられる。<sup>31</sup>

[表3]から明らかなように、当時、専門部政治経済科の必修科

---

治経済科を中心として『アジア太平洋研究科論集』16号(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科、2008年、13頁)。

30 楊肇嘉『楊肇嘉回憶録』(上)(台北：3民書局、1967年、225頁)。

31 王敏川について、彼の入学は1919年(大正8)にあったという説もあるが、検討の余地があると考えられる。



出典：早稲田大学大学史資料センター所蔵「3号館旧蔵資料」・「C付属学校(旧制)・5専門部：(大正9年)撰撰課目届(専門部政治経済科3年)」(5~08)。

図1. 台湾人留学生劉安紅の「選撰課目届」(1920年(大正9))

目は、「政治学」と「経済学」関連の専門科目のみならず、「史学」、「地理学」、「社会学」、「文学」、「法学」、「語学」など、さまざまな分野の講義も履修しなければならなかった。それに加え、日本人学生と同様に、台湾人留学生も「国会演習」<sup>32</sup>というユニークな科目を通して、近代議会制度をある程度、学ぶことができたと推測できよう。

32 「明治21年6月課程表には、政治科第3年前期に『国会法』の講義が新設され、それと並んで同科第3年前、後期に隔週1回の『国会法演習』が置かれている。議会開設を2年後控えたこの時期にあって、学苑がこれらの科目を設置したことは、高田(早苗)の強い主張に基づくものと考えられるが、学苑の特色を遺憾なく発揮した、まさに特筆すべき新機軸であったに違いない」という。早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』第1巻(1978年、770頁)。

表3. 1920年(大正9)度早稲田大学専門部政治経済学科の科目配当一覽

学年	第一	学年	第二	学年	第三	学年
学科・教員	第一	学年	第二	学年	第三	学年
政治学	国家学原理 帝国憲法 経済学原理	浮田和民 副島義一 塩澤昌貞	行政法汎論 政治学史 貨幣及銀行 農業政策 工業政策及 社会政策	副島義一 高橋清吾 服部文四郎 猪俣津南雄 塩澤昌貞	行政法各論 自治政策 鉄道政策 商業政策 金融政策 保険政策	島村他三郎 高橋清吾 佐竹三吾 上田貞次郎 服部文四郎 栗津清亮
経済学・財政学			財政学 近代史 東洋近代史 文明史 最近政治史	小林丑三郎 本多浅治郎 松井等 内ヶ崎作三郎 煙山専太郎	財政学 近時外交史 支那現代外交史	小林丑三郎 信夫淳平 青柳篤恒
史学	西洋史 *東洋思想史	本多浅治郎 遠藤隆吉				
地理学	地理学	志賀重昂				
文学・社会学			社会学	遠藤隆吉		
哲学	*哲学	杉森孝次郎				
法学	民法要論 刑法要論	牧野菊之助 岡田朝太郎	民法要論	磯谷幸次郎	国際公法 国際私法	中村進午 松野祐裔
簿記					商法要論	柳川勝二
外国語	英語	(吉田源次郎) 山崎貞	英語	(吉田源次郎) 帆足理一郎	簿記 英語	神尾錠吉 山崎貞
	日語	渡俊治	日語	渡俊治	日語	勝俣銓吉郎 菊池三九郎
	*支那語		*支那語		*支那語	
論文及国会演習	論文	菊池三九郎	*国会演習		*国会演習	

注) ①第2学年以後に於いては専攻の方針により学課の数を限定して選択必修せしむ、\*印は随意科なり。

②担当教員の空欄と( )は、史料が不明のためである。

出典: 「大正9年度学科配当表」早稲田大学大学史資料センター所蔵「3号館旧蔵資料」・「[自明治42年度至大正11年度] 学科配当表[続]」(25-05)と『早稲田大学百年史』第2巻より筆者作成

## 2) 啓蒙運動への参加

さて、ロシア革命、朝鮮半島の31独立運動、中国の54運動などの民族運動から刺激をうけ、在京台湾人留学生は啓蒙運動団体を組織しはじめた。<sup>33</sup> そこで、早稲田大学の台湾人留学生が「瀛士会」という学内の台湾人学生サークル活動のみならず、東亜同盟会(新亜同盟党)、「新民会」、<sup>34</sup> 「コスモ倶楽部」<sup>35</sup>などの団体にも意欲的に参加した。<sup>36</sup> 一方、当時朝鮮人の啓蒙文化運動は、「台湾人の運動より遙かに前進しつつあり、東京留学生の如き既に数個の団体を組織し、機関紙の刊行、思想の宣伝普及を行ひつつあ」<sup>37</sup> という状況のなかで、蔡培火、林呈禄、王敏川等台湾人は、在京朝

---

33 ロシア革命がアジアに与えた影響については、石母田正『歴史と民族の発見』東京大学出版会、1952年、20~21頁を参照されたい。

34 「在京台湾人留学生の民族的覚醒と、実践運動への発展の傾向は、林献堂、蔡惠如等の統制下に具体化し、東京青年学生を説き、大正8年末百余名を糾合し、啓発会なる名称を以て団体組織を遂げ、間もなく之を新民会と改称するという。台湾総督府警務局『台湾社会運動史』復刻版(初出：『台湾総督府警察沿革誌』第2編領台以後の治安状況 中巻、1939年、龍溪書舎、1973年、25~31頁)。

35 松尾尊兌「コスモ倶楽部小史」(『京都橘女子大学研究紀要』26号(京都橘女子大学研究紀要編集委員会、1999年、33頁)。

36 しかし、早稲田大学学生を中心とする民人同盟会、早大一新会、建設者同盟会、早大文化会等組織の活動には、早稲田大学台湾人留学生が参加した記録は見当たらない。これに対し、明治大学在学の台湾人彭華英は建設者同盟の一員として名をつらねている。建設者同盟会史刊委員会『建設者同盟の歴史~大正期のヴ・ナロード運動』(日本社会党中央本部機関紙局、1979年)。

37 台湾総督府警務局『台湾社会運動史』復刻版(初出：『台湾総督府警察沿革誌』第2編領台以後の治安状況 中巻、1939年、龍溪書舎、1973年、24頁)。

鮮人との連携を図ろうと試みた。

具体的に、台湾青年雑誌社のメンバーは、『亜細亜公論』より約3ヶ月早く誕生した『青年朝鮮』(1922年2月15日創刊)の第1号に、「台湾青年の憤起」(『台湾青年』誌に対する言論弾圧を糾弾する公開状)を寄稿している。<sup>38</sup> なお、この記事の内容の一部は、後に『亜細亜公論』創刊号にも掲載された(「台湾における言論圧迫を内地朝野諸賢(君)賢に訴ふ」)。

「吾人は一昨年郷里の先輩と協力して帝都に於て台湾青年雑誌社を創立し、月刊雑誌台湾青年を同年7月より発行して今日に及んだのであるが、曾て同誌第1巻第3号にも発表した通り、台湾各地の下級官吏は同誌の発展を妨害すべく、不法にも該誌の購読者に対して極力監視を加へ、或は其の購読停止を勧告したり或は其の所持の雑誌を取り上げて、読者の増加を防止することに努めた。更に中央なる台湾総督府に於ては、其の特別なる台湾新聞紙規則に依つて同雑誌の取次所を台湾島内に設置し、而して取次所より既に内務省の検閲を通過したる雑誌を毎号改めて納本し其の検閲を受け、又雑誌を読者へ発送する際には何れも総督府の認定したる取次人の印鑑を雑誌に捺すべきと命じた……。

実際、『亜細亜公論』の執筆者をみればわかるが、台湾人留学生黄呈聡、王敏川のほか、同じ専門部政治経済科の朝鮮人李相壽(1923年卒)と中国人湯鶴逸(1922年卒)・張昌言(1924年卒)なども論説を發表した。<sup>39</sup> こうした『亜細亜公論』の例を通して、アジア留学生

38 朴慶植編『朝鮮問題資料叢書第12巻日本植民地下の在日朝鮮人の状況』(アジア問題研究所、1990年、11頁)。

39 李相壽「日支交渉を論じて現代の強国の政策を弾劾す」(第1巻第2号)と湯

と日本知識人の間にはなんらかの交流と連携があったと推測できよう。とはいうものの、大正期において中国人や朝鮮人に比べ、台湾人留学生の数は、はるかに少なかった上に、啓蒙運動のスタートに関してかなり遅れていたと指摘しなければならないのである。

#### 4. 『亜細亜公論』にみるアジア知識人の対話

「『亜細亜公論』は何にも亜細亜民族の団結とか統一とか、そんなケチ臭ひ考のものではない。人類主義の表徴の積りでこの題を選定したわけだ。人類の幸福は、各人の幸福の拡張だ。世界平和の必要なるが為には、どうしても吾々としては腐敗した亜細亜自身が、欧米人に遜色のない人格者にならなければならない。現状から考へると、どうしても第1歩として亜細亜人は覚醒を要する、さうして魚食魚たらん根性から脱れねばならぬ」と創刊号の「『誌題』懸賞募集」に記されるように、『亜細亜公論』は、「人類主義・博愛精神をもって、アジア人を覚醒させる」ことを当面の目標として第一歩を踏み出した。<sup>40</sup>

---

鶴逸「求日本人之反省」・「西湖雜詩漢詩（漢詩）」（第1巻創刊号）、「排日」（第1巻第5号）・論中華民國與高麗之關係」（第2巻第1号・漢文）と張昌言「日本政府当局の支労働者追放に就て日本官民諸士に忠告す」（第1巻第6号）などがある。

- 40 雑誌『亜細亜公論』の基本旋律については、後藤乾一「大正デモクラシーと雑誌『亜細亜公論』—その史的意味と時代背景」（『アジア太平洋討究』12号、

一方、『台湾青年』といった在京台湾人主宰の機関誌と同様に、『亜細亜公論』創刊当時から、日本知識人が原稿の供給源として重要な役割を担った。中でも、早稲田大学関係者からの寄稿が目立っている。<sup>41</sup> その日本人執筆陣から明らかなように、安部磯雄、大山郁夫、杉森孝次郎、武田豊4郎、佐野学などの教員に加え、山室軍平、島田3郎などの早稲田大学出身者からの寄稿も多くみられる。彼らの多くは、キリスト教会活動および社会運動に積極的に取り組んだ人々であった。<sup>42</sup> なお、紙幅の都合上、日本知識人とアジア留学生との連携については別稿を期したい。

## 1) 中国人と台湾人執筆者について

さて、無署名の寄稿を除いて、中国人と台湾人執筆者については次のような人物があげられる。中国人では、戴季陶(天仇)、傅立魚、湯鶴逸、張昌言、楊橐吾、胡中和、王了人、了人(王了人と同一

---

早稲田大学アジア太平洋研究センター、2009年、150~160頁)を参照されたい。

41 拙稿「植村正久と台湾—近代日本キリスト者を通じて」(『問題と研究』第36巻第6号(11・12月号)、台北：国立政治大学国際関係研究センター、2007年)。

42 「社会主義には、幸徳秋水の思想に見られるように志士仁人的、儒教精神をとりいれた場合や安部磯雄、島田3郎のようなキリスト教精神をとりいれた場合があるが、一種のヒューマニズムに立脚し、弱者救済に熱心であった点で、両者は共有点を持っている」という。遠藤興一『田川大吉郎』(大空社、1998年、184頁)。

人物の可能性が高い)、酔天生(ペンネーム)などである。<sup>43</sup> これに対して、台湾人執筆者は蔡培火と黄呈聡と王敏川などであった。

まず、留学時期が発行期間と重ならなかった戴季陶(日本大学専門部法科・1909年中退)と蔡培火(東京高師・現筑波大学)2人が、どのような経緯で原稿をよせたのだろうか。戴季陶の場合はおそらく『亜細亜公論』の編集を担当した宮崎龍介の紹介・斡旋が理由のひとつであろう。なぜなら、戴季陶は孫文を通じて、宮崎滔天と知り合い、さらにその親交は、宮崎滔天の長男宮崎龍介にも受け継がれた。こうした交友関係が、戴季陶の『亜細亜公論』への寄稿につながる一要因と推測できよう。<sup>44</sup> これに対して、蔡培火という台湾人執筆者は、1915年(大正4)に日本に渡ったが、留学中、蔡恵如や林獻堂などの台湾地方名士(士紳)から支援を受け、さまざまな啓蒙運動に取り組むと同時に、亜細亜公論雑誌社長柳泰慶との交遊を通して、原稿掲載の機会を得た。<sup>45</sup>

ところで、明治期に日本に留学した戴季陶と傅立魚(明治大学・卒

---

43 紀旭峰「『半植民地中国』・『植民地台湾』知識人から見たアジア」後藤乾一・羅京洙・紀旭峰編集解題(『20世紀日本のアジア関係重要研究資料 亜細亜公論・大東公論』(復刻版)、第1巻、龍溪書舎、2008年)。

44 戴季陶の日本観は、望月敏弘「戴季陶の初期日本認識について—辛亥革命前後から日本亡命時期を中心に」(小島朋之・家近亮子編『歴史の中の中国政治—近代と現代』勁草書房、1999年)、嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』(東方書店、2003年)などを参照されたい。

45 「『亜細亜公論』主幹柳壽泉と蔡培火、林呈禄の親交、及び亜細亜公論に対する頻繁なる投稿は之を証するものと見るべく、殊に蔡培火は右公論社の理事を囑託されたることあり」という。台湾総督府警務局『台湾社会運動史』復刻版(初出:『台湾総督府警察沿革誌』第2編領台以後の治安状況 中巻、1939年、龍溪書舎、1973年、24頁)。

業年度不明)を除いては、大正期の日本留学経験者、とりわけ早稲田大学専門部政治経済科出身の執筆者が多かった。早稲田大学のほか、明治大学専門部政治経済科の胡中和(1921年卒)、日本大学専門部政治科の王了人(1921年卒)などがあげられる。<sup>46</sup>

なぜ、早稲田大学政治経済科の留学生が多く関与していたのだろうか。その理由のひとつは、留学時期と『亜細亜公論』の発行期間が重なっていたことである。もうひとつは、『亜細亜公論』と早稲田系知識人との深いつながりがあげられる。というのも、『亜細亜公論』創刊当初から、三浦鏡太郎、安部磯雄、大山郁夫、高辻秀宣をはじめとする早稲田系の日本人執筆者が多い上に、本社が早稲田鶴巻町(中目黒からの移転)にあった。こうした要因が、早稲田大学の留学生に、大きな役割を担う機会をもたらしたのであろう。

## 2) 「植民地台湾」知識人からみたアジア

中国人・台湾人の寄稿を整理すると、主に3つの特徴を挙げることができるだろう。第1に、それぞれ国内情勢および国際趨勢を反映する内容が多い。第2に、政治経済学科出身の執筆者をはじめ、専門知識が論説に多くあらわれている。第3は、日本語と中国語両方の原稿があった。

「対等な国対国」の日中関係を求める「半植民地中国」知識人の

---

46 興亜院『日本留学中華民国人名調』(1940年); 周棉編『中国留学生大辞典』(南京: 南京大学出版社、1999年)。

論考が多かったに対して、<sup>47</sup> 当時日本植民地下におかれていた台湾人の寄稿は、主に「内台差別待遇」の撤廃を訴える内容に集中している。当時台湾統治の実態が内地日本ではそれほど大きくは報じられなかったことを考えると、台湾人にとって『亜細亜公論』は、内地日本人に「台湾総督府の統治政策」と「内台差別待遇の実態」を告発できる数少ない媒体のひとつであったことは間違いないであろう。

ところで、蔡培火「極東の平和果して如何」(第1巻創刊号)、黄呈聡「台湾の経済的危機」(第1巻第3号)、王敏川「希望賢明政治家之出現(中国語)」(第2巻新年号)などの論考は、植民地台湾統治政策の改善を述べる半面、「国際的排日」、「アジア・モンロー主義」など、アジアの現在・将来をめぐっても論じている。今日からみれば、彼らの論説は必ずしも完成度の高いものとはいえず、その論点についても検討の余地があるが、彼らの論考を通じて、当時の「植民地台湾」知識人の中国観、朝鮮観、日本観、アジア観を一瞥することができるであろう。

まず、「台湾の経済的危機」と題した黄呈聡の論説であるが、管見の限り、その内容は、1921年(大正10)に、総督府の検閲で全文削除の命令をうけた「台湾経済界の危機と其の救済」(『台湾青年』第3巻第5号、1921)と「台湾経済界の危機と其の救済(承前)」(『台湾青年』第3巻第6号、1921)に加筆したものと見なすことができる。黄呈聡は、植民地

---

47 紀旭峰、「『半植民地中国』・『植民地台湾』知識人から見たアジア」後藤乾一・羅京洙・紀旭峰編集解題(『20世紀日本のアジア関係重要研究資料 亜細亜公論・大東公論』(復刻版)、第1巻、龍溪書舎、2008年、75~80頁)

母国本位主義と植民地本位主義の優劣について、欧米の例を取り上げ、「<sup>(スペイン)</sup> <sup>(ポルトガル)</sup> 西班牙及葡萄牙は吸収主義の為に多数の植民地を失ひ、残余の少数の植民地は却って毎年本国より逆に補助しつゝある状態である。英国は概して独立自給主義を採りたる為に補助金を免れ、母国と植民地は互に融合して繁栄しつゝあるは鑑とすべきである。斯様に先進国の過去の植民史を見れば、幾多の失敗を重ねて来たので台湾も先轍を踏んで来たのは帝国の為め台湾の為に憂慮すべきことであらう」<sup>48</sup>と述べている。

それに加え、同文は、『亜細亜公論』が敬遠してきた「アジア主義」について、「大亜細亜主義」を推進するためには、まず、征服者と被征服者を平等に扱わなければならないと論じている。

「要するに台湾の統治方針は徒らに一部の母国人の利権扶殖腐心して台湾人の経済状態を考察せず、農奴に化せられつゝあるは一視同仁の皇徳でないと思ふ。一時的の小利益の為に永遠の大利益を見ざるは決して帝国の大をなす所以ではない。新領土の統治は須く征服者の態度を去り、住民に対して、正義なるを要し、万事公明正大にして母国人に偏重せず共存共栄主義の誠意あればこそ帝国の利益を永遠に確保する所以で亦以て大国民の襟度を列国に示すのである。大亜細亜主義も此れより出発しなければならぬと思ふ」。<sup>49</sup>

48 黄呈聡「台湾の経済的危機」（『亜細亜公論』第1巻第3号（7月号）、1922年、25頁）。

49 黄呈聡「台湾の経済的危機」（『亜細亜公論』第1巻第3号（7月号）、1922年、25頁）。

実際、黄呈聡が提唱した「万事公明正大」、「共存共栄主義」について、早稲田大学政治経済科教授安部磯雄は『次の時代』のなかでも提起している。安部は、優勝劣敗を前提とする自由競争主義を批判し、「優勝劣敗と共存共栄との両立が不可能である」と主張する上で、共存共栄主義を実現するためには何よりもまず人類平等(4海同胞主義)を要求しなければならないと述べている。<sup>50</sup> この例からも、当時アジア知識人の間には何らかの「知の交流」・「知の連鎖」を有していたと推測できよう。

黄呈聡と同級生であった王敏川は、『希望賢明政治家之出現』(中国語)と題する原稿を寄せた。王敏川は台湾議会の設置、植民地言論集会の自由などを実現するためには、「党派を超越すること」、「党派を感化すること」、「党派に左右されないこと」といった3つのキーワードを提起した上で、有色人種と白色人種との地位平等を図るためには、朝鮮民族日本民族漢民族3者が協力し合わなければならないと賢明な政治家の出現を強く期待している。

則當有超越黨派之毅力。感化黨派之能力。勿為黨派之所左右。庶可謂賢明之政治家也。故於日本本土。當使普通選舉的實現。即同此意。而於臺灣則當許設置民選議會。苟能如是。則不但可避特權階級之專橫。而亦可融可和民族之感情也。…… 況觀垂細垂之文

50 安部磯雄『次の時代』春陽堂、1927年(復刻版：安部磯雄著作集第5巻、学術出版会、2008年)56~73頁；紀旭峰「安部磯雄の台湾論一大正期と昭和期の台湾訪問を手がかりに」(『アジア太平洋研究科論集』17号、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科、2009年、16頁)。

明。於今日尚遠遜歐米。誠難自為庇護。白色人種之每自誇為優等  
人種。豈非有特於此。而有色人種之輒被蔑視。亦豈非有基於此。  
有色人種不相發奮圖文化之進步。終為所侮。亦安能免。故於有色  
人種中。如朝鮮民族日本民族漢民族。實有負指導文化之使命。欲  
期有<sup>(ママ)</sup>人色種與白色人種有同等文化之地位。非此3民族協同努力。  
何能達此目的。故欲圖有色人種此進步。不為白色人種所輕視。宜  
相援助。不宜相傾陷 ……。<sup>51</sup>

一方、蔡培火「極東の平和果して如何」の論点は植民地台湾に  
おかれたというよりも、むしろ、「日中」・「日朝」・「日台」という  
相互関係の推進にあったと考えてよい。蔡培火は、まず「日朝」と  
「日台」関係の相違点<sup>52</sup>を分析し、朝鮮台湾に対する差別政策の撤  
廃を呼びかけている。それから、極東の平和を実現するには、「日  
華相親」が不可欠な一要素であると主張する。実際、上記の論説  
が発表される前年、1921年(大正10)8月、蔡培火は「中日親善の要諦」  
(『台湾青年』第3巻第2号)と題した論説のなかで、日華親善の意義・必  
要・障碍・要諦について論じていた。<sup>53</sup> また、ヴェルサイユ講和

51 王敏川「希望賢明政治家之出現」(『亜細亜公論』第2巻第1号(新年号)、  
1923年、16頁)。

52 「日鮮は合邦である。國と國とを合意的形式に於いて併合したものであつ  
て、其の理想は兩國人の共存共立にあるのであつた。臺灣と日本の關係は  
前者と相違して、合意的の結合ではなかつたけれど、何分其の地は海洋の  
孤島にして、其の人は多からず、而も臺灣人の身には寸鐵なくして、其の  
性は元來平和を好み、人種の憎惡の感を抱持しない」という。蔡培火「極東  
の平和果して如何」(『亜細亜公論』創刊号(5月号)、1922年、27頁)。

53 蔡培火は日中関係の改善について、次のように指摘している。「実に日本対

会議とワシントン平和会議における日中両国の激しい抗争に対し、彼は、「極東は極東人の極東である。極東の建設は極東人の手に依らねばならぬと同様に、其の破壊も極東人に依って行はるべき筈である」<sup>54</sup>と力説している。

しかし、ここで注意しなければならない点は、この「極東は極東人の極東である」という主張は、決してモンロー主義のような排外的なものではないということである。というのは、蔡培火が「極東は極東人の極東である」という論調を打ち出した真意は、「極東に於ける一切の紛糾は、皆極東人自ら醸した罪業と信ずるものである。極東宜しく自ら進んで其の責を負ふべしして、決して他へ転嫁すべきでない。極東の各民族は、若し真摯の態度を持して、各自の身边を点検し、従来の迷夢から醒めて、一致協力の下に徹底した新しき別途に進み、根本的平和建設策を択ばねば、縦へ如何なる外的援助ありとも、極東の平和は蓋し絶望だと覚悟するを要する。上來、予輩は、極東人の極東を高唱したるが、是れは決して、彼のモンロー主義とやらの衣鉢を襲用せうとするの料簡ではなく、排外的的色彩、元より一点だも之れを帯びず、唯だ責任を重じ其の所在を明白すべきを主張するの意志に出づるのみ」<sup>55</sup>と

---

朝鮮、台湾の問題は、日本対中国の問題の2大試金石であつて、中日の關係は、日鮮、日台の關係にその聯結の端緒を得べきである。」蔡培火『日本々国民に與ふ一植民地問題解決の基調』（台湾問題研究会、1928年、139頁）。

54 蔡培火、「極東の平和果して如何」（『亜細亞公論』創刊号（5月号）、1922年、24頁）。

55 蔡培火、「極東の平和果して如何」（『亜細亞公論』創刊号（5月号）、1922年、24頁）。

いう、「アジア人の自己反省・自己責任」に由来すると考えられるからである。またこの「極東は極東人の極東である」を彷彿させる論調は、1920年(大正9)蔡培火が発表した「我島と我等」(『台湾青年』第1巻第4号)にもみられる。

「<sup>(オランダ)</sup>実に過去の我島は立派な戦場であつた、西班牙が退いて和蘭が代り、鄭氏が拠つて席未だ温まざる時に満清の政令は早や布かれた、帝国の領有に帰するまで幾度争奪戦が重ねられたか知れない。不幸にして帝国が他国と砲火を交へる場合があつたらば、我島は更に皇軍飛躍の根拠地となり、そしてまた時としては我等の家屋一間々々が敵弾の標的となることもないとは限ぎらぬ。即ち我島は帝国南方の鎖鑰で、軍事上の重要地点である。我島の政治が多年の間武人によつて掌握されたのは、この点が余り重く認められ過ぎた結果の禍ではないかと疑ふ。此の意味から考へて、我等は決して悠々閑々に、何時まで無能力として立つて行く理にはいかぬ。台湾は日本帝国の台湾であると同時に、我等台湾人の台湾である。風雨の前に牖戸を綯繆すべしである。……我等は今の中より我等の自由の範囲内に於て将来の真なる生活を果す準備に、我等の智力は既述の如く敏くなくてはならぬと共に、我等の体力はこれを充実に鍊へて置く必要がある。これは決して軍国主義の未流を引いた料簡でなく、我等の本分を全するための覚悟である……」<sup>56</sup>

しかし実際、蔡培火がどのような文脈をもって「台湾は日本帝

---

56 蔡培火「我島と我等」(『台湾青年』第1巻第4号、1920年、19~20頁)。

国の台湾であると同時に、我等台湾人の台湾である」と「極東は極東人の極東である」と提唱したのかについては、今後さらなる検証を必要とするであろう。

## 5. むすびに代えて

今日に至るまで、「東アジア」と「アジア」については、さまざまな視点から語られてきた。とくに、日本の東アジア歴史研究においては、「戦後日本の学界における『東アジア』概念は、意識するとしないとにかかわらず、西嶋定生によって理論化された東アジア世界論の影響下にあると考えてよい」<sup>57</sup> という指摘のように、西嶋の「東アジア世界論」が、ひとつの定説として重要視されてきた。一方、1960年代に、戦後日本のアジア主義研究ブームの火付け役を演じた竹内好は、岡倉天心、宮崎滔天、北一輝、孫文などのアジア論の比較を行った。近年、子安宣邦は、近代以降の東亜概念、東亜秩序の編成過程を検討しつつ、新たな「東亜」概念の再構成に取り組んでいる。<sup>58</sup> これに対して、山室信一は、「日本が知の結節環となったことは、そこにおいてアジア

57 李成市「古代東アジア世界論再考—地域文化圏の形成を中心に」(『歴史評論』697号(5月号)、校倉書房、2008年、39頁)。また、西嶋定生の「東アジア世界」と「漢字文化圏」について、西嶋定生著・李成市編『古代東アジアと日本』(岩波書店、2000年)を参照されたい。

58 『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム』(藤原書店、2003年)、『「近代の超克」とは何か』(青土社、2008年)などがある。

各地の人々が出会う機会を提供し、それによって思想連鎖とアジアについてのまとまりの意識を生み出すことになったことは重要な意味をもっている」<sup>59</sup>という前提をもって、近代アジアにおける「知識人の連携」・「知識の連鎖」の実態を究明している。

以上のように、アジアを捉え直すこれまでのさまざまな動きの中で、わずかり号をもって閉刊に追い込まれた『亜細亜公論』は、必ずしも成功を取めたとは言い難い。しかし「一国家」・「一民族」という枠組みをこえてアジア知識人に対話の場を提供し、さらには日清戦争後、異なる近代国民国家建設の過程を経てきた中国人と台湾人に、新たな出会いの場を与えたことについては注目すべきであろう。

終戦から、すでに60数年を経たが、従軍慰安婦問題、B.C.級戦犯、靖国神社合祀問題、領土問題をはじめ、多くのアジア人はいまなお植民地統治や大東亜戦争などが残した遺産に翻弄され続けている。とくに、異なった歴史記憶、歴史教育を有する日本、韓国、北朝鮮、中国、台湾など、東アジアの人々は、歴史をどう共有するかという難題を抱えている。このようにいまだ未解決のさまざまな歴史問題が、「見える壁」・「見えざる壁」としてわれわれの前に立ちはだかっている中で、より開かれたアジアを目指す上

---

59 しかし、その後、「ヴェトナムやインドからの留学生や亡命者の離日と中国や朝鮮の留学生や亡命者の反日意識の高まりによって、日本を知的結節環とする時代は終わった。中国から日本への留学の熱潮も次第にさめていった」という。山室信一『思想課題としてのアジア—基軸・連鎖・投企』（岩波書店、2001年、350～355頁）。

で、1920年代初頭に「人類主義」を掲げた『亜細亜公論』は、ひとつの方向を提供してくれるのではないだろうか。

※ [付記] 調査に際しては、早稲田大学大学史資料センター、ならびに奥州市立斎藤實記念館から閲覧の便宜をはかって頂いた。記して謝意を表したい。



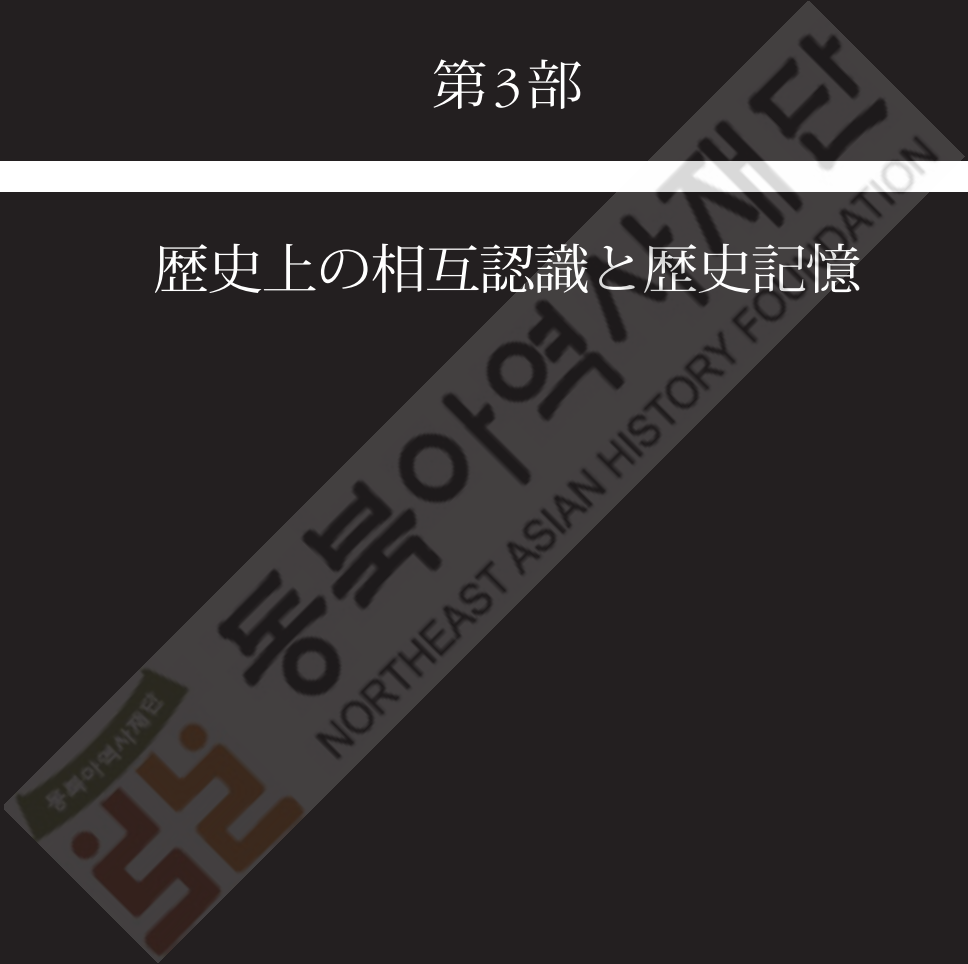


동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

## 第3部

### 歴史上の相互認識と歴史記憶





동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

# 近世日本の朝鮮認識

## － 壬辰倭乱の記憶を中心に

宮嶋博史 (成均館大学)

### 1. はじめに

日本史では豊臣政権の成立をもって中世と近世を分か  
つ分水嶺とみなす見解が一般的である。こうした理解  
に立てば、壬辰倭乱(豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争)は近世の初頭に起きた大  
事件であったということが出来るが、同様に、日本近代の開始を  
告げる明治維新の前後から「征韓論」が唱えられ、それはやがて日  
本による韓国支配へとつながっていった。つまり、日本の歴史に  
おける近世の始まりと近代の始まりは、ともに朝鮮＝韓国に対す  
る侵略と深く結びついていたのであるが、「明治」日本の指導者た  
ちも、朝鮮＝韓国に対する侵略政策を進めるにあたって、つねに  
秀吉の故事を意識していた。こうした事態は日朝関係にとってき  
わめて不幸なことであったが、なぜこのような繰り返しが生じた  
のであろうか。

この報告は、この繰り返しがなぜ生じたのかを考えるひとつの

手がかりとして、近世日本において壬辰倭乱がどのように語られ、記憶されたのかについて考察しようとするものである。壬辰倭乱に関する記録はさまざまな種類のものがあるが、最初にそれらを種類別に概観したうえで、武士たちによって作成された記録を中心に考察することにしたい。なぜならば、薩摩の島津氏や長州の毛利氏は、壬辰倭乱の主要な参戦者であっただけでなく、明治維新以後の朝鮮＝韓国侵略を主導する役割をも果たしたからである。

そしてこれら武士による壬辰倭乱の記録を検討するにあたって、特に次の諸点に着目しようと思う。すなわち、第1に、壬辰倭乱は所期の目的を達成することに失敗したという意味において日本の敗北であったといわざるをえないが、壬辰倭乱が敗北であったと日本が認識していたのかという点である。そして第2に、このことと関連して、なぜ所期の目的を達成することができなかったに関して、どのような認識が行なわれたのかという点である。第3には、壬辰倭乱の前後における対朝鮮認識の問題である。つまり、壬辰倭乱がどのような朝鮮認識に基づいて引き起こされ、また乱後に朝鮮認識がどう変化したのかということである。これら3つの点に焦点をあてることによって、明治維新以後の日本の対朝鮮＝韓国政策を歴史的に規定した朝鮮認識のありかたを探ってみよう。

## 2. 壬辰倭乱に関する各種記録

近世の日本においては、壬辰倭乱に関するさまざまな記録が作成され、またその一部は刊行されて多くの人に読まれた。それらを主に著者、あるいは編者の類型によって区別すると、以下のように分けることができる。すなわち、第1には民間人による記録であり、その多くは刊行されることがなかったが、中には刊行されて広く読まれたものも少数ながら存在している。第2には幕府や大名によって編纂されたものであり、壬辰倭乱に直接参加した武士やその子孫たちの壬辰倭乱に関する認識をよく示す史料である。

第3の類型として、やや性格が異なるが、朝鮮側の壬辰倭乱に関する記録を原文のまま、あるいは日本語に翻訳して出版されたものがある。特に壬辰倭乱当時、朝鮮政府の中枢にいて戦争を指揮した柳成龍が戦後執筆した『懲毖録』は1695年に日本で刊行されたのをはじめ、以後、数度にわたって刊行、翻訳された。1695年に江戸で出版された『懲毖録』の序文は著名な儒学者であった貝原篤信(益軒)が書いている。益軒はその中で、古語を引きながら、兵には義兵、応兵、貪兵、驕兵、忿兵の5種類があること、義兵と応兵は君子の用兵であることを指摘したうえで、秀吉の朝鮮出兵は貪、驕、忿の兵として天道の憎むところであり、敗北せざるをえなかったと述べている。さらに、大国であっても好戦的であれば滅び、天下が平安であっても戦争を忘れると危険であるという言葉を引きながら、朝鮮は後者の場合であって、国が滅びる直前

であったと批判している。こうした益軒の評価は比較的客観的なものであり、秀吉の敗北を冷静に受け止めているといえるが、こうした見方はきわめて少数に属するものであった。

第1の類型に属するものとしては、小瀬甫庵(おぜ・ほあん)の『太閤記』、竹内確斎・岡田玉山『絵本太閤記』、堀杏庵『朝鮮征伐記』、下河辺拾水『絵本朝鮮征伐記』、川口長孺『征韓偉略』などが代表的なもので、特に最初のふたつは徳川時代に人口に膾炙して、日本人の壬辰倭乱観、朝鮮観に大きな影響を与えた。また加藤清正の家臣であった古橋又玄(ふるはし・ゆうげん)が著した『清正記』も同様の類型に属する記録である。これらの記録は史実とフィクションを交えながら、壬辰倭乱における日本軍の戦功を賛美する立場から書かれており、壬辰倭乱やそれをひき起こした秀吉に対する批判的な省察はまったく見られない。

以上にあげたものはいずれも刊行されたが、民間人による記録の多くは刊行されることなく、家伝の史料として近年の研究によって知られるようになったものである。その代表的なものとして、壬辰倭乱に医僧として従軍した慶念という人物の体験記録である『朝鮮日々記』をあげることができる。この日記では壬辰倭乱の悲惨さが赤裸々に描かれているが、内藤雋輔によって発掘、紹介されることによって広く知られるようになった。<sup>1</sup>

また倉地克直も1669年に岡山・池田藩で作成された「岡山藩家中諸士家譜5音寄」を用いて、そこに収録されている一般藩士たち

---

1 慶念著、内藤雋輔校注「朝鮮日々記」(『朝鮮学報』35、1965年)。

の家譜の中から壬辰倭乱に従軍した人物たちの記録を紹介している。<sup>2</sup> 倉地は、壬辰倭乱の呼称として「高麗陣」という言葉が使われ、国内の戦いと同様の呼称が用いられている事実から、壬辰倭乱が外国との戦争であるという認識がほとんど見られないことを指摘しながらも、日本という「民族的」自覚や、朝鮮に対する蔑視という面だけでは捉えられない多様な意識のあり方を紹介している。

第2の類型に属する記録に関しては次節で検討するので、ここでは省略するが、壬辰倭乱に関する日本側の各種記録の特色として一点だけ指摘しておきたいことがある。それは壬辰倭乱に関する公的記録といえるものが、豊臣政権によっても徳川政権によっても作成されなかったということである。言いかえると、日本では国家の立場に立って壬辰倭乱全体を対象とした公的記録がいっさい作成されなかったということである。そしてこのことは、日本において「正史」というものの編纂が古代の一時期を除いて行われなかったということと深く結びついている。

周知のように、東アジア世界において、歴史という学は特別な意味を与えられてきた。それに対応して、歴史を記録するという営みもきわめて重視されたが、その端的な現われが「正史」というものの編纂であった。中国で始められた正史の編纂という事業は、その周辺地域でも受容され、朝鮮でもヴェトナムでも、王朝が滅びると、その王朝の正史を編纂することが、新しい統治者の義務

---

2 倉地克直『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』(角川選書、2001年)。

とみなされたのである。しかし他の事象でも見られることであるが、儒教文化圏に片足だけを突っ込んでいた日本においては、歴史を記録するという点においても、他の東アジア地域と異なった様相を呈してきた。すなわち、古代においては日本でも『日本書紀』をはじめとして、正史と見なすことのできる書籍が何度か編纂されたが、律令国家が衰退するとともに正史の編纂が行われなくなり、10世紀以後は正史が存在しないという特異な状況が続くことになったのである。

歴史を記録し、歴史書を編纂するという点に関する朝鮮と日本のこのような違いは、壬辰倭乱に関する記録においても如実に現れている。朝鮮では『宣祖実録』という基本史料が残されているだけでなく、柳成龍や李舜臣といった壬辰倭乱の最高指揮者たちの手になる記録が作成されたのに対して、日本では公的記録だけでなく、指揮官たちが直接執筆した記録もきわめて断片的なものが残されているだけなのである。

日本のこうした状況については、いくつかその原因を指摘することができよう。武士たちの教養のなさ、豊臣政権が戦後まもなく崩壊し、徳川政権に取って代わられたこと、などもその原因であろう。しかしより根本的な原因として、歴史を記録しそれを編纂するという伝統が日本では欠如していたことを指摘しなければならない。周知のように朝鮮では、壬辰倭乱によって焼失した朝鮮前期の『実録』を復刊するために多大の努力を傾けたのであるが、歴史を記録してそれを後世に残すということに対する朝鮮のこうした熱意と比較するとき、日本の状況はきわめて対照的である。

そしてこのことは、単に歴史書編纂の問題にとどまるものではなく、壬辰倭乱が日本の敗北であったという認識をもてなくさせた大きな原因のひとつでなかったのだろうか。

### 3. 徳川幕府と大名による公的記録

次に壬辰倭乱に関する各種記録の中で、公的な性格を有するもの、すなわち徳川幕府や近世の大名家によって編纂されたものを検討する。

まず幕府による記録としてもっとも注目されるのは、『寛政重修諸家譜』（以下、『寛政家譜』と略称する）である。『寛政家譜』は、1799年に幕府の命によって編纂が開始され1812年に完成された全1520巻から成る膨大な家系記録である。幕府はこれに先立って『寛永諸家系図伝』を編纂したことがあったが、『寛政家譜』はこれを大幅に補充したもので、徳川時代の最上級武士たちの家系と個人の行跡を記録している。その編纂は各大名や旗本から提出された家譜をもとにして、その真偽を幕府が調査するという方法で行なわれたので、幕府の公的史料としての性格を有しているとみることができる。

『寛政家譜』に収録されているのは、徳川時代中期の時点で存在していた大名と旗本の家系であり、家系が断絶した家門はその支流が存続しているものに限って、史料の残っている範囲で収録することを原則とした。したがって壬辰倭乱において中心的な役

割を果たした小西行長や加藤清正、さらには宇喜多秀家などの家系は収録されていない。『寛政家譜』は家譜という名称からも推測しうるように族譜の一種と見ることができるが、日本の家譜は基本的に傍系子孫を除外していること、政府の命により編纂されたものであること、などの点で韓国や中国の族譜と区別され、琉球の家譜と同じ性格を有している。そしてこれも琉球の家譜と共通していることであるが、重要な個人に関してはきわめて詳細な履歴が記載されており、この個人記録の部分に、壬辰倭乱と関連する記述を多く発見することができる。

壬辰倭乱の際の豊臣軍は全体が9隊に分けられたが、各隊の指揮者は第1隊から順番に小西行長、加藤清正、黒田長政、毛利吉成、福島正則、小早川隆景、毛利輝元、宇喜多秀家、豊臣秀勝であった。このほかの重要な参戦者としては宗義智、鍋島直茂、大友吉統、島津義弘、細川忠興などがあり、また水軍の中心的人物としては9鬼喜隆、藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明などをあげることができる。以上にあげた主要参戦者の中で、小西行長、加藤清正、宇喜多秀家、豊臣秀勝の4名を除くすべての人物が『寛政家譜』に収録されているので、徳川時代の壬辰倭乱に関する公的な認識を示す史料としての価値が高いといえる。特に黒田長政、宗義智、島津義弘、九鬼喜隆、藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明等の伝記部分では、壬辰、丁酉倭乱の際の行跡がきわめて詳細に述べられている。

『寛政家譜』に収録されている人物たちの壬辰倭乱に関する記録の特徴は、そのほとんどが戦勝の記録であるということである。

たとえば、水軍の指揮者のひとりであった脇坂安治に関しては、次のように記述されている。

文禄元年朝鮮の役に浮田(宇喜多一引用者、以下同じ)秀家を総大将とし、陸軍の大將は小西行長、加藤清正、黒田長政等である。水軍の大將は安治および9鬼嘉隆、加藤嘉明である。4月12日に名護屋を発して釜山浦の着船し、そこから水陸に分かれて数箇所の城を攻め破り、しばらくして諸軍がソウルに攻め入り、浮田が陣を構えた。(その途中)安治は数万の敵陣を攻め破り、首千余級を得、生け捕りした者が2百人に及んだ。……慶長2年、ふたたびかの地を征伐しようと諸將とともに海を渡った。……唐島の前にいる板屋船がどうかするとわが軍船渡海の妨害をする。まずこれを追い払おうと熊川に行き、大きな船を造って諸軍一体になって鐘太鼓を合図に進退して討ち取ることを約束しあい、前後を争って敵船を攻撃し、片時の間に敵船数十艘を乗っ取った。残った船もことごとく敗北し、沖の方に向かって逃れるのを、諸軍が追いかけてこれを討ち取った。この事情が名護屋に伝えられると、太閤(秀吉)は書簡を送り、東照宮(徳川家康)からもその戦功を賞賛する書簡が与えられた。<sup>3</sup>

さらにこのほかにも、明の軍隊が立て籠もっていた泗川城を攻撃して手柄を立てた話しや、蔚山に立て籠もった加藤清正軍を救出した話なども記録されているのであるが、総じていえば、安治の戦功のみが述べられていて、李舜臣が指揮する水軍と戦って敗

---

3 『寛政家譜』、937巻、藤原氏支流 脇坂条。

れた話しなどはまったく出てこないのである。

こうした傾向は安治に限られたものでなく、ほとんどの場合、勝利した記録、戦功を立てた記録だけが一面的に強調されている。不名誉な記録としては大友吉統(おおとも・よしむね)の場合が唯一と言ってよいが、吉統に関しては次のように述べられている。

文禄2年朝鮮の役に、明将李如松大軍をひきいて小西行長が籠れる平壤城を攻。行長使を吉統および黒田長政等が許にはせて、援兵をこうといえども、吉統明兵の形勢におそれてこれを救わず。太閤此よしを聞おおいに怒り、吉統がふるまい日本の恥辱なりとて、領国をのぞかれ、佐竹義宣に預けらる。<sup>4</sup>

吉統がこのように秀吉から罰せられたのは、他の武将に対するみせしめとしての意味もあったが、それよりも彼の領国であった豊後国を豊臣の直轄領にしたかったからであるともいわれている。<sup>5</sup> いずれにせよ、『寛政家譜』の中で珍しく不名誉なことが記録されているのであるが、これは大友氏がこの処罰を契機に没落して、徳川政権のもとで存続することができなかったために生じた現象であると考えられる。言いかえると、徳川時代にも大名として存続した家門の場合、壬辰、丁酉倭乱における敗北や不名誉な記録は意図的に避けられたのである。

『寛政家譜』の中で特に注目したいのは、島津氏の薩摩藩と毛利氏の長州藩の場合である。なぜならばこの両藩は壬辰倭乱に加

---

4 『寛政家譜』、114巻、清和源氏(為義流)大友条。

5 池上裕子『織豊政権と江戸幕府』(講談社、日本の歴史15、2002年)。

わったのち、豊臣の臣下として徳川と争ったにも関わらず徳川時代にも存続しただけでなく、周知のように明治維新の中心勢力として、近代日本の建設において核心的な役割を果たすとともに、韓国侵略を先導したからである。‘征韓論’を唱えた西郷隆盛は薩摩藩出身であり、初代韓国統監の伊藤博文と初代朝鮮総督となった寺内正毅は長州藩出身であった。

島津氏で壬辰・丁酉倭乱に出軍した義弘の場合、『諸家譜』では義弘の功績が詳細に描かれている(108巻)。特に丁酉再乱の時に、南原城の攻撃や、泗川における明将・董一元との戦いで戦功を上げたことが特記されている。島津氏の場合、これだけでなく、『征韓録』(島津久通・高柳行文編、1671年刊)という書籍を独自に編纂しているが、これは壬辰倭乱当時の文書史料をも多く収録していて、島津氏による公的な記録としての性格を有している。編者のひとりである島津久通は島津氏の族臣であったことも、このことを裏付けてくれる。したがってこの記録はそれなりの史料価値を有しているといえることができるが、その内容においては壬辰倭乱時の日本軍の行動について、やはりその勝利の側面ばかりを記録していて、この戦争が何を目的として起され、何を結果したのかというような根本的な問題に関しては何の言及もないのである。

柳成龍の『懲毖録』では、壬辰倭乱の教訓を得るために、朝鮮軍の敗北や、内部の混乱なども包み隠さずに描かれているのに対して、日本では壬辰倭乱に関する記録のほとんどが、あたかも勝利した戦争であったかのように描かれている。そしてこうした記録を通じて壬辰倭乱に関する記憶が蓄積されていったのであるが、

明治維新以後、日本が再度韓国に対する侵略政策を推進しようとした際に、秀吉の侵略が‘大陸雄飛’の先駆としてあらためて注目されるようになり、それが手痛い敗北であったことは忘却されてしまった。

こうした全体的な傾向の中で、毛利氏の場合はやや様相を異にしているのが注目される。『寛政家譜』の毛利輝元の部分では、壬辰、丁酉倭乱に関してごく簡略な記述があるだけである。これは輝元が朝鮮に渡った翌年に発病したため、養子の秀元が代わりに出兵したこと、丁酉再乱の際も壹岐に行っただけで、直接参戦しなかったことによるものであろうが、丁酉再乱のときの蔚山城籠城戦で輝元の家臣が多く戦死したことが述べられ、壬辰倭乱が毛利氏にとって苦い経験であったことをうかがわせてくれる。また毛利氏のこうした立場は、あるいは壬辰倭乱に際して朝鮮に渡ったときの輝元が秀吉に送った報告にみえる次のような認識も影響しているのかも知れない。

さてさてこの国手広きこと、日本より広く候ずると申すことに候、今度御人数にては、この国御治めは少分のことに候、そのうえ口通ぜず候、一所一所に通事も物知りあまたいり申すべく、殊の外むつかしきことに候、……このまま唐などへはなかなか人があるまじく候、成らざることに候、少々の大なることにてはなく候、お察し給うべく候、……この状、大坂へ御見せ頼み申し候、絵図もお副え候べく候。<sup>6</sup>

---

6 「厳島文書」(『広島県史』古代中世資料集3、朝尾直弘「16世紀後半の日本」、

倉地が指摘しているように、日本の武将たちは壬辰倭乱を国内の戦いの延長として認識していたのであるが、輝元はそこが日本国内とはまったく異なる異国の地であることを緒戦で思い知らされたのである。逆にいうと、日本軍は朝鮮に関する基本的な情報、すなわち国土の広さや地理、人口などに関する情報をもたないまま侵略戦争を始めたのであった。そして皮肉なことに、壬辰倭乱当時の両国の人口数は歴史上もっとも近接した状況にあったと思われる、輝元の認識は当らずといえども遠からずであった。

しかしこうした輝元のような見方は例外的なものであり、多くの武将たちは自己の戦績を誇るだけで、個々の戦闘ではほとんど勝利を収めながらも、所期の目的をなぜ達成することができなかったのかについては疑問をもつこともなかったのである。

#### 4. 新井白石の認識

次に、公的な記録とはいふことができないが、新井白石が壬辰倭乱をどのように認識していたのかをみることにしたい。白石は周知のように徳川家に儒者として仕え、幕府の中枢をになっただけでなく、朝鮮通信使との関係を改めようとした経歴の持ち主であり、徳川時代の対朝鮮外交において重要な役割を果たした人物である。先にふれたように徳川氏自身による

---

岩波講座 日本歴史 11、1993年、より再引用)。

壬辰倭乱の公的総括は行なわれなかったので、白石の壬辰倭乱観を通じて、徳川政権の立場をある程度うかがうことが可能であると考えられるのである。

白石の代表的な歴史論として著名なのは、あらためていうまでもなく『読史余論』である。この書物は、摂関政治の開始から徳川政権成立までを対象として、日本の歴史を大きく公家の時代と武家の時代に分け、公家の時代が9変して武家の時代となり、さらに武家の時代が5変して徳川政権が樹立されたということを論じている。そして徳川政権の立場に立って執筆されているために豊臣秀吉に対してはきわめて批判的な見方をしているが、その批判は秀吉の国内政治に関するものであり、壬辰倭乱に関する批判はみられないのである。

『読史余論』はその末尾で「秀吉天下の事」として秀吉に関して論じている。「此人匹夫より起り天下を掌にし給いしかば、世の人は是を称するなり。かゝる事我朝にては希なりしかど、異朝には其ためし少なからず。但し時の運に乗ぜられしによれるか」として、秀吉が天下を取ったことを冷笑的に述べている。そして秀吉の政権が2世という短命で終わった原因として5つの失政を指摘しているのであるが、それは検地を厳しくしたこと、厳罰主義を採用したこと、臣下を信用しなかったこと、武家の官位が高くなったこと、奢侈に流れたことがそれである。そして徳川政権のもとではこうした秀吉の統治とは反対の政策がとられたことを指摘して、体制の擁護をはかっているのであるが、豊臣政権の致命傷となった壬辰、丁酉倭乱に関しては一言の言及もない。

『読史余論』では壬辰倭乱に関して何の言及もないのに対して、白石の壬辰倭乱観がよくあらわれているのが『藩翰譜』である。『藩翰譜』は白石が仕えた甲府藩主・徳川綱豊(後に徳川幕府の第6代将軍となって家宣と改名した)の命によって執筆されたもので、大名337家の由来と行跡を記録し、さらに系図が付されている。

『藩翰譜』に収録されている人物の中で壬辰倭乱に参戦したのは加藤嘉明、藤堂高虎、毛利輝元、島津義弘、鍋島直茂、蜂須賀家政、有馬晴信、脇坂安治、宗義智、福島正則、加藤清正などであり、小西行長、宇喜多秀家を除いて、主要な人物がすべてほぼ網羅されている。問題は各人物の描き方であるが、基本的に『寛政家譜』と同様に戦勝の記録で埋めつくされているとすることができる。『寛政家譜』との違いといえば、個別の戦闘に関する考証部分で、史料によって日付が食い違っているものについて推論を加えているのが異なっているだけである。この違いは、白石の儒者としての「合理性」のあらわれとみることもできるが、壬辰倭乱そのものに対する批判はまったくみられない。そもそも徳川家康の壬辰倭乱に対する態度は、自らは直接参戦しなかったものの、それに反対したわけでは決してなかった。秀吉が朝鮮攻撃を最終的に決定するために開いた5宿老、3小宿老、5奉行との会議において、5宿老の筆頭であった家康ひとりが賛成の発言をしたのである。したがって徳川政権としては秀吉の朝鮮侵略を批判しうる立場にはなかったのであり、こうしたことが白石にも影響を与えているのかも知れない。

白石に限らず、徳川時代日本の儒者たちは、「武」に対する「文」

の優位という儒教のきわめて原則的な立場に立って豊臣、徳川政権を批判することはなかった。「武」の支配を認めたとえでの「仁政」の追求、これが彼らに共通する姿勢であったのである。「武」による全国統一という論理の延長で企図された壬辰倭乱に対して批判することができなかつたのも、こうした儒者としての不徹底さと不可分の関係にあったと考えられるのである。

## 5. 明治維新以後への展望

幕末になって日本が欧米の脅威にさらされる中で、征韓の主張が再度高まってくることで、それが明治維新政府にも引き継がれていくことに関しては、これまでも指摘されてきた。そして韓国を併合して初代の朝鮮総督になった寺内正毅が、「小早川、加藤、小西が世にあれば、今宵の月をいかにみらむ」という歌を詠んだことも周知の通りである。こうして明治維新以後の日本において、秀吉は大陸雄飛の先駆者としてふたたび蘇るのであるが、こうした現象は近世における壬辰倭乱認識、すなわちそれに対する批判の欠如の産物であった。

近世における壬辰倭乱認識と近代のそれとの共通性を端的に示すものとして、1924年に参謀本部で編纂、出版された『日本戦史朝鮮役』をあげることができる。この本は、経過表、附表、附図から成る本巻と文書、補伝から成る補巻の2冊で構成されているが、その内容は、近世に編纂された壬辰倭乱に関する各種書物と

基本的に変わるところがない。すなわち、ほとんどが戦勝の記録であり、この戦争が何を目的として、どういう判断にもとづいて始められたのか、所期の目的がなぜ達成されなかったのか、等の基本的な問題に関しては何も語っていないのである。補伝の最後の部分で、「朝鮮役の評」としていくつかの史料を抜粋しているが、「武家事紀」からの抜粋がもっとも大きな部分を占めている。

秀吉晩年ニ及ンデ朝鮮ヲ征伐シ其勇膽古今ニ拔出ス。凡ソ朝鮮ハ本朝ノ属国藩屏タルコト往古神功皇后3韓ヲ征伐セラレシヨリ此方代々其制旧記ニ明白也。其後本朝ノ王威衰エ武家未ダ4海平均ノ化ニ及ブコトナシ。故ニ朝鮮久シク本朝ヘ貢賦ヲ奉ズル事絶エテ中比ヨリ唯隣交ノ好ヲ修スルト称ス。秀吉治世ニ当テ東西南北武化ヲ慕テ不庭ノ賊臣アラズ。故ニ秀吉朝鮮征伐ノ催ヲナシ玉ウ。朝鮮元懦弱国ナルカ故ニ僅カ一戦ニ利ヲ失ッテ国王逃亡シ王子既ニ生捕ラル此時朝鮮征伐ノ諸将志ヲ一ニシテ忠義ヲ竭サンニハ朝鮮ハ云ウニ不及大明国モ一旦敗亡ニ至ルベシト雖モ衆議不正諸将不和ガ故ニ悉ク異国ノ謀ニ落ツ ……。

「武家事紀」は山鹿素行の著述であり、彼の見解が参謀本部＝日本軍部の見解であったわけではもちろんないが、さまざまに存在した壬辰倭乱に関する評価の中で、「武家事紀」の評価をわざわざ長々と紹介しているのは、参謀本部の立場をそれとなく示すものであろう。儒者である山鹿素行の壬辰倭乱観も寒心に耐えないものであるが、近代日本においてもこうした山鹿のような見解が大きな影響力を発揮したのである。

## 6. 現在の問題

壬辰、丁酉倭乱の原因に関しては周知のように色々な見解があり、一致した理解というものは現在も存在していない。しかしそれが無知と誇大妄想から発したきわめて無謀な企てであったということに関しては、大方の意見は一致しているとみてもよいだろう。そうした意味では、近世から近代にかけての壬辰倭乱観は克服されたとみることできるが、戦国の内乱状況を克服して国内統一を達成した豊臣政権に対する高い評価と、壬辰倭乱に関する否定的評価とが総合されないままに並存しているのが現状ではなかろうか。統一を成し遂げるまでの秀吉は好きであるが、それ以後の秀吉はまったく評価できないという司馬遼太郎の見解は、こうした現状を端的に反映したものであろう。

こうした問題を再考するためには、「武家事紀」がいみじくも述べているように、武家による統一政権の成立ということが、ただちに海外への侵略となって現われざるをえなかったという問題、すなわち日本における統一政権の成立が東アジア全体にとってはきわめて不幸なことであったという問題を深刻に省察することが必要であると思われる。そしてそれは、明治維新という変革が東アジア世界にとっては災いとなってしまったという問題と深く結びついていると私は考える。

# 清末中国における「アジア」論によって引き継がれた「歴史の記憶」 — “他者”としての日本と朝鮮を併せて論じる

章清 (復旦大学)

本稿は、清末中国における「アジア」論によって引き継がれた「歴史の記憶」について検討するものである。清末中国の「アジア」に対する議論に関しては、すでに多くの論者が議論しているが、それらの議論は主として問題の中心を「アジア」自体に、特に日本における「アジア」論の展開との対照に置いている。<sup>1</sup> しかし卑見によれば、清末中国の「アジア」論を検討するには、この問題を清末における「世界」認識の歴史の長いタイムスパンの中で捉えるべきであろう。つまり「アジア」に関する言説は、「天下」から「万国」へとという認識転換の最中に顕著となったのである。それと同時に、清末において「アジ

1 この分野の研究については、葛兆光「想像的 and 实际的：誰認同“亜洲”？— 關於晚清至民初日本與中国的“亜洲主義”言説」（『台湾大学歴史学報』2003年第30期）を参照。最近の研究として、孫江「“東洋”的變遷— 近代中国語境裡的“東洋”概念」；黃東蘭「“亜洲”的誕生— 近代中国語境裡的“亜洲”概念」（ともに孫江主編『新史学（第2卷）— 概念・文本・方法』[北京中華書局、2008年] 3~26、27~46頁に収録）を参照。

ア」の「他者」つまり朝鮮と日本に対する認識もまた併せて検討される必要がある。さらに、このような問題を仔細に検討するに際しては、対象を個別の思想家の言論に限るのではなく、その他の文書にも注目しなければならない。そこで本稿では、「歴史の記憶」を引き継がせる特殊な媒体である「策問」と教科書とに依拠することとし、それによって朝鮮と日本の「他者」としての「イメージ」を提示することを試みる。「歴史の記憶」が清末に呼び起こされたのにはそれ相応の理由がある。「3千年来未だ有らざる所の大変局」に遭遇し、「記憶」の「倉庫」が広く開かれたが、それは同時に次のような2つの要因によって導かれたのである。つまり、1つは「反満」によって促された漢族復興の記憶、もう1つは外来要素によって開かれた中国史に関する記憶である。これらの問題を検討することは、中国史の記憶の引継ぎの一側面を明らかにするのに資するものぞめる。<sup>2</sup> 外来要素を「アジア」意識の形成を促した具体的要因と捉え、また特殊な媒介に着目し、清末中国で「歴史の記憶」がいかにか引き継がれたのかを詳細に検討することで、あるいは新しい視野を獲得できるかもしれない。ここでの鍵は、「策

---

2 王汎森は、清朝末年における歴史的記憶の復活と、服喪制度など日常生活における伝統のひそかな再現が、章太炎を代表とする知識人達の現実政治における選択にいかにか影響したかについて分析を加えている。沈松橋は、清末知識人による中国の「民族的英雄」の系譜の確立を取り上げ、歴史を書くことと国族(民族)イメージとの関係を論じている。王汎森「清末の歴史記憶與国家建構—以章太炎為例」(『思與言』第34巻第3期、1~18頁、1996年9月)；沈松橋「振大漢之天声—民族英雄系譜與晚清的国族想像」(『中央研究院近代史研究所集刊』第33期、77~158頁、2000年6月)。

問」にしる「教科書」にしる、いずれも特別な意味を有していることである。「策問」は国家試験を受験する際の答案であり、設「問」者にしる応「策」者にしる、いずれも大体において当局の観念形態（イデオロギー）を遵守している。教科書も同様に国家の意志を体現した産物である。よって、「歴史の記憶」の引き継ぎがいかにして清末における思想の発展変化の象徴を構成したのかもまた、この特殊な媒介に従って「提示する」ことが出来る。重要なのは、「伝統」あるいは「歴史」がいかにして「創造」されたのか、「歴史の記憶」はどのような方法でもって引き継がれたのか、ということである。<sup>3</sup>

## 1. 「天下」：居場所を欠いた「アジア」

やはり所謂「天下」から議論を始めなければならないだろう。孟子は「諸侯の寶は3つ、土地、人民、政事なり」と言った。<sup>4</sup> このように、中国の伝統的知的資源の中には政治秩序に対する適切な処理も含まれていたことは否定できない。現代の研究者はその意味を解釈して「この孟子の言は、少なくとも

<sup>3</sup> Eric Hobsbawm and Terence eds., *The Invention of Tradition* (Cambridge : Cambridge University Press, 1983) ; Benedict Anderson, *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (revised edition, London : Verso, 1991).

<sup>4</sup> 『孟子』盡心下。注に「諸侯正其封疆、不侵隣國、隣國不犯、寶土地也。使民以時、民不離散、寶人民也。修其徳教、布其恵政、寶政事也。」とある。焦循『孟子正義』（北京中華書局、1987年、1001頁）参照。

形式上において、土地、人民、主権によって『国家』の境界を定める西洋政治学の見解にすでに近接している」と指摘する。<sup>5</sup> しかし、「天下」と「中国」、「四夷」の区別には、国境によって画定される現代社会の「国家」間の違いとは異なった意味合いがある。<sup>6</sup> この点について、すでに顧炎武(1613~1682)の『日知録』の「亡国」と「亡天下」に関する著名な議論が、以下のように明確に述べている。つまり、「『国を亡ぼす』ということがあり、『天下を亡ぼす』ということがある。『国を亡ぼす』と『天下を亡ぼす』とはどこで弁別されるのか。いわく、『天子が姓を易え国号が改まるのが国を亡ぼす』ということで、仁義が行き詰まって、獣を連れて人を食わせ、人同士が食い相をしようとするに至るのが天下を亡ぼすということである』と。……だから天下を保持することを知ってこそ、その国を保持することを知る。国を保持するのは、その君主とその家臣のごとき上流階級が考えることである。天下を保持するのは、一人一人の人民が関与して責任を持たねばならないことなのである。」と。<sup>7</sup> この話は広く引用され、確かに重要性を有し、「道尊於勢」の理想を強化し、王朝の盛衰より中国文化のほうを重視する知識人の見解を体現している。陳寅恪も指摘するするに、王朝交

---

5 余英時「国家觀念與民族意識」、(『文化評論與中国情懷』、台北允晨文化実業股份有限公司、1990年所収、18頁)。

6 葛兆光は各種の地図を結合して、「天下」に関するイメージと「中国」に対する認識を提示している。葛兆光「天下、中国與4夷—古代中国世界地図中的思想史」(『學術集林』第16巻、上海遠東出版社、1999年)。

7 顧炎武『日知録』巻13、「正始」。黄汝成『日知録集釈』(長沙岳麓書社、1986年、471頁)に依拠。

代に際会した知識人たちに対し、その「品行の高低」と「学術の差異」については彼らを一概に論じることはできないが、しかしその「心の中にはある共通した思想がある。それは、国は滅ぶことがあっても、歴史は滅んではならないということだ」。<sup>8</sup> これはまさに先行研究の強調するように、古代中国では主として「中国は1つの文化体系と看做され、一定の政治領域ではなかった」<sup>9</sup> であり、過去の「天下」という語には広義・狭義2つの意味があって、それぞれ今日の「世界」と「中国」に対応している。<sup>9</sup> 錢穆(1895~1990)は「国」と「天下」とを論じた文の中で、さらにこれを「心胸之知」と「耳目之知」とに区分している。<sup>10</sup>

どのように解釈するにせよ、「天下」は中国文化において象徴

- 
- 8 陳寅恪「吾国学術之現状及清華之職責」(『陳寅恪集・金明館叢稿2編』[北京3聯書店、2001年] 361~363頁)。
- 9 邢義田「天下一家—中国人的天下觀」(劉岱總主編『中国文化新論·根源篇』[台湾聯經出版公司、1981年] 425~478頁)；羅志田「先秦的5服制與古代的天下中国觀」(『学人』第10輯、1996年9月)を参照。
- 10 錢穆は「私は幼い頃、我が国の人々が古代の人々を譴責するのをつぶさに聞いていると、『古代の人々は関所を閉じて外界との往來を絶ち、天下があることを知らなかった』といい、むやみと『国の外に天下がある』と言っていた。但し中国の万里の長城のようなものは、確かに『関所を閉じて外界との往來を絶っていた』と言えようが、しかし『中国の古代の人々は長城の外に異民族がこの同じ天下のもとに存在していることを知らなかった』などと言う事はできない。ただ天下の内側にあって関所を閉じて外界との往來を絶つことが出来たのは、中国文化の長所であって、中国文化の短所ではない。どうして西洋の帝国主義資本主義と比べられようか。もし中国の古代人は西欧を知らなかったというのなら、それは『耳目之知』であって、『心胸之知』ではない。当時の西洋人もどうして中国の存在を知りえたのだろうか。」と述べている。錢穆「晩学盲言·国與天下」上(『錢実4先生全集』[台北聯經出版公司、1998年] 第48冊、418頁)参照。

的な意義を有し、かつ士大夫の役割や身分と密接に結びついている。いわゆる「天下に道あり」は、まさに士大夫の精神的拠り所であり自説の基盤を形成した。このことは、清末の新しい文脈の下での「天下」に対する論争を検討する上でも、それ相応の基礎を提供してくれる。

次に、清末の科举制度改革の中で強化された試験形式である「策問」について検討するが、まず補足説明をしておこう。「策問」とはつとに存在した形式で、その歴史は科举開始よりもさらに早くに遡るだろう。歴代状元の殿試を見れば、その中に「天下」を立論の中心としている様子を見て取るのは難しいことではない。いわゆる「偃武修文(戦を止めて文教を興す)」や「徳化天下(天下を徳化する)」などはまさしく「天下」の有する文化的意義を説明している。たとえば「策問」中で具体的に「天下」の内容を論じることは多くなくとも、その提示形式がやはり突出しているのは明らかで、このことはさらに、何を「天下」というか明確でもなく、「天下」は地理知識上の存在でもないにもかかわらず、「天下」が具備する文化的象徴的意義は、かえって帝王言説の核心となっていたことを表している。いわゆる殿試の「策問」には、「奉天承運、皇帝制曰」で始まること以外にも、往々にして次のような大同小異の表現が見られる。つまり、「朕紹承大統、撫禦万邦」、あるいは「朕寅紹丕基、撫綏寰寓」、「朕寅承洪緒、統馭寰区」である。用いる言葉に違いはあれ、いずれも伝えようとしているのは、1つはその権力の来源が皇室の系統にあること、2つはその統治範囲を強調していることである。このように、「天下」(あるいは「寰寓」「万邦」の類の字句)も一種の象

徴となっている。さらに、単に皇帝だけがこのことに強い関心を有していただけではなく、その教導のもと、「天下」に対する知識人の認識も同様なものであった。<sup>11</sup> しかし、「状元策」の「天下」に対する叙述からは、「天下」をもって自問自答するのは、多くは一種の習慣的な態度であり、特定の時期の「辺靖」に関する場合を除き、実質的な内容は少なく、単にいわゆる「治道」に合致させているにすぎなかったことが容易に看取される。たとえ「策問」であっても、必ずしも八股文と何か違いがあったわけでもない。清末の科挙試験でも、この方面の題目は少なくなく、例えば、光緒6年庚辰(1880)の会試答案集の「欽命4書詩題」第2題は「遠人を柔ぐれば、則ち四方之に帰し、諸侯を懐くれば、則ち天下之を畏る」であった。これは『中庸』に拠る題目で、答案集所収の王詠霓(1839~1916)や沈曾植(1850~1922)等の人々の答案は、あきらかに8股文の書式の束縛を受けており、新しい息吹はほとんど感じられない。<sup>12</sup>

しかし、「天下」構造という言説が強調されたからといって、そのことは伝統中国がその他の「国家」と「民族」に対する認識を欠いていたことを否定しようとするものではない。『史通』「二体篇」は『春秋』に言及して次のように述べている。曰く「そもそも春秋は、日月を繋いで順序とし、歳時を列ねて相継ぐもので、中国と

11 鄧洪波・龔杭雲編著『中国状元殿試卷大全』(上海教育出版社、2006年、上下冊)参照。

12 顧廷龍主編『清代硃卷集成』(台北成文出版社、1992年、45~50冊)。この題目に対する王詠霓の答案は45冊、201~204頁、沈曾植の答案は46冊、261~264頁)。

外夷は、年を同じくし世代を共にしており、その事柄をつぶさに記載して目前に表さないものはない」と。周辺の民族ないし国家の歴史や文化を記述することもまた中国史書の伝統と言える。各時代の史書はおおよそ「列伝」や「志」の形式で、その他の民族ないし国家の状況を紹介している（主として周辺国家、特に朝貢関係・宗属関係にある国家に偏っている）。清初に編纂された『明史』では、西洋国家も中国史書の著述対象となっている。『列伝』では、「土司」や「西域」のほか、さらに「外国」列伝も含まれる。ただし、おおよそのところを言えば、中国は主として関連する歴史的情報に依拠して、世界に関する知識を「想像」していた。『明史』について言えば、当時すでに「天下には5大洲がある」という知識を受容していたとはいえ、しかしながら、必ずしもそれを信じていたわけではない。『明史』には次のような記述がある。

万暦の時代、その国の人利瑪竇が京師に至り、『万国全図』を作成し、天下には5大洲があると言った。つまり、第一を亜細亞洲といい、その中にはおおよそ百余国があり、中国はその1つである。第2は欧羅巴洲といい、その中にはおおよそ710余国あり、イタリアはその1つである。第3は利未亞洲といい、また百余国ある。第4は亜墨利加洲で、土地はさらに大きく、領土は相連なっているが、南北2洲に分かれている。最後に墨瓦臘尼加洲が発見され、これを第5とするが、これで域中にある大地はすべてだ、と。その説はでたらめで渺茫としており確かめようもない。しかしその国の人が中土に満ち満ちている以上、その国の土地は確かに存在しており、偽りではない。<sup>13</sup>

ここに言う「その説はでたらめで渺茫としており確かめようもない」とは、まさに世界地理の知識が受け入れられ難かった理由を示しており、そのような世界地理知識は、中国本土において関連する歴史的情報に依拠して展開されてきた「イメージ」を超えていたのである。しかし、「その国の人が中土に満ち満ちている以上、その国の土地は確かに存在しており、偽りではない」とも指摘しており、これは認識の転換がいかんして起こったのかを示している。畢竟、中国と西洋との間におりる人々の往来を通じて発生した実際の交流は、すでに否定しようも無かったのである。ただし総じて言えば、いわゆる「6合の外、聖人存りとするも論ぜず」の觀念がやはり大きな影響力を持っていた。それに応じて、世界地理分野に関する知識も様々な実証しにくい「イメージ」に満ち満ちることとなった。中国と外国との直接の交流が起こると、このような限界性がはっきりと現れた。姚瑩(1785~1852)が批判するように、「これまで地理について語る者は、みな中国には詳しいが外夷については簡単に触れるだけだ。『史記』や『前後漢書』など正史の外夷列伝も、多くの人は捨て置いて読みもしない。まして外夷の書などいうまでもない」。<sup>14</sup> この意味でいえば、「天下」概念の主導下では「アジア」に居場所はなかったと指摘しても、間違いではあるまい。

13 『明史』「外国伝」巻326(上海古籍出版社、926頁)。『205史・明史』(上海書店出版社、1986年、8703頁)に依拠。

14 姚瑩「華人著外夷地理書」(『康輜紀行』巻9)。引用は『中復堂全集』(『近代中国史料叢刊統編』[台北文海出版社、1981年]第6輯、3309頁)所収。

## 2. 世界構造の中の「アジア」

言うまでもなく、いわゆる「アジア」像が描き出されたのは、イエズス会宣教師の「援西入中（西洋文化を援用して中国文化に入る）」による。マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552~1610) が明の万暦10年(1582)に中国に派遣されて来た。伝教活動のほか、彼は天文、算学の知識を伝える活動を展開し、10余幅の世界地図を作成した。地図中には当時すでに知られていた世界の五大陸 — 欧羅巴、利未亜、亜細亜、南比亜墨利加、墨瓦臘泥加が描かれていた。<sup>15</sup> 地図のほか、明の天啓3年(1623)にアレニ (Jules Aleni, 1582~1649) が著した『職方外紀』は、中国語で編集された最も早い世界地理の著作である。その内容は、巻1、亜細亜洲、巻2、欧邏巴洲、巻3、利未亜洲、巻4、亜墨利加洲・墨瓦臘尼加洲、巻5、四海総説で、五大陸各国の風土や民情、気候、物産を紹介している。「亜細亜総説」は次のように述べている。つまり、「亜細亜は、天下の一大洲であり、人類発祥の地、聖人賢者が最初に出現した都会である」、「そのうち大きいものとして先ず中国が挙げられる」と。さらに中国のアジアにおける地位について、「中国はその東南に位置する。古代より帝王が帝位に即き、聖哲が次々と現れ、名声・文物・礼楽・衣冠之美、およびその山川・土俗・物産・人民の富庶は、遠

---

15 マテオ・リッチは『坤輿万国全地図』の注釈の中で「地勢に基づき土地を分けて五大陸とする」と明示している。当該図は1602年に作成された。禹貢学会1936年発行。「墨瓦臘泥加」とは想像上の大陸である。

近のともに尊敬するところであり、その北極(帝王)を仰いでいる」と述べている。<sup>16</sup> 上述のアジアに関する描写は賛美の言葉ばかりだが、しかし巻2の「欧邏巴総説」と対照してみると、その意味するところがよく分かる。巻2の中には「天下第2の大洲は欧邏巴という。……およそ欧邏巴にある大小の諸国は、国王から庶民に至るまでみな天主教・耶穌正教を奉じており、少しも異教徒が入り込むことを許さない」とあり、「欧邏巴諸国はいずれも学問を重視している。国王は広く学校を設立し、国ごとと郡ごとに大学や中学があり、邑ごとと郷ごとに小学がある。」と強調している。さらに「諸国で読まれる書籍は、みな聖人賢者の著述したもので、古代より相伝えられたものだが、もっぱら天主教経典をその宗旨とする。たとえ後世の賢人による著作でも、必ず大道に合致し、人心に有益なものでなければ国内で広めることを許されない」<sup>17</sup>とある。アジアの記述に比べ、ヨーロッパの特徴が学問と信仰の重視にあることが特に強調されている。

中国を「アジア」に位置づけたことが中国の知識人に與えた衝撃はやはり大きかったといわねばなるまい。葉向高(1559~1627)の『「職方外紀」序』は次のように述べる。つまり、「泰西の艾君にはまた『職方外紀』があり、その内容はどれも我が中国ではいまだかつて聞いたことのない、思いもよらないことばかりである」、さらに「その言うことは極めて明確で根拠があり、道家のいう諸天

---

16 謝方『職方外紀校釈』(北京中華書局、1986年、32~33頁)。

17 謝方『職方外紀校釈』(北京中華書局、1986年、69~70頁)。

や釈迦のいう恒河や須弥のような、未来永劫人跡の至ることの無いような桁はずれで荒唐無稽なものではない」と。瞿式穀の『職方外紀小言』もまた次のように指摘する。つまり、「試しに地図に基づいて論じてみると、中国が古めるのは垂細垂の10分の1で、垂細垂が古めるのはまた天下の5分の一なのだとしたら、赤鼎神州(中国)の外に、赤鼎神州のような国が10のうち9あるのに、わずかにこの一地方を支配して、天下の全てを挙げてことごとく蛮貉だと斥けるのは、井の中の蛙が誇っているのと変わらないのではないか!」と。<sup>18</sup> さらに李之藻(1565~1630)の『刻職方外紀序』は特に言及して「これほど土地が大きいとはいえ、天の中にあっては一粒の粟にすぎない。我が州・我が郷などさらに一粒の粟の端にすぎない」と述べている。<sup>19</sup>

ここに「アジア」言説の中国に対する意義—「アジア」言説が「天下」を暴きだす利器を作りよでるといふこと—がはっきりと示されている。ただ「アジア」の一部分に過ぎないものをどうして「天下」と言うのかと。しかし、ここに言う衝撃も、依然として一部の知識人の中で起こったにすぎず、イエズス会士のもたらした地理の新知識がより広範な層に受け入れられることはなかった。『4庫全書総目』は『職方外紀』を紹介して、その「記述はみな絶域の風土に関することで、古代からの輿図には記載のない事柄である」と認めているが、しかし「述べるところは珍しい話で真偽を追究

---

18 葉向高『「職方外紀」序』、瞿式穀『「職方外紀」小言』は謝方『職方外紀校釈』、9~10頁、13~14頁)を参照。

19 李之藻「刻職方外紀序」(『天学初函』[台湾学生書局、1963年] 1269頁)。

することの出来ないものが多く、大袈裟な表現が多いのは免れないようである」と述べている。マテオ・リッチの『坤輿図説』に対する紹介はさらに面白く、その中に記されていることは東方朔の『神異記』や周密の『癸庚雜識』などの書と「全く合致している」と看做し、このため「恐らくは彼が中国に東来して以後、中国の古書を目にし、これに基づいてその論を著しく変えたのだろう。必ずしも内容のすべてが本当のことではない」とする。<sup>20</sup> マカートニー (George Macartney, 1733~1806) の使節団の来華についても、中国語世界ではこの事件を伝えるに、天朝がいかん「四海を占拠した」か、そして遠く海のかなたにある外夷のほうもまたいかん「心より帰服し」「万国が朝見にやってきた」という語り方がなされた。

イエズス会士について知識伝播の役割を果たしたのは、主として新教の宣教師だった。ある研究者の指摘によれば、来華したイエズス会士は、中国の官僚学者たちのキリスト教に対する恐怖と不信感を緩和するために、ヨーロッパの「神話」と「神話的歴史」の伝播に務めたので、中西文化の最初の接触には、実は中国を世界の中心とする思想とイエズス会士の伝えるヨーロッパの神話との戦いが含まれていた。<sup>21</sup> 一方、19世紀当時には、西洋が有した「強勢」の意味はそれ以前よりも一層甚だしいものとはった。あ

---

20 『四庫全書総目』巻71「史部・地理類」4、『職方外紀』の条、『坤輿図説』の条（北京中華書局、1983年、上冊、632~634頁）参照。

21 陳明生「南懷仁来華耶穌会士の地理学著作（1584~1674）」（魏若望編『南懷仁—魯汶国際學術研討会論文集』[北京社会科学文献出版社、2001年] 123~136頁）。

るいは堅船利砲(強力な軍艦と性能のいい銃砲)によってのみ西洋知識に特殊な意味を付與することができたのかもしれない。ミュアヘッド(William Muirhead, 1822~1900)の『地理全志』巻一「地理総志」の「亜西亜全志」は次のように述べる。つまり、「亜西亜は5洲のうち一番で、その中は連峰がぐるりと取り囲み、高原や広野があり、文化が集り、各種の物が雑多に溢れかえり、気候は寒暖が程良く、肥沃な土地もあれば痩せた土地もある」と。しかしその「政論」部分では、「学俗」に言及して「洲内の学俗は優劣がばらばらである。かつては5洲の中で最も鋭敏であったが、今はだいたい衰微退廃してしまっている」と述べる。その一方で「欧羅巴洲全志」の「政論」部分では、「学俗」は「学芸」と呼び改められ、「洲内の学芸が優れていてよく備わっていることは、5洲の中で一番である」と強調している。<sup>22</sup> このほか、エドキンス(Joseph Edkins, 1823~1905)の翻訳した「西学啓蒙16種」のうちの『希臘志略』、『羅馬志略』、『歐洲志略』等の歴史地誌分野の著作でも、「ヨーロッパ」に対する賞賛が強調されていた。『歐洲志略』は主にヨーロッパがいかにして繁栄したのかを伝えるもので、「中朝の道光初年以來、ヨーロッパの大局は以前にも増して大きく変化し、この30年の間にそのような情勢変化の激しさは頂点に達した」とする。つまり、「今ヨーロッパ地域の諸国の政治は、以前よりも適切なものとなり、民衆はみないよいよ自主を得た。そして諸々の技術や技芸は日進月歩の進歩を遂

---

22 慕維廉『地理全志』巻1、巻2引用は王西清・盧梈青輯『西学大成』(上海辭6堂書坊、1895年、寅編「地学一」、1~2頁)に拠る。

げであり、それは前代にはありえなかったことでめる。なんといろ繁栄ふりだろろ」。<sup>23</sup> さらに『泰西新史攬要』の見解について補足しておこう。ティモシー・リチャード(Timothy Richard, 1845~1919)はその訳序の中でこのように強調している。つまり、中国はかつて「巍然とアジアの中に抜きん出た最も歴史の長い大国であり、その名声は遠く他の大陸にまで響き渡っていた」、しかし、「今日に至っては、ちっぽけな日本にさえ対抗することができなくなってしまった。誰の咎なのか、誰の咎なのか！」と。<sup>24</sup>

新教の宣教師が創刊した刊行物から、この問題に関連する論述の転換がいかにして起こったのかをおおよそ理解することができる。宣教師達による中国語の月刊雑誌『遐邇貫珍』では、中国と外国に言及する際、主に「中土」と「泰西」、「列邦」、「外邦」、「西邦」の表現を用いており、中国と外国を含めて「天下」「瀛寰」の語も用いている。新しい地理知識を伝えるのと同時に、宣教師たちは中国の世界観に対する疑問も提起している。『遐邇貫珍』にミュアヘッドの『地理全志』の摘要を掲載した際、その編者は「中国の地理書を検討してみると、巻物は殆どなく、その中に記載されていることも詳細さに欠け、記述内容も大半が中国の一部に限られているが、それでもその書を天下地輿というのは、天下を軽んじるものだといわざるを得ない」と指摘している。<sup>25</sup> 外国人にとって、「天下万国」という表現は、自己の価値観を擁護する要素をも含ん

23 『歐洲史略』(総稅務司署印、1886年、187~188頁)。

24 李提摩太訳、蔡爾康述、『泰西新史攬要』訳本序(上海広学会、1895年)。

25 『地理撮要』文後語(『遐邇貫珍』第3巻第6号[1855年6月]、5頁)。

でおり、それは往々にして宗教的「普遍性」に基づき天下一家の心情を伝達しようとするものであったことは否定できない。『遐邇貫珍』掲載のある一文は次のように指摘している。つまり、「各国の風俗は異なるのだから、各国がそれぞれその宗教に従えばいいと言う人がいる。しかし私は、人はみな同類なのだから、宗教を同じくし、万国を合わせて同じ神の赤子とならなければならないと思う。さらに人はみな最初の父母2人の後裔であり、もともと1つの教えを信奉するべきであり、そうして初めて恭しく神の厚い情けをお受けし、天のご加護をいただくことができるのだ」と。<sup>26</sup>その後「万国」の意味は、次第に宗教を越えた「普遍性」の表現に落ちていく。例えばマーティン(W.A.P. Martin, 1827~1916)の翻訳した『万国公法』では、その「凡例」に特に次のように指摘している。つまり、「この書の記載している条例を万国公法と名づける。それは諸国で通用している条例であって、一国の勝手にすることの出来るものではないからだ。またこの条例は各国の律令に類似しているので、それゆえ万国律令とも呼ぶ」と。<sup>27</sup>

来華西洋人のもたらした世界地理関係の知識をざっと整理することも、清末中国におけるこれらの知識の受容過程を検討する上でそれ相応の基礎を提供してくれる。ここで特に注意しなければならないのは、中国本土ではどのような背景のもとでこれらの知識を受容したのかということであり、この点に大まかな分析を加

---

26 「続地理撮要終」(『遐邇貫珍』第3巻第9号[1855年9月]、10頁)

27 恵頓著、丁韞良訳『万国公法』(上海書店出版社、2002年、4頁)。

えることで、「天下万国」の受容がどのようにして起こったのか、またその際の困難はどこにあったのかを理解することができるのである。マッシーニは、「万国」の語が初めて現れるのは1854年の羅森の『日本遊記』だとするが、それは恐らく正確では無いだろう。<sup>28</sup> 実は「万国」という名は、中国では普通の表現で、『易経』乾には「<sup>はじ</sup>首めてもろもろの物を生い出でさせ、またついに万国がみな安らかに治まるようにさせるのである」との表現があり、杜佑の『通志総序』にはさらに「万国の道は異なっても、必ず諸夏に通じる」との表現がある。重視すべきは、いわゆる「万国」は中国古代の文献において「万邦、天下、各国」と類似の表現として用いられているが、しかし「諸夏」とは対になっており、「諸夏」が「万国」より上にあることが強調されているのは疑いない。中国の知識人は次第に「天下万国」を受容していったが、それにもかかわらず、いわゆる「万国」とは一体何を指すのか、それについて議論すべき点が全くないわけではないところに、この問題の複雑さがある。<sup>29</sup> この当時の中国士大夫が抱く天下観と、その言うところの万国とを比べてみれば、やはり天下の万国であって、中華は天下の特殊な位置を占めることが依然として強調されており、両者はちょう

---

28 馬西尼『現代漢語辞彙的形成—19世紀漢語外来詞研究(The Formation of Modern Chinese Lexicon and its Evolution toward a National language : The Period from 1840 to 1898)』(黄河清訳、上海漢語大詞典出版社、1997年、「付録2：19世紀文献中的新詞詞表」、246頁)。

29 方維規は19世紀後半の少なからざる本の書名に「万国」の2字が用いられていることを指摘している。「論近代思想史的“民族”“Nation”與“中国”」(『21世紀』2002年4月号、33~43頁)。

ど対照を成している。徐繼畚輯(1795~1873)の『瀛寰志略』は中国を表現するのによく「中土」を用い、これに対応して全世界の土地を「四土」と呼ぶが、これは4洲(4つの大陸)の意味である。劉鴻翱はこの書の『序』の中で「万国」に言及し、「そもそも中国は天地の心にして、4夷は天地の4肢である。ゆえに開闢以来、神靈が相次いで生まれ、伏羲・神農・黄帝・堯・舜・禹・湯・文・武が天に代わって帝位に即き、天君は安泰で百官は命令に従い、聖人が現れ万国はみな平安であった」という考えを依然として遵守している。<sup>30</sup> マーティンが翻訳した『万国公法』に対する、この当時の中国士大夫の表現も、全く意味のないものではない。ある者は「今、9州の外の国が林立しているが、法によってこれを縛り繋がなければ、何によって国を存立させるのか?これこそマーティン教師が万国公法を翻訳した理由である」と指摘し、またある者は「試みに天下の大局を観るに、中華は首善の区にして、4海は会同し万国が来王してきたが、それは遙か遠くにまでは及んでいない。この外の諸国は、春秋時代の大列国である」と強調している。<sup>31</sup> これらの記述では、中国は「万国」の外にあるようである。このため、清末中国における世界秩序に関する表現に対して、「万国」を受容しているかどうかを基準とすることはできない。「万国」自体が「天下」の「万国」であるかもしれないからである。この点に関する鄭観応(1842~1922)の記述は、世界観の転換がどのようにして起こったの

---

30 徐繼畚輯著『瀛寰志略』(台北商務印書館、1986年、6、37頁)。

31 董恂「序1」、張斯桂「序2」(『万国公法』、上海書店出版社、2002年、1~3頁)。

かをおおよそ表している。つまり、「我が中国のごときは、自ら地球の中心に在ると言い、概して他のものを夷狄視し、これまで領土を区切り自ら守りを固め、遠略に勤めずに来た」。たとえ西洋諸国と通商するようになってからでも、「中国も自らが万国のうちの一國となることを潔しとしなかった」と。鄭観応の見解によれば、「そもそも地球は球体で、東西もない以上、どうして中心や辺縁があろうか。同じく天地の下にあるのに、どうして強いて夷と夏に分ける必要があるだろうか。もし中国が自らを万国のうちの一國と看做すことができたなら、西洋の公法もその中に必ずや中国だけを欠くわけにはいかなくなるし、我が中華の法律もまた万国に行なうことができるだろう」と。<sup>32</sup> このように、重要なのは「天下万国」を受容することではなく、中国が「万国のうちの一國」であることを受容し、他国との間に「国」と「国」との対等な関係を確立することにあるのである。

### 3. 日本由来の「東洋史」

アメリカ人研究者のレイノルズ(Douglas R. Reynolds)はかつて次のような見解を述べている。つまり、「1898年から1910年の12年間に中国で起こった思想上および体制上の転換

---

32 鄭観応『易言』、「論公法」、引用は夏東元編『鄭観応集』(上海人民出版社、1982年、上冊、67頁)。

は、いずれも人の注目を引く成果をあげている。しかし、その過程全体を通じて、もし改革の各段階において中国の見本となりそれに積極的に參與した日本の存在がなかったら、これらの成果は得られなかっただろう」と。<sup>33</sup> 清末中国の「アジア」論を詳しく検討するうえで欠かせないのが、まさに「日本ルート」である。福沢諭吉(1834~1901)が1875年に著した『文明論之概略』は現代文明を次のように定置している。つまり、ヨーロッパ各国とアメリカは「最上の文明国」、トルコ、中国、日本等は「半開の国」、アフリカとオーストラリアは「野蛮の国」で、さらに野蛮、半開と文明とは「人類の当に経過すべき階級なり」と強調している。<sup>34</sup> 福沢氏が1885年に提起した有名な「脱亜論」は、さらに日本に極めて大きな影響をもたらした。ある論者の述べるように、「脱亜入欧」は、近代日本における、少なくとも1つの基本的なテーゼであった。「我れは心に於いて亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」という福沢諭吉の『脱亜論』の言葉は、その後ほぼ半世紀にわたって、多かれ少なかれ近代日本のあり方を基本的に規定した一つの命題であった。<sup>35</sup>

「アジア」をめぐる日本の論述こそまさに中国のアジア意識を直接的に強め、それに基づいて新しい「アイデンティティー」が生まれたのである。この側面において所謂「他者」とは特別な意義

---

33 任達著、李仲賢訳『新改革革命與日本』(南京江蘇人民出版社、1998年、7頁)。

34 福沢諭吉『文明論概略』(北京編訳社訳、北京商務印書館、1959年、9~10頁)。  
記者付記：翻訳にあたっては日本語原文を直接引用した。

35 野村浩一、張学鋒訳『近代日本の中国認識』(北京中央編訳出版社、1999年、110頁)。  
記者付記：翻訳にあたっては日本語原文を直接引用した。

を現す。梁啓超(1873~1929)の『西学書目表』史学部分は最初に『万国史記』を挙げるが、それはこの書がそれだけ注目に値する書であったからである。この書は清末の中国知識人に重視され、宋恕(1862~1910)は友人宛ての書簡の中で、『万国史記』について「ぜひ一度丹念に読まなくてはならないし、さらに広く友人や門生に読むよう勧めるべきだ」と述べている。そしてそれは他でもなく、「地球万国の古今の政教の源流について、この書の説明は極めて道理に適っており、我が国の人には出来ないものだから」だった。<sup>36</sup> では、『万国史記』は一体どのような点で注目に値したのだろうか？ その中には天下と万国に対する認識の転換について、極めて豊富な意味を含んでいる。重野安繹(1827~1910)撰の『万国史記序』は、この書が「宇宙は甚だ大きく、万国は甚だ多く、林立して各々互いに覇をととなえあっていて統一されていない」とはっきり指摘していることを肯定的に捉えている。そして特にこれを満清と比較して、中国が「万国の史書をもって一国の史書とするようなものだ」と批判している。さらにこの『序』は続けて、

私が読んだ漢土の史書はどれも、いわゆる外国伝や異域志において、それらの小ささをあざ笑うものばかりだった。彼らは中土を以って自認し、威厳に満ちた態度で万国に臨んできた。強大で自分を超えるものであっても、これを夷狄視しないのであれば、藩属として遇し、政治の得失も国勢の強弱も相関せず、

---

36 宋恕「致貴翰香書」(1895年7月、胡珠生編『宋恕集』[北京中華書局、1993年]上冊、533~535頁)。

彼は彼、我は我、中国が偉大な理由は、つまり相手が小さい理由だと。近年、魏黙深という、海防を論じることを好み、天下の事情によく精通している人物が現れたが、その著書を題して『海国図志』という。つまり五大陸の諸邦を海国とみなしているのだ。そもそも大海が中国の周囲をめぐっているのは、行って見れば確かにそのはずで、漢土もまた一海国に過ぎず、どうして大小を問うのか。彼の国の国土は大きいとはいえ、数万里四方に過ぎない。この数万里四方の中に眠り、その目は海波に接することなく、外来のものは皆海路で遣って来るからと、ついにはそれを海国と看做し、自らは中土と称する。これは幼稚で浅はかな見方であり、井の中の蛙に他ならない。黙深は優れた見識の持ち主としてその名を知られているが、それでもなお平素の習慣に縛られて自覚できていない。その他の人間については推して知るべしだ……。

『万国史記』巻1の「亜細亜総説」では、地理上のアジアを描写するだけでなく、人文方面の内容にも言及しており、「アジアは人類発祥の地であり、他の大陸の人民はみなここから移り住んだのだ」。「大陸内の諸国は、学問・風俗の優劣に差があり、昔は文物制度において五大陸の中で卓越していたが、今はヨーロッパに後れをとってただ後ろから見つめるだけだ」と。<sup>37</sup> 日本人学者によって描かれたこの段のアジア景観は、おのずからそれ自体の意義を有しており、中国に対し、アジアにおいて何ら特別な地位を與えてはいない。その他の論著でも、中国はもう特殊な国家ではないことが指摘されている。例えば『万国地志』はアジアの政治区画に言

---

37 岡本監輔『万国史記』（上海申報館出版、1879年、2～3頁）。

及して、まず先に「日本帝国」を挙げ、ついで「支那帝国」を挙げているだけではなく、さらに「日本ヲ除クノ外ハ半開国ノ常態ナル君主専制トス。支那・朝鮮・波斯・暹羅ノ如キ是ナリ。其以下各地ニ至リテハ自ラ独立スルコト能ハス。其版図ハ広ク其住民ハ衆キニ拘ラス、諸強国ノ為メニ併呑セラレ、或ハ属国ト称シ、或ハ保護国等ト称シテ他ノ支配ヲ受クルモノアリ」とはっきり指摘している。<sup>38</sup>

通常、日本の歴史書で比較的早い時期から中国史学界に影響を与え、またその影響力も大きいとされるのは、「おおよそ日本の那珂通世の『支那通史』と桑原鷺蔵の『中等東洋史』の両書であり、さらに前者は漢文で書かれていた関係から、より影響力が大きかった」。<sup>39</sup> 一方、アジアに関する論述に関しては、後者のほうがより大きな影響力を持っていた。那珂通世(1851~1908)の『中等東洋史原序』は「歐洲の盛衰のみを叙述して、世界史又は万国史と名づくることの不都合なるは、事新しく言う迄もなし。世界の開化は、固より歐洲人の専有に非ず。東洋諸国、殊に皇国支那印度の如き、人類社会発達の上に、風化を及ぼせることの廣大なるは、復疑うべからず。且皇国は東洋の東端に位し、既往現在将来共に、東洋諸国と関係最も密なれば、国民たる者は東洋古来の盛衰沿革に就

---

38 矢津昌永著・樊炳清訳『万国地誌』、引用は樊炳清編『科学叢書』第1集、教育世界出版社、1901年、上巻、第12葉に挺る(記者付記：翻訳にあたり、矢津昌永『中学万国地誌』、丸善、1893年、37~38頁の日本語原文を直接引用した)。

39 周予同『50年来中国之新史学』、朱維錚編『周予同経学史論著選集』、上海人民出版社、1996年、535頁。

きて、明晰なる智識を有せざるべからず。これ尋常中学の歴史科に於て、国史西洋史の間に、東洋史の目を加ふる所以なり。近年東洋史の書、世に行はるる者頗る多けれども、皆支那の盛衰のみを詳にして塞外の事変を略し、殊に東西兩洋の連鎖なる、中央アジアの興亡の如きは、全く省略に従うが故に、アジア古今の大勢を考ふるに於ては、不十分なることを免れず。予常に之を憾とせり。此頃文学士桑原鷺蔵君中等東洋史を著はして予に示せり。予受けて之を読むに、史料を東西に取りて博引旁搜し、善く東洋民族の盛衰消長、列国の治乱興亡を述べ、簡にして要を得たり。予良書の世に出でて、以って国民の愛国の心を激励するに足るを喜べり」と述べている。<sup>40</sup> 中国人知識人に対する影響、特に「アジア」に関する認識において、この書は重要な役割を果たした。周同愈は『重訳中等東洋史自序』の中で、次のように述べている。

5つの大陸がまだ互に行き来しあう以前、中国は巨大で尊大であり、我が傍らにあるのは皆小さな蛮夷ばかりだと思い、その領域が東洋であることを知らず、まして海外に西洋のあることなど知らなかったが、今の人はみな東西洋のあることを知っている。東洋の東洋との、この百年来は東洋と西洋との外交関係は、日々複雑で密接なものとなっているのに、我が中国には一人として重大要件を挙げ、一史書を編纂して世に問うことも

---

40 『中等東洋史教科書』、桑原鷺蔵原著と表記、上海科学書局蔵版、第1葉（訳者付記：翻訳にあたり『中等東洋史』（大日本図書、1898年、那珂通世「中等東洋史叙」、1～3頁）を参照した。ただし、日本語原文と著者の引用する中国語訳文には多少の異同もあり、その部分は著者が引用する中国語訳文に従って訳した）。

出来ないのは、恥ずかしいことである。桑原鷺蔵君の『中等東洋史』は日本人の手になる東洋史であり、最も早く出て最も完備している書で、これまでの訳者は習慣に従い口に出すことができなかったが、この書は各国の治乱興亡や重大事件をもっぱら日本の紀元を用いて排列している。桑原鷺蔵君は日本人ならば、彼が自らその国を愛するのは当然のことだろう。しかし訳者は中国人である以上、その旧に従って改めないなら、愛国の心はどこにあるのか？そこで私はこれを重訳することにした。文章も文字も自然な表現を心がけ、務めて韓退之の家法に合致することを目標とした。各国の治乱興亡と重大事件は、中国の紀元を用いて排列した。3カ月かけてすべての翻訳を終えた。私が熱心に探求していい加減なことをしなかったのは、他でもない、要するに我が愛国の心によって読者の愛国の心を突き動かしたかったからである。<sup>41</sup>

陳慶年の編纂した『中学中国歴史教科書』の後序も、この書が広範な範囲にわたって影響を及ぼしたことを紹介しており、「桑原鷺蔵の東洋史は、樊炳清によって東文学社から出版されてより流行して、ほとんど東南諸省全体に広がっていた。私が武昌にいた時、様々なところから校訂・印刷されたものがすでに数種類あるのを見た。己亥の年より4、5年の間にこの書を使って教育を行なうものが相次いだからだろう。ただし、これは世界史を記したものであって、国史に関する詳細については、なお大雑把な点が多い」と述べている。陳慶年はさらに、自分がいかにしてこの書を

---

41 桑原鷺蔵原著・周同予訳著『中等東洋史』（上海文明書局発行、1904年初版、2頁）。

基礎として『中学中国歴史教科書』を編纂したのかについて説明している。つまり、「光緒癸卯の年、両湖に文高等学堂が設立され、私は歴史課に赴任し文普通学堂で教えたが、自分の考えに基づいて別に本国の歴史を綴りたいと思った。ただ考えてみると、我国の学生たちは久しく桑原の書を読んで学んでおり、この書はアジア全体の国際関係に最も注意している。我国は庚子の乱からまだ数年しか絶っておらず、世界に関する知識を以って啓蒙を行なうのは、道理においても差し迫ったことであり、そこで自己流に編纂することはやめ、おおよそ桑原の篇題に依拠し、事実を補い集めてこの書を編纂した」と。<sup>42</sup>

おおまかに言えば、「アジア」に関する論述は、日本人によってより重視されたのであり、清末の中国知識人はその影響を受けて「アジア」意識を形成したのである。日本方面に関する問題についてここで詳しく論じることはできないが、<sup>43</sup> 日本人学者が中国問題を考える時、往々にしてアジアという視点に立って論述を進めていることが、辻武雄(1868~1931)の著した『支那教育改革案』からはっきり見て取れるということを補足しておきたい。つまり、「私は東瀛の人である。若くして聖賢の書を読み、長じてからは東西の諸家の論説を涉猟したが、常に東邦の不振に憤慨し、黄種の日々衰える様を悲しんだ。西勢東漸の歴史を読むたび、いつも深い

---

42 陳慶年編纂『中学中国歴史教科書』(商務印書館、1909年初版、1頁)。

43 この方面については、前掲の葛兆光論文が日本における論述の基本的な内容を概説している。おおまかに言うと、日本のアジア主義の思潮は、19世紀前半あるいはもっと早く18世紀末にまで遡ることができる。

感慨を受けながら書を閉じている。今、印度がまず亡び、緬甸、安南が次いで滅び、亜細亞洲で独立国を称するものは、わずかに日本、支那、朝鮮、波斯、暹羅の5カ国のみである。しかし暹羅と波斯は、独立の名はあっても独立の実はなく、朝鮮は国勢が衰微し、危うくて維持できない。今日亞洲に覇を称えるに足るのは、ただ日本と支那の両国だけである。両国が富強であれば東邦は振るい、東邦が振るえば黄種は興起する。そうなれば、西力東漸といっても、それを選び取って我が文学を追究し我が軍備を助けることに利用できる」と。彼は支那教育改革案を提示したが、それもまた、「もとより支那一国の幸いであり、かつ東亜3国の喜ぶところである。いわんや日本と支那とは、土は同洲、人は同種、書は同文、もとより唇齒輔車の邦(互いに離れられない密接な関係を有する国同士)である。緩急相助け、喜憂を相共にすべきである」ことを重視していた。<sup>44</sup>

#### 4. 「アジア」としての中国

上述のように、世界の各大陸に関する知識が中国に紹介された時期は決して遅かったとはいえませんが、それを受容したかどうかというのはまた別の問題である。1901年に李熙が蕭庸士編集の『5洲述略』のために著した「序」の中で、「授学

---

44 辻武雄著「支那教育改革案」(『教育世界』巻3、1~3頁)。

村塾」での体験に言及して「5洲の地図を諸生に示した際、諸生はアジア・ヨーロッパの名を聞くや、互いに大笑いしてやまない。なぜなら彼らは、その高祖・曾祖父から同郷や朋友・姻戚に至るまで、行商ためであろうと、赴任や応試のためであろうと、誰一人として未だ嘗てその地に行ったことのある者は無く、これを経義策括に求めても、口や耳になれない地名なため、きっとそんな土地はなく、ただ教師がでたらめを伝え、嘘を教えているのだと思うからである」と述べている。<sup>45</sup>ここでは中国において「5洲」に関する知識が伝播されるに際し直面した様々な困難を挙げているが、しかし、広く近代的知識を吸収した知識人に着目してみれば、また違った様相が見えてくる。同じ1901年に、梁啓超は一篇の文章を著して、中国の歴史を次のような3段階に分けた。つまり、1. 「黄帝から秦の一統まで」の「上世史」で、「中国の中国」だった時代、「つまり中国民族が自ら発展し、自ら競争し、自ら団結した時代」、2. 「秦の一統後から清代乾隆末年まで」の「中世史」で、「アジアの中国」だった時代、「つまり中国民族とアジアの各民族が複雑かつ密接に交渉し、競争が最も激烈であった時代」、3. 「乾隆末年から今日まで」の「近世史」で、「世界の中の中国」である時代、「つまり中国民族が全アジアの民族と協力して交渉・競争する時代」、である。<sup>46</sup>このように中国の歴史を時代区分するのは必ずしも適切なものではないが、しかしこの時代区分が「中国」－「アジア」－

---

45 李熙「序」(光緒辛丑6月撰、蕭庸士輯『5洲述略』、紫藤書館、1902年、1頁)。

46 梁啓超「国家思想變遷異同論」(『清議報』第94～95冊、1901年10月)。

「世界」によって貫かれていることは、「アジア」意識を有した中国知識人がすでにその助けを借りて中国を改めて定置し直していたことを示している。この一文は、梁啓超の日本亡命後に書かれたもので、このことは我々に対し、日本によるアジア論述が日本のアジアにおける指導的地位を肯定する傾向にあった点への注意をも促しており、このため中国知識人も、それに対し論争を行なう必要に迫られていたということは、さらなる分析に値する。

さきに『万国史記』の影響について言及したが、この書に対する評価は、まったくの賞賛ばかりであった訳では決して無い。『西学書目答問』は「政学第1」の「史志学」で、まず『万国史記』を挙げており、「この書は20巻の分量で全世界数10か国の古今の事跡を網羅しているため、記述が簡略で詳細ではないのは言うまでも無い。かつ、我が華と同文の国ではあるのが、記載には事実と合わないものが多く、さらにその容赦のない痛罵は、最も伝言の体を失っている」と評している。<sup>47</sup>『万国史記』に対する評論は、その中国知識人が日本経由で万国史およびアジアの説明を受容したのかどうかを示す、1つの象徴と看做すことができよう。あるいは初めから、アジアの範囲内にはアジアの解釈権をめぐる争いが存在していたということかもしれない。確かにいえることは、「アジア」が中国人知識人にとってその誇りを追究するもう1つの地平ともなったということである。清末には多くの西学彙編資料が出版

---

47 趙惟熙「政学第一」（『西学書目答問』、貴陽学署、1901年、1頁）。

されたが、<sup>48</sup> これらの資料の中には、「アジア」に照らして編集を行なっている事例が少なくない。1902年出版の『西学三通』は「西政通典」と「西史通志」、「西芸通考」とに分かれており、陶鈞の『西史通志序』は「大地は全身のようなものであり、五大陸は5体のようなものである。体には貴賤があり、大陸には前後がある」と述べ、試みに強調して「アジアは人類誕生の地にして、中国は文明発祥の邦である。堂々たる頭であり、その他の欧米・アフリカ・オーストラリアは4肢のようなものである。大陸に多くの国があるのは、手にたくさんの指があるようなものであり、国に大小があるのは、指に親指や人差し指があるようなものである」とする。このような強調は、以下のことを肯定するために他ならない。つまり、「4大陸の中で、アジアが最大であり」、「アジア西部は各人類の始祖の本地であり、道理術法や教門もすべてアジアに生まれた。ゆえに昔から今に至るまで重要な地と看做されてきた」のである。<sup>49</sup> ここにはアジアに仮託して尊厳を顕彰しようとする意味合いが多少は含まれており、これらの書籍がなぜ先ず初めにアジ

---

48 章清「採西学」：学科次第之論弁及其意義—略論晚清对“西学門徑”的探討」（『歴史研究』2007年第3期）。

49 『西学三通』、光緒壬寅夏月萃新書館精本、上海文盛堂印。その「西史通志」は「古閩龍岩謝若潮慕韓鑒定」、「豊城袁宗濂、南昌晏志清編輯」。引用部分は「西史通志」巻1、1~4頁参照。「西史通志」の目録は以下の通り：太古志共2巻、日本志共14巻、印度志共7巻、亞洲各国志共2巻、歐洲羅馬志共1巻、法志共8巻、英志共7巻、徳志共2巻、希臘志共2巻、俄志共9巻、歐洲各国志共1巻、非洲各国志共1巻、美洲志共4巻、美洲各国志共1巻、澳洲各国志共1巻、疆域志共28巻、沿革志共12巻、興盛志共4巻、戦伐志共8巻、礼俗志共2巻、図籍志共1巻、人物志共7巻、編年表共4巻。

アに言及するのをはっきりと説明してもいる。

いずれにせよ、アジアに依拠して中国の新たな地位を求めるのが大方の趨勢であった。趙懿年編纂『東洋歴史』の「総論」部分は次のように述べている。つまり、「東洋史とは、もっぱら東洋各国の事実を記すもので、このため中国史や西洋史、世界史とは分けて呼ばれるのである。学問をするものは地球各国のすべてが我が中国と重要な関係を有することを知らないわけではないが、しかしやはり最も関係が深いのは同洲の諸国に他ならない。思うに、諸国は有史以来、我が中国の文明の影響を受けて発達し、あるいは宗教、商務、戦争などによってお互いに交わり、その関係はすでに数千年に及ぶ。今日、あるものは栄え、あるものは衰退し、あるものは興起し、あるものは滅んだが、しかしその関係は昔日よりもさらに緊密なものとなっている。このため、西洋各国史を書こうと思ったら、勢い東洋各国の歴史を先に述べないわけにはいかない。ただ、東洋諸国はばらばらでまとまりが無く、一貫性をもたせることは難しい」と。<sup>50</sup> 秦瑞玠訳編『普通西洋歴史教科書』の「総論」部分は、さらに人類について言及しており、「今、世界の人類を区分するに7種類ある。白哲人、蒙古人、マレー人、黒人、アメリカインド人、南アフリカ人、そしてオーストラリア黒人である。白哲と蒙古の2種は代々身分が高く、全世界の文明はこの2種より最初に起こったものであり、その他の5種は現在にい

---

50 趙懿年編纂『東洋歴史』（上海科学会編訳部発行、作新社印刷、1914年4月3版、1頁）。

たるまで多くが未開のまま、文明とはほとんど関係がない。一方、白樺と蒙古の兩大種は、居住地も離れており、歴史系統もまたそれぞれ関わり合っていない。このため、私は歴史を研究するに当り、東西両洋に分けるのが簡便だと思う」と指摘し、<sup>51</sup>「白樺と蒙古の2種は代々身分が高く、全世界の文明はこの2種より最初に起こったもの」と特に強調している。商務印書館出版の『最新国文教科書』第6冊第一課「地球大勢」は五大陸の知識に関する平板な紹介であるが、第2課の「我国疆域」は「我が国の本部は18行省に分かれており、寒暖も丁度良く、土壤も肥沃である。黄河、長江、西江の3大河が貫き、まことに世界で最も人口の多く物産豊かな地である」と明示している。<sup>52</sup>「学部審定」と記されている『中学中国歴史教科書』（原名は本朝史講義）の「緒論」の冒頭もまた、「アジア」の中で中国を定置する観点に立脚している。つまり、「本朝史は中国史の一部であり、全史中の最近世史である。中国の建国は遠く5千年前のことで、世界最長の歴史を有し、またその文化は古来東洋諸国の中で最も優れていた。その疆域は東アジアの十分の9を覆い、その盛衰はアジア列国の大勢に影響を及ぼすに足りる。このため、中国史の範囲はじつに東洋史全体の大半を占めることとなり、ひそかに西洋史と相対応する」と<sup>53</sup> 鄒代鈞(1854~1908)

---

51 秦瑞玠訳編『普通西洋歴史教科書』（上海文明書局、1907年、1~2頁）。

52 蔣維喬・莊俞編纂、高鳳謙・張元濟、校訂『最新初等小学国文教科書』、第6冊（商務印書館、1905年初版、1~3頁）。

53 汪英宝編纂、張元濟校訂『中学中国教科書』（本朝史）、1冊（商務印書館、1909年初版、1頁）。

撰の『京師大学堂本国地理志講義』第1課「疆域」は冒頭で「本国はアジアの東南にあり、東アジア高地および中間高原を含む。その面積はヨーロッパ全体よりも大きく、地球上の大国である」と述べる。そこで強調しようとしているのは、中国は「おおよそアジア全面積の4分の1を占め、地球の全陸地面積の12分の1を占める。ヨーロッパ最大の国と比較すると、ロシアの面積はすでに我が国の倍で、イギリスの領土はそのロシアよりさらに大きい。ただ、ロシア領のシベリアは、荒涼とした寒冷の痩せた土地で、イギリスの植民地は5洲に分散しており、また荒地も多い。もし土地も肥沃で気候も温暖、また一箇所に集中した広大な地域を挙げるとなれば、まさに我国をその最大のものとして挙げねばならない。」ということである。<sup>54</sup>

そのほかの文章にも、同様の事例を少なからず見かける。アジアに依拠して中国の歴史や歴史上の人物像を描きなおすことも往々にして見られる。羅振玉(1866~1940)は『教育世界』巻6に掲載した「『論語』講義1」の中で、「孔子はアジア第一の教育大家である」と言及している。数多くの教科書について言えば、「中華民族は分派が極めて多い。……周・秦・漢・唐・宋・明を経て、その勢いはますます盛んとなり、東アジア文化といえ、必ずこの民族が挙がる」と力を込めて表彰している。<sup>55</sup> 孫宝瑄(1874~1924)は日記に梁啓超を賞賛して「見識の広い優れた議論で、黄海の内外、東ア

54 鄒代鈞『京師大学堂本国歴史地理志講義』(北京大学図書館古籍部蔵書、1、2、32頁)。

55 潘武編輯、劉法曾參訂『講習適用歴史教科書』(中華書局、1913年、562頁)。

ジア3国の間に伝播し」、「およそアジアに居住するものなら、誰もが胸中に梁啓超を抱いている」と記している。<sup>56</sup> 中国におけるアジア論述が、誇りを追求する新しい拠り所となっていることを、このことは多かれ少なかれ意味している。

## 5. 「他者」としての日本・朝鮮

中国でアジア論が現れたことについて、康有為(1858~1927)の「京師強学会序」は注目に値する。これは、アジアないし「世界」の地理概念を獲得した後に、論述の中に直接現れてきたものである。それは以下のように言う。

ロシアが北から窺い見、イギリスが西から盗み見、フランスが南から注視し、日本が東から狙い見ている。4方の強い隣国に囲まれて中国とは、なんと危ないことか!まして牙を磨き涎や舌を垂らして残りを分けようと思うものがさらに10余国もある。遼東半島や台湾は将来の見通しが立たず、回族の反乱によって様々な騒擾が起り、人々は不安にかられ、情勢は不穏で、非常に切迫している。昔、インドはアジアで名高い国だったが、旧習を墨守して改革を行なわなかった。乾隆の時、イギリス人は12万金の公司によって通商させ、5印度を荒廃させた。昔トルコはイスラムの大国であった。その領土はアジアとヨーロッパ、アフリカの3大陸に跨ったが、旧習を墨守して改革を行な

---

56 孫宝瑄『忘山廬日記』(1902年9月2日、上海古籍出版社、1983年、2頁)。

かったところ、6国にその政治を操られ、その土地を分割され、その君主を廃位された。そのほかの安南や、緬甸、高麗、琉球、波斯、<sup>アフガニ</sup>アフガニ、<sup>ペルチ</sup>ペルチ、および太平洋の群島やアフリカの諸国は千数百を以って数えるが、いまや或るものは領土を侵食され、或るものは亡び、全世界の旧習を墨守する国には、すでに一つとして節を曲げて生きながらえているものは無い。……そもそも中国は全世界において、聖賢が数多く現れ、国は最も有名である。その義理、制度、文物は4方に広まり、その土地の広さは万国の中で第3位、その人口の多さは第1位である。その緯度は温帯に属し、その民は聡明で優秀、その土地は肥沃で豊か、恐らく全世界の万国の中にこれに匹敵しうる国などないだろう。ただ、風気が未だ開けず、人材が乏しく絶えてしまったため、侮辱を受けている。<sup>57</sup>

康有為がこの論述の中で、「アジア」に依拠して中国の新しい地位を追究していることが分かるだけでなく、鍵はやはり「他者」を例証とする言説方式にあり、中国認識に対し、単に「アジア」に定置するだけでなく、とりわけ日本や朝鮮の「他者」としての意義を際立たせている。このため、清末中国の「アジア」論述を詳しく検討する際、やはり「他者」としての朝鮮と日本とを合わせた上で議論を展開する必要がある。実際、清末のアジア論述は、そもそも「東アジア3国」を中心としていた。

言うまでも無く、所謂「3千年来未だ有らざる所之変局」は、主に日本からの衝撃を受けてのものだった。中国の士大夫がこの影

---

57 康有為「京師強学会序」（湯志鈞編『康有為政論集』、北京中華書局、1981年、上冊、165～166頁）。

響を受けたことも明らかである。宋恕は中国を日本と比較して「日本は決然として数千年の衣冠を捨てて西洋の衣冠に従ったのに、我国は2百年の衣冠を捨てて西洋人に従うことが出来ない。日本の度量が中国より優越すること、なんと遠いことか！」と述べる。<sup>58</sup> 出洋学生総監督の夏借復(1874~?)の「学校芻議」もまた「地球上に万国が並立しているが、沿革が違うので、国体もおおのずから異なり、そのため学校の主義もやや傾向を異にしている。今、中国は学校を設立しようとしているが、先ず主義を立てなければならぬ。主義を立てようとするれば、まず国体の如何、全国人民の弊習がどこにあり、どのような主義を用いれば困難を救済し、気運を挽回できるのかを調べなければならない。このようにすれば、教育の方針は明確となり、混乱し順序を失うに至ることもない」と指摘する。言う所の「主義」とは、実際には日本に見習うということの意味している。つまり、「日本は泰東の国である。その政治・宗教・風土には、泰西諸国のそれに相当するものはない。西洋に習い必死で後を追ひ、彼の長所を真似するだけでなく、苦心して独自の修養を積み、旧来の良き所を保持している。我と日本との関係でいえば、古来より政治の重要な道理は相同じく、宗教の儒仏をともに重視する点も相同じく、同洲同種で、往來の歴史も最も長く、風土は最も似ている」と。<sup>59</sup>

しかし、注目すべきは、日本のほかに朝鮮もまた中国のアジア

---

58 宋恕「致錢念劬書」(1895年7月25日、『宋恕集』、上冊、535~536頁)。

59 夏借復「学校芻議」(『教育世界』巻13~15、引用文は巻13所収。1901年、1~3頁)。

論述の中心となっている点である。しかも、その理由はたんに両国が同じく「東アジア」に属しているからではなく、日本と朝鮮は「他者」であることから、強弱・対比の模範例を構成したからである。蕭庸士編集の『5洲述略』では、その凡例中で五大陸について「この書はヨーロッパの諸強国やアジアの日本、アメリカ大陸のアメリカについてはやや詳しく記述し、その興起の理由を記したが、その他の弱小の国については、一まとめにして言及しているに過ぎない」とその取捨の基準を明示している。しかし、「アジアの朝鮮、ヨーロッパのトルコは弱小の国だが、採録に当っては一まとめにして言及するのではなく、その衰微した理由を記した」とし、本文の冒頭部分でもまず朝鮮を選び、日本をその次に行っている。<sup>60</sup> 先に言及した『西学三通』の『西史通志』巻91「沿革志一」「亜細亜総説」部分でも、「全大陸は112兆1万1840方里、イギリスがその10分の1を占め、ロシアが10分の4、各国が10分の2、残りの10分の3が我国の土地である。日本が東方を侵し、ロシアが北方を削り、イギリスが西方を略したので、残ったのはこれだけだが、もしここから奮起すれば、英・日・ロの何ぞ恐るるに足らんや。だが、ここから衰えたなら、朝鮮・越南・緬甸・波斯はすべて我が鏡となる。人の国を鏡とするなら、同じ大陸の国から始めるべきであり、ゆえにアジアを冒頭に置いたのである」と述べる。<sup>61</sup> ここにいう「人の国を鏡とするなら、同じ大陸の国から始

---

60 蕭庸士輯『5洲述略』（紫藤書館居印、1902年、「凡例」、1頁、本文、1頁）。

61 『西学三通』（「西史通志」巻1、1~4頁）。

める」とは、まさに清末に「歴史の記憶」が改めて引き継がれる際のあり方を明示しており、日本・朝鮮が新しい記憶の源泉、あるいは「他者」と称すべきものとなっている。以前の中国で歴史の記憶が引き継がれる方法は、もちろん中国本国に基づいて展開されていたが、アジア意識が高まるにつれ、記憶の方法が変化したのである。

まず注目すべきは、商務印書館から1904年に出版された『最新国文教科書』（初等小学堂課本）で、その第5課と第6課はそれぞれ日本と朝鮮を紹介している。第5課・日本の全文は以下の通り。

我国の東海岸に島国があり、日本という。我国と同じくアジアに属す。我国と同じく黄種の国である。国土は狭く、4川1省に等しい。

日本の皇室は一家系によって伝えられており、2000年あまりに及ぶが、未だ嘗て姓が変わったことがない。しかし幕府の専横、列藩の跋扈に加え、欧米各国も時に勢力を笠に着ていじめ、情勢は緊迫して一刻の猶予もならなくなった。明治天皇が即位すると、幕府を倒して藩を廃止し、国内の困難を平定し、そこで詔を下して国是を定め、新政の実施に努めた。教育事業を興して人材を育成し、憲法を制定して国を安んじ、いままで棚上げにされてきた事業を一斉に興した。このため40年を経ずして国勢は強盛となり、我国を戦争で打ち負かし、東アジアに雄を称えるようになった。今また強大なロシアを大いに打ち破り、全世界を振動させたのは、変法の功績である。ああ、日本を観察すれば、我が国人は興起できよう。<sup>62</sup>

---

62 『最新国文教科書』（初等小学堂課本、商務印書館、1904年、第9冊、4～5頁）。

## 第6課・朝鮮の部分は次のようにある。

我国は周の初めに、箕子を朝鮮に封じた。その後しばしば主人は変わったが、朝鮮の王となったものはおおよそ我が華人であった。秦漢以来、内属するときもあれば、自立することもあった。我が朝に至ると、代々職貢を修め、恭しく命を奉じた。

光緒初年、朝鮮は初めて各国と通商したが、しかしその我が属国であることは以前の通りであった。20年に朝鮮では内乱が起こり、我国に助けを求めてきた。我が軍隊がこれを助けたが、日本軍もやって来た。乱は平定され、撤兵について論じたが、決まらず、ついに日本と戦争が始まった。我が軍は破れ、朝鮮はついに自立し、2度と我国に属することはなくなった。

ロシア人が朝鮮の動静を密にさぐって機会をうかがい、その権力は次第に大きくなっていった。日本はロシアと争ったが、いい結果は得られなかった。また兵端が開かれ、日本は再び大勝利を収めた。そこで京城に統監府が置かれ、その内政・外交で日本が関與しないものはなく、あたかも日本の保護国のようになってしまった。

朝鮮は半島の国で、領土は狭いが、それでも日本の半分はあるのに、ついに自ら振興することができなかったのは、悲しいことである。<sup>63</sup>

ここで注意すべきは、この文中で展開されている問題の捉え方である。「日本を観察すれば、我が国人は興起できよう」との言葉は、ともにアジアに属する日本が中国振興の啓示となりえることを説明しているに他ならない。一方、朝鮮が「ついに自ら振興す

---

63 『最新国文教科書』(初等小学堂課本、商務印書館、1904年、第9冊、5頁)。

ることができなかつた」と強調するのは、同じアジアの朝鮮を反面教師としているのである。実際、このような問題の見方は、清末における「アジア」論述の核心を構成するものでもあった。「歴史の記憶」の引き継ぎ方法を更によく説明するため、その他の資料からそこにおける転換を説明してみよう。

ここ数年の思想史研究では、エリートと経典の思想と普通の社会と生活の間に、もう1つ「一般の知識・思想と信仰の世界」があり、この知識・思想と信仰の世界の引き継ぎも、ある1つの思想的歴史過程を構成しており、このため、こうした中間の知識・思想も思想史研究に視野の中に含まれるべきとの主張が研究者の間でなされることが少なくない。<sup>64</sup> 問題の鍵となるのは、「一般の知識・思想と信仰」とは何をいうのか、ということである。清末の「思想資源」図を反映するものについていえば、清末の科挙試験こそその新しい経路であった。特に「廢除八股・改試策論」後の試験内容である「各国政治芸学」は、上層官員および一般知識人の、中国の置かれている境遇や世界事情に対する見解をよく表している。鍵となるのは、やはり「策問」という、明らかにある方向に導く作用を持った特殊な体裁形式であり、つまり「問策」が出題する具体的な題目が多くの人々の関心をその問題に向かわせる作用を持っていた。「格致書院課芸」の開始以来、この種の試験ではだいたいの各級の官員が「命題人」を担当し受験生が解答するという方式が

---

64 葛兆光『中国思想史』（第1巻は「7世紀前中国的知識、思想與信仰世界」、第2巻は「7世紀至19世紀中国的知識、思想與信仰世界」、上海復旦大学出版社、1998年、2000年）。

形成された。これらの「策問」を通じて、我々は清末の上層官員たちが憂えた大事がどういうことであったのかを理解することができると同時に、その一方で、清末に科挙に参加した数十万の知識人が「問策」の誘導の下で行なった解答もまた、知識人階層一般の思想状況を表している。はっきり言ってしまえば、当局の実施する試験として、問策者であろうと応策者であろうと、いずれの側も当局のイデオロギーを恪守せざるを得なかった。重要なのは、その中に具体的に現れる清末の改革の方向性が、同時にいわゆる「新知」がいかんにして受容されたのかを反映していることである。格致書院課芸が列挙する関連の問策は、この点をよく説明しており、その中には他者としての日本・朝鮮のイメージに関するものも少なくない。

1890年の『格致書院課芸』秋季課題は、蘇松太兵備道の聶緝規が出題した「朝鮮為中国藩属宜如何保守論」で、これは本来の天下秩序が瓦解した後の知識人の思考を示している。「超等第一名」とされた中郎の朱有濂の応策は次のように明確に指摘する。つまり、「そもそも朝鮮は我が属国であり、我が藩屏である。道義において度外視できないばかりでなく、情勢としてもまた度外視できない。もし我々がその滅亡を座視して救わなかったらなら、イギリスがビルマで行なったように、ロシアが必ずや朝鮮を占拠するだろう。当面はしばらく隠忍すべきだという者がいるが、情勢が切迫してからこれを救おうとしても、フランスがベトナムで行なったように、ロシアは必ずや我国の辺境を乱すであろう」このため「朝鮮を保護しなければ、その朝鮮は我々の朝鮮ではない。朝鮮

を保護すれば、その朝鮮は我々の朝鮮である。朝鮮が我々の朝鮮であれば、朝鮮の人民は我々の人民であり、朝鮮の土地は我々の土地である。人民は税を納めるが、朝鮮に納めるということはすなわち我々に納めるということである。その保有する土地は、朝鮮が保有するということはすなわち我々の土地である。今後得られるものは、いま費やすものを埋め合わせ、必ずや3百万を回収できるし、さらに必ずや回収するだけに止まらない」と。<sup>65</sup> 問題が言及するのは中国の藩属としての朝鮮をいかに「保守」するかであるにもかかわらず、議論では中国と朝鮮を一体のものとして看做し、まるで藩属関係を一国と看做して取り扱っているのが、容易に見て取れよう。この点についていえば、第2名の奉賢県の優稟生である程廷傑が応策中で提示した見解も、同様の前提に基づいている。その答案は前駐日本公使館随員の姚文棟が上申した3策を引用し、これに批評を加えて「高麗の土地・人民はことごとく我が国がその政治を行い、歳入の一部を斟酌して高麗王の財政に充てることとする。イギリスのインドに対するがごとくする。これが上策である。朝鮮はもとより我が属地であり、これを我がものとするのに害は無い。先ずこれを平定して郡県とし、そうして他国の分不相応な望みを絶つ。これが中策である。各国と通商させ、各国にかりて共同で保護を行なう。これが下策である。この3策について、下策はすでに実施された。中国は字小(小を慈しむ)を信

---

65 朱有濂答案、『庚寅格致書院課芸』(上海図書集成居印書局印、1898年、301a~401b頁)。

条としており、上の2策を実施することはできない。そうなれば高麗を保守する方策は結局無い」と述べている。<sup>66</sup>

中国・朝鮮間の「藩属」関係を整理し明確に区分していないだけでなく、朝鮮を保守するとの主張はおもに「自保」に基づいて展開されてもおり、「朝鮮は東3省を外敵から遮断する存在であり、ベトナム諸藩と比較にならない。所謂“自分の寝台のすぐ側でどうして他人の熟睡が許されようか”というものであるが、ただこれを保つ策が無い」と強調される。この方面については、第3名の松江府学稟生の朱昌鼎はさらに明確な応策を提出し、「これを去るも惜しむに足らずである。中国の内地、たとえば澳門、香港ですらポルトガルやイギリスの得るところとなった。どうして朝鮮だけを惜しむのか」というような言論に対して、朱は次のように強調する。つまり、朝鮮は「全局の安危が及ぶところ」であり、「朝鮮は明以前においては捨て去ってきたが、本朝にあっては捨て去ってはならない。なぜか。朝鮮は、北は奉天から僅かに鴨緑江・図們江の2水を隔てるばかり、これを過ぎればすぐに長白山の南側で、祖宗発祥の地である。また北は陪都に迫り、列聖の陵寢はここにあり、前王朝にとって辺境の荒地に過ぎなかったこととは比較にならない。その国は東西南の3面で海を隔てて山東とはるかに相對し、中国の海防上の要地であって、マカオ・香港が大局に関係ないのとは異なる。近頃はましてロシア人が久しく中国の災いとなっており、彼らがこの地を得たならまさに鬼に金棒、その

---

66 程廷傑答案『庚寅格致書院課芸』(401b~402a頁)。

勢いを止めることは出来なくなり、中国は藩屏の朝鮮なくしては、特に東3省は危なくなり、畿輔の状況もまたきわどいものとなる」と。<sup>67</sup>

言うまでも無く、朝鮮を「藩属」と看做す以上、所謂「保守」の道もまたその考えに基づいて展開されることとなり、その中で言われる「主権」の観念は自ずと拡大しにくくなる。面白いのは、この前3名の答案には『万国公法』が全く言及されておらず、第4名と第5名の答案には言及されている点である。安徽廬州府学優行稟善生の李経邦の答案は第4名に列せられた。彼は文中に当時の様々な意見を列举するが、彼のそれらに対する評価は完全に否定的なものである。その中で『万国公法』に対する評価にも言及して、次のように述べる。つまり、「朝鮮を保守するのはこのように難しい以上、その封貢を停止し、その臣家と称するのを断り、藩属から進んで隣邦となり、その自主をはっきりと許し、もっぱら『万国公法』に拠って事を処理して少しも偏らないようにし、ロシアと日本がこれを併呑しようとしたら、公法に依拠して争えばいいという者がいる」。しかし、彼の見るところ「これもまた保守の一策ではある」が、しかし問題は「朝鮮は属国であり、我はまだ自主の権を回収することが出来ていないのに、改めて友邦となるのはもっと処理しにくいことを分かっていないことにある。一枚の紙切れのような公法に、どうして露日両国の争いを止めさせることができようか？」当時の様々な対応策を批評した後、李も彼自

---

67 朱昌鼎答案、『庚寅格致書院課芸』(403a~404b頁)。

身の見解を明示して、中国の富強こそ根本の策だとする。つまり「中国が豊かになり、中国が強くなった後、自らの強さをもって朝鮮に迫る。無事の時には、我が徳や恩恵によって十分これを結び付けることができる。有事の際には、我が威力をもってこれを保守することができる。ここにおいて朝鮮は永く我が藩属となり、中国は枕を高くして眠ることができるのだ」と。やはり「藩属」を放棄することなど夢にも思っていない。<sup>68</sup> この意味でいえば、さらに第5名に列せられた候選従9品の張玠の答案を見ると、その中に大変興味深い一面を見出せる。張玠は聯英拒露を力説するが、彼はその答案の中でロシアによる高麗への侵出を「大いに『万国公法』の禁例を犯すもの」で、もしイギリスが中国を助けてロシアに対抗するなら、それは「まさに公法の大権を実行するもの」と指摘する。つまり、「高麗は歴代中国に服属してきた。ロシア人がこれを侵害するのは、小国に侵入することで、小国に侵入することは大いに『万国公法』の禁例を犯すものである。イギリスが中国を助けてロシアに抵抗し、それによって弱国の高麗を存続せしめるのは、まさに公法の大権を実行することで、覇者の非凡な謀略を展開し、天下のために公道を表彰し、万世のために人心を正すことである。高麗人はこれに感激し、中国人はこれに感謝し、各国はこれを議論すれば、ロシアにはどんな言い訳が立とうか」と。<sup>69</sup> そうは言っても、これは問題の一面にすぎず、「高麗は歴代中国に

---

68 李経邦答案、『庚寅格致書院課芸』(404b~406b頁)。

69 張玠答案、『庚寅格致書院課芸』(407a~409a頁)。

服属してきた」ことが『万国公法』と符合するのかがどうかはいまだ考慮されていない。これらの応策を通観するに、すべて朝鮮を属国と看做しており、ここで企図されている策もまた、国と国との関係に基づいて思考されたものは見られず、主として利益に着目して評価したものである。

格致書院課芸に反映される中国人知識人のこの問題に対する思考は、間違いなく注目に値するものである。ここには「天下」観が有する影響がはっきりと示されており、これは『万国公法』によって規定される国際新秩序に対する不信感を反映すると同時に、国際新秩序をすでに理解している知識人にとっても、それを自分自身に対する認識へと転換させることは困難であったことをも説明している。それによって「自保」を行なうことはあるいは可能でも、問題が自身の利益と密接に関わる状況に向かった場合、いかに対応するかに関しては、全く方法が無かったのが良くわかる。このような矛盾と困惑の交錯こそ、まさに「天下」観が国際秩序に直面した時に遭遇するものだったのかもしれない。しかも、文中には「アジア」に関する論述はほとんどなく、これはまた「天下」観が主導的な世界秩序のもとには「アジア」の位置は無かったということをも説明している。

『格致書院課芸』はただ風気が開かれる前の状況を反映しているにすぎない。科挙改革後の状況に焦点を当ててみれば、策問の意義はすでに同日に論じられるものではなかった。清末の科挙改革の中で「策問」の重要性は明らかに高まり、各種の彙編が生まれた。ここで主として取り上げる『中外策問大観』の編集や出版

も、こうした時勢に対応したものである。<sup>70</sup> これらの資料を通じて、清末中国における「アジア」論の枢要がどこにあったのかをおおよそ把握することができる。巻5所収の『興亜策』では、作者のト宗俊が次のように指摘している。つまり、「今、次々と興亜を論じる者が現れており、彼らは文章に著して議論し、広く計略を立て、これを著作に載せており、その数は指折り数えても、数え切れない多さだ」と。さらに、日本の成功例があるので、「興亜」には何の問題もないようで、「今日の情勢は、日本はすでに勇ましく東方で傑出した存在である。非常に見劣りがするのは、ひとり中国ばかりだ。中国がもし振興したなら、日本が側でこれを補佐し、両雄並立して、その権勢はにわかにヨーロッパの上に出るだろう。どうしてアジアが振興しないことを憂う必要があるか。」しかし、作者も指摘することだが、そうはいつでも困難も少なくなく、その原因は「中国と日本が一致できない」ことにある。つまり、「今日の東アジアについて論じれば、領土の大きさで中国より大きいものはなく、氣勢の強さで日本より強いものはない。大きいことは有為であるのに十分であり、強いことは傑出した存在であるのに十分である。しかし、私はアジアの振興の助けとなるものが無いのは、中国が大きくないからでも、日本が強くないからでもなく、大きいものは俄かには強くなれず、強いものは俄かには大きくなれないことにあると考える」。このため、作者外宗俊は

---

70 雷瑯編輯『中外策問大観』（硯耕山莊石印、1903年）。この問題については章清「“策問”與科学体制下对“西学”的接引—以『中外策問』為中心」（『近代史研究所集刊』第58集、台北中央研究院近代史研究所、2008年12月）。

私が思うに、今は興亜について語るときではない。興亜を言うには、まず中国の長年の悪習を除き、ついで日本の慢心を取り去り、最後にロシアやヨーロッパ列国の強欲を塞ぎ、アジア諸国を結集し、心を一つに合わせ、みな力を合わせて協力するのでなければ、決して出来ない。そうはいつでも、これを必ず行なうのは用意ではない事柄であり、アジアの気運を務めて挽回するのに望むものである。<sup>71</sup>

と述べる。

『中外策問大観』の中には他に、直接「アジア」を題とするものとして巻19「問亞洲各国宗教異同」等の問策がある。大まかに言えば、「アジア」を例証として中国の新たな位置づけを行なうのが主流の見解であり、「アジア」はまた新たな誇りの印ともなった。例えば巻24所収の「機器殖財策」で、作者の羅綱法は「中土の領土の広さはアジア一で、中央に位置している。また温帯に属し、財産に富み、植物が繁茂している。しかし、この数年、国は瘦せ民は貧しく、ヨーロッパ各国と肩を並べることができないのは、人材や財産が尽きたからでも、植物がしおれたからでもない。おそらくそれは財産があってもその財産を用いるのが下手なのであり、物があってもそれを精製することが出来ないからである」と強調する。<sup>72</sup> 特に注目すべきは、その中で朝鮮に言及している問題があまり見られず、日本に関する問題がかえって多いことである。

『中外策問大観』に収録される日本関連の問策から、「日本要素」

---

71 ト宗俊「興亜策」(『中外策問大観』巻5、16頁)。

72 羅綱法、「機器殖財策」(『中外策問大観』巻204、1頁)。

がいかに関心を持っていたかをよりはっきりと見出すことができる。その「西史」巻についていえば、「西史」巻の合計23題の「策問」を総合して見ると、最も際立っているのは中国の関心を外国史に投影している点である。往々にして、富強の由来や統治の方法、長期に亘る社会の安定の道など、その当時中国が関心を持っていた問題を外国の歴史に投影することが行なわれていたが、特に「弱国から強国となった」例証が重視された。その中でも直接日本に関する話題のものが4条と多く、すなわち①日本明治維新新策、②問題：プロシアはフランスに苦しめられたがついに覇業を成し遂げた。日本のような小国もまた覇を称えることができた。日本の天皇は助力を得て維新を行なったが、プロシア王は果たしてどのような方法を使ったのか？③日本の新政はまず何を行い、何の効果が最も顕著だったのか。その一切を西洋の方法に従って改めたのに対し、識者は行き過ぎが無い訳ではないと論じている。その見解を認めるとして、どのようなことがその事例にあたるか。今、それを挽回する方法があるのかどうか。筋道を立てて分析し、適切に説明し、もって中国の参考に資する論策を作成せよ。④問題：泰西や日本の維新前に存在した一切の弊政と中国のそれは多くが類似しているが、それらを箇条書きで列挙できるか？である。これらの日本に関する設問は、日本に対する清末中国の関心の所在を反映しており、中国知識人のそれに対する解答は、同じアジアに属する日本に対する複雑な心情を反映するものでもある。③の問題について言えば、この問題には2本の対策を収録している。陳曾矩の対策は、特に日本の変革の順序およびそこで生じた弊害

に重大な注意を払っており、それに借りて中国の改革に対する意見を述べている。そこで強調しているのは、「前後緩急の順序を観察すれば、我が中国の先駆けとなり得る。その効果の顕著なものを観察すれば、我が中国が今日採るべき基準とすることができる。その行き過ぎの弊害を観察すれば、我が中国の今日の戒めとする。その挽回の方法を観察すれば、我が中国の今日の成案となり得る。ゆえに日本のここ30年の歴史は、単に我が中国の今日の手本であるばかりではない。日本の政治を考察することは、それもまた参考とするところを知るのだ」と。劉邦驥の対策は冒頭部分で「日本の新政で先ず実施され、最も顕著であったのは、西洋の方法ではなく、中国の学問であった」と述べる。特に日本の改革の指導者は「春秋の尊王の大義」を手本としたと指摘する。そして最後に、「今、天下は競って変法を言うが、日本を手本とすべきである。私はその利を採りたいと願うが、最もその弊害を鏡とすべきである。あえて一言でいえば、国を弊害のない中に建てようとするれば、必ず尊尊親親から始めなければならない」と述べる。<sup>73</sup>

『格致書院課芸』と『中外策問大観』は、我々に対し、清末以降において中国の普通の知識人たちが中国の情勢を考える「思想資源」を示してくれるものである。このような「思想資源」が深く分析するに値する理由は、「策問」資料の特殊性と多かれ少なかれ関わっている。実際に「日本要素」が科挙試験の場で現れたのは、上述のような文章の「研究」の中においてだけではなく、最後の科挙

---

73 雷瑯編輯『中外策問大観』、巻28(6~7頁)。

試験の第2場で、その「各国政治芸学策」の5題の「問策」のうち、第3策は直接日本に対するものであった。つまり、「日本は変法の初めに西洋人を招聘し、そうして国は日増しに強大となった。エジプトは千人以上の外国人を用いたが、ついに財政や裁判の権利を失い、国は振るわなかった。その得失と利弊について詳しく論じよ」というものである。これも、清末中国における「アジア」に対する論述を検討する際、「他者」としての日本と朝鮮を結びつけて考察することの必要性を説明している。

## 6. 余論

歴史と記憶の相関性とは何ら新しい問題ではなく、これに関する叙述もそれ自体がすでに悠久の歴史を有していると言ってよい。フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561~1626)は、人類に関する学問に対して分類を試みた際、「人類に関する学問(learning)の諸部門は、学問が宿る、人間の知力(the rational soul)の3つの部門に関係がある」とし、ここから彼は「歴史は人間の記憶に、詩は人間の想像力に、哲学は人間の理性に関係がある」とも指摘した。<sup>74</sup> 20世紀に至り、カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883~1969)

74 *De Aundmenties Scientiarum*より柳卸林選訳・何兆武主編『歴史理論與史学理論—近現代西方史学著作選』(北京商務印書館、1999年、12~21頁)。引用部分は13頁参照。訳者付記：翻訳にあたり服部英次郎・多田英次訳『学問の進歩』(岩波文庫、1974年)を参照した。

も歴史認識の思考に関し、人類の歴史は記憶を通じて現在と結びつけられることを強調している。このため、「歴史とは、われわれが単にそれについて知るだけではなく、われわれがそれに基づいて生きる場所の記憶である。歴史は、すでに置かれてある基礎であり、われわれが虚空に霧散し果てずに、人間存在にあずかりたいと念ずるとすれば、われわれはあくまでこの歴史という基礎に結びついているのである」と。<sup>75</sup> ただ、これらの文章は単に歴史と記憶の相関性を強調しているだけで、記憶がいかにして展開されるかには未だ言及がない。この点について言えば、モーリス・アルヴァックス (Maurice Halbwachs, 1877~1945) が重要な地位を占めるのも容易に理解できよう。アルヴァックス氏は「記憶と社会的枠」に注目し、さらに具体的な例証を通じて、歴史に依拠することの重要な意義を説明している。<sup>76</sup> すでに指摘されるように、「我々の過去に対する概念は、我々が現在の問題を解決するのに用いた情緒的イメージの影響を受けており、このため、集合的記憶は本質的に現在に立脚点を置きながら過去に対する再構成を行なうことであり、間違いなくアルヴァックスはそれを最初に強調した社会学者」であった。<sup>77</sup>

---

75 雅斯貝斯『歴史的起源與目標』(魏楚雄・兪新天訳、北京華夏出版社、1989年)。記者付記：翻訳にあたり重田英世訳『歴史の起源と目標』、理想社、1964年を参照した。

76 莫里斯・哈布瓦赫著『論集体記憶 (On Collective Memory)』(畢然・郭金華訳、上海人民出版社、2002年、294頁)。

77 路易斯・科瑟「導論—莫里斯・哈布瓦赫」(莫里斯・哈布瓦赫著『論集体記憶』、59頁)。

このことと清末中国における「アジア」論述とを対照してみると、歴史を例証とすること、つまり歴史の記憶を喚起することでもあるが、それは清末中国が見ず知らずの外部世界を理解する上で重要な一段階を構成するものであったと言えるのかもしれない。それゆえにこそ、清末中国において歴史の記憶がいかにして引き継がれたのかは、我々がこの時期の思想文化の発展変化を理解する上で、重要な視点ともなるのである。中国は「信じて古を好む」として世に名高いが、「歴史」の助けを借りて合法的論証を行なうのもまた、社会変革を推し進める上で重要な力添えとなった。そして「外来要素」の加入は、「古に仮託する」論述策略に対する強力な衝撃となった。<sup>78</sup> なぜなら「歴史の記憶」の引継ぎは往々にして中外の歴史を「完全に理解する」過程において展開され、その中で自我にたいするアイデンティティーに絡み付いて離れないからである。

アルヴァックスの「記憶」に対する論述は、我々がいかに記憶するのかを特に追究しており、さらに「私が回想する理由は、まさに他の人が私を刺激したからである。彼らの記憶が私の記憶を助け、私の記憶が彼らの回想の助けとなる。少なくともこのような状況における記憶の喚起は、言うほど神秘的なものではない」と指摘する。<sup>79</sup> 確かに、記憶は往々にして「他者」が引き起こすと

---

78 「古に仮託する」論述策略とその成立の要因については、以下を参照：章清「“伝統”系譜的建構與中国自由主義的論述策略」（劉青峰・岑国良編『自由主義與中国近代伝統』〔香港中文大学出版社、2002年、251~288頁〕。

79 莫里斯・哈布瓦赫著『論集体記憶』（69頁）。

ころのものに助けを借りるものである。清末の中国についていえば、この「他者」とは疑いなく「外来要素」のことである。言うまでも無く、「外来要素」について言えば、間違いなく「西方要素」こそが最もその顕著な部分である。しかし、具体的に清末中国の「アジア」に対する論述についていえば、「世界」を認識する長い歴史過程に立って考察を加える必要があり、一方で清末の「アジア」に関する言説は「天下」から「万国」に至る転換において顕著なものがあるが、その一方で清末における「アジア」の「他者」— 朝鮮と日本 — への認識もまた、その不可欠な部分を構成していた。「歴史の記憶」を引き継がせる特殊な形式 — 「策問」と教科書 — を通じてみれば、朝鮮と日本の「他者」としての「イメージ」を見出すのは難しいことではなく、これは清末の「アジア」論述にとって重要な参考であった。しかも、「策問」であろうと「教科書」であろうと、いずれも特殊な意味を有していた。このような視点から、個別の思想家の見解を超えて、清末の主流なイデオロギーの「アジア」に対する立場を詳しく検討することも可能である。

※ 和訳：箱田恵子(京都大学)

# 安重根と中国

－ 程滄『安重根』を中心として

王元周（北京大学）

## 1. はじめに

1909年10月26日、安重根がハルビンで伊藤博文を暗殺した。彼のこの義挙は東北アジアの近代史において重要な地位を占め、とりわけ中国人の韓国認識に大きな影響を与えた。<sup>1</sup> 故に当時中国に滞在していた朴殷植、金澤栄が著した安重根の伝記は、中国に大きく広まる一方、同様の伝記が中国人の手によっても出版され、また新劇などの形で安重根の事績が宣伝された。しかし、中国人が安重根の事績をどのように認識するかは、実はそれぞれの時期の歴史的背景によって、絶え間なく新たな解釈を与えられていた。

最も一般的な解釈は安重根の義挙を賞賛することによって国民

---

1 王元周「近代中国人的韓国認識：経路と特徴」（『東方学志』第132輯、2005年12月）。

が列強の侵略に抵抗する勇気を鼓舞するものである。しかし、5.4 運動前後の「内は国賊を除き、外は強権に抗う」という時代の要求の下に、異なる解釈も生まれてきた。それは安重根が結局は民族の危機を救えなかったという結末から、外敵と戦うより国賊を除くほうがより重要だということに気がついたというものである。程涪<sup>2</sup>が編集した冊子『安重根』は、この解釈の代表的なものである。

程涪の『安重根』は分量こそ40ハルツメページ余りと少ないが、著名人の詩文を数多く収録しており中には文集に収録されていないものまで含まれている。例えば本書に収録されている蔡元培の詩は『蔡元培全集』（1997年浙江教育出版社出版、中国蔡元培研究会編）には収録されていない。ここから程涪の『安重根』が長い間中国の学者に重要視されなかったことが窺える。同書は早くから韓国に知られていた。韓詩俊の紹介によれば、同書は復旦大学歴史学科の孫科志教授が上海図書館で発見し、尹炳奭教授に提供したことで、韓国の学者に知られるようになったという。<sup>3</sup> 尹炳奭教授は同書を

- 
- 2 程涪（1870～1940）、字白菴、号菴深居士、江蘇省陽湖（現在の武進県）出身でめる。若いころ彼はイギリス人宣教師ティモシー・リチャードの中国語秘書を務め、1900年沈仲力が山西に行き洋務を行う際に、ティモシー・リチャードとともに山西に随行し、山西報局総辦に任じられ、『晋報』と『山西白話報』を創刊した。彼は書画の収集を好み、自らも書に優れ、印章を彫ることもでき、『程涪印存』という本が伝わっている。また詩作も好み、趙熙や易順鼎とよく唱和していた。晩年には彼が孔教を提唱し、1933年5月『歷代尊孔記孔教外論合刻』を編集して、上海道德会より出版した。1934年には『読経救国論』上冊を発表し、1935年には中・下冊も書き上げ、学校全般が経学を第1科目にすべきと主張した。1940年上海で病没。
  - 3 同書は上海図書館のほか、北京の国家図書館や北京大学図書館などにも所蔵がある（程涪『安重根』の注については、以下、書名を省略し、上篇、中篇、

自らが編集した『安重根伝記全集』<sup>4</sup>に収録し、解題および注釈において、同書が長沙の鄭沅により編集され、1920年前後に上海で刊行され、そのうち「安重根伝」の部分が程済の作であり、安重根「略史」の部分が鄭沅により編集されたと指摘した。程済の「安重根伝」と「略史」の執筆年代については、義挙の後との簡単な説明にとどまっている。<sup>5</sup> 韓国独立記念館「韓国独立運動史情報系統」も同書を紹介したが、同じくその編者を鄭沅としている。<sup>6</sup> 韓国の韓詩俊や中国の金春善らは論文で同書に関する分析を行ったが、同書の編者や編集の背景などについては詳細な考察を加えていない。韓詩俊「中国人이 본 安重根—朴殷植과 鄭沅의 〈安重根〉을 중심으로」(中国人が見た安重根—朴殷植と鄭沅の『安重根』を中心として)<sup>7</sup>は、鄭

---

下篇と区別する一訳者注)。韓詩俊「中国人이 본 安重根—朴殷植과 鄭沅의 〈安重根〉을 중심으로 (中国人が見た安重根—朴殷植と鄭沅の『安重根』を中心として)」、『忠北史学』第11・12合冊、2000年)。

- 4 尹炳奭編『安重根伝記全集』(国家褒勛処、1999年)。
- 5 尹炳奭編「解題」(『安重根伝記全集』(国家褒勛処、1999年、35、529頁)。
- 6 鄭沅、字叔進、号習叟、湖南省長沙出身。清末湖南省の名士である。鄭沅の家は医学の名門であり読書人の名門でもあった。1894年(光緒20)の科挙で恩科一甲の3、翰林院編集に任命された。この時の状元は張謇であり、榜眼は尹銘綬であった。1903年に4川省の学政に就任する。辛亥革命のときに、南書房に着任し、のち總統府秘書を担当する。その後、上海に隠居し、書を買って生計を立てた。愛麗園に仮住まいしたことがあり、読書3昧の余生を送り、1940年上海で没した。彼は医学理論を熟知し、詩や書道に堪能であり、鑑賞にも精通し、とりわけ拓本や法帖の考証に精通しており、『独笑齋金石題跋記』を出版した。彼の書は西太后に認められ、頤和園のカーテンの書画がすべて鄭沅の手によって書かれることになった。
- 7 韓詩俊「中国人이 본 安重根—朴殷植과 鄭沅의 〈安重根〉을 중심으로 (中国人が見た安重根—朴殷植と鄭沅の『安重根』を中心として)」、『忠北史学』第11・12合冊、2000年)。

沅が同書の編者と考え、中篇の「略史」と下篇の「韓人殺売国奴之歴史」(ハルツメ人の売国奴暗殺史)は鄭沅が自ら執筆した部分であり、「略史」こそが『安重根』の中心部分であるとしている。そして、金春善も「안중근의 의거에 대한 중국인의 인식」(安重根の義挙に対する中国人の認識)において、同書の編者を鄭沅としている。<sup>8</sup>しかし、同書の内容から見て、鄭沅が編者である証拠はどこにも見あらず、封面の署名や印章から見ても、この本のために題字を書き記しただけに過ぎない。このように、先行研究の同書への理解にはまだ数多くの問題が残されていることがわかる。

このような事情にかんがみれば、『安重根』の編者と出版状況について改めて考証する必要があるだろう。そのうえ、程涓(1870~1940)が『安重根』で伝えようとしたことは、朝鮮の滅亡を通じて、侵略者と戦うことよりも、過激な手段を用いてでも国内の売国奴や誤国賊たちに立ち向かうことこそが重要だと、国民に呼びかけることである。程涓のこのような考えは多くの人びとの賛同を得たのであった。程涓らのこのような認識についても、彼らの経歴や編集前後の中国国内の政治情勢と関連づけて簡単な分析を加えなければならない。

---

8 金春善「안중근의 의거에 대한 중국인의 인식」(安重根の義挙に対する中国人の認識)、『韓国近現代史研究』、2005年夏季号、第33輯。

## 2. 編者と出版時期について

まずは『安重根』が一体誰によって編纂されたのか見てみよう。実はこれは問題とするまでもないことだが、上述のように先行研究が鄭沅を編者と誤解しているため、ここで考証しておかねばならない。

実は程滄は本書の「後序」において明白に書き記しているのである。「私は安重根の事跡をまとめ、伝記を作って序文を書き、同人たちは多く詩文を作り、その事績を詠嘆した。これらを一冊にまとめ、まもなく上梓されるが、また国内外の新聞雑誌で、安重根の弟安定根によって著された「血涙語」を目にした。<sup>9</sup> ここからあらゆる作業が彼の手によって行われ、書籍にする際も彼自身が印刷に出向いたことがわかる。

そのうえ、『安重根』は上篇の「序」・「安重根伝」・「後序」に、いずれも程滄の署名があるので、彼の作品であることに異議はないであろう。上篇に収録されている詩文については、すべてではないが、多くが他人に依頼して書かれたことが、この後序からわかる。

同書には、王樹枏、<sup>10</sup> 呉伝綺、<sup>11</sup> 易順鼎、<sup>12</sup> 昭陵僧、賈恩猷、

9 程滄「後序」（『安重根』上篇、4頁）。

10 王樹枏(1851~1936)、字は晋卿、号は陶廬老人、河北省新城出身である。1886年(光緒丙戌)の進士、戸部主事に任じられ、その後、4川省青神県の知県・4川省学政を歴任、最終的に新疆の布政使まで昇進した。辛亥革命後は北京に隠居し、趙爾巽に清史館の総纂として招聘される。1936年2月北京西直門の寓居にて没した。彼は著作が多く、『畿輔通志』『清史稿』のほか、

『文莫室詩集』や『陶廬文集』、『陶廬文内集』、『陶廬詩統集』など数十種がある。王樹枏『陶廬老人隨年録』（張伯鋒・顧亜編、『近代稗海』第12輯、四川人民出版社、1988年）；姚漁湘・李満康「王樹枏伝略」（『大陸雜誌』第24卷第9期、1962年）。

- 11 呉伝綺（1858~1934）、字は季白、安徽省懷寧出身であり、のち安慶に定住した。1889年（光緒15）に挙人に及第し、国子監学録助教や湖南永綏府同知、湖南永寧府知府を歴任する。その後、足の病のため辞職し、安慶に帰って定住した。1909年（宣統元）に、安慶風節井のそばに安慶女子師範学堂を創設し、幼稚園も付設した。さらに彼はまた大弓箭巷で私立図書館を創設した。懷寧中学堂の監督を務めたこともある。1919年には『安徽商報』の主筆を担当する。1923年の冬には安徽省立図書館館長に任じられ、さらに通俗教育館を創設する。1928年館長の職から離れ、1934年南京で病没した。著書には『説文偶義』数十巻がある。
- 12 易順鼎（1858~1920）、字は実甫あるいは石甫ともいう。他にもまた中実、実父、中碩、碩甫、仲碩、易碩などの呼び名があり、懺綺斎と自署し、また眉伽とも号していた。晩年には哭庵と称し、のち一庵と変わり、ほかに眉伽や龍陽才子、懺綺斎主人、湖南漢寿龍陽人、碧湖秋夢詞人など別称があり、人はしばしば易5と呼んだ。湖南龍陽（漢寿县）城関鎮出身である。父の易佩紳は貴州按察使を務めた有名な儒将である。易順鼎は5歳の時には既に神童として知られ、有名な詩人であった。1875年（光緒元）恩科の挙人である。1888年以降3省河図総辦などにつく。日清戦争の時に、彼は主戦論者として知られ、劉坤一の軍幕に参加し、「討日本檄文」を著した。日清戦争後、悲しみと怒りがこもごも至り、廬山に入り、3峽谷の上に琴志楼を築き隠居したが、湖広総督張之洞の招聘により幕府に入り、両湖書院の分教を務める。1900年（光緒26）、8国連合軍の中国侵入に際して、彼が江陰江防の督辦に任命され、その後、陝西に転任を命ぜられ「江楚」（両江と両湖をさす。即ち江蘇・安徽・江西・湖北・湖南である）の運輸を監督した。1902（光緒28）年に広西右江道に転任し、1908年雲南臨安開広道に移り、その後すぐに広東欽廉道に転任した。翌年の秋広東肇羅道代理を務め、のち高雷陽道に移った。辛亥革命後は官にはつかず北京で暮らしたが、1915年9月参事院に帝政の復活を要求するため、湖南の官紳および立憲派の人士たち61人と連名して上書した。ゆえに1916年2月印鑄局の局長代理、局長の地位を得たのである。袁世凱の帝政が倒れると、易順鼎は失意のうちに北京をさすらい歩き、道楽場に入りし、女色に耽った。1920年北京の寓居にて逝去した。著作には詩集の『丁戊之間行巻』、『四魂集』など20数

陶鏞、<sup>13</sup> 唐桂、蔡元培、狄郁、<sup>14</sup> 王照、<sup>15</sup> 閔爾昌、<sup>16</sup> 江亢虎、<sup>17</sup> 姚

---

種があり、その大半が『琴志樓叢書』に収録されている。賈逸君編『中華民国名人伝』（北平文化学社、1937年、6頁）。

- 13 陶鏞(1895~1985)、名は善鏞、字は咏韶、鏞または宏齋と号し、別称は冷月という。陶淵明の子孫で、江蘇省蘇州出身である。祖父の陶芑孫、大叔父の陶詒孫はともに蘇州の有名な画家である。年少時代に羅樹敏のもとで絵画を勉強し、中国画と西洋画ともに優れていた。のち顔文梁と絵画の技術を学びし、とりわけ雪や月の絵に秀でていた。1918年長沙、南京、開封などにおいて大学教授を歴任し、蔡元培に新しい中国画の創始者であると称された。中華人民共和国が建立してから、彼は中国美術協会上海分会会員、上海文史館の館員となった。
- 14 狄郁、河南省の才子であり、民国初年に孔教を提唱し『孔教評議』を著した。
- 15 王照(1859~1933)、字は小航、芦中窮士または水東と号した。河北省寧河(現在天津に属する)出身である。1894年(光緒20)に進士及第し、戊戌の変法に参加していた。変法が失敗した後年、日本に亡命し、のちに清朝に自首した。その後、彼は官話合声字母を提唱したことで世に知られ、1913年には袁世凱に読音統一会の副議長に任命され、同会が彼の『官話合声字母』に基づいて考案した注音字母が1917年北洋政府によって承認・実施されることになった。
- 16 閔爾昌(1872~1948)、字は葆之、清末に袁世凱の幕僚となり、民初には北洋政府総統府の秘書を担当する。1927年以降彼は輔仁大学で教員を務める。著作には『雲海樓詩存』や『雷塘詞』、『碑伝集補』60巻などがある。そのうち『碑伝集補』60巻は彼が10年もの間精力を傾けて編集したものである(金毓黻「閔爾昌伝」、『国史館館刊』1967年第2巻第1期)。
- 17 江亢虎(1883~1954)、名は紹銓、別称に無文、抗斧、康瓠など、齋名は無我廬、素憲堂。江西弋陽人、南社のメンバーであった。清末に、彼が編訳局総辨、『北洋官報』総纂、刑部主事、京師大学堂教習、法部員外郎などを歴任した。1901年から日本やヨーロッパへ何回か留学、遊歴した。中国で最も早い社会主義者の一人である。1910年に彼が無宗教、無国家、無家庭の3無主義を提案し、1911年に上海にて社会主義研究会を発足させ『社会星』という雑誌を出版した。1911年11月に中国社会党を組織する。1913年中国社会党が解散させられたのち、アメリカに渡り、1921年にソ連へ渡った。1922年9月には上海で南方大学を創立し、自ら校長の座についた。1924年中国社会党を再組織、1925年に中国新社会民主党に改名、1926年に解散し

た。1927年夏、彼はカナダ大学中国文学院院长および漢学の主任教授に任じられる。1939年に汪精衛政権に参加したため、1946年漢奸罪に問われ、無期懲役の判決を受けた。著作には『無我廬文存』、『無我廬詩存』、『江亢虎文存初編』がある。

- 18** 查士瑞(1877~1961)、即ち查忠礼であり、浙江海寧袁花鎮出身である。12歳から南京の叔母の家に預けられ、学校で勉学に励んだ。辛亥革命の際に、彼が革命運動に応じ、学生軍の創設に参与する。1926年に新聞業界に入り、上海で『小日報』を発行した(查良安「願世界永遠和平—父親查忠礼逝世40年祭」(『蘇州雜誌』2001年、第6期)。
- 19** 汪洋(1878~1921)、字は子実、別称は影廬、影生、破園、石皮、聽歌人。安徽省旌徳出身であるが、幼少時代から揚州に寄寓した。小学校の教員をしていたが、のち新聞業界に身を投じ、まずは奉天(現在の沈陽である)で『東三省日報』を主宰し、反清朝革命を鼓吹した。1911年上海に赴き『中華民報』の編集長となる。辛亥革命後、彼は国民党に加入し、1913年3月宋教仁暗殺事件がおけると、袁世凱を倒すことを強く主張し、しばしば過激な演説を行った。第2革命失敗の後、許世英(1872~1964)の招請を受けて北上し、まもなくして許世英に従って福建へ行き、教科科長を担当した。その後、許世英が帝政に反対したが、これは汪洋の提案によるものと言われている。段祺瑞組閣後、許世英が交通総長となり、汪洋が上海電政局の監督を務めた。許世英が退いた後、汪洋も排斥された。汪洋は詩文に優れ、南社のメンバーとなる。彼はまた遊歴を好み、嘗てシベリアに行き、バイカル湖を経て、ウラル山脈を越えてサントペテルブルグまで至ったことがあり、台湾と日本にも行っている。1921年病気にかかり、医者 の誤診がもとで43歳の若さで逝去した。著作には『息影枝談』、『影生雜記』、『台湾』などがある。鄭逸梅「南社社友事略・汪洋」(『南社叢談』、上海人民出版社、1981年、151~152頁)；邵迎武『南社人物吟評』(社会科学文献出版社、1994年、106頁)；沃丘仲子『当代名人小伝』(崇文書局、1926年、148~149頁)。
- 20** 羅伽陵(1864~1932)、姓は羅詩であったが、のち羅と略称するようになる。本名は儷穂であったが、儷蕤ともいう。号は伽陵。上海でフランス人の父親のルイと、福建閩Vのユダヤ系イギリス人の豪商サイラス・ハルドーンと結婚すると、老上海で有名な哈同花園すなわち愛麗園に住んでいた。羅伽陵は字を読めなかったが、文章を発表していたということは、代作者がいたはずである。

葉舟、<sup>22</sup> 程善之、<sup>23</sup> 程美之、費樹蔚、<sup>24</sup> 梁啓超という24名の題詞

- 21 陳篤春は同盟会の会員である。1911年7月31日に同盟会の中中部総会が上海の北4川路にある湖州会館で設立された。公の活動に便利のように、彼は朱少屏、馬相伯、陳其美などとイギリス租界の漢口路嬢嬢里で中国国民総会を組織、ボランティアを公募して「模範体操団」を作った。これは合法的な形で尚武精神を提唱しながら、武装蜂起の準備をしていたのである。
- 22 葉舟は『安重根伝』（上海大同編輯局、1914年）において「一舟」と署名している。ここから葉桐封のことと思われる。葉桐封、号は一舟であり、浙江寧海县城関人。1908年に抜貢及第し、直隸州通判を務めた。著作には『一舟詩草』がある。
- 23 程涓は程善之が女性であると明記しているが、正しいかどうか確認できない。程善之の詩が程涓の「安重根伝」のために作られたものではないことから、程涓と程善之とは面識がない可能性も考えられ、このような誤りが生じたのかもしれない。南社のメンバーには、程善之と称する人がいるが男性である。この男性の経歴は以下のとおりである。程善之(1880~1942)、名は慶余、号は小齋、別称は一粟、書齋名は漚和室である。原籍は安徽省歙県であるが、江蘇省の揚州に居住し、南社のメンバーであった。父親の程桓生は兩淮塩運使に任じられたことがあり、3番目の兄程錦武は進士に及第して翰林院編修を賜わり、文学と書道により名声を博した。若い頃には父親の指導のもと経書でなければ読まず、史書でなければ眼を通さなかった。のち科挙を受ける際に、先生のところに寄宿してはじめて『紅樓夢』や『花月痕』などにひそかに目を通し思いをはせ、それらを真似して『駢枝余話』、『倦雲憶語』、『清代割地談』、『女革命吳淑卿』などのような野史小説を著した。1896年、博士弟子員となってからは科挙の道を諦め、当世の事に留意するようになった。まもなく彼は同人たちを集め、結社して講義を行い、歴代政治の沿革を研究する。1908年から1912年まで、彼は揚州府中学堂で教員を担当した。その間に、同盟会に参加し、辛亥革命の際には『中華民報』にて執筆した。第2革命の際には、孫文の軍事政府に参加し、事務的な仕事を任され大きな貢献を果たした。第2革命が失敗した後、彼は揚州に隠居して門を閉ざして母に仕え、世間の出来事に見向きもしなかった。30歳を過ぎてからは禅悦に皈依し、遁世した。彼は綺語の戒を慎重に守り、あまり執筆しないが、胡朴安とはよく討論していた。1928年、包明叔が鎮江で『新江蘇報』を創刊し、彼を主筆として招聘した。1932年には招かれて国難会議の会員となった。1935年、陳含光、陳賜卿らと一緒に蔣

が収録されている。

そのうち査士端、汪洋、王燾、陳鴛春、葉舟、程善之、程美之、梁啓超の詩文は、程涪が本書を編集する前に作られていた。

---

太華が創設した揚州国学専門学校で教員を担当した。1937年、鎮江が陥落し、彼は『新江蘇報』社に従って泰州へ、後に長江をわたって上海へ避難した。『新江蘇報』に勤務していた期間に、彼は積極的に抗日抗戦を宣伝し、1938年、武進で汪兆銘政権の「清郷」運動に遭遇、強い衝撃を受けた。1942年4月12日、上海から宜興の張渚へ引越す途中、常州で脳出血のため病没した。著作には『滙和室文存』、『滙和室詩存』、『印度宗教史論略』、『40年聞見録』がある。鄭逸梅『南社叢談』（上海人民出版社、1981年、255～256頁）；邵迎武『南社人物吟評』（社会科学文献出版社、1994年、280～281頁）；肖維琪、顧一平『南社中的揚州人』内部出版（邗江印刷、1991年、15～18頁）。程涪の『安重根』書のみならず、1914年上海大同編輯局が出版した『安重根伝』の「選録」にも程善之の詩がある。

- 24 費樹蔚(1883～1935)、字は仲深で、『韓非子』の「西門豹は気が短かったので、柔らかい草〔なめし草〕を身につけて短気を直すよう努めた」という故事から取った草斎を号とし、また明朝の黄梨洲(即ち黄宗羲一訳者注)を心にとどめて忘れぬよう、願梨を号としてもいた。ほかに左梨や左癖、迂瑣といった号もある。江蘇呉江同里鎮の出身であり、柳亜子の母親のおじにあたる。19歳に秀才に及第した。呉大澄が彼の才能を買って、娘の呉本静を嫁がせた。1915年(民国4)7月、費樹蔚は北京政府に入り肅政史を担当し、袁世凱の長男・克定と同じく呉大澄の婿であるため、厚い寵愛と信頼を受けた。袁世凱が帝王を僭称するにあたり、費樹蔚が面と向かっていさめたが、聞き入れられなかった。11月、彼は失望して袁世凱のもとを去り、蘇州に隠居し、章太炎、金松岑、張仲仁らと詩文を通じて討論を行い、張仲仁とともに「蘇州2仲」と称された。1916年5月8日、国民党の軍警がひそかに柳亜子を逮捕しようとしたところ、柳の妹婿である凌誦益を間違って捕まえた。結局費樹蔚が奔走して凌が救出された。彼は信孚銀行の董事長、呉江紅十字会の会長も務めた。1951年、柳亜子の提議によって編纂、出版された『費草斎集』には、費の詩文が3000余り収録されている。張仲仁「費君仲深家伝」(張一麐著『心太平室集』第4巻、1頁、『民国叢書』第3編82總合輯、1991年)；傳增湘「呉江費君墓志銘」(国史館館刊編集委員会、『国史館館刊』、台北・国史館、1948年第1巻第3期)。

それらは1914年に出版された『安重根伝』(上海大同編輯局)<sup>25</sup>にすでに掲載されており、『安重根』に収録される際に、文字の変更や抜粋が多少行われているだけである。『安重根伝』は、「東西洋偉人叢史」に収録された滄海老紡室の「安重根義士伝」をもとにして、海外の著名人の関連作品を加えて編集したものである。同書の序文には「かつて『東西洋偉人叢史』を刊行したが、この『安重根義士伝』は滄海老紡室の原稿であり、本局はその原本を見つけ、さらに国内外の著名人たちの傑作を集めて一冊にまとめ、世に公開するのである」<sup>26</sup>とある。査士端・汪洋・汪燾・陳篤春・葉舟・程善之・程美之らの詩はおそらくこの時期に収録されたのであろう。先行研究の考証によれば、滄海老紡室とは朴殷植のペンネームであり、『安重根伝』を脱稿したのは1912年のことであるという。<sup>27</sup> ということは、査士端らの詩が作られたのは1912年から1914年の間のはずである。しかし、梁啓超の「秋風断藤曲」が書かれたのはそれ以前の庚戌年(1910)のことで、上海醒社出版の『朝鮮滅亡史』に収録されていた。<sup>28</sup>

残りの王樹枏や易順鼎らの詩には、程滄の「安重根伝」のため  
に作ったと明記されているものもある。例えば、王樹枏の詩は「題

---

25 上海大同編輯局の『安重根伝』(表紙では題目が『安重根』となっているが、奥付では『安重根伝』と表記されている)は、尹炳奭編『安重根伝記全集』(ハル、国家褒勛処、1999年、204~261頁)に収録されている。

26 滄海老紡室(朴殷植)『安重根伝』; 尹炳奭編『安重根伝記全集』(韓、国家褒勛処、1999年、204頁)。

27 尹炳奭編『安重根伝記全集』(ハルツメ、国家褒勛処、1999年、203頁)。

28 梁啓超「秋風断藤曲」(『朝鮮滅亡史』、上海醒社、出版年代不詳、3~5頁)。

白菟居士韓義士安重根伝後40韻」、呉伝綺の詩は「侠烈行白菟居士属作」という題名であり、いずれも程涓との関係を示している。易順鼎は「題安重根伝後」、昭陵僧は「次韻一庵居士題安重根伝後」、唐桂は「白菟居士所作安重根伝引荊卿留侯故事，其美2人亦人傑也，又賦2絶」という題名を冠していることから、これらも程涓の「安重根伝」のために作られたことがわかる。唐桂にいたっては詩の中でははっきりと「勇ましい程君は古来の君子であり、天下を支えようとする事彼に及ぶ者は今いない。昨夜私に一通の手紙を示した。韓国男児安重根の伝記だという」<sup>29</sup>と述べている。

このほか、賈恩馱の詩に「程君のこの伝記には思いが込められているが、世間はよく見ていながら誰も応えようとしなない」、陶鏞の詩に「ああ刺客の安重根よ、程君が悲憤慷慨の言を伝えきったぞ」、費樹蔚の詩に「このような気質をもつ程君は、あるいは私の趣旨を理解するかもしれない」とあるように、この3人の詩も程涓の「安重根伝」のために作成したものだと思われる。その他の詩の中にも、はっきりと言明してはいないが、程涓の外敵よりも国賊を殺すべきという主張をめぐって詠まれたかもしれないものがある。この点に関しては、後に改めて言及したい。

『安重根』の中篇に収録されている安重根の生涯・義挙・処刑などに関する資料は、「後序」に「私は安重根の事跡をまとめ、伝記を作って序文を書いた」とあるように程涓が収集・整理したに違いない。そして、「序」に「私が国内外の新聞から記事を選び出

---

29 程涓『安重根』上篇(8頁)。

し、並べ直して伝にした」<sup>30</sup>とあるのも間接的にこのことを表している。下篇附録の内容も同じく彼が収集したものである。それは、彼が「後序」に、安定根の「血涙語」は彼が「収録して伝の後に付け加えた」<sup>31</sup>と明記していることからわかる。ゆえに、程澗が編者であるのは勿論のこと、これらの内容を一冊にまとめて印刷に出したのも彼であり、おそらくは彼自身の資金を使って出版した可能性が高い。だから出版社の名前が示されていないのである。1933年に程澗が『歴代尊孔記孔教外論合刻』を出版した際には、上海道徳会の名義で出版されたが、実際には、各方面の名士により出資、印刷されたのである。鄭沅は同書の題字を揮毫しただけであって、それ以外にはこの書物といかなる関係も見いだせない。この時期の鄭沅は上海で隠居し、書道作品を売って生計を立てていた。程澗は若い頃から各地を渡り歩いて名家の書画を収集することを好み、数多くの書道・絵画の名人と交流していた。のちに彼はティモシー・リチャード (Timothy Richard, 1845~1919—訳者注) の中国語秘書を務めることとなり、ティモシー・リチャードが中国の高官らと幅広く交際していたことから程澗の交際範囲もさらに広がっていた。おそらく鄭沅とも早くから知り合っていたはずである。しかも当時は、2人とも上海に滞在していたため、程澗が鄭沅に題字を求めることは理に適っている。封面に書かれた「安重根」の題字の書体や「長沙鄭沅」の下に押されている印章などから見ると、こ

---

30 程澗「序」(『安重根』上篇、1頁)。

31 程澗「後序」(『安重根』上篇、5頁)。

の題字が鄭沅によって書かれたことは紛れもない事実である。

程涓が本書を編纂した背景を明らかにするには、出版時期の確定が重要な鍵となるだろう。同書は出版社や出版期日を記していないので、僅かな手がかりから推測するほかない。

出版時期に関しては、韓詩俊が1920年ごろと推定している。これは『新韓青年』創刊号の出版時期にもとづいて推定したものである。なぜならこの本には『新韓青年』に収録されている安定根の文章が掲載されており、さらにこの文章が『新韓青年』の創刊号に最初に掲載されたと編者注で明確に書かれているからである。『新韓青年』創刊号は2種類が発行されている。一つは1919年12月1日に上海で発行されたものであり、もう一つは1920年3月1日に上海で発行されたものである。前者には、安定根の文章は載せられていないが、後者には、安定根の「余之来華后感想」と題する文章が掲載されており、ところどころ表現に違いこそあれ、「血涙語」と内容が一致している。そこで同書が1920年3月1日以降に出版されたと推定しているのである。<sup>32</sup>

韓氏の論は論拠が比較的しっかりしている。いっぽう金春善は『新韓青年』創刊号が1920年3月1日の出版である事実を無視し、ただ安定根の文章に「その上、前年韓人が吉林省延吉県で独立万歳を叫んだが、整然と秩序だっており、何も騒ぎは起きなかった。しかし中国の軍隊が現れて発砲し、その場で19人が銃殺された」

---

32 韓詩俊「中国人이 본 安重根—朴殷植과鄭沅의 〈安重根〉을 중심으로」(中国人がみた安重根—朴殷植と鄭沅の『安重根』を中心として、『忠北史学』第11・12合冊、2000年)。

という一節があり、これが1919年3月13日に中国の警察が龍井における韓人のデモを鎮圧したことを示していることから、本書が1920年より後、1920年代前半の発行だと推測し得る。<sup>33</sup> つまり金春善の推測は、韓詩俊より少なくとも1年遅い。これは「前年(おとし)」という言葉だけを根拠にしているので、明らかに説得力に欠ける。なぜなら朝鮮語では、「前年」が「前の1年」すなわち「去年」としての意味にとることもできるからである。もし「去年」という意味合いで理解すれば、安定根の文章は1920年初から3月1日までの間に書かれたことになる。さらに安定根の文章に「私は10年後において(安重根死後10年—筆者注)、我が韓民族の独立運動に因んで、中国に対して思わず心の中を吐露せずにはいられなかったので、この衷心を表したのだ」<sup>34</sup>とあり字面からは1920年のことと理解できる。我々が確認できるのは『安重根』が1920年3月1日以降に出版されたことだけで、1921年3月1日以降とは断定することはできない。

また、本書に収録された詩も本書の内容が形作られた時期を反映する。先ほどの「後序」にあった「まもなく上梓されるが、国内外の新聞から安重根の弟、安定根が著した『血涙語』(『』は訳者がつけたものである)を見かけた」という記述から、『安重根』の内容がおおよそ1920年3月1日以前には出来上がっていたと結論できよう。

---

33 韓詩俊「中国人이 본 安重根—朴殷植과鄭沅의 <安重根>을 중심으로」(中国人がみた安重根—朴殷植と鄭沅の『安重根』を中心として、『忠北史学』第11・12合冊、2000年)。

34 安定根「血涙語」(程洵『安重根伝』下篇・附録2、11頁)。

そして、これまでの議論から、梁啓超の「秋風断藤曲」が1910年、查士瑞・汪洋・王燾・陳鴛春・葉舟・程善之・程美之などの詩が1914年あるいはその前に作られたことがわかっている。とはいえ、このことは同書の形成過程の理解にさほど役に立たない。重要なのは程涓の「安重根伝」のために作った詩の年代を確定することである。

本書に収録される王樹枏の「題白菑居士韓義士安重根伝後40韻」は、「題程伯菑韓義士安重根伝後40韻」という題名で王樹枏の『陶廬詩続集』第10巻の『斜街花市集』(陶廬叢刻20、丁巳年(1917)2月)にも収録されている。『斜街花市集』は王樹枏が「戊午年(1918)から己未年(1919)まで」2年間に執筆したもので、安重根を詠むこの詩は戊午年つまり1918年に置かれている。先ほど引用した程涓の「後序」の説明によれば、彼が安重根に関する資料を集め、「安重根伝」と「序」を執筆する作業は、著名人たちに題辞を求めるまえに行われているので、これらの作業はおおよそ1918年頃に行われていたと言える。

そのほか、費樹蔚の詩には「このことは今となつては10年」という表現があり、安重根が伊藤博文を暗殺した事件からすでに10年がたったことを示しているので、この詩が作られたのが1919年のことであると判断できよう。もしこういった推測が成立するのであれば、程涓が同志たちに「安重根伝」のための詩を依頼したのは、1918年から1919年の間ということになる。

### 3. 主旨と意義

純粋な歴史学の観点から見れば、程澗の「安重根伝」は朴殷植の『安重根伝』に遠く及ばないだけでなく、中国人による同類の作品の中でも決して優れたものとは言えない。なぜなら、程澗は主に新聞資料に依拠して執筆したが、各新聞の記事は必ずしも一致しておらず、その結果、いくつかの事実について程自身も意見をまとめることができていないからである。例えば、安重根の出身地に関して、「安重根伝」では韓国平安道鎮南浦人としたが、中篇の「略史」では、安重根とその父親が平安道（海一筆者注）州の出身という説もあれば、中和生まれという説もあると述べ、「現在はまだ確定できないが、要するに平安道付近の生まれであることは疑いないであろう」<sup>35</sup>とまとめる。しかし安重根自身は、平安道海州首陽山のふもとに生まれたと述べているのである。<sup>36</sup>

それだけでなく、程澗の「安重根伝」は史実の間違いも多々ある。例えば、安重根の父安泰勛の名前を「泰混」と間違い、更に安泰勛が「天主教を信仰し、かつて慶尚南道鎮海郡守を務めたが、大院君の件で排日主義を首唱し、投獄され処刑された」<sup>37</sup>と記す。しかし、実際のところ、安泰勛は儒生で進士とはなったが、郡守

35 程澗「略史」（『安重根伝』中篇、1頁）。

36 安重根「安応7歴史」（尹炳爽編『安重根伝記全集』、国家褒勛処、1999年、64頁）。

37 程澗「安重根伝」（『安重根』上篇、1～2頁）。

になったことはない。祖父の安仁寿が鎮海県監を務めたことがあるだけである。安泰勛が天主教を信仰したのも1895年以降のことである。1894年朝鮮は東学党の乱(甲午農民戦争—訳者注)が起こり、このとき安泰勛は故郷を守るために郷勇を組織したので、安重根もそれに参加した。彼は赤い服を身にまとい、勇敢に戦っていたことで「天から降りてきた紅衣將軍」<sup>38</sup>と呼ばれた。のちにある宰相が軍事費用に流用していた公谷を返納するよう安泰勛に命じたので、安泰勛はやむを得ずフランス人の天主教教会に入り、このとき安重根も天主教に入信したのである。<sup>39</sup> この件は大院君とは何の関係もなく、このことを理由に処刑されることもなかった。

安泰勛が処刑されていないとすると、程滄が「安重根伝」で父親が死んだ後に「安重根は独りきりで身を寄せるところがなく、平壤の農家に逃げ込んだ」<sup>40</sup>ことや中篇「略史・刺客之家世」の「安(重根)は一族を失ってから、貧困のなかを育ち、若くして身寄りを失い、流浪の生活を送り、辛苦を嘗め尽くした。その言語に絶する艱難辛苦の思いがあったことが、彼が慎重に心を砕き国難を憂える人物となる大きな助けとなった」<sup>41</sup>という記述も事実と合わなくなる。安重根の家は、本来財産に富み、家族も多かった。ただ、1895年以降安重根は家業に励むことをやめ、ひたすら尚武精神を

---

38 『安重根伝』(朴殷植著、檀国大学校附設東洋学研究所篇『朴殷植全書』中、東洋学叢書・第4輯、檀国大学校出版部、1975年8月、569頁)。

39 『安重根伝』(朴殷植著、檀国大学校附設東洋学研究所篇『朴殷植全書』中、東洋学叢書・第4輯、檀国大学校出版部、1975年8月、569頁)。

40 程滄「安重根伝」(『安重根』上篇、2頁)。

41 程滄「略史」(『安重根』中篇、1頁)。

提唱して、一家の財産を使い銃器を買い入れ、故郷の青年たちを組織して軍事訓練させて、さらに各地へ志を同じくする人びとを訪ねて団体を組織し、同仁たちを救済するようになったため、財産をすっかり使い果たし、生計にも事欠くようになったのであった。<sup>42</sup>

さらに、程済は「金玉均・禹範善・朴鏞和・李完用の暗殺に、いずれも安重根が関与していた」<sup>43</sup>という。しかし、実は金玉均は日清戦争の前に朝鮮朝廷から派遣された洪鐘宇に既に暗殺されており、安重根とは関係がない。それに比較して、史実について言えば『世界亡国稗史』<sup>44</sup>（楊南郵編、1917年出版）の「韓国義士小伝」に書かれている安重根伝のほうがまだ優れている。ここから、程済が当時既に出版された朴殷植の『安重根伝』やその他の中国人の著作をおそらくほとんど参考にしていなかったことがわかる。

全体的に見て、程済が編集した『安重根』は安重根研究にとって史料価値は低い。程済の主旨は、実は安重根の生涯や思想の研究にはなかったのである。収集した資料を除いてしまえば、彼自身が執筆した「安重根伝」は千字にも満たない、わずか1ページあまりの分量に過ぎない。彼が本書を編集した趣旨は、おそらく安重根の義挙を通じて自分の思想を伝えることにあった。著名人

---

42 朴殷植著、檀国大学校附設東洋学研究所篇『朴殷植全書』中（東洋学叢書・第4輯、檀国大学校出版部、1975年8月、571頁）。

43 程済「安重根伝」（『安重根』上篇、2頁）。

44 上海交通大学図書館1917年初版。1928年上海進益学社によって『亡国痛史』と改題して再版された。

たちが寄せた詩文も類似の傾向を表している。このような内容は、中国人の韓国認識や安重根認識、および5.4運動前後の中国知識人たちの時勢に対する認識と主張を理解するためには一定の参考価値を持つ。<sup>45</sup>

安重根事件の意義については、1914年に上海大同編集局が『安重根伝』を再版した際に、「近世以来の英豪義侠および国民心理を研究する優れた資料であり」、さらに「近年東アジア情勢の密接な関係に関しても、本書から窺うことができる」と、その意義を語った。<sup>46</sup> これに対して、程済が編集した『安重根』の目的はやや異なる。程は本書の封面に次のメッセージを残し読者の注意を惹いた。「本書が伝えたいのは、朝鮮の安重根は、国が滅びる前に李完用と李容九という売国奴を暗殺すべきであったということである。そうすれば、朝鮮が滅亡することはなかったのだ(国内を混乱させる輩は誤国賊であり、罪は売国奴に等しい)。国が滅びてから伊藤博文を暗殺したところで、もはや手遅れであり、いたずらに朝鮮の滅亡を早めたにすぎない。孟子が言っているではないか。『国が自らを滅ぼせば、後に他人がその国を滅ぼすものだ』と。自ら滅亡の道を取ったのであるから、伊藤博文と何の関係があるのか。愛国の男児よ、早く気づきたまえ」。

---

45 先述の金春善論文はこの点について言及したが、『安重根』の内容がすべて54運動後に作られたことを前提に論じたので、分析に誤りが生じるのは避けられなかった。

46 滄海老紡室(朴殷植)『安重根伝』；尹炳奭編『安重根伝記全集』(国家褒勲処、1999年、204頁)。

収録されている序跋や題辞から、程涓のこの考えに賛同する人が少なくなかったことがわかる。まずは陶毅が「書安重根伝後」で程涓の「安重根伝」に対する心境を以下のように示している。「とりわけ好きなのは冒頭の序文であり、自分の考えと期せずして一致している」。<sup>47</sup> そして陶毅は、安重根の業績は始皇帝を暗殺しようとした荆軻にも勝るが、その見識は秦桧を暗殺した施全には及ばないとも考えた。施全は「身を捨て外敵を殺しても、外敵は無数にいて殺し尽くすことができない。それよりはこの身を捨て国の裏切り者を倒して、裏切り者につく輩や、裏切り者になろうとする輩、国を売り敵に媚びて生計を立てる輩どもの見せしめとし、命を顧みて悪事をまねる勇気を失わせるのだ。そのうえで国じゅうの人びとの心を奮い立たせ、協力して共通の敵に立ち向かうことを望むことができれば、強い隣国に抵抗するのに妨害を憂えることもなく、亡国の禍も少し免れるであろう」<sup>48</sup> というものであった。安重根にとっても同じ理屈で、「伊藤一人を殺すのは、憂憤を晴らすに十分かもしれないが、国の滅亡を救う足しにはならず、かえって朝鮮の滅亡を加速させた。荆軻が始皇帝を暗殺しようとして果たせず、徒に命を失って燕の滅亡を加速させたのとどれほどの違いがあるというのだろう」<sup>49</sup> と陶毅は考えたのであった。ゆ

47 陶毅「書安重根伝後」(程涓『安重根』上篇、4頁)。

48 陶毅「書安重根伝後」(程涓『安重根』上篇、3頁)。引用文の傍点は原文につけられたまま(以下同)である。陶毅あるいは程涓が意図的に強調したことがここから伺える。

49 陶毅「書安重根伝後」(程涓『安重根』上篇、3頁)。

えに陶毅も安重根のような義士は施全のごとく「外敵を憎まず、裏切り者を憎む」べきであったと主張したのである。陶毅はこのような想像までしている。「もし安重根に施全のような見識を持たせ、その新しい武器と優れた技術を手にさせ、まず国内の李完用や李容九といった売国奴を殺させていれば、忠義が唱えられ、民衆の感情が奮い立ち、積年の弊害を一掃して、国もいまなお保たれていたであろう。これは日本の統監を銃殺して、自らの命も国家もみな犠牲にするよりはるかに優れているではないか」。

呉伝綺も「侠烈行白菴居士属作」において次のように程済の思想を評価した。「程君の素晴らしい言論がヒントを与えてくれた。興亡を感慨して胸が高鳴るのである」。<sup>50</sup> また彼は「安重根にもし大志があれば、国を強くして速やかに外国に訴えかけるべきであった。暗殺はただ国内に対して奸党を除き危機を免れるためのみ行うべきである」ともなえざる。李容九、李完用ら売国奴に対しては、もしも「国が滅亡する前に一撃を加えていれば、それは真に万雷の一時にとどろき渡るような出来事であり、朝鮮の人心が皆揺り動かされ、力はなくとも強く支えたはずである。いま伊藤を殺したが(本当の)敵は無傷であり、無駄死にただけで、本末転倒である」<sup>51</sup>と考えていた。

賈恩猷も詩の中で売国奴の害は外敵より大きいと強調しており、程済の考えを受け入れている。彼は次のように慨嘆してい

---

50 呉伝綺「侠烈行白菴居士属作」上篇(6頁)。

51 呉伝綺「侠烈行白菴居士属作」上篇(6頁)。

る。「惜しいかな重根の計画は拙劣であった。あのときもしまず内患を取り除いていれば、あれほど多くの人命と武器が犠牲になることはなかった。国を売り身代を築けば、そのたびに命を落とすことになるので、国賊はうろたえてわれ先に改心する。虎が手先を失い、鳥がおとりを失ったからには、素晴らしいわが領土が何によって侵略されよう。惜しいかな、頭にあったのは伊藤を暗殺することだけ、国賊たちは少しも傷つかない」。<sup>52</sup>

ほかには、唐桂や姚季英、陳錫麒も程済の主張に賛同した。唐桂は「悪事を助ける人間たちがすべて取り除かれたら、強き隣国もたやすくは侵略できない」<sup>53</sup>と考え、姚季英は詩に「志が定まったのに身が滅びるのはまた悲しい、羊に逃げられてから檻を修理してももう遅い」と詠んだ。そして陳錫麒は詩に「なくの巨奸は、たずらに高位そ古め。忠義の心その義拳の年になる義るだけ。36人はみな壮士であるが、早く血を啜って盟約し汚れた世界を浄化すべきである」<sup>54</sup>と述べた。蔡元培は詩において、国が自らを滅ぼせば、後に他人がその国を滅ぼすものだということを強調し、安重根の義拳が結局韓国の滅亡を救えなかったことを嘆いているので、どうやら彼も程済の考えに同意しているようだ。そして、蔡元培は権力を握っている売国奴への批判を以下のような詩に託した。「その執政ぶりは心をひどく痛ませる、小人が権力をかさに着ているのだ。政治制度と教化は失われ、国は滅びる。利害には、た

---

52 呉伝綺「俠烈行白菟居士属作」上篇(6頁)。

53 程済『安重根』上篇(9頁)。

54 程済『安重根』上篇(12頁)。

とえ毫厘の差であっても積もり積もって千里のように違ってくる。あるものは国が自壊していくさなか、権力を争い牽制しあう。それは物が腐ったら、蟻が襲ってくるようなものである」。彼は安重根の義挙に対しても「私は沈黙するほど悲しく、心を痛めて歯軋りする。この孤憤を発するも、ついに国の祭祀を絶やすこととなった。ああ烈士よ!」<sup>55</sup>と嘆いた。

陶鏞は大筋で程涓の売国奴を殺せと言う主張に賛同するが、詩の中ではそれが簡単にできることでないと嘆いてもいる。そして彼はこのようにも言うのである「私はこの話を聞いて大きなため息をつく。国賊を取り除くことは山を持ろしげるくらい難しいことなのだ」。<sup>56</sup>と慨嘆したのである。一方、狄郁は、安重根の伊藤博文暗殺が韓国の滅亡を加速させたとの主張に、はっきりと反対した。「韓国の滅亡について安君を責める者があるが、この説は誤りで私は受け入れない」。しかし「矛先を変えて内奸を殺すべきであったというのは、たいへん鋭い言葉でもっともなことである」。<sup>57</sup>と程涓を賞賛してもいる。程涓と全く違う意見を表明したのは、費樹蔚だけであった。彼は殺すべきはむしろ伊藤博文であって李完用ら売国奴ではない、なぜなら外敵の誘惑がなければ売国奴はあらわれないからだと考えた、即ち「誰が利益と官位を掲げて誘い、我々の心を死なせたのか。賊を擒えるにはまず王を擒

---

55 程涓『安重根』上篇(10頁)。

56 程涓『安重根』上篇(8頁)。

57 程涓『安重根』上篇(10頁)。

えるべきで、それはあちらにあって此処にはないのである」<sup>58</sup>と語っているのである。ただ、費樹蔚は「奸佞を殺すほうがまだやるべきで、隣国の敵を殺すことはやめてもいい。これは安重根君のことは異なるので、まだ両者を軽々しく比較すべきではない。<sup>59</sup>とも考えていた。

程澗が裏切り者や売国奴を殺せと主張したのは実は当時の中国に対して提言するためであった。彼のこの意図は序文において既に明白に述べられている。彼は文章を書いて安重根を賞賛する趣旨をこう強調した。「天下後世のおよそ祖国が滅亡するに忍びない者に対して、自ら国を滅ぼす者をまず切り殺すべきであると示し、自ら国を滅ぼせる者には、国内に安重根のような人材がいることを知らしめることにある。ああ、恐れるがよい」。<sup>60</sup>

程澗の「安重根伝」に題辞した人も程澗の意図をはっきりと理解していた。例を挙げてみよう。呉伝綺は詩において「私はこの話を聞いて大きくため息をつく。無言で向かい合い、心が朦朧となりそう。君よ大声で叫び耳を貸さない者を振り向かせよう。水面上に警鐘は鳴り響いていると。いかんせん迷って醒めない者が多く、同胞が心配で気が気でない」。<sup>61</sup> 賈恩馘も「程君のこの伝記には思いが込められている。しかし世間はしっかりと見ているのに呼びかけても応じない。私は更に声を大にして天下に呼びかける。

---

58 程澗『安重根』上篇(13頁)。

59 程澗『安重根』上篇(13頁)。

60 程澗「序」(『安重根』上篇、1頁)。

61 呉伝綺「侠烈行白菴居士属作」(『安重根』上篇、1頁)。

弱者を励まし、強者を懲らしめるべきであると。一万冊を刷り、一万遍読みあげよう。この一言だけで国を興隆させることができるであろう」<sup>62</sup>とも言った。そして、易順鼎も詩で程済が「安重根伝」を著したのは義侠を称揚するためのみならず、国内の売国奴に警告するためであると述べた。彼は「程君のこの伝記には別の意味がある。それは義侠を重んじるだけでなく、義侠に借りて奸佞に警告しているのである。歴史書を著して乱賊を恐れさせるようなものであり、その上で義侠に手本を残すのである」<sup>63</sup>という。昭陵僧が「次韻一庵居士題安重根伝後」において「程侯は華袞で特別であるが、年月がたつと忠烈の士が埋没されてしまうことを恐れ、厳肅さに溢れた言葉で奸佞に警告し、永遠に売国奴を痛罵するのである」<sup>64</sup>と述べ、更に中国でも売国奴を懲らす安重根のような義士が現れることを期待して、次のように示した。「中国の国土が列強の手に陥ちていることは久しい前からのことであるが、その人〔安重根のような義士＝訳者注〕を探してもまだ見つからない。思わずすすり泣き長嘆してしまうのである」。唐桂は「中原には狐・鼠がなんと多いのであろう。奴らを殺したいが手には斧がない。ああ、手に斧なくしてはどうしようもなかろう。中原の狐や鼠がなんと多いのか!」とまで言って嘆いたのであった。陳錫麒は同じような嘆きを「一句ひねり出すごとに振り返り、霸気が消沈し九州〔中国全土〕を眺める。どうすれば先生（安重根を指す＝訳者注）のよう

62 程済『安重根』上篇(7~8頁)。

63 易順鼎「題安重根伝後」(『安重根』上篇、7頁)。

64 昭陵僧「次韻一庵居士題安重根伝後」(『安重根』上篇、7頁)。

な義士を数多く得て、自らの命を省みず敵を倒せるのであろう。」と詩で綴った。

では、程済・陶毅が言った中国の売国奴とはいったい誰であろうか。安定根は「血涙語」において「満清を排除することには勇敢だが、外国人には弱腰である」、「現在、中国の偉人たちはことごとく日本恐怖症になっている」と中国人のことを評し、武力で日本の侵略に抵抗するよう主張した。また彼は「ああ、今日の中国を救おうとするならば、国民の志を激励し、士気を高めてから、4億人の熱血で島族(日本人)に抵抗してはじめて為しえるのである。さもなくば、諸般の政策がすべて机上の空論として役に立たなくなり、自ら破滅を招くであろう。いわゆる国を興隆させる一言とは、流血のことなのだ」<sup>65</sup>と力説している。安定根のこの文章については、程済が「安重根伝・後序」において「読み終えてひどく悲しくなる。まるで文字に血涙がにじみ出ているようである」。<sup>66</sup> 編集後記においてもこの文章を「一句一句が金石のようで、一字一字に血涙が染み込み、これを読めば十分に国民を反省させるに足る」<sup>67</sup>と称え、また以下のように明確に語った。「そもそも『血涙語』は、韓国人を激励するのみならず、強きに媚びて弱者を虐げれば、自滅するにとどまらないと懇々と中国人に警告してもいるのである。我々中国人の中に安重根と志と行いを同じくする者や、同じ義憤を感じる者がいないことがあるか。もしいるとしたら、

---

65 安定根「血涙語」(『安重根』下篇、10~11頁)。

66 程済「後序」(『安重根』上篇、4頁)。

67 程済『安重根』下篇(8頁)。

風を聞いてすぐに立ち上がろうではないか。我が国の何もできない中央政府や混乱する辺境を見回してみれば、隣国に媚びないものは少なく、狐や鼠のような小人ばかりなのである。祖国の民衆を虐げ、結局は国家の財産を盗み、乾物店の魚のような我が民衆から際限なく取り立てようとし、沢の水を抜いてから漁をするごとく目先の利益ばかりを考えているのである。内訌が次から次へと起こり、外患がその隙につけ込んで、国全体はすでに滅亡の危機に瀕している。しかし彼らが、国が滅びんとしても自らの権利にしがみつくなのは、朝鮮の李完用、李容九という売国奴と比べても、全く変わるところがないのである。世論も箴言も国法もどうすることもできない。ただ愛国義侠の士が現れて、ともに5歩歩けば血を流し、少しでも凶頑を戒めることを期待するのみである。もし安重根が現在の中国に生きていれば、血を語ろうともせず、毅然として武器を持ち上げるであろう。その鉄血が伊藤に向かう暇もなく、まず本物よりもいっそう酷い中国の李完用、李容九らを懲らすであろうこと、言うまでもない。<sup>68</sup>

1918~1919年前後の中国の現実と照らし合わせれば、程済がいう中国の売国奴や誤国賊とは明らかに北洋軍閥と地方軍閥であり、とりわけその親日派を指している。1918年5月北京政府は日本と『日華陸軍共同防敵軍事協定』と『日華海軍共同防敵軍事協定』を結び、日本の中国侵略の片棒を担いだ。このことは中国民衆の反対をまねき、日本への留学生が学業を放棄して帰国する事態を引き

---

68 程済「後序」(『安重根』上篇、4~5頁)。

起こし、5.4運動の伏線になった。5.4運動が勃発した後、曹汝霖・陸宗輿・章宗祥ら親日派は国民に売国奴と名指しされ、中国の輿論も軒並み売国奴を糾弾したが、常に朝鮮を引き合いに出していた。<sup>69</sup> 程滄は保守派の文人として、1918年の段階から過激な手段で親日の売国奴に立ち向かうことを呼びかけ、数多くの文人の共鳴を得た。これは当時中国の政治状況の変化を反映し、つまり人びとがみな直接的行動や非常の手段を以て北洋軍閥に対抗することを望んだのである。このことから5.4運動のときに、学生のデモ隊がなぜ趙家楼を焼討ちし、章宗祥を袋だたきにしたのかがよりわかりやすくなるであろう。

国民革命が始まる前には、一般民衆は中国の未来がどうなるか全く予想できておらず、程滄のような保守的な文人はなおさらそこまで考えが及ばなかったので、義侠に希望をよせるしかなかったのである。王樹枏は詩において「程君は義侠を好む」<sup>70</sup>と語っている。このように程滄にとっては、中国人が義侠と見なした安重根が目止まるのは自然なことで、彼が「安重根伝」を著した動機もおそらくそこにあったであろう。

---

69 例えば、北京大学の学生がかつて北京の市民に『李完用与朝鮮』を講演したことがあり（『5.4愛国運動』、中国社会科学出版社、1979年、322頁）、1919年5月6日に『晨报』は「高麗与中国的比較」を発表し、売国派が亡国の元凶だと指摘した。売国奴を糾弾する時に朝鮮のことを思い出し、そして安重根を自然に連想するのである。5.4運動の時に、各地の学生が演出した新劇に『安重根』、『高麗亡国史』、『朝鮮亡国恨』などがある（中国社会科学院近代史研究所編『54運動回憶録』下（中国社会科学出版社、1979年、783～785頁）。

70 王樹枏「題白菑居士韓義士安重根伝後40韻」（『安重根』上篇、5頁）。

義侠に希望を寄せたのは程涓だけではない。彼の「安重根伝」に題辞した人々もみな義侠に傾倒し、中には自ら侠気を持つ人も少なくなかった。易順鼎は「文儒・義侠は古より並び立つが、儒者が義侠に及ばないのは今に始まったことではない」<sup>71</sup>と慨嘆するが、彼自身もたいへん侠気のある人物であった。日清戦争の時、彼は筏で海を渡り東京を制圧する計画を立て、後には実際に台湾へ行き日本軍に抵抗しているのである。彼は、かつて次のように自分を評価した。「この20年あまりの半生は、最初は神童、才子であったが、後に酒豪となり、侠客となった。若くして名士であり、経生であり、学者であり、高官であり、隠者でもあった。東へ西へ神出鬼没で、師友たちが冗談で神龍などと呼ぶ。その操行は定まらず、儒者のようだが墨家のように、伯夷のようだが柳下惠のよう。その一部分だけを取り上げてどうこう評価できないのである」<sup>72</sup> また程善之が嘗て「春日雜感詩」において自分の若いときの経験を次のように綴った。「私のはじめて髪を結んだ頃、もう遠方に出る志を抱いた。富貴には心引かれず、功名を挙げることを誓ったのであった。10歳で経書を学んだが、文章を以て名を上げることを恥じた。14歳で剣術をならい、16歳には兵法を語った。20歳で非凡な氣勢をもち、なにものも眼中になかった。それから10余年、さまよい歩き結局何もなしていない。才能も日増しに弱まり、意気込みだけが溢れている。のんびり日々を過ごすことを

---

71 易順鼎「題安重根伝後」（『安重根』上篇、6~7頁）。

72 易順鼎「哭庵伝」（王文濡編、程大琥・馬美着校訂・注釈『続古文觀止』、岳麓書社、2003年、319頁）。

幸いとして、妻子もできた。立身出世ができぬのなら、いっそ大罪を犯して刑死してしまおう。ああ、明鏡の中で頭をかく姿に驚ろかされる」。<sup>73</sup> 易順鼎・程善之が青年時代にみな義侠のような気概を持ったことは、ここから窺える。閔爾昌は抗日戦争期に北京に隠居し、数年間家から一步も出ず、中央公園に行くことさえ節を失うことだと考えていた。彼はアメリカの戦闘機が空爆に来てくれることを夢見て、自分が爆死しても決して惜しくないと言っていた。このことも彼の気高い民族的気概を表している。<sup>74</sup>

蔡元培は若い頃に、暗殺に傾倒し、革命には暴動と暗殺という2つの道しかないと思い、「とりわけ女性による暗殺が適当で、愛国女学に暗殺の種をまいておくのだ」<sup>75</sup>と考えていた。1904年の夏から初秋にかけて、蔡元培自身も暗殺団に参加し、ひそかに爆弾の製造を試みていた。<sup>76</sup> 実は、5.4運動の勃発は蔡元培と直接に関係し、彼は学生が実際の行動で愛国心を表すことを支持していたのである。<sup>77</sup>

---

73 肖維琪、顧一平『南社中的揚州人』内部出版(邗江印刷、1991年、112頁)；鄭逸梅『南社叢談』(上海人民出版社、1981年、255頁)。

74 鄭振鐸「吳佩孚的生与死」(鄭振鐸著、劉英民、李艷民責任編集『鄭振鐸全集』第2卷、花山文藝出版社、1998年11月、487頁)。

75 「我在教育界的經驗」(蔡元培著、中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第8卷、浙江教育出版社、1997年、507頁)。

76 周天度『蔡元培伝』(人民出版社、1984年9月、30~34頁)。

77 何思源の回想では、1919年5月2日、蔡元培校長は学生班長と代表の100人あまりを集め、パリ講和會議が中国に不利益を被らせようとしており、今こそ国家存亡の正念場であると述べ、皆が救国のため立ち上がろうと呼びかけたという。何思源「54運動回憶」(中国人民政治協商會議北京市委員会文史資料研究委員會編、『文史資料選編』第4輯、北京出版社、1979年、67

しかし更に根本的な原因は、程涪たちが置かれていた当時の時代背景である。先程述べたように、彼らの義侠の士に対する呼びかけは、5.4運動前後、国民革命開始以前に、現実には不満を持っているが、政治の出口を見つけ出せない一般の文人たちが思いつく唯一の闘争手段であった。易白沙<sup>78</sup>が1921年に単身北京へ乗り込み北洋軍閥の頭目を隙をうかがって暗殺しようとしたが、彼も程涪らが期待した義侠の一人といえよう。

#### 4. おわりに

安重根の義拳は中国人に大きな衝撃をもたらした。程涪と彼の『安重根』に詩を寄せた20人あまりの人びと

---

頁)。葉景莘、梁敬錚、鄭天挺、唐偉らの話によると、北洋政府が陸懲祥ら中国代表にベルサイユ条約に調印するよう訓令したことを蔡元培北京大学の学生に伝えた、このために5.4運動が起こったという。高平叔『蔡元培年譜長編』（人民教育出版社、1996年、196～197頁）。

**78** 易白沙(1886～1921)、もとの名前は坤、字は越村、湖南長沙の出身である。かつて呉伝綺の招きにより安徽へ懷寧中学を主宰し、続いて師範学堂や旅皖湖南中学堂の校長となる。辛亥革命後、彼は青年軍の組織に参加し、第2革命ののち日本へ亡命し、章士釗と雑誌『甲寅』を編集し、袁世凱を非難した。1915年から『新青年』に文章を投稿するようになり、民主と科学を宣伝する。その後、彼は南開大学や復旦大学などで教授を務めたが、軍閥の混争戦に不満を感じ、1919年に湖南に戻った。麓山の辺鄙など一人で暮らしを送り、意気消沈していた。1921年、孫文が共に事業を図ろうと手紙を送ったが、すぐに承諾しなかった。のち、彼は一人で上京し、北洋軍閥の首脳を暗殺する機会をうかがったが、成功せず、その年、端午の節句の日に海に身を投げた。

はみな安重根の義侠行為を高く評価し彼を荊軻や張良と比較して、「安重根の名は荊軻や留侯(張良)よりも知られている」<sup>79</sup>と述べた。そして、安重根の義拳は中国人の韓国人に対する印象を変えもした。呉伝綺は詩において「安重根の名は万世に残る。朝鮮はこの義侠を輩出したので、滅びはしたが榮譽ある」<sup>80</sup>と詠んだ。同時にこの義拳はまた中国人の羨望の情を呼び、みなが中国にも安重根のような義士が現れることを期待していた。王照は「残念なことに、我が中原は輝きを失ってしまった。ゆえに荊軻や聶政の亡霊も泣くのだ」<sup>81</sup>と慨嘆している。しかしながら中国の当時の情勢と関連して、安重根の伊藤博文暗殺の効果については人によって意見が異なったものの、多くの人びとは、内通者を消滅させることが外敵を倒すことよりも重要と考え、中国にも売国奴を除く義侠の出現を望み、これこそ民族の危機を救う急務としたのである。このような人びとの経歴や思想の背景が大きく異なったことから、比較的広範な普遍性を有した意見であったと言える。彼らの鉄血主義への呼びかけは、5.4運動前後の中国における政治状況が大きく変化したことを現し、新たな国民革命がまもなく発生することを予告しているのであった。

※ 和訳：高瑩瑩(中国社会科学院 近代史研究所)  
石野一晴(千里金蘭大学)

79 程済「序」(『安重根』上篇、1頁)。

80 呉伝綺「侠烈行白葭居士属作」(『安重根』上篇、6頁)。

81 程済『安重根』上篇(10頁)。

# 日中戦争直後における植民地朝鮮人の「満州」および「中国」認識 - 崔南善の紀行文を中心に

柳時賢 (高麗大学)

## 1. はじめに

国際旅行記は、異国という他者を通じて自己のアイデンティティを確認する方法のひとつである。蒸気機関を使った近代的交通手段の発達により、外国旅行が容易となり、多くの旅行記が出版された。かつての「想像された」空間は、こうした現地旅行の実現により消え去ったが、「外国」は観察者の内部において様々な形で再現された。『オリエンタリズム』においてエドワード・サイードが指摘するように、西欧人の旅行記は、旅行の対象である「東洋」への定型イメージを構築し、西洋との差を固着化させることによって西洋帝国主義の支配を合理化した。<sup>1</sup> 一方で近代以降の「東洋」の西洋紀行文、あるいは植民地から帝国主義国家への旅行の記録は、訪問地における「近代経験」にもとづき国

1 エドワード・サイード、박홍규 역『오리엔탈리즘』(교보문고, 1991, 11~58頁)。

民国家の建設に役立てられるなど、民族主義的な関心と深く結びついていた。<sup>2</sup> ならば、同じ帝国主義国家の内部、つまり植民地から植民地への旅行は、いかなる意味をもつのであろうか。帝国主義諸国の多くは、具体的な政策の差はあるものの、自国が支配する各植民地に様々な位置づけを与えており、それらは植民地間の「序列化」につながっている。<sup>3</sup> こうした問題意識から、本稿では、植民地知識人の一人であった崔南善の日中戦争直後の満州紀行について検討する。その理由は、満州という空間の理解において、当時の日本人の理解と朝鮮人であった崔南善の旅行記を比較すると、彼の旅行記には、民族的な所属意識や利害関係などによる複雑な視線・議論が内在していた可能性が想定されるためである。

1929年の大恐慌以降、日本は資源の確保や商品販売市場の拡大を目的に、1931年9月に満州を侵略し、1937年7月には日中戦争を引き起こした。これにより、日本の占領地は満州を越えて中国地域まで拡大したが、同地域は大韓帝国末期から朝鮮人の移住が多く、植民地期以降は本格的な民族運動の背後地としての役割を担った。だが日本の領土が満州や中国に拡大するにつれ、朝鮮

---

2 大韓帝国末期～日帝時代にかけて、西欧と日本に関する紀行文で注目されるのは、彼らの近代文明と文化であった。1945年以降も、西欧を含む世界地理の教育目標は、国民精神の育成と国家・民族の発達であった。임종명「탈식민지시기(1945~1950) 남한의 지리교육과 국토표상」(『한국사학보』30、2008年2月、12頁)。

3 フランスの「分割統治」が行われたインドシナ半島では、フランス人に「精神的で知的な」ベトナム人は「子供のような」クメール・ラオス人と対比され、ベトナム人もまたフランスの立場を反映した。베네딕트 앤더슨, 윤형숙 역, 『상상의 공동체』(나남출판, 2003年、162~171頁)。

半島は空間的に中国東北地域—朝鮮—日本を結ぶ中間的存在となり、日本帝国内部における「朝鮮人」の位置づけも変化していった。1930年代半ば～後期にかけて、日本は朝鮮と日本との関係を念頭に置く時は「内鮮一体」を掲げ、大陸と朝鮮の関係においては「満鮮一如」を強調した。一方、「満州」を含む中国東北地域や日本の租借地であった関東州は、日本の侵略戦争によって朝鮮人をはじめ日本の被支配民族(人種、種族)の外延が拡大していたこともあり、朝鮮人にとって単なる外国でなかった。ここにおいて、日本の支配下にあった満州と中国は、諸民族が共存・角逐を展開する空間となった。

出版人、歴史家であった崔南善は、1920年代には「金剛礼讃」(1926)、『白頭山観参記』(1927)といった民族主義的立場を強調した旅行記を残している。1920年代における彼の紀行文は、『白頭山観参記』などから旅行が個人と民族の「心象空間」として理解されていた点が注目され、彼の妙香山・金剛山紀行と植民地・帝国主義の関係や、あるいは李光洙の紀行文との比較から、研究されている。<sup>4</sup> また彼は、日中戦争直後の1937年9～10月にかけて中国東北地域と関東州を旅行し、その紀行文『松漠燕雲録』を残した。この時期の旅行記は、かつての旅行記が国土を対象としていた半面、

---

4 우미영 「시각장의 변화와 근대적 심상 공간」(『어문연구』 32~4, 2004年); 서영재 「崔南善과 이광수의 금강산 기행문에 대하여」(『민족문학사연구』 24, 2004年); 우미영 「근대 여행의 의미 변이와 식민지/제국의 자기 구성 논리」(『동방학지』 133, 2006年); 류시현 「여행과 기행문을 통한 민족·민족사의 재인식」(『사충』 64, 역사학연구회, 2007年)을 参照。

日中戦争以降の「異国」と、その地で暮らす朝鮮人を対象にしている。そのためこの旅行記の考察は、日本に協力的な人物へと変化した崔南善の論理や、当時の満州に関する朝鮮知識人の複合的な立場を理解する契機となるだろう。また彼の紀行文にあらわれる在満朝鮮人の活動への「期待」が、日本の侵略戦争という現実の中でどのように屈折しているのか、その手がかりを見いだしたい。また、中国東北地域が朝鮮民族の古代史の空間であったことと合わせ、同地域の過去と植民地時代の議論の中から「民族史」認識の連続と断絶についても検討したい。

## 2. 日中戦争と植民地朝鮮人の「国境越え」

旅行記を考える上で重要なのは、執筆の時期と、掲載・発表されたメディアの性格である。「松漠燕雲録」は、1937年7月、日中戦争勃発の直後における中国東北地域の旅行記であった。崔南善のこの紀行文は、以前彼が記した国内旅行記である『金剛礼讃』や『白頭山観参記』とは違い、戦争と空間の拡大という問題が深くかかわっている。また旅行記の発表が、読者との共感を目的にしていると考えられるなら、『毎日申報』にハングルで掲載された「松漠燕雲録」は、朝鮮人読者が対象であったと言えよう。1930年代半ば～後期における崔南善の著述活動は、朝鮮総督府の機関紙『毎日申報』に集中しているが、表に見られるように、「松

表 1. 1930年代半ば～後期に『毎日申報』に連載された崔南善の作品

年度	記事の目次と掲載期間
1934	「甲戌史眞」, 1934. 1. 3~2. 18 ; 「이순신과 뱌순」, 1934. 4. 21~5. 1 ; 「龜船은 이조초부터」, 1934. 5. 3~5. 5 ; 「禁火에 관한 제도」, 1934. 5. 13~5. 16 ; 「興福寺·원각사로부터 파고다 공원까지」, 1934. 5. 19~6. 15 ; 「올어러 뱌는 大圓光」, 1934. 5. 20~6. 2 ; 「5월5일 天中節」, 1934. 6. 16, 6. 21.
1935	「故事千字」, 1935. 6. 29~12. 31
1936	「赤鼠5百年」, 1936. 1. 1~1. 3 ; 「日日是好日」, 1936. 1. 26 ; 「조선의 신화」, 1936. 2. 16~3. 13.
1937	「元日을 의의있게 하자」, 1937. 1. 4 ; 「신화·전설상의 牛」, 1937. 1. 9~1. 29 ; 「朝鮮文化當面の課題」, 1937. 2. 9~2. 11 ; 「3重苦의 聖女 헬렌 켈러」, 1937. 5. 25~5. 29 ; 「조선상식 推候篇」, 1937. 9. 11~9. 22 ; 「북지나의 역사적 특수성」, 1937. 10. 3~10. 10 ; 「괴담」, 1937. 10. 13~10. 22 ; 「제주도의 문화사관」, 1937. 9. 16~10. 2 ; 「松漠燕雲錄」, 1937. 10~1938. 4.
1938	「보은감사의 생활」, 1938. 1. 3~1. 4 ; 「奇談소설」, 1938. 1. 11~1. 26 ; 「동물괴담」, 1938. 4. 5~4. 13 ; 「변화괴담」, 1938. 4. 14~5. 2 ; 「人妖談」, 1938. 5. 3~5. 26 ; 「異物世界說話」, 1938. 5. 27~6. 16 ; 「動物故郷說話」, 1938. 6. 20~6. 30 ; 「조선의 민담·동화」, 1938. 7. 1~7. 21 ; 「조선의 가정문화」, 1938. 7. 22~8. 2 ; 「삼도고적순례」, 1938. 9. 1~9. 15 ; 「고적 애호에 대하여」, 1938. 9. 9~9. 11 ; 「만주풍경」, 1938. 10. 4~10. 18 ; 「로서아의 동방침략」, 1938. 10. 27~11. 2 ; 「寶盆설화」, 1938. 11. 3~11. 16 ; 「因鬼致富설화」, 1938. 11. 17~11. 29 ; 「仙鏡설화」, 1938. 11. 30~12. 15 ; 「여의주설화」, 1938. 12. 16~12. 28.
1939	「露國 東侵연대기」, 1939. 1. 1~1. 19 ; 「異人설화」, 1939. 1. 23~2. 3 ; 「조선의 신화」, 1939. 2. 16~3. 13

「松漠燕雲錄」は、彼の多くの著作のうち1937年末から1938年初めまで『毎日申報』に掲載されたもののひとつである。

〈表 1〉にあるように、1930年代半ば～後期における崔南善の作品は、朝鮮総督府の機関紙『毎日申報』に集中している。崔南善は、1933年10月から李相協の誘いを受け、本格的に『毎日申報』への掲載を開始した。<sup>5</sup> 当時は「満州事変」1931年の勃発期であり、

満州国建国の後であった。崔南善は1934年12月～1935年1月の間、日本の神社訪問期間を除き、<sup>6</sup> 1939年4月の満州建国大学に教授として赴任するまで、ほぼ連続して『毎日申報』に多くの作品を連載している。『毎日申報』掲載作品をテーマ別にみると、①ネルソン、李舜臣、ヘレン・ケラーといった人物紹介、②1936年のネズミ、1937年の牛など、その年の干支を史実と結びつけた逸話の紹介、③「怪談」や「説話」をテーマとする作品、④朝鮮の文化と歴史、「東方文化圏」に関する作品、⑤日中戦争以降の満州・ロシア紀行文、評論などに分けられる。

「朝鮮学」において多方面で業績をあげてきた崔南善は、1930年代になると旅行作家として注目される。「松漠燕雲録」は④に含まれるもので、中国東北地域やロシアに関する「北支那の歴史的特殊性」、「三都古蹟巡礼」、「満州風景」、「露西亜の東方侵略」、「露国東侵年代記」などの間に掲載された。崔南善は、中国東北地域旅行の動機について「別に時節の風雲に衝動されたわけではないが、かねてからの念願であった満支遊観をこれ以上遅らせてはいけないとの思いが切実であった矢先、鮮満拓殖から満州のいわゆる「安全農村」の見物を奨めてきたため、ふいと旅に出てみたのである」としている。<sup>7</sup> 崔南善は、かなり以前から満州と中国地域に対する期待感を抱いており、日中戦争とは無関係だとしている

5 六堂全集編纂委員会編「年譜」(『六党崔南善全集(以下『全集』)』15、1973年、현암사、280頁)。

6 崔南善「日本の信仰文化と朝鮮」(『文教の朝鮮』115、1935年3月、94頁)。

7 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1937年10月28日、4頁)。

が、その動機は、国策企業の助力を得て朝鮮人の「安全農村」を視察することにあった。鮮満拓殖株式会社は、1936年9月、満鮮拓殖株式会社と共に朝鮮人の移住を組織的・計画的に実施する目的から、京城と新京に設立された企業で、<sup>8</sup> 15年をかけて朝鮮人農民18万戸100万人を満州に移住させることを計画していた。<sup>9</sup> つまり「松漠燕雲録」紀行の主な目的は、鮮満拓殖の斡旋によって日本の大陸支配政策下にある朝鮮農民と「安全農村」を訪問することにあつたのである。

「松漠燕雲録」は、1937年10月28日から1938年4月1日まで、『毎日申報』に84回連載された。崔南善は「松漠燕雲録」という題について、松は満州、漠は蒙古、燕是北京、雲は山西の意だとしている。旅程は、京城を1937年9月26日に発ち、帰国の正確な日付は不明であるが、同年10月15日に旅順と大連に宿泊したことが分かっている。つまりこの紀行文には、およそ20日間で中国東北地域から旅順と大連に至る地域をまわり、当地の実状とそこで暮らす朝鮮人に関する内容が記されていることが分かる。移動の経路を見ると、京城を出発し、清津・会寧をへて中国東北地域に行き、そこで竜井村、延吉、図們、琿春、東京城、ハルピンなどをめぐり、さらにハルピンを出発して満州の新京(長春)、吉林、奉天などをめぐり、奉天を出発してから営口、開平をへて関東州の

---

8 満鮮拓殖株式會社、『大陸の開拓と半島』(大海堂、1941年、73~76頁)。

9 『조선중앙일보』、1936年4月13日；日本の満州移民政策については김기훈 「일제하 만주국의 이민정책 연구 시론」(『아세아 문화연구』18、翰林大學校、2002年)。

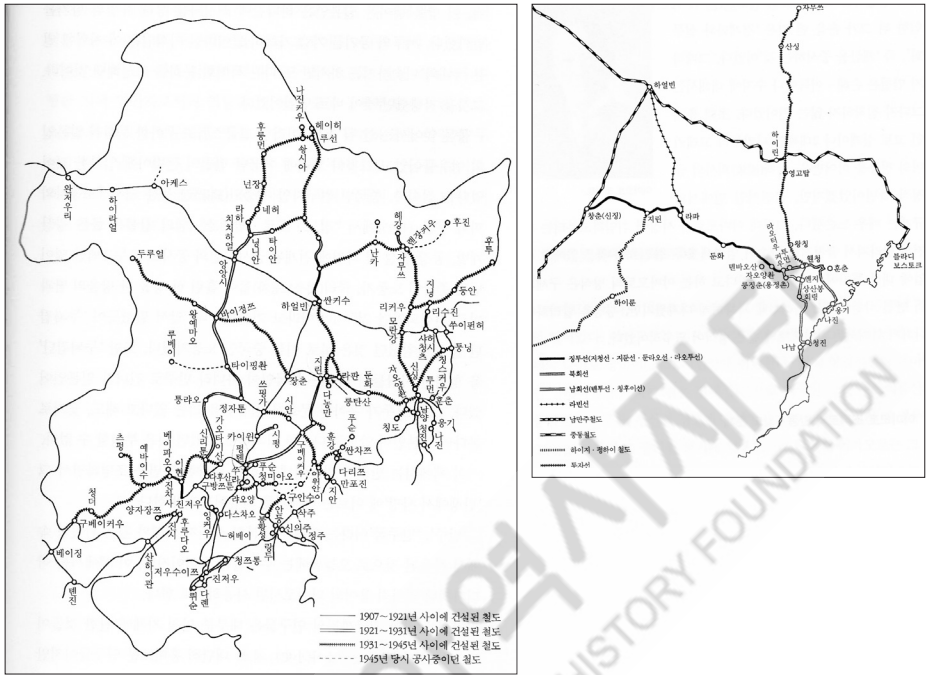


図1. 滿鉄路線図(1945年現在、左)、吉林省周辺の鉄道路線(右)

大連を訪れている。この旅行の主な運送手段は汽車であったと思われるが、彼の主な旅行ルートと訪問先を汽車路線で確認すると、図1のあうにはる。<sup>10</sup>

1910~1920年代における崔南善の旅行記と「松漠燕雲録」の差は、空間の点からは「国境越え」がある。朝鮮から満州国への道は、朝鮮から日本へ行くよりはるかに楽であった。日本への旅は、居住地における警察の許可をはじめ、釜山一下関間の警察の視線が

10 図一は・小林英夫、임성모 옮김『滿鐵』(산치림, 2004年1月7日, 98頁より引用)。

随所に配置されるというものであった。だが崔南善に朝鮮と中国の国境は「間島方面に向かう者は、上3峰から朝開線に乗り換え、川を渡るのが順路である……上3峰駅には、満州国の税関が出張しており、携帯物の検査を行う。一見軍人のようであるが、よく見ると服装のちょっと変わった満州巡査の行き交うことが、いずれも国境色というべきものであった」としている。<sup>11</sup> つまり朝鮮において、中国東北地域へ向かうルートのひとつである清津―豆満江間を鉄道で渡る「国境越え」は、エキゾチックな情緒があり、しかも税関検査のみで可能だったのである。

「国境越え」は、崔南善があらためて民族を考える契機となった。彼は国境越えの際、「年前の白頭山観参行の情懷がよみがえるのを禁じ得ない。祖岳と呼ばれる白頭山に特異な感興を覚えたように、祖疆と呼ばれる満州の地を往省する今、同様の心境を覚えることは、まことに当然とも言えようか」としている。<sup>12</sup> ここで彼は白頭山を「祖岳」、満州を「祖疆」として対比させている。<sup>13</sup> 時間の連続性・継承性を強調する「祖」という呼称を用いることで、満州は朝鮮人の過去と現在をつなぐ空間となった。さらに崔南善にとって、朝鮮人が多く暮らす間島地域に向かう風景は、ほぼ朝鮮的郷土色の延長として認識されていた。

---

11 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年10月29日）。

12 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年10月28日）。

13 満州は「祖疆」のほか、朝鮮人の「故土」として表現された。李瑄根は「満州なくして中古以前の朝鮮文化を考えられない」としている。이선근「만주와 조선」（『半島史話와 樂土満州』、満鮮學海社、1942年、94頁）。

沿路の駅名は、開山屯、8道河子といい、なるほど漢文的色彩を帯びてはいるが、目に入ってくる赤い唐辛子をのせた草屋と白衣をまとして歩く男女は、まさに朝鮮内地そのものである。言うなれば、汽車内には若干異国情緒あるも、車外の世界は毅然として朝鮮の連続のみである。<sup>14</sup>

今もそうであるが、当時においても朝鮮から満州に向かう旅は、狭い朝鮮半島から広い大陸に向かうという情緒が一般的であった。満州の面積は、日本の3.5倍、朝鮮の5倍に匹敵し、「土地が狭い半島」と広い「満州原野」の対比は、当時の満州地域を指す一般的な表現であった。日本人が日本から半島を経由して「満州」へ向かう旅行も、大陸に行くという情緒が一般的であった。だが日本人は「大陸」の広大さに圧倒されるよりも、植民支配者の視線からこの空間を理解していた。朝鮮と満州を視察した1930年のある報告書では、朝鮮においては植民地占領25年目という状況から産業・経済・教育・交通の「発展」を確認し、満州域においては満州国の「躍進」を確認しようとしている。<sup>15</sup> 日本人が満州に求めたものが日本の手による「発展」であったとすれば、崔南善のそれは、中国東北地域という広大な空間、そしてかつて栄華を極めた朝鮮の古代史という時間への投影であった。

崔南善はかつて、朝鮮民族の活動地である遼東を通過する際「遼東はまさに古朝鮮の西疆であり、その結果(秦開の攻撃により-引用

14 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1937年10月30日)。

15 京都府教育會夫田郡部會 満鮮視察團「満鮮視察報告」(1936年「序文」を参照)。

者)、朝鮮はついに鴨緑の南に……するに至った」と回顧している。朝鮮民族と満州地域(遼東)は、古代史における民族の活動と経験によって結びついている。<sup>16</sup> 同地域に関する崔南善の歴史認識は、高句麗へと拡大する。高句麗が遼東地域を統治していたことを「高句麗人の光復的西進」と表現し、さらにこれが「単に高句麗人のみでなく、実に全東方民族の栄光」であると評価した。<sup>17</sup> 合わせてこうした「過去の栄華」の強調は、新羅の3国統一以降、国土が「退縮」したという認識にもつながっている。朝鮮民族史の空間が朝鮮半島に縮小したという認識は、高麗時代と朝鮮時代の歴史理解にも反映している。

高麗・李朝の1000年間に、国歩が鴨東に倭遅し、跼天踏地に息があがり詰まる萎縮朝鮮の有心人が、一度遼瀋の境に及ぶと、ふと俯仰する感慨に旧業思変の心が油然興起するを自ら抑えきれなかった。<sup>18</sup>

中国東北地域という空間と朝鮮古代史を結びつけることで、崔南善はこの地を朝鮮人の視線から眺めていた。このように、崔南善にとって満州は「異国」ではあったが、同時に「祖疆」と見なされる朝鮮人本位の思考が、旅行記の中心にあった。<sup>19</sup> さらに「松漠燕

16 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年2月11日)。

17 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年2月11日)。

18 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年3月12日)。類似の表現として、崔南善は朝鮮を「センニム(선남, 優男)朝鮮」を用いている(崔南善「松漠燕雲録」、『毎日申報』、1938年3月11日)。

19 崔南善は満州を「祖疆というべき満州」と表現している(崔南善、「松漠燕雲

雲録」の対象空間は、朝鮮古代史の足跡であると同時に、当時の移住朝鮮人の現実の暮らしの場でもあった。1931年の満州事変の勃発と1932年の満州国樹立により、朝鮮人移住者は1933年以外は増加を続け、1935年には8万7000人が増加した。<sup>20</sup> 崔南善にとって、満州が朝鮮人の「祖疆」になるためには、古代史の経験と共に、現在かの地に暮らす朝鮮人の役割が必要であった。崔南善は、朝鮮人の間島地域への居住を歴史的「使命」のごとく強調している。

諸君の才知により、今日ここまで戦ってきたわけでもない。諸君の首筋に見えない大きな力があり、それが諸君をここまで引っ張ってきたのである。それは何かというと、我々に先祖の地を探し求めさせる意志なのである。満州は、朝鮮および朝鮮人の故郷である。そして遥か昔から代々受け継いできた我々の世間である。<sup>21</sup>

満州は朝鮮と朝鮮人の「故郷」だとしているが、「先祖の地」の言葉が示すように、それは過去においてであった。崔南善が中国東北地域を旅行した当時、満州は日本に支配されていた。日本は1935～1936年、治安の確立にともない満州国の「第2期建設」を主張し、従来の治安工作第一主義を脱皮して大衆組織化運動を展開し、満州国協和会では朝鮮人の組織化に力を注いだ。<sup>22</sup> 過去の民

---

録」、1937年10月28日)。

20 김경일·윤휘탁·이동진·임성모 지음, 『동아시아의 민족이산과 도시』(역사비평사, 2004年, 4頁)。

21 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1937年11月20日)。

22 任城模「滿州國協和會의 總力戰體制 構想 研究」(연세대학교 사학과 박사학위

族史の領域で「主人意識」を持つことはあっても、当時の現実の中で、崔南善が中国東北地域を訪問した時、治外法権を失って満州国の国民に含まれた朝鮮人が存在した。このように、1930年代の現実とは、中国東北地域における「開拓」の主管は日本帝国主義であり、その企画の下で朝鮮人の役割が定められる、というものであった。

### 3. 北東アジア国際関係における 植民地朝鮮(人)の位置づけ

国際関係における対立の典型は戦争であり、戦争時には、当事国が正当性を確保するのが一般的であったと言えよう。1937年の日中戦争をめぐる中国と日本の視点が異なっていた点は言うまでもないが、崔南善は日本の立場からこの戦争を理解していた。彼は、大韓帝国末期から中国を「老大国」と表現しており「支那は世界でも比類なき老大国であると同時に、4億を超えるというその国民は、その歴史と文化を誇るのに頑冥執拗しており、尋常な方法では彼らを近代生活の此岸に済度させることのできない群像である」とし、1930年代の近代物質文明の波の中にあっても変化のない国家という彼の中国観は保たれていたものと思われる。

---

논문, 1997年, 41~42頁)。

る。<sup>23</sup> さらに彼は、辛亥革命などの激変期を経験したにもかかわらず、「老衰した」中国は、自力では問題を解決できないと認識していた。

所謂辛亥革命を以て中原が漢民族の手に返ったが今26年になる。革命と云ひ、民国と云ひ訓政期と云ひ、新生活運動と云ふ、何れが皆外観は美しいが爾來4半世紀の間支那の民衆が實質的に如何なる福利を得たかと云へば軍閥の暴虐と党部の専制以外に見るべき光明に浴びて居ないことは天下の耳目が見て居る所である。<sup>24</sup>

こうした認識に立脚する限り、中国は日本によって「済度」されるべき対象だった。日中戦争における日本帝国の役割を語りつつ「今こゝに至って、我等は已むを得ず涙の鞭を取った。かくなつた以上は我等は彼らの迷夢を破り、その誤信を矯正するまで驀進しなければならぬのである」としている。<sup>25</sup> ここで言う「彼ら」とは中国人を指し、「我々」とは日本人だけでなく朝鮮人を含む用語であった。崔南善は中国を「ムチ打ち」すべき相手として表現しているが、これは文明化した存在が「野蛮」な存在を啓蒙する際の常套表現であった。崔南善は、日本と朝鮮(人)の役割が中国人の「迷夢」と「誤信」を正す「応懲」にあると明らかにしており、上位

23 崔南善「전쟁과 교육」(『삼천리』、1939年7月、58頁)。

24 崔南善「北支の歴史的特殊性(下)」(1937年10月、『全集』10、286頁)。

25 崔南善「北支の歴史的特殊性(下)」(1937年10月、『全集』10、274頁)。

者が下位者に対する姿勢を取っている。<sup>26</sup>

日中戦争以降、崔南善の視線が注目したのは、中国の「新たな」文明化、近代化の姿だった。ハルピンの中国人居住地に関する彼の印象は「支那人に対する新しい認識をはじめ、ハルピン支那人の市街見物は、一種の感興を醸し出した」というものであり、「支那人市街といえば既成観念にとらわれている者が、乱雑で臭穢、また幽昏などと、この地区を連想」する認識から抜け出すよう、読者に求めている。<sup>27</sup> 満州国の都である新京については「建築の壮雄さが、新都市の特色」だとしている。<sup>28</sup> 無論、中国と満州国の都市をこのように変化させ、文明化させたのは、中国ではなく日本帝国主義であった。崔南善は関東州について「翠蒼に包まれた山、整然とした大小の道路は、今までの荒乱たる光景のようではなく、誰に対しても文明郷に入った印象を与える」とし、日本によって「文明郷」になったとしている。<sup>29</sup> 山には木々が青々と茂り、都市が発展したという評価は、朝鮮を植民地化してから日本が朝鮮に対し用いた修辞法であった。こうした理解は、物質面のみならず、文化事業にも反映されている。日本の主導によって完成した大清

---

26 崔南善は他の作品においても、日本の役割について「ムチを正面から持って出た日本の教訓は無論だが、今回の事変(日中戦争—引用者)の教育的意味は、日本と中国の直接の関係にとどまるものではない……支那の近代化に貴重な刺激を与えているものとする」と表現した。崔南善「전쟁과 교육」(『삼천리』、1939年7月、59頁)。

27 崔南善「松漠燕雲録」(1937年12月11日)。

28 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1937年12月21日)。

29 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年3月29日)。

歴朝実録を「学界に一大光明」を与えたものと評価している。<sup>30</sup> つまり、日中戦争が進むなかで崔南善は、日本が中国を文明的に「啓導」し、さらには文化的に中国人を指導する事業を担ったと考えた。

一方、中国東北地域は、韓末～日露戦争時におけるロシアと日本の激戦地であり、満州事変以降は、ソビエトロシアとの対立が予想される空間だった。日本人が満州、中国東北地域を視察する際は、日清戦争と日露戦争の戦跡調査が中心であった。奉天地域では日露戦争における「奉天会戦」戦死者の忠霊塔を、旅順では表忠塔と戦利品陳列館を訪れた。<sup>31</sup> 日露戦争以降、同地域を対象にした日本人の海外観光は、軍部の主導のもと、愛国心の鼓吹に向けられ、イム・ソンモによると「満州への団体観光の誕生は、帝国意識の培養を目的とする巡礼空間の誕生」を意味した。<sup>32</sup> 崔南善のロシア観は①日露戦争当時における日本の相手としての帝政ロシア②黄色人種と白色人種の対立における1方の主体であるロシア③共産主義国家であるソビエトロシア、などに区分されていた。

日露戦争の認識は、戦争の跡地である大連を訪問して以降、さらに強調されたが、崔南善は日露戦争を「東西対抗史」と規定し、この戦争の結果と、大連にある日本の勝戦塔について「黄白人種

30 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1938年2月1日）。

31 京都府教育會夫田郡部會 満鮮視察團「満鮮視察報告」（1936年14月、25頁）。

32 임성모「팽창하는 경계와 제국의 시선」（『동아시아 역사 속의 여행』1、산치림、2008年、199頁）。

の進退と南北勢力の消長戦線において最初の反発を示すものであり、永遠なる自信を与えた東洋人の戦勝記念塔」と紹介している。<sup>33</sup> つまり日本が、日露戦争当時、ロシアに対抗して東洋を守ったという観点を堅持したのである。そして日露戦争の結果によって「1904、1905の両年に日本との間で東洋平和のための対仗が起き、日本の武力によって露西亜が駆逐され、これによって日本が満州に特殊権益を持つに至った」としている。<sup>34</sup> このように彼は、黄白の人種対立において日本が「東洋人」を代表し、白人を駆逐した事件が日露戦争だと評価している。さらに日中戦争直後に出された『毎日申報』の掲載文において、崔南善は日中戦争を「非常時局」と表現し、この戦争が「正当な日中関係」のためのものであり、当時の北東アジア国際情勢について次のように語っている。

日本の存在と勃興は、□アジアの気運、東方の光であり、そのため有色人種が喜びを叫び、立ち上がって彼ら—日本を盟主として一大大同団結を□掲げ、白色人種に我ら東洋の歴史と生活と栄光を確保する好機であることは論じるまでもありません。<sup>35</sup>

崔南善は当時の北東アジア情勢について、日本を中心に白人と黄人が対立する人種問題だと理解していた。日本を中心とする有色人種を、東方や東洋といった一単位と認識し、ロシアを念頭に

---

33 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年3月31日)。

34 崔南善「満州略史」(『半島史話와 樂土滿州』、1943年、143頁)。

35 崔南善「시국인식의 근본점 來日 의 신광명 약속」(『毎日申報』、1937年8月15日)。

置いて有色人種と白色人種を対応させた。従ってロシアは「東方」あるいは「東亜」という地域的空間と対比され、「排除」すべき対象となった。崔南善は、ロシアに対する否定的な理解を歴史に見だし、日本とロシアの対立を民族ではなく人種主義の立場から説明しようとした。旅行記の直後に崔南善が書いた「露西亜の東方侵略」において「北方の「ソビエト」—すなわち露西亜の侵略的脅威が、いかに歴史的に根深いか」を前提に、彼らの「東方侵略」を叙述した。<sup>36</sup> ロシアが領土拡張をはかる「侵略国家」だとの認識は、韓末の対ロシア認識の延長線上にあるものだが、ここではロシアの東方侵略が「シベリアをもって満足したか」というとそうではなく、その次に満州、そしてさらに朝鮮半島へとこの不気味な黒い手を伸ばしに伸ばし、とどまることをしらない」と表現することで、領土への野心の大きな国だとしている。<sup>37</sup> すなわち「東洋人」の他者として設定されたロシアは、歴史的に「東方侵略」を続けてきた否定的存在として描かれている。さらに白人の「白禍」と領土への欲望を有すと評されたロシアの印象は、反共の立場から「赤禍」の中心地であるソビエトロシアを対象に、さらに否定的なものへと転換している。

休むことを知らない露西亜人の侵略性は、常に、小は隣国の平和を乱し、大は世界の秩序を破る癖のあることを、十分に知った上で出てくるものです。かつての露西亜は、単なる領土への

---

36 崔南善「노서아의 동방침략」(『毎日申報』、1938年10月27日)。

37 崔南善「노서아의 동방침략」(『毎日申報』、1938年10月27日)。

野心からくる侵略者としても周囲の全国民にとって大きな脅威でした。ところが最近のソビエト連邦という露西亜は、その上に思想的凶計の加わった侵略者であり、全世界共同の敵となっているのです。<sup>38</sup>

崔南善にとってロシアは、白色人種の「白化」、共産主義国家の「赤化」という危険要素を持つ存在であり、日本のみならず「全世界共同の敵」と認識されていた。崔南善は当時、白色人種との対比から「黄人種」の枠組を設定するにあたり、北東アジア地域の歴史的経験の中から「北方民族」という語を用いている。そして日中戦争の勃発直後、対ロシア関係が中国と日本の問題ではなく「北方民族」全体の懸案だと拡大解釈した。<sup>39</sup> ところで崔南善は、彼が「北方民族」と規定した日本人と朝鮮人、満州人の関係をどのように理解していたのだろうか。1930年代半ば、崔南善は中国とが区別される存在として北方民族を設定し、文化的、歴史的に「東方文化」という概念の中でアジア北方民族の共通性を強調した。北東アジア文化圏を強調することは、中国との歴史的対比の中で行われる。崔南善は「北方民族」と中国民族との対立を論じた。同地域における「北方民族」の役割を強調すればするほど、中国の歴史的・文化的活動を低く評価したり、はなはだしきは中国の持続は、北方民族の役割によるものだと考えた。

---

38 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年11月2日)。

39 彼はロシアを「東方平和に対する絶対の凶賊である赤蘇の魔手」としている(崔南善「시국인식의 근본점 來日の 신광명 약속」(『毎日申報』、1937年8月15日)。

支那には国家という観念もなく、国境という事実がない。……支那民族の徹底した包容力と中原文化の恐るべき同化力が、ややもすれば我らの北方的特徴を銷却するに容易いのである。……東洋に最古の歴史を有する支那民族が、逆に老衰残廢せず、生存繁衍を続けていくのは、まことにその時代時代ごとに周囲の新興民族の清新な血液が注入され、浄化作用を与えることによっているのである。<sup>40</sup>

「北方民族」の語は、様々な民族や人種を含んだものである。それではこの空間内部における日本の役割とはいかなるものだろうか。崔南善は、長春を訪問した際、新京神社を参拝した。<sup>41</sup> 彼の旅行記には、神社訪問の説明は特にされていない。参拝の事実を記しても意味づけを行っていないのは、それが「日常性」と見なされていたことによる。1930年代半ば～後期において、崔南善の神社参拝を可能にした論理は、1930年代半ばの日本古文化と神社に関する彼の立場から読み取ることができる。彼が新京神社を訪問したのは、現実の権力として日本を認めただけでなく、日本が文化的に北東アジア地域における歴史的淵源をもった「盟主」とであると認識していたことにもとづいている。

今日日本帝国が先づ朝鮮を併合し、次ぎに満州の独立が成り、……満州国は捲土重来の意味にて、朝鮮人は高句麗以来の武歩を中原に入れやうとした理想実現の機会として、又豊臣秀

---

40 崔南善「松漠燕雲録」(1938年1月24日)。

41 崔南善「松漠燕雲録」(1937年12月22日)。

吉の「一超直入大明国」をしようとした莊園が半島にて挫折した遺恨を持つ日本が一方は民族伝統の経綸を成就し、一方は亜細亜の盟主的地位を確保する必要上、中原を舞台とする今日の支那事変が起ったと云ふことが出来る。今度の東方勢力は、今まで中原に於ける活動歴史を持って居ないが一度は中原に入るべく亜細亜最東方に最後迄残存した民族達が大同団結して舞台上に上った点に於て一層注意を引くのである。そうしてこれが単に民族闘争とか中原争奪とか如き野心的のことでなく全東洋の文化、平和及び真正な幸福が為に起った大義名分の十字軍である点に於て絶対的意義が存するのである。<sup>42</sup>

崔南善は、1930年代に入り、東北アジア地域における日本の文明と文化の優越性を認めた。彼が1920年代に「不咸文化論」において朝鮮の役割を強調したのとは異なり、1930年代半ば～後期において、「東方民族」内部の指導的役割は、日本にあると考えた。そして当時のソビエトロシアの「赤化」に対する北東アジア地域の防御を思う時、崔南善にとって日本は、東方の盟主としての地位を持つ存在となった。また彼は満州国について「王道楽土の実験場として出現したもの」と評しており、<sup>43</sup> 日本の中国東北地域への侵略は領土欲ではなく「道義主義、解放主義」だと考えた。このような認識には、日本の侵略戦争が、満州だけでなく中国への「文

42 崔南善「北支の歴史的特殊性(上)」(1937年10月、『全集』10、286～287頁)。

43 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年.1月.14、4頁)。

崔南善の「満蒙文化」認識と建国大学での活動については곽은희「만몽문화의 친일적 해석과 제국 국민의 창출」(『한민족어문학』47、한민족어문학회、2005年)；강혜수「崔南善의 '만몽' 인식과 제국의 욕망」(『역사비평』76、2006年)；전성곤、『근대 '조선' 의 아이덴티티와崔南善』(J&C、2008年)を参照。

明的役割」を強調する意図があった。このような認識を持つ限り、崔南善は文化の普遍性を前提とする民族相互の調和を強調することによって「大東亜共栄圏」という日本帝国の論理に取り込まれざるを得なかった。これは、西欧の近代に代わる「東洋的」価値観によって「近代の超克」を主張した日本の論理にもつながるものと言えよう。<sup>44</sup>

#### 4. 満州と中国東北地域に暮らす 朝鮮人の活動に対する認識

崔南善は、朝鮮人の開拓能力をもって「満州は我々のもの」、<sup>45</sup>あるいは満州は「新朝鮮」であり、かの地における朝鮮人の活動は「朝鮮人の満州発展は、一面において復古であり、同時に一面において新生命の開拓」だと強弁した。<sup>46</sup> 日中戦争以降の中国東北地域における朝鮮人の活動について解明すべき点としては、①朝鮮人が満州で重要な役割を担うと主張する際、日本との関係をいかに設定するか②満州国内における民族序列化において、日

44 「近代の超克」論は、英米式の資本主義社会体制と理念とソ連を中心とする社会主義経済組織と革命理念をすべて「超克」する新しい体制・理念であり、これをすなわち「5族協和」「協同主義哲学」などに求めようとした作業だといえよう。戦前末期の日本における「近代の超克」論については、廣松渉、김항 옮김、『근대초극론』(민음사, 1989年)を参照。

45 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年3月7日)。

46 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1938年3月8日)。

本人と朝鮮人を先頭に置く時、他の民族構成員との関係をどのように念頭に置くか③朝鮮人の役割を強調することが、中国をはじめ他の民族にいかん認識されていたか、などが挙げられよう。

満州国の成立について、当時満州国の名誉領事だった金季洙は「満州国の生長発展は、東亜新秩序建設の拠点の培養」だと主張した。<sup>47</sup> 日本が宣伝した「新秩序」とは、既存の国際情勢が欧米帝国主義による世界支配体制であり、この「旧秩序」に対応する概念として「東亜」地域の諸民族を構成員とする協同体系を新たに構想するというものである。<sup>48</sup> 崔南善もまた「満州と日本との間に、根本的な文化上の一致があるとすれば、その間にある半島が不可欠であることは無論自明のこと」<sup>49</sup> 満州と日本の間にある朝鮮と朝鮮人が、重要な役割を担うべきだと考えた。また彼は、満州国設立の過程は「神聖な運動」であり、この運動の「心核分子は日本人と朝鮮人」<sup>50</sup> だと考えた。<sup>50</sup> さらに「日本人と朝鮮人の完全な結合のみがこれを達成」できると強弁した。<sup>51</sup> つまり彼の主張とは、在満朝鮮人と朝鮮人の「同伴者」的役割にあった。これと関連し、1937年10月11日奉天で行われた朝鮮人と日本人を対象にした講演会が注目される。奉天協和会が主管した同講演会の内容は『在

---

47 金季洙「재만 조선인의 장래」(『반도사회와 낙토만주』、만선학회사、1943年、41頁)。

48 子安宣邦著、이승연 옮김『동아·대동아·동아시아』(역사비평사、2003年、87頁)。

49 崔南善「松漠燕雲錄」(『毎日申報』、1937年11月8日)。

50 崔南善「松漠燕雲錄」(『毎日申報』、1938年1月24日)。

51 崔南善「松漠燕雲錄」(『毎日申報』、1938年1月24日)。

『満朝鮮人通信』に掲載されたが、<sup>52</sup> その主な内容は、以下の通りである。

歴史的に北方民族が、南方民族の「進出」を受け、北方民族のうちいまだ中原の舞台を踏みこめないまま生存し、南方民族の強烈な同化力を避けてきた民族は、海洋の大和民族と半島の朝鮮民族である。…… 現在、その最後の日本民族が、大陸に向けて進出するその形式内容は、前日の北方諸民族のそれとは異なり、侵略征伐が主題ではなくアジア民族の全体的繁栄が主題となっているため、日本民族を先頭とした東方民族の中原進出こそが、東洋史上に比類なきものだと言えましょう。…… 支那民族を浄化する血は、朝鮮族と合わせ、日本族でなければならないと考えます。<sup>53</sup>

この講演の特徴は、崔南善が中国東北地域において、過去の歴史認識にもとづき、日本と朝鮮民族の役割を強調した点にある。また朝鮮と日本の役割が、中国の「浄化」あるいは「進歩」だとしている。<sup>54</sup> こうした認識は、日中戦争を支持する他の作品においても「東洋安定の責任者、東洋平和の守護者たる日本帝国の大方針

---

52 『在満朝鮮人通信』は、奉天地域特務機関が主動し組織された興亜協会が、1936年4月から発刊した。황민호 「만주지역 친일언론 '재만조선인통신' 의 발행과 사상통제의 경향」(『한일민족문제연구』10、한일민족문제학회、2006年、4頁)。

53 崔南善 「동방민족의 증원 진출과 역사상으로 본 아세아제민족의 동향」(『在満朝鮮人通信』38、1937年10月、6~7頁)。

54 崔南善 「北支の歴史的特殊性」上・下(『在満朝鮮人通信』39、40、1937年11月)。

は、断固これあるのみと確信する我々は、何よりも北支事変を道徳的に認識し、心から国民への当然の責務を極めて尽くすよう、ひとえに約束するものです」とし、<sup>55</sup> 「国民」がその義務を果たすよう唱えている。すなわち「松漠燕雲録」に登場する「我々」の語の一部は、朝鮮人と日本人を意味するものであり、朝鮮人の発展を日本の発展と連動させていたのである。歴史的、文化的実体としての朝鮮人と、日本国民である朝鮮人という2重の存在感が、崔南善の視線には共存していたのである。

一方「松漠燕雲録」には「朝鮮人」、「白衣民族」など朝鮮本位の表現が登場する。崔南善は、満州地域における朝鮮人の役割について「満州は今後、王道の指標のもと、歴史の建設がうながされている。これに対する日本帝国の指導力が、いかなる障害も感じないことは、まことに無論である。そして地理、歴史、種族関係、生活条件のいずれにおいても、この工作上の最重要分子は、朝鮮人自身であることを、我々は確信する」と表現した。<sup>56</sup> つまり彼は、中国東北地域の「発展」に、日本人だけでなく朝鮮人が大きな役割を果たすことを強調したのである。このような認識は、朝鮮人が多く住んでいた竜井地域に特に顕著だった。

竜井は、朝鮮人の潜在的発展力を具現した自然生成の国外都市であると同時に …… 意図的に特殊な産業機能を開顕させた飛

---

55 崔南善「시국인식의 근본점 來日の 신광명 약속」(『毎日申報』、1937年8月15日)。

56 崔南善「만주가 우리에게 있다」(『在滿朝鮮人通信』39、1937年11月、1頁)。

躍地であり、永久の名誉を持つ場所である。総じて朝鮮人の満州発展は、水田という独特の生産手段をもってあらゆる困難を克服した結果であるが、満州土壌における水田の価値の転換は、まことにこの竜井に端を発したのである。…… 竜井は、まことに満州における産業革命の発火点である。<sup>57</sup>

崔南善にとって中国東北地域の朝鮮人は「発展」の主体であり、彼らの活動は「産業革命」として評価された。水田の強調は、訪問地ごとに行われているが、崔南善は「荒廃不顧の地を手に入れ、寡少な良田沃土を化成してきた我が移住民の勇敢と勤勉を思うと胸が詰まり、涙が目がしらを熱くする。…… 朝鮮人の開拓的能力も、驚くべきものではないか。これほどであれば、満州が我々のものという信念がぐさりと脳筋を刺す」<sup>58</sup>と朝鮮人の活動に感情移入するとともに、「開拓精神」を強調している。一般的に、開拓精神あるいは冒険精神とは、西欧帝国主義を象徴する用語であった。崔南善はかつて韓末期に『ロビンソン・クルーソー』、『ガリバー旅行記』などを翻訳し、西欧の「開拓」や冒険精神を学ぶよう強調したことがある。彼は、韓末における国民国家樹立と結びついたこうした希望を、1930年代に入り、満州地域の朝鮮人に再び適用したのである。崔南善が満州地域において朝鮮人の開拓精神を強調したのは、日本が朝鮮に強調した文明論説と類似する。朝鮮人の活動は、満州人と中国人の活動と対比されることで、一層クロ

---

57 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年10月31日）。

58 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1938年3月7日）。

一ズアップされたのである。

満州族は…… いまだ不農不商して両班の心理を抱いて暮らし…… 清国が覆滅するとともに、彼らの両班的特権はすでに依拠を失ってしまったとしても…… 窮迫する諸事情が、唯一の生資である土地そのものまでを売却せしめ、さらに僻地へ、深処へと退入することが、彼らの今日の運命である。まるで数十年前に我々が経歴した階段を、今彼らが直面しているわけであるが、我々の時よりも困窮した様子である。<sup>59</sup>

中人出身の崔南善にとって、「両班」は否定的な存在であった。「松漠燕雲録」で崔南善は「両班」と関連した否定的イメージを満州人に適用し、日中戦争直後における満州国の状況を、数十年前の朝鮮と対比させている。<sup>60</sup> 蓋平站を訪れた崔南善は「この一帯の水田だけは、朝鮮人の模範と満鉄農事試験所の指導により、支那人の自作するところであり、乞人でも足袋を脱がない彼らだが、このあたりでは婦女までもが田に入って田植えや除草を行っており、むしろ一奇観と称すべきだ」と力説している。<sup>61</sup> すなわち当時の満州は、朝鮮を見つめ直す鏡のような存在であった。日本が朝鮮において「文明」の移植を強調したように、中国東北地域において、朝鮮人は文明を先導する役割を果たしたと考えたのである。以上

---

59 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年11月8日）。

60 崔南善は、農業もせず、商業にも従事しないことを「両班の心理」ととらえた。崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年11月8日）。

61 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1938年3月26日）。

のように、1930年代半ばの崔南善は「古神道」を通じて日本と朝鮮の文化的同源関係を主張し、朝鮮人の満州と中国に対する「産業化」を先導する役割を強調することによって「文明」を強調した。

満州は、当時のみならず、近接した過去においても、朝鮮人にとって民族運動の根拠地であった。このように時期的に近接、あるいは当時行われていた民族運動という敏感な主題を、崔南善はどう記したのであろうか。崔南善は1937年9月28日、南陽駅を出発して図佳線に乗り換え、途中、3道構鳳儀洞を過ぎながら「当年に洪範図一派の占拠活動するところ」とい、同年10月2日、濱綏線を出発し、海林という站名から「金佐鎮の血なまぐさい匂いの記憶に、眉をひそめる」とした。<sup>62</sup> このように崔南善は、1920年代における民族運動の現場を、車窓の外の風景のように、軽く言及するにとどまっている。先に触れたように、崔南善は「松漠燕雲録」が「時節の風雲に衝動されたわけではない」とし「脱政治的」だとした。だが鮮満拓殖株式会社の斡旋を受け、日本の占領地と満州国という空間の中で朝鮮人の居住地域を訪問することにより、明確に「政治的」立場を表している。彼は吉林地域において民族運動の現場を訪問し、これを「我が政治運動者巢窟時代の情況」と表現した。

ここは某名士の寓居、ここは某団体の旧基、ここは某事業の発生処だと指摘するのは、いちいち感慨深いのみである。それら

---

62 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年114日）；崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年11月18日）。

の血なまぐさい事件を思うと眉間にしわがよるが、ひるがえってみれば、こうした風霜が吉林をもって朝鮮人の満州発展上、一楔子したと思えば、それも決して無意味でないことを悟るであろう。<sup>63</sup>

崔南善は、かつての民族運動を「政治運動」と表現し、過去の事実と断定している。こうした表現は、自らの活動がもはや「政治」的でないことを表現したものとも言え、同時に1930年代半ばの時局は、もはや朝鮮人の「政治」活動が不要な過去の現象として理解したものと言えよう。つまりこれらは「脱政治化」ではなく、民族運動を過去の事件に追いやり、沈黙、廃棄する叙述と言えよう。だが、吉林地域の民族運動の現場に触れただりでは、彼がもし日本への協力に積極的であったなら、朝鮮人は、もはや日本の支配を認め「無謀な」過去の政治運動から逸脱するよう述べたであろう。だが崔南善は、民族運動の歴史的経験を「朝鮮人の満州発展」におけるひとつの「楔子」であったとし、当時における朝鮮人の「発展」にかかわる史実に含めている。

朝鮮人への期待感は、朝鮮人を対象にした講演会、演説会において一層強調されている。奉天へ向かう途中で鉄嶺農村という安全農村を訪れた際、彼は「朝鮮内地の小作人の実情に比べ、皆様の環境が非常に美しく、村に希望のあることを思い、より一層勇猛かつ精誠して満州の模範農村となるとともに、隠然と歴史的使

---

63 崔南善「松漠燕雲録」(『毎日申報』、1937年12月28日)。

命を果たしますよう」と語っている。<sup>64</sup> また牡丹江地域を訪れた際は「在留の同胞が、農家中心ではなく、時勢に明るい国内の知識層や資本閥の新進出」を強調している。日本への協力をあらしつつ、朝鮮人農民だけでなく資本家・企業家の進出によって「朝鮮単位」の発展に思いをめぐらせる彼の一面がうかがえる。だが故郷を去って満州という空間の中で「苦勞」する朝鮮人農民に対し、すばらしい環境だと語ることは、さして説得力のあるものではなかった。こうした現実に対し、崔南善が適用した論理は「宿命」だった。

民族主義の論理は、民族の構成員を一つの共通体に構成するため、血統と歴史を主に活用した。過去の「栄華」と血統の「悠久性」が、論理展開の主な構成要素となる。崔南善は間島地域を訪れた際「間島の朝鮮人の本位性が、次第に濃度を増すのは、ほぼ宿命的な約束」だとし、満州に朝鮮農民がやって来た「宿命」は「我々をして先祖の土地を探し求めさせた天の意志である」と考えていた。<sup>65</sup> 説得力が足りず、現実と理想との間に亀裂が生じた際、通常それを埋めるのに使われる論理が「飛躍」である。崔南善は、朝鮮人が中国東北地域に住み、発展の役割を担うことを「神の命であり、祖霊の助力である」と捉えた。<sup>66</sup>

---

64 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1938年1月17日）。

65 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年11月1日）。

66 崔南善は「満州は、朝鮮および朝鮮人の故郷である。そして遙か昔から代々受け継いできた我々の世間である」と考えていた。崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年11月20日）。

一方、当時の朝鮮人の中国東北地域における活動を「発展」と「文明」の言説となし、その役割の重要性を強調しても、同地域に対する日本の主導権や現実権力は、念頭に置かざるをえなかった。日本、そして満州国の「5族協和」の論理のように、崔南善は満州国について「歴史的諸民族が現実的構成分子」となった「民族協和」が達成された空間と捉えた。だが諸民族の同等な結合を意味する「5族協和」とは、実際には日本を頂点に各民族を序列化した差別が存在した。崔南善も「満鮮一如」のスローガンのもと、朝鮮人と満州人の居住地域を区別し、その「区別意識」があることを認めており、「5族」の枠組のなかで、朝鮮人の役割と地位により大きな意味を与えている。

満鮮一如の大旆がはためく今日であるが、由来が由来であるため、竜井はどこまでいっても朝鮮人中心の邑落であり、局子街つまり延吉はどこまでいっても満州人中心の市街であるという特色は、いまだに以前と変わらない。ただ、間島の朝鮮人の本位性が、次第に濃度を増すのは、ほぼ宿命的な約束であり、また今後の事情は、以前にくらべ幾倍もの順便を持つに至っており……。<sup>67</sup>

同地域においては、東北抗日連軍の勢力が当時弱まっていたとはいえ、その活動はいまだ続いていた。関東軍は1936年4月から1939年3月にかけて「満州国治安肅清計画要綱」を策定し、安東省

---

67 崔南善「松漠燕雲録」（『毎日申報』、1937年11月1日）。

や賓江省の東北部地域と3江省において活動する抗日遊撃隊を攻撃した。<sup>68</sup> 崔南善は、1930年代後半の同地に暮らす朝鮮人農民に対し、日本の侵略と支配を支持し、協力するよう要請したのである。そのため帝国主義日本の主導下で行われた朝鮮人の役割と活動は、中国の目には、侵略と収奪の尖兵と映ったことであろう。

## 5. おわりに

1930年代半ば以降の崔南善の作品は、朝鮮総督府の機関紙『毎日申報』に集中している。彼は、1931年に満州事変が、1937年に日中戦争が勃発した中国東北地域と密接な関係を結んだ。彼は1938年に『満鮮日報』の顧問を務めたが、『満鮮日報』の前身は『満蒙日報』であった。同紙は日本が満州在住の朝鮮人に国策を宣伝する指導機関紙として、1933年8月25日に新京で創刊した朝鮮語新聞で、1937年には『満鮮日報』に改名した。そして彼は、1939年4月、満州建国大学に赴任し、同大学研究院の民族研究班と歴史研究班に所属した。満州建国大学は1938年5月、「5族協和」実現のための人材養成を目的に、満州国新京に設立された。特に同大学の研究院は、「東方文化の隆盛」と「国家精神の振興」という政治目的達成のための研究活動を行った。崔南善は同地域の歴史・文化の研究を通じ、日本の侵略戦争を支持する論

---

68 尹輝鐸、『日帝의 満州國研究』(一潮閣、1996年、31頁)。

説活動を行った。彼の「松漠燕雲録」は、日中戦争を日本側から支持し、朝鮮人農民層の満州「移民政策」に呼応した旅行記であった。

崔南善は1930年代に入り、東北アジア地域における日本の文明・文化の優越性を認めた。満州国は彼にとって「王道楽土の実験場として出現した」存在であり「歴史的諸民族が現実的構成分子」となった「民族協和」が達成された空間であった。また彼は日本の中国東北地域に対する侵略を領土欲ではなく「道義主義、解放主義」ととらえた。その目的は、日本の侵略戦争が満州だけでなく中国への「文明的役割」であることを強調することにあった。白色人種であるロシア共産主義の防波堤としての日本の役割と、アジア人種(民族)の相互調和を強調することで、彼は「大東亜共栄圏」という帝国日本の論理に包摂されざるを得なかった。そして日本の侵略戦争が北東アジア地域の繁栄と発展のためだと強調するのは、1940年代の太平洋戦争を「聖戦」と強弁し、彼が1943年ごろ、朝鮮青年の戦争参加を督励する「学兵支援」の遊説に積極的に乗り出す活動にもつながっていた。

だが1930年代半ばの崔南善にとって、中国東北地域は日本の「発展」にとどまらず、朝鮮人の発展の可能性を見つめ直す空間でもあった。日本の侵略戦争を支持する一方で、崔南善の紀行文には「朝鮮(人)単位」の苦悩が共存していたと言えよう。彼にとって間島とは、現実には「異国」であるが、「実際の間島」を強調しているように、朝鮮人の役割に大きな期待を寄せていた。朝鮮から国境を越えて広大な満州に入っていく過程で、彼は朝鮮人の活動空間が、過去の栄華から半島地域に縮小したと考えた。だが、朝鮮

は「萎縮」してしまったが、満州という空間において、再び過去の栄華を再現しなければならないと主張した。さらに彼は「満鮮一如」のスローガンにおいて朝鮮人を区別し、朝鮮人本位を強調した。満州という空間において、各民族独自の視線に差があるように、1930年代半ばの崔南善においても、日本帝国の一員としての朝鮮の立場と朝鮮人独自の役割を強調する見解などが、複合的な情緒となって彼の旅行記に反映しているのである。

※ 和訳：篠原啓方 (関西大学)

# 植民地経験のなかの「個人的記憶」と「集合的記憶」

－戦後台湾の「歴史的記憶」の形成と変遷

李承機 (成功大学)

## 1. 『海角7号』が喚起する「記憶」

2008年8月末、台湾映画市場は『海角7号』という名の国産映画を上映した。その封切上映期間中の興行収入は、10月末までですでに4億5000万台湾ドルを超え、既存のあらゆる国産映画の興行記録を塗り替え、また大部分のハリウッド映画の台湾におけるチケット売上げ成績を抜き、1990年代以降に興行成績の記録がはじまって以来、第2位の映画となった(第1位は1997年の『タイタニック』)。この映画の物語は、2組の日台間の国境を越えたラブストーリーを中心に織り成されている。ひとつの物語の舞台は今日の台湾であり、もうひとつの物語の舞台は在台日本人の引き揚げが行われた1945年前後である。2組の日台間の国境を越えた恋愛の物語中での交錯は、ふたつの異なる時代のコントラストを際立たせることを意図したこの映画の手法のようだが、1945年以前の「日本時代」と呼ばれる、台湾が日本の植民地支配を

受けた歴史的経験(あるいは歴史的意味をともなったイメージ)にかかわることから、興行の好成績がさらなる観客動員を促進したことも手伝い、一連の論議をまきおこした。

もっとも批判的な論調は、『海角7号』中にあらわれる「日本」像を、台湾が日本の影響から抜け出すことができない証拠と短絡的にみなし、ひいては、戦後台湾の文化の発展はいまだに日本の支配下にあると認識する。この種の見方は基本的に1945年以後の「植民者対被植民者」的な観点の延長上にあるが、さらに一步すすんで、台湾の被植民の歴史における「抗日」経験が不断に反復強化されていくという、端的に言えば植民地支配脱却後の植民地が普遍的にもつ「ポストコロニアル」思想の性格をもつ。こうした観点自体はけっして珍しいものではないが、数多くの論議と『海角7号』がひきおこした話題のうち、「ポストコロニアル」との比較でもっとも特異な現象だったのは、植民地時代に生まれた台湾人と日本人の個人関係が数多く紹介され、ひいては新聞やテレビの報道材料となったことである。なかでも代表的な例は、個人が実際に経験したとされるラブストーリーと『海角7号』が虚構したラブストーリーとを表で比較した「海角7号真実人生版」という報道記事である。<sup>1</sup>

この記事が全国版の大手新聞の紙面に載ることができたのは、『海角7号』という一本の映画がひきおこした社会現象のなかに、個人の植民地時代の記憶を喚起しやすい何らかの要素が含まれており、これらの「個人的記憶」と台湾社会のある種の「集合的記憶」とが結びつき、かつ、それが「歴史的記憶」のなかに投射されるこ

とで植民地時代の台湾の歴史的経験との間に共振を生じさせたからにほかならない。そこで本論文では、戦後台湾人の「個人的記憶」と戦後台湾社会の「集会的記憶」とが、1945年以前の植民地経験といかなる関係を生じたのかを探り、また、この関係のなかで生みだされた「歴史的記憶」が戦後いかなる変化の過程をたどるのかに着目しつつ、「個人的記憶」と「歴史的記憶」の間に存在する、互いに補完しあい、かつ、互いに挑戦しあう奇妙な関係を説明してみたい。

「個人的記憶」と「集会的記憶」の間関係については、本論文ではマウリス・アルヴァックス (M. Halbwachs) がおこなった社会心理学的な考察を参照し、個人的な経験にもとづく個人の思い出を「個人的記憶」と呼び、ある集団やある団体の成員の間で、何らかの共通観念と社会関係にもとづいて持続的に維持される感情や観点

1

### 海角七號 vs. 島崎義行之台日戀

 <b>日籍教師</b> (中學教師) 隱居思念長達60年... 日籍教師與剛畢業的小島友子墮落情生 日本戰敗，相約私奔，男方爽約 返日後結婚生子	<b>男主角</b>  <b>日籍教師</b> (島崎義行/80歲) 尋找初戀情人陳明珠長達63年 島崎義行26歲與小他10歲的學校工友陳明珠互有好感 日本戰敗，倉促返日，2人沒能來得及脫再見 返日後結婚
 <b>小島友子 / 學生</b> (梁文音 飾演) 活潑、熱情，不怕權威 與日籍男老師相戀，打算闖下台灣的一切私奔去，卻在連連看守輔導，一直到船將離港的瞬間... 結婚生子	<b>女主角</b>  <b>陳明珠 / 工友</b> (當年16歲) 「一雙大眼靈靈活活俏皮，象個山口百惠」 學校開會時，校長在座，陳明珠總是把泡好的第1杯茶端給島崎。 以台語告訴島崎「我愛你，跟我我會死」。

背景：台日談話 查詢中

資料來源：海角七號部落格、陳澤民、真早天涯

記者蘇孟娟(9旬、日籍老師跨海尋「友子」63年)、『自由時報電子報』(2008年10月29日) <http://www.libertytimes.com.tw/2008/new/oct/29/today-so1.htm>。

によって構成され、共同の思い出として認識されるものを「集合的記憶」と呼ぶ。ただし、本来、ある個人の思い出と他の人の思い出とが完全に同じではありえないので、多くの「個人的記憶」の集合体としての「集合的記憶」と「個人的記憶」との間には対立関係があり、われわれ個人の思い出は絶えず所属する団体や社会のなかで反復的に再認され、同時に、「個人的記憶」の再認は一種の「再構成」の過程に変化する。<sup>2</sup> この「再構成」の過程については、「個人的記憶」と「集団的記憶」との間に、両者の間で相互の出会いと交差の「場」となる、「通路」としての意味合いをもつ、ある種の「入り口となる要素」がその社会環境のうちにはっきりと存在する必要がある。<sup>3</sup>

アルヴァックスは「個人的記憶」と「集合的記憶」の両者の間には「外見上の対立」があり「鋭い対照」が存在しているといい、両者を「内的なものと外的なもの」、「個人的記憶と社会的記憶」或いは「自伝的記憶と歴史的記憶」とに大別しながらも、われわれ個人が同時にこれらの2種類の記憶に参加すると認識している。このように2項対立図式をもちいて「集合的記憶」を「社会的記憶」や「歴史的記憶」と同等にあつかっているのは、「われわれ(個人)の生活の歴史は歴史一般の一部だから」であり、「(後者は)過去を要約した図式的な形において示す」ことで、「個人的記憶」を補うからであ

---

2 Maurice Halbwachs 著、小関藤一郎訳『集合的記憶(La mémoire collective)』(京都：行路社、1989年、7~16頁)。

3 Maurice Halbwachs 著、小関藤一郎訳『集合的記憶(La mémoire collective)』(京都：行路社、1989年、37~42頁)。

る。<sup>4</sup>

アナール派第3世代の重要な学者ジャック・ル・ゴフの歴史と記憶にかんする考察を整理すると、「記憶はその社会的な機能によって特徴づけられる」という観点についてはアルヴァックスと大きな違いはない。だが、「民族や国民における集合的記憶の不在、あるいは消滅は、集合的アイデンティティの深刻な混乱をもたらすことがありうる」ことから、「集合的記憶は権力をめぐる社会的諸勢力の闘争における重要な武器でもあり、「記憶や忘却を支配することは、歴史的社會を支配する階級・集団・個人にとっての大いなる関心事の一つだった」という。<sup>5</sup> つまり、「歴史」と記憶の間には、一種のかくされた操作のメカニズムがあることを、ル・ゴフははっきりと指摘している。これに鑑み、本論文では「集合的記憶」を直接に「歴史的記憶」と同一視するのではなく、「集合的記憶」はたんに「個人的記憶」の集合体にあたりとみなす。そして、歴史に関連をもつ認識や意識であり、かつ操作されて変化した「集合的記憶」こそが、いわゆる「歴史的記憶」であるとみなすこととする。また、「個人的記憶」と「集合的記憶」は個人や所属する団体の凋落につれて次第に消滅してしまうのに対し、国家や社会といった制度やイデオロギー等をとおして構築された「歴史的記憶」の場合は、世代を超越して伝えられるものであり、また、類似の要

---

4 Maurice Halbwachs 著、小関藤一郎訳『集合的記憶 (La mémoire collective)』(京都：行路社、1989年、45~48頁)。

5 Jacques Le Goff 著、立川孝一訳『歴史と記憶 (Histoire et mémoire)』(東京：法政大学出版局、1999年、2、93頁)。

因によってさらなる変化を生じることもありうるのである。

本論文の主軸としては、映画のようなマスメディアの発展にしたがって1950年代以降の台湾で出現した大衆文化を、戦後台湾社会のなかの「個人的記憶」と「集合的記憶」とが互いに混じり合う「通路」あるいは「場」ととらえ、この両者が1945年以前の植民地経験と生じた関係、ひいては、それが経てきた一連の政治的社会的な過程について説明を試みたい。さらには、「集合的記憶」がいかに操作を受け、または、いかなる政治的社会的な意味合いにおいて、「歴史的記憶」となっていたのかに着目してみたい。これらの検討を通じて、戦後台湾社会のなかに観察される植民地時代の「歴史的記憶」は、「被抑圧」の「集合的記憶」から抗日の「歴史的記憶」へ、ならびに、戦後から成長してきた「集合的記憶」から多角的に争奪される「歴史的記憶」へ、幾度もの変化を経てはじめて今日のような各種の多元的対立に満ちた様相に至ったことを説明できればとおもう。

## 2. 「被抑圧」の「集合的記憶」から 抗日の「歴史的記憶」へ

植民地下の台湾では、はやくから映画の放映や上映活動が行われたが、1929年の有声映画技術実用化により、映画は一種の視聴覚メディアとなり、テレビの普及以前においてももっとも「大衆性」をそなえたメディアとなったといえよう。三沢真美恵も

指摘するように、映画は、はやくも1920年代半ばの台湾で、すでに演劇にとってかわり「娯楽界の頂点」に立った。<sup>6</sup> だが、植民地時代を通じ、台湾本土の資本・技術によって製作あるいは創作された映画は多くはなく、台湾総督府がかかわっていた宣伝映画やニュース映画をのぞくと、台湾人の手による映画はきわめて稀であった。ましてや、本土の資本により進められた商業的な映画の製作と上映はいうまでもなかった。そのため、日本統治下において、植民地台湾の映画市場は日本本国の資本が進出し利益を追い求める場所とはならず、西方のハリウッド式映画市場の最末端に位置することになった。1930年代末の戦時期以後になると、台湾の映画市場においても日本本国での「映画統制」実施にともない、映画は国家動員と思想コントロールのシステムに組み込まれ、いわゆる「国策映画」とそのほかのポピュラーな日本製作の娯楽映画がともに全市場を占拠した。<sup>7</sup>

戦時期の「国策映画」にせよ、日本製娯楽映画にせよ、劇中の要素やシンボルは、いうまでもなく台湾本土とそれほど大きな相関関係があるはずがない。台湾総督府の画策やタイアップのもとで、何らかの台湾的シンボルを含んだ「国策映画」が出現したこともあったが、これは宣伝工作という角度からみるのが適当だろう。

---

6 三沢真美恵『植民地下の「銀幕」—台湾総督府電影政策の研究(1895~1942)』(台北：前衛出版社、2002年、286~290頁)。

7 戦時期の台湾映画市場を概観する関連研究は多くないが、三沢真美恵『植民地下の「銀幕」』を一部参照できる。戦争期日本の「映画統制」と「国策映画」の挫折、および娯楽映画の隆成については、古川隆久『戦時下の日本映画—人々は国策映画を観たか』(東京：吉川弘文館、2003年)。

戦後1950年代半ばまでの台湾映画市場は、基本的に香港や上海の製作者が大勢を占め、台湾自製の映画は少数の宣伝的性格のものをのぞいては、「銀幕上に台湾映画が占める場所はほとんどない。たまに出てきたとしても、ひととおりの体裁を整えただけにすぎず、巷の話題にのぼることもない」という状態であった。だが、1920年代に台湾本土の戯劇である歌仔戲が起り、すでに一群の劇団と台湾の民衆との間には共通の基本要素やシンボルが共有されるようになっており、なかには中国あるいは漢民族の伝統的な歴史物語もあり、また一部は台湾の民間伝承に由来するものもあった。このため、1954年より瞬く間に台頭してきた台湾自製の「正宗台語片(正統台湾語映画)」は、まさに「歌仔戲映画」の形式に頼ることにより市場に参入し、人気を博したのである。<sup>8</sup>

研究者の廖金鳳は、台湾語映画が歌仔戲から映画文化に至るまでの意味内容の変遷と拡大の関係は複雑であり、植民地時代から国民党政府統治時代までの過程には政治・経済・社会的な要因も働いていたと考える。廖はまた、1955年から1972年の台湾語映画をひとつの再現システム(representation system)とみており、その「文化的想像の内包」は「多重の言説が相互に拮抗するなかに表出し、かつ歴史情勢の変化にしたがって移ろい揺れ動くものである。台湾語映画という実践は、国際的な映画文化・台湾本土の映画文化、さらには台湾の歴史的経験と生活文化といったさまざまな言説に

---

8 盧非易『台湾電影：政治・経済・美学 1949～1994』（台北：遠流出版、1998年、61～67頁）。

よりかかっている」と考える。<sup>9</sup> ここで指摘されている「歴史情勢の変化」は、もちろん政治社会等の変遷と関連している。「台湾の歴史的経験」とは、1950年代という時点から遡って考えると、当然1945年以前の植民地時代を指しているとおもわれる。これを敷衍していえば、植民地時代をくぐりぬけてきた戦後台湾人は、植民地時代と戦後とを相異なるふたつの「時代」として区分していたのであり、このような区分のもとではじめて当時の台湾社会が抱いていた「時代感」と符合するであろう。

こういった「時代感」が、おそらくは戦後の台湾人をして植民地時代を一個の全体性をもった「時代」とみなすよう促し、このため個別の「個人的記憶」のなかに多少の異質な思い出が存在していたとしても、植民地時代を一個の「全体」とみなす「時代感」が「個人的記憶」を絶えず連結させ、植民地時代に対し全体的な解釈をおこなう「集合的記憶」が容易に形成されたのであろう。研究者葉龍彦の『春花夢露—正宗台語電影興衰録』という書に序文を書いた陳万益は、1957年に出版された文献を引用して、植民地時代には文学・文化運動に従事していた戦前の台湾人エリートが、戦時期の「皇民化運動」および戦後国民党政府の「高圧統治」のもとの「長期にわたる密語と沈黙」を経験したのち、「50年代における正宗台語片ブーム」により、「かれらの情熱と理想を奮い立たせ」、ついにはこれを「台湾のルネッサンス時代」と称するほどであった

---

9 廖金鳳『消逝の影像—台語片的電影再現與文化認同』（台北：遠流出版、2001年、18～21頁）。

と指摘している。<sup>10</sup> すなわち、植民地時代の台湾人エリートが戦後1950年代になって「正宗台湾語映画」に対し、「ルネッサンス」にも似た大きな希望を抱いた原因は、植民地下台湾本土の映画の「荒廃」との比較で、台湾製の台湾語映画が市場を席卷し大衆文化の主流となっていくさまを目の当たりにし、かれらの植民地時代の記憶に刺激を与えたからであろう。陳が引用する王白淵の文章にいたっては、植民地時代の「台湾語禁止」の「個人的記憶」にまで言及がなされ、対比により、植民地時代の経験のなかでも「被抑圧」の部分が記憶として喚起され、さらに「正宗台語片」という「個人的記憶」と「集合的記憶」の混じり合う「通路」を通過することで、植民地経験を有する台湾人の「個人的記憶」をより集めた「被支配」という植民地時代の「集合的記憶」が作り上げられたという。研究者葉龍彦の見方によれば、戦後1950年代半ばから起こり1970年代半ばまで続いた台湾語映画旋風の「大きな時代の環境」は、台湾人の「国民党の高圧統治下—その心情は日本帝国植民統治下でのそれと類似するのだが」、つまり台湾語が植民地時代以降すぐに圧迫を受けたことと関係することが指摘される。<sup>11</sup>

ともに現代の研究者である陳万益・廖金鳳・葉龍彦の3人全員が、戦後国民党政府が台湾に対して施行した「高圧統治」もまた「正

---

10 陳万益「台語片的啓示」(葉龍彦『春花夢露—正宗台語電影興衰録』、3~5頁)。他に陳が引用している文献には1957年出版の『影劇内幕』があり、そのなかには王白淵・張文環・陳豪の3名の植民地化の文壇で活躍した台湾人エリートが含まれる。

11 葉龍彦『春花夢露—正宗台語電影興衰録』(台北:博揚文化、1999年、43~44頁)。

「宗台語片」ブームの原因であったと認識しているが、ここでより深く理解しておく必要があるのは、いったいどのようにして台湾社会が植民地時代の「集合的記憶」と関係を生じたのか、という問題である。1945年の終戦後の「大日本帝国」の崩壊にともなう植民地台湾の解放ならびに国民党主導の中華民国体制への急激な併合という点を考えると、まさにそこに台湾社会の植民地時代の「集合的記憶」が「歴史的記憶」に転化する過程を見出すことができる。

戦後台湾を統治した国民党政府が「中国」あるいは「中華」の回復を統治イデオロギーとして掲げ、ついで「脱日本化」が公式の政策の基本的言説とされ、そのなかにもっとも明確な定義がしにくい「文化」が包含されることになったことも、また政治権力の操作という角度から理解される。<sup>12</sup> もしこうした観点から植民地時代台湾の文化発展を認識しようとするならば、植民地時代の台湾「文化」を単純に「日本的vs被日本的」といった2項対立図式に導くことは容易になる。1947年の「2.28事件」を経てその後の「白色テロ」と戒厳令の時期に入った後、このような2項対立図式をもちいて「文化」を解釈する権限はいつそう国民党政府の手に握られることになった。もし台湾の植民地時代からつづく「文化」全般が「日本的」と解釈されたならば、埋葬され消滅していく命運から逃れることはできなかった。このため、何らかの台湾文化のシンボルが「非日本的」と解釈され、ひいては何とかして「中国的」あるいは「中

---

12 戦後初期の台湾の政治状況と文化的な「区分」と「差異」の問題が引き起こした大規模な反乱事件については、何義麟『2.28事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス』（東京：東京大学出版会、2003年）を参照。

華的」なものと結びつけることで、ようやくいくらかの「非日本的」な部分が存続することができたのである。

上述のロジックは若干異なる角度からみれば、すべて文化解釈権争奪のための一種の道具あるいは策略にすぎず、前述の国民党政府の台湾に対するいわゆる「高圧統治」もイデオロギー上の弾圧だけに限定されない。だがこの時期の「正宗台語片」は大衆文化のいち主役として、「中国的」あるいは「中華的」なものと連結してこそ、その必要性を有した。実際、数多くの日中戦争を題材とする台湾語映画は「すべて日本植民地化と抗日戦争の歴史的経験と密接なかかわりを再現」したのであり、さらには廖金鳳が台湾語映画に表出されたナショナリズムと歴史認識について検討した際に指摘したように、1960年代半ば以後の台湾語映画は「明らかに中国あるいは台湾と日本の対立状態を眼前に展開してみせ」、さらには「日本統治時代の植民生活に触れるときには、明らかに中国の抗戦経験をその映画の物語の叙述に組み込んだ。<sup>13</sup>」そして、関連する近代史あるいは社会事件の言説においても、台湾語映画は歌仔戲とは異なる文化的な意味内容を開拓し、「中国/日本」が「中原/番邦」に取ってかわり、「忠臣/反逆」もまた「凶悪な日本人/苦難の中国人」へと変わったのである。<sup>14</sup>

要するに、台湾大衆文化の主流は、植民地時代から、台湾社会

---

13 廖金鳳『消逝の影像—台語片的電影再現與文化認同』（台北：遠流出版，2001年、131、151～153頁）。

14 廖金鳳『消逝の影像—台語片的電影再現與文化認同』（台北：遠流出版，2001年、92頁）。

の熟知する儀劇の基本要素と文化的シンボルを内包して土台としてきた歌仔戲から、戦後の「歌仔戲映画」をはじめとする「正宗台湾語映画」へと変遷を経た—その間に「中国の抗戦経験」を組み込んだことは一種の「歴史情勢変化」への対処策であったのかどうか、また、その間に「歴史情勢変化」に依拠して文化言説上の変化が生み出されたかどうか—それらはともかくとして、植民地時代の台湾人の「被抑圧」の「集合的記憶」が中国の抗日戦争の経験に連結されるや、台湾社会における植民地時代の「集合的記憶」が操作され、中国と共同で日本に抵抗した「歴史的記憶」に転化する機会を得たのである。

ようやく1970年代初頭に「正宗台語片」ブームが衰え、ついで映画市場に起こった国語(華語)映画には基本的にふたつの主流があった。ひとつはラブストーリーを基調として物語が構成される「文芸愛情片」であり、ひとつは中国の対日抗戦を題材とした「愛国政宣片」である。「文芸愛情片」も当然、台湾社会の1970年代以後の都市発展・経済成長・社会変化等の内容を含むが、映画本体に密着している娯楽的意義は比較的高い。「愛国宣伝片」が人気を博した背景については、同年代初頭に台湾の国際的地位が次第に弱まったこと(特に1971年の「日台断交」の影響が大きかった)、国民党政府が「外交の困況」を認めざるを得なかった政治状況と関わりがある。研究者盧非易が指摘するように、この手の映画は政府の全力の支持を受け、1974年に上映された『英烈千秋』が大ヒットした後も、国防部とその他の政府宣伝機関はみな「慣例的協力」を行った。盧はまた、台湾が国際的地位とイメージの低落に直面した1970年代に

際し、これらの全面的に中国の対日抗戦経験によりかかってなされた題材選択は、「過去の歴史のなかに勝利の記憶を探し求め、それによって現実における挫折を忘却することにほかならず」、「愛国政宣片」も国民党政府が直面する危機への標準的対処モデルの一つとなったようであると考えている。<sup>15</sup>

したがって、台湾社会の植民地時代の「集合的記憶」についていえば、最初期に「正宗台語片」が、中国と共同で日本に抵抗したという「歴史的記憶」へと転化する機会をすでに提供し、「愛国政宣片」の大ヒット後になって、廖金鳳がそのまま指摘するように、「国語片の「脱日本化」は明らかにこの土地の植民経験を拭い去り」、<sup>16</sup> 一種の「中国化」した抗日の「歴史的記憶」が、もはやほとんど植民地時代の「集合的記憶」に等しくなったのである。

### 3. 戦後成長した「集合的記憶」から 多元対立の「歴史的記憶」へ

1980年代に入る前後になると、1970年代からつづく一連の国際事件の衝撃により、台湾国内の政治社会状況には不穏で得体の知れない雰囲気が見え隠れする。エリートのサークルのな

15 盧非易『台湾電影：政治・經濟・美学 1949～1994』（台北：遠流出版，1998年，181～183、222頁）。

16 廖金鳳『消逝的影像—台語片的電影再現與文化認同』（台北：遠流出版，2001年，193頁）。

かには、1970年代初頭からすでに「本土反思運動」が起り、1977年に至り、のちの思想潮流の発展にきわめて深遠な影響を与えた「郷土文学論争」が開始された。この論争の中で数種類の複雑な立場が分裂と結合を繰り返し、1983年に発生した「台湾意識論争」後まで続いたが、最も主要な立場の違いは、いわゆる「中国意識」と「台湾意識」の対立に比較的はっきりと区分される。<sup>17</sup>

しかし、文学界等その他の文化領域で「郷土文学論争」時すでにある種の「郷土意識」あるいは「本土意識」の実践が開始されていたのと比較すると、台湾映画市場は「最後にようやく感受した」といい。盧非易はこうした現象を「映画が終始、国家と資本家の手に握られていた」せいであるとし、また、映画の「強い商業的本質」が、「保守的な現状への挑戦の思想潮流を忌避」させたとする。<sup>18</sup> 1982年になってようやく「郷土文学」より題材を取った最初の映画が出現し、1986年になり「台湾新映画」と称されたこの風潮は、一転して「郷土意識と写実主義実現の傾向」をもつと認識され、たとえ「苦心することのない本土化あるいは郷土意識の傾向」であっても、「比較的多くの個人の成長経験を反映し、かつその成長経験を台湾の経験とシンクロさせることにより、そのなかから本土性を現出させたのであった」。<sup>19</sup>

---

17 「郷土文学論争」について台湾文化ナショナリズム発生という視角から行われた分析研究は、A-chin Hsiau (蕭阿勤), *Contemporary Taiwanese Cultural Nationalism* (Routledge, 2001年)を参照。

18 盧非易『台湾電影：政治・経済・美学 1949～1994』（台北：遠流出版，1998年，227頁）。

19 盧非易『台湾電影：政治・経済・美学 1949～1994』（台北：遠流出版，1998年，

したがって、「台湾新映画」では主として製作者の戦後台湾における成長の「個人的記憶」が表出され、観衆の共鳴と市場の肯定的評価を受けた結果、戦後台湾社会の共同の成長経験をより集めたひとつの「集合的記憶」の「通路」が形成され得たのである。「台湾新映画」の主だった製作者はみな戦後の台湾に成長し、植民地時代の歴史的経験に触れる可能性は相対的に少なかったが、この戦後の台湾社会に成長したという「集合的記憶」が形成されたのち、また絶えずこれら戦後世代の個人成長経験に対して一種の「召喚」効果を生じることで、個別の「個人的記憶」が強化され、さらに継続的に「集合的記憶」と結びつきを生じ、ついにはこれらの「個人的記憶」と「集合的記憶」との間で引き続き相互の「再構成」が進行していったのである。そしてまさに1980年代の経済成長と社会変化が激しさを増していた時期に、戦後世代が「個人的記憶」と「集合的記憶」の相互影響をとおして成長経験を振り返ったとき、戦後台湾に対しても一種の「時代感」を生じたのであり、そして1980年代以前の戦後台湾と1980年代以後との間にも、おおよその区分がなされるようになっていった。

台湾の植民地時代における歴史的経験は戦後世代についていえば、概ねごく一部分の稀少な幼年期の「個人的記憶」が存在し得たにすぎず、戦後の成長経験というひとつの「時代」をとおして植民地経験を再び眺めたとき、多くはただ確実に植民地経験を有する世代の「個人的記憶」に依拠するか、あるいは、前述の1970年代に

定型化を経た抗日の「歴史的記憶」に依拠することしかできなかった。この時期におけるこれら戦後世代の台湾植民地経験の一般認識を説明しようとしても概ね非常に困難であるが、もしかれらが抱いている「本土化あるいは郷土意識の傾向」と抗日の「歴史的記憶」を対照し、かれらが身を置く1980年代から、かれらの成長経験であるひとつの「時代」を隔てて、再びその前のひとつの「時代」を眺めたときには、きっとある種の神秘的な感覚に包まれ、さらには、政治上の原因により一種のなんともいえない「禁忌」を感じたことであろう。

そしてこの「台湾新映画」の波が起こると同時に、「愛国政宣片」が急速に勢いを失っただけでなく、純粋な「文芸愛情片」も終わりを告げた。実は映画市場には「台湾新映画」のほかにも、まだ既存の「類型」ではアイデンティファイできない各種の商業映画がひしめき合っていた。ちょうどこれが「映画の政治構造の軟化」時期と呼ばれるとおり、民主化の波の衝撃に迫られて国民党政権が1986年に戒厳体制の解除を宣布せざるを得なくなり、まさに台湾映画が既存の映画検閲制度が設けた各種のタブーに挑戦を開始した時期であった。<sup>20</sup> なかでも、「台湾新映画」の波の延長ともいえる1989年上映の『悲情城市』は、1947年に発生した「2.28事件」の「禁忌性」に挑戦し、そのため映画とビデオテープが攻撃を受けたにもかか

---

20 盧非易『台湾電影：政治・経済・美学1949~1994』（台北：遠流出版，1998年、297、280頁）。ほかに、これらの既存の「禁忌」は数多くの倫理道德の論議を呼ぶような題材、ならびに中国製映画・中国とかわる政治的な題材を含み、さらには中国の風景等も含んでいる。

ならず、日増しに収縮していた映画市場の中であって興行の好成績は止まることなく、またエリート・サークルや社会上で一連の「歴史」と「再現」問題の議論をも引き起こした。

1980年代初頭の台湾社会にはすでに「2.28タブー」に挑戦する機運がおぼろげながらも浮上しつつあったが、その背景に民主化要求や前述の「中国意識」と「台湾意識」の対立が含まれることは言を俟たない。『悲情城市』上映の一年前に公開出版された『辛酸の60年—2.28事件27部隊部隊長鍾逸人回想録』は、事件発生時に武装部隊を組織して国民党軍に抵抗した重要当事者の回想を公にし、「タブー」への挑戦を達成する効果を狙ったものである。その序を記した一人の文学者と3人の学者ははっきりと「みんなで歴史を書く」「真相の回復」「この地の歴史を大切に」「あの年代の生き証人」<sup>21</sup>といった類の表現でもって、一種の歴史解釈権争奪の正当性を表現している。言い換えると、1986年に国民党政府が戒厳令を解除する前後から台湾社会において、それまであちこちに逃げまどっていた「2.28事件」にまつわる「個人的記憶」が、前述の抗日の「歴史的記憶」に挑戦する可能性を持つにいたったのである。

おそらくは『悲情城市』がこの歴史事件を背景とするひとつの虚構テクストとして大衆文化の領域に出現し、かつ「遠くから景色を覗き見るような構図により、作者の認識する歴史(あるいは記憶する過去)を、夢のなかでの回想を彷彿とさせるような絶え間なくひ

---

21 鍾逸人『辛酸60年—2.28事件27部隊部隊長鍾逸人回想録(上)』(台北：前衛出版社、1993年新增訂版(1988年初版)、〈序1〉～〈序4〉)。ほかに序文を書いた4人はそれぞれ、李喬・陳芳明・張炎憲・李筱峰である。

らめき入り乱れる光と影のなかに、観衆に歴史上の過去を覗き見させる遠近入替わる位置を提供した」<sup>22</sup> ときに、「2.28事件」が具えている「禁忌性」が瞬く間に突破され、「2.28事件」にまつわる「個人的記憶」も誘発されて同じ方向をめざして集まりはじめ、たちまち『悲情城市』という「通路」をとおして、台湾社会に「2.28事件」経験にまつわるひとつの「集合的記憶」が形成された。ここにおいて、この「集合的記憶」に抗日の「歴史的記憶」を転覆させるポテンシャルがみなぎりはじめ、その後の台湾社会で「多元/対立」の各種の「歴史的記憶」が充満しはじめる起点ともなった。

「2.28事件」の「集合的記憶」がどうして従前の抗日の「歴史的記憶」を急速に崩壊させたのか。その理由はこの「集合的記憶」が植民地時代と戦後台湾との区別をはっきりと標示させることができたからであるが、それ以上に、「真相」と「歴史」を追究せんとする力が、「2.28事件」発生の原因を植民地時代と戦後というふたつの異なる「時代」の比較のなかに求める方向に働いたからである。こうした心理は植民地経験を有する台湾人について言えば当然のことである。すでに戦後の成長経験の「集合的記憶」をもつ戦後世代について言うと、台湾の歴史的経験過程のなかに「本土意識」さらには「台湾意識」の源流を探し求めれば求めるほど、抗日とは別な何らかの「歴史的記憶」が必要とされ、それによってかれらの、ほとんど模糊とした「2.28事件」、ならびに、いまだ経験したことの

---

22 盧非易『台湾電影：政治・経済・美学1949～1994』（台北：遠流出版，1998年，305頁）。

ない植民地「時代」の認識を助けたのである。

植民地時期あるいは「2.28事件」のなかに一体いかなる「本土意識」あるいは「台湾意識」があったのかは、本論文が取り扱うべき問題ではない。だが、すでに「2.28事件」に関わりをもつ植民地時代の何らかの「歴史的記憶」が必要とされ、またすでに植民地経験を有する「個人的記憶」が必要とされており、植民地経験を有する人の「回想録」の公開出版が1990年以後増加しはじめたことからだけでも、こうした需要が増えつづけていることはすでに観察される。台湾の学術界における最高の主導的地位を占める中央研究院では、その部局である近代史研究所が1991年初頭、定期的に出版する『口述歴史』に「2.28事件特集号」を組むことを決定した。2期にわたる「特集号」において、1989年以後のインタビュー（大部分のインタビューは1991年以後に集中）にもとづき、合計75篇の「インタビュー記録」が掲載された。<sup>23</sup> そのなかに姿を現わしたさまざまな「個人的記憶」のうち、ほぼ大多数に相通じる観点は、「2.28事件」発生原因として具体的に、戦後に台湾にやってきて接收した国民党政府と軍の極度の腐敗を指し示したことである。さらには一種の文化言説上の「同一証明」として、当該事件の「真の原因」を植民地時代台湾の「進歩」と戦後中国からきた台湾統治者の「遅れ」といった2項対立的な矛盾のせいに帰したのであった。

以上から明らかなように、「2.28事件」の「個人的記憶」が1980

---

23 中央研究院近代史研究所口述歴史編輯委員会「口述歴史 第3期 2.28事件専号」（『口述歴史 第4期 2.28事件専号』、台北：中央研究院近代史研究所、1992、1993年）。

年代半ばから伏流のように台湾社会にひっそり流れ、植民地時代の「個人的記憶」も「2.28事件」を論じる際の「副産物」のように浮かび上がってきた。『悲情城市』が「2.28事件」にまつわる「個人的記憶」がより集まって「集合的記憶」となる「場」を提供するや、同時に植民地時代のさまざまな「個人的記憶」もこれに便乗して集結しはじめ、一種の植民地時代の「集合記憶」をなした。この2組の(集合記憶の)双生現象のような同時出現は、植民地時代と戦後のふたつの「時代」の差異を比較によって顕示し、これを一種の認識論上の「常態」とし、2組の「個人的記憶」が結集した「集合的記憶」を互いに絶え間なく「再構成」させるばかりでなく、「2.28事件」の「集合的記憶」を事件そのものから乖離させもしたのである。戦後世代が「2.28事件」の「歴史的記憶」を探し求めるのと同時に、植民地時代の「歴史的記憶」の形成をも牽引した。そして植民地時代と戦後というふたつの時代の差異が、「進んだ/台湾vs遅れた/中国」という一種の文化言説の比較を行った際に、前述の国民党官製の色彩に満ちた抗日の「歴史的記憶」はおのずから急速に瓦解したのである。言い換えるなら、抗日の「歴史的記憶」がこの崩壊に直面した時、実際の日中戦争の経験にもとづく「個人的記憶」は急速に再結集し、さらに「集合的記憶」の形態をもって支え続けていかねばならなくなってしまった。

1990年代に入って後の台湾では、すぐに「族群」(エスニック・グループ)という語がひろく使用されはじめた。いくつかの現象が、族群問題あるいは族群論議の概念をもちいて叙述できることも注目されるようになった。<sup>24</sup> 抗日の「集合的記憶」でもって引き続き

抗日の「歴史的記憶」を支えていた主要グループは、その成員の多くが1945年以前に中国本土で抗戦経験を有しており、また1949年以後に台湾にやってきた者は、想像される族群の分類格子のなかで、戦後初期の「外省人」という呼称を踏襲して「外省族群」となった。相対的に植民地の「集合的記憶」を有し、また1980年代末に突然ひとまとまりの植民地の「歴史的記憶」を構築したグループは、分類されて「本省族群」となった。基本的には1992年の民主体制の実施開始、メディア統制の開放後、また同時にマスメディアの高度に資本主義に原則にのっとり競争への従事のはじまりによって、上述の2種の族群に限らず、さまざまな記憶がみな記憶を集合させる「場」を見出すことが可能となり、各族群もさっそく族群単位の「集合的記憶」をもちはじめた。さらに一歩進んで、それぞれが抛るところの政治・経済・社会的な位置にもとづいて、大体の族群の位置と観点により、かれらの族群の「歴史的記憶」をも構成していった。これ以降、台湾で見ることのできる「歴史的記憶」の間にはときに対立し、ときに結構する関係が現れ、一種の多元かつ多重対立の様相を呈していった。

---

24 王甫昌『当代台湾社会的族群想像』（台北：群学出版、2003年、3頁）。

#### 4. おわりに—隠喩の植民地「歴史的記憶」

現代台湾の植民地時代の「個人的記憶」と「集合的記憶」は、すでに植民地経験を有する個人とその所属する集団の凋落にともない次第に消滅しつつある。しかし戦後から今日までの政治・社会等の制度やイデオロギー操作あるいは転化を経てできあがった「歴史的記憶」は、かえって世代を超えて継続的に伝わっていくことができ、あるものは将来の政治・社会等の変化にしたがい引き続き変化していくかもしれない。ポール・リクール (P. Ricoeur) の言うように、「歴史と虚構 (fiction) の交叉は〈歴史の具体化〉に一種の隠喩的指示作用を賦与することができる。そして歴史的記憶に転化するとその隠喩の効果はたちまち数多くの〈類推〉を生み出しうる」。<sup>25</sup>

1989年に戦後台湾の植民地の「歴史的記憶」に対し影響を及ぼした『悲情城市』は、おそらく「歴史と虚構の交叉」によって、いわゆる「隠喩的指示作用」を帯び、そうしてはじめて台湾社会をして植民地経験を深く掘り起こさせることになったのであろう。だが一方でまた『悲情城市』は、植民地の歴史的経験と、いくらか文化言説的性質を帯びた「集合的記憶」とに関係を生じさせ、さらには何らかの隠喩的意味を有する「歴史的記憶」も引き起こした。そし

---

25 Paul Ricoeur 著、久米博訳『時間と物語 第1巻 歴史と物語』（東京：新曜社、2004年）。

て2008年に上映された『海角7号』は、もはや「歴史と虚構の交叉」であるにとどまらず、さらにこれらの植民地の「歴史的記憶」を巧妙に操り類推によりつくりあげたテキストでもあった。このように「類推」の性格をそなえている以上、人々の植民地に対する「歴史的記憶」にさらに多くの言説空間を提供し、植民地の「歴史的記憶」をもより大きな隠喩性に富ませたのである。

『海角7号』がつき動かす隠喩の「歴史的記憶」はどこへ向かうのかについては、各種の政治・社会上の位置や観念の違いによって、数多くの異なる言説が得られそうだ。したがって、植民地の歴史的経験を絶えず隠喩に変えていく一種の「歴史的記憶」は、すでに植民地の歴史的経験からは乖離し、かつてに移り変わり、また自ら類推によりさらに多種多様な「歴史的記憶」をつくりだしていく。『海角7号』のチケット売上げは、一面では絶え間なく変遷し続けるであろう隠喩の「歴史的記憶」を代表し、一面ではすでに植民地の歴史的経験からどんどん遠ざかっている台湾社会を代表するものである。

このほか、本論文では「大衆文化」が「個人的記憶」と「集合的記憶」の間の通路となりうることを主張したものの、映画以外についての研究は現段階の能力の限界により、まだ組み込むことができていない。実際、映画と共同で「大衆文化」を築き上げているマスメディアの種類はきわめて多く、なかでもレコードにより伝播する歌謡も非常に重要である。音声を記録するレコードが伝達することのできる「肉声」が、人々の過去の「記憶」に及ぼす効果は極めて強力であり、より「時代感」さらには「歴史感」を喚起する効

果をそなえているようにおもう。さらに一歩進んで、将来、さらに比較の観点を組み込むことができれば、異なる植民地の状況も考慮に入れたい。そうしてはじめて戦後台湾社会の「歴史的記憶」の変遷の特殊性と普遍性を多角的に理解することができるだろう。

※ 和訳：向正樹（大阪大学）



# 歴史対話論

## － 日中韓共通歴史教材開発の成果と課題を例に

齋藤一晴 (明治大学)

### 1. はじめに

2005年以降、日韓、日中韓共同編集による共通歴史教材の刊行が続いている。日中韓共通歴史教材『未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史』高文研、2005(以後、『未来をひらく歴史』と略)、を例にとれば、日中韓3国ですでに25万部以上が刊行されており、香港、台湾などで流通しているものを含めると、少なくない数が東アジアレベルで世に問われているといえる。また共通教材という形式以外にも、共同編集され各国で刊行された学術書や翻訳刊行された一般書などを含めると、近年の日中韓3国における学術研究の緊密化は急速に進んでいる。

一方、こうした動きが進むなかで、日中韓それぞれの国内のナショナリズムが他国のそれと共振関係を有しており、そうした関係性と各国における自国中心的な歴史認識の点検・更新作業とが表裏一体の関係として存在していることを指摘できる。そして今

日、日本の歴史認識問題だけでなく、東アジアとは何なのか、東アジア史とはどのようなものなのか、という問いが、ますます大きな課題として国境を越えて私たちの前に大きく浮上してきていることも、また事実であろう。

そこで本稿では、以下の3点について、『未来をひらく歴史』の作成過程を例に考えてみたい。

1つ目は、東アジアにおける共通歴史教材作成の到達点と課題である。2つ目は、『未来をひらく歴史』の作成という歴史対話が明らかにした歴史研究・歴史教育・歴史叙述の課題である。3つ目は、そうした課題にどのように向き合うことが求められているのか、共通歴史教材作成という取り組みを、東アジアのなかでどのように位置づけ、発展させていくことが求められているのか、という問いに対する私なりの応答である。

そしてこれら3つを結びつけることによって、東アジアにおける共通歴史教材の編集・刊行を、日本の戦争責任を継承するための歴史和解に役立てるだけでなく、国境を越えた研究・実践・叙述のあり方を問い、各国で既成となっている自国中心的な歴史認識を自己点検・自己更新する土台づくりに結びつけたい。そして国境を越えた歴史対話を通じて、東アジアとは、東アジア史とは、という問いに答えようとする取り組みとして位置づけてみたい。こうした試みは、いうなれば共通歴史教材の作成から歴史対話論へ、という道筋をどう確保するのか、という今日的課題について明らかにすることを意味しているといえよう。

## 2. 東アジアにおける共通歴史教材 作成の到達点と課題

1982年のいわゆる歴史教科書問題の発生以降、日本の歴史認識問題をめぐる歴史対話は本格化していった。なかでも日本と韓国の歴史対話が活発に行われ、共通歴史教材作成を目標に積み重ねられた10年以上におよぶ研究・実践交流は、日韓共通歴史教材の刊行に結実しただけでなく、すでに両国における自国史の問い直しや日本の植民地支配をめぐる幅広い議論を可能としている。

一方、日本と中国の歴史対話は、韓国との関係に比べるといまだその経験は乏しい。しかし、2002年以降、毎年1度、日中韓の研究者や教育者、市民が参加して行われている「東アジアと歴史認識の平和フォーラム」を例にとれば、これまで7回のシンポジウムを経るなかで中国側の報告・発言内容が大きく変容してきていることもまた事実である。

2002年のフォーラム開催当初、中国側の報告は日本の歴史教科書問題への批判や戦争犯罪追及が中心であった。しかし2006年11月に京都・立命館大学で開かれたシンポジウムでは、中国側の報告者が朝鮮戦争における北朝鮮の先制攻撃に言及して、従来、中国国内でみられた韓国による武力北侵という歴史理解とは異なる内容を報告している。また先月(2008年11月)、北京で行われた第7回シンポジウムでも、中国政府の戦後補償裁判への対応のまずさや、日本の人民と軍国主義者とを区別するという戦後政策が戦

争被害者個人の尊厳の回復を遅らせたとする批判がなされるなど、自国史を問い直そうとする動きが強まりつつある。

このように、今日、日本の歴史認識問題をめぐって行われてきた日中韓の議論は、徐々に各国における自国史の問い直し作業をどのように共有、発展させるのか、という方向へと移行しつつある。それは単純な日本批判へ陥ることを回避し、国境を越えて戦争被害者という視点から歴史事実を共有することで、日本の歴史認識問題をめぐる議論をさらに建設的に深めようとする動きが生まれつつあるといえるだろう。

こうしたなか日韓、もしくは日中韓で編集・刊行された共通歴史教材は、2005年以降これまでにすでに5種類、6冊におよぶ。そのなかでも『未来をひらく歴史』は、唯一、日中韓3国で共同編集されたものである。

『未来をひらく歴史』は、2001年に発生した日本の教科書問題を発端として作成が検討、開始され、2002年から3年の歳月と10回の国際編集会議、3回の国際シンポジウムを経て刊行されている。

その特徴は、1982年の教科書問題以降、日本と韓国、日本と中国との間に築かれてきた歴史対話の成果と課題に依拠し、そのさらなる前進が目指されたこと。日本の戦争責任・戦後責任をめぐる歴史事実の共有が目標とされ、その実現のために歴史研究、歴史教育、歴史叙述、科学運動の「四位一体」の取り組みが行われたこと。また、自国中心的な歴史理解について国境を越えて行われる歴史対話によって克服する方法を具体的に模索しようとしたこ

と。そして国家の検定を受ける既存の歴史教科書とは異なる、民衆レベルで作成した共通歴史教材という代案を日中韓3国で作成、共有しようと試みたことである。

すでに刊行から3年あまりが経過し、内容に関する具体的な批判や建設的な批評、<sup>1</sup> 作成過程における論点に言及した著作も刊行されるなど、<sup>2</sup> その成果と課題を問い直す環境が整いつつある。こうした状況を、成田龍一は「『未来をひらく歴史』をめぐる議論が開始された」と指摘して、本格的な議論はこれから、という認識を示している。<sup>3</sup>

今後、『未来をひらく歴史』は、英語版の刊行が予定されており、内容やそのあり方に関してこれまで以上の議論が予想される。また『未来をひらく歴史』の作成メンバーは、2011年をめどに上下巻の日中韓共同学術書の刊行を目標として、2008年末までに7回の編集会議を行い、歴史対話を新たな段階へと到達させる努力を行っている。こうした状況をふまえると、今日、『未来をひらく歴

- 
- 1 『未来をひらく歴史』をめぐる議論としては、その戦争記述を批判的にとらえた林雄介「東アジア共通歴史教材を読んで」(歴史科学協議会『歴史評論』2008年3月号)と、それに応答した及川英二郎「林雄介『東アジア共通歴史教材を読んで』に苦言を呈する」(歴史科学協議会『歴史評論』2008年7月号)がある。
  - 2 『未来をひらく歴史』作成過程における論点や刊行後の活用方法、その成果と課題については、齋藤一晴『中国歴史教科書と東アジア歴史対話』(花伝社、2008年)を参照頂ければ幸いである。
  - 3 成田龍一「『東アジア史』の可能性—日本・中国・韓国=共同編集『未来をひらく歴史』(2005年)をめぐる」(小森陽一・崔元植・朴裕河・金哲編著『東アジア歴史認識論争のメタヒストリー「韓日、連帯21」の試み』、青弓社、2008年、129頁)。

史』の作成過程や教材の内容を改めて検討し、その成果と課題から学ぶことが求められているといえよう。

さらに日本では歴史対話のあり方やその方向性をめぐって議論が活発化しつつある。例えば、ヨーロッパにおける国際歴史教科書対話を専門とする近藤孝弘は、以下のように問題提起を行っている。近藤は家永教科書訴訟の「成果と限界の両方を見据えて新たな努力を早急に始める必要」について言及したうえで、<sup>4</sup> 裁判を支えた論理の一部が、「国家あるいは民主的に選ばれた政府による教育内容への介入の否定が、政治教育という考え方にとって障害となったことは否定できない」と述べている。<sup>5</sup> そしてヨーロッパで歴史問題の深刻化を防止する歴史政策が行われ、一定の成果を収めてきたことと東アジアにおける歴史対話の現状を比較しながら、「公権力による歴史問題に取り組む政治教育という観点にもう少し積極的であるべきではないか」と提起し、<sup>6</sup> 各国が歴史政策を具体化していくことによって「歴史対話をこえる」ことが可能であると指摘している。

一方、韓国では2007年に改定・告示された歴史科教育課程(日本の学習指導要領に相当)によって、高校選択科目として「東アジア史」の新設が決まった。すでにサンプル単元の開発が行われており、

---

4 近藤孝弘編著『東アジアの歴史政策 日中韓 対話と歴史認識』(明石書店、2008年、237~238頁)。

5 近藤孝弘編著『東アジアの歴史政策 日中韓 対話と歴史認識』(明石書店、2008年、237頁)。

6 近藤孝弘編著『東アジアの歴史政策 日中韓 対話と歴史認識』(明石書店、2008年、15頁)。

その報告書によれば、「政府が積極的に『東アジア史』新設という改定教育課程を打ち出したのは、東アジア各国の歴史認識共有の必要性和、民間次元の成果が土台になったとみられる。これは教育部で各界の意見を集めて推進している、一連の歴史教育強化政策でもあった」とまとめられている。<sup>7</sup> これは「東アジア史」の設置が、韓国政府の歴史政策の一環として行われていることを示している。

さらに日中、日韓の両政府間で行われている日中共同歴史研究と日韓共同歴史研究(第2次)において、そのメンバーには民間レベルの共通教材作成経験者が少なからず含まれている。例えば日中共同歴史研究の場合、中国側10名のうち、座長の歩平と栄維木の2名が『未来をひらく歴史』の編集を経験している。日韓共同歴史研究でも、韓国側16名のうち4名(辛珠柏・鄭在貞・玄明喆・河棕文)が民間レベルの教材作成にたずさわっている。これは民間レベルの歴史対話の経験を、政府レベルにも反映しようとする各国の歴史政策の表れと考えられる。

一方、共同研究を歴史事実の検証というよりも、むしろ政治・外交戦略と位置づける日本政府にとって、日本側のメンバーに民間レベルの共通教材作成経験者を入れるということは考えられない。これは歴史政策という角度から見ると、日本と中韓には大きな隔たりがあるといわざるをえないだろう。

---

7 三橋広夫監修・翻訳『高等学校「東アジア史」サンプル単元開発報告書』(2008年、54頁)。

このように東アジアにおける共通歴史教材の到達点と課題は、幾つかの点で今日的検討を加える必要がある。まず東アジアにおける共通歴史教材作成の特殊性を、ヨーロッパにおける経験と比較検討すること。次に共通歴史教材の作成に代表される歴史対話とは何を意味するのか、その担い手とは誰なのか、とうこと。そして、その担い手を育成するために求められているのは、あくまでも民間レベルの歴史対話を積み重ねていくことなのか、それとも各国政府による歴史政策の具体化なのか、ということなどである。

これらを言い換えれば、東アジアにおける歴史対話が、各国の歴史研究、歴史教育、歴史政策を問い直すことから始まることを意味しており、東アジアや東アジア史が誰にとっての何なのか、という議論をさらに深めていく必要がある時期に今日さしかかっている、ということになるだろう。

これらを明らかにするためには、具体的な対象を手がかりに検証することが最適であろう。そこで次章では、『未来をひらく歴史』の内容と作成プロセスを歴史対話の具体例として、分析を加えてみたい。

### 3. 『未来をひらく歴史』という歴史対話

『未来をひらく歴史』作成、刊行の成果は、日本の戦争責任・戦後責任をめぐる歴史事実を日中韓3国で共有

しようと試みたこと。そして作成過程や議論において、東アジアや東アジア史を問うことの必要性和難しさを編集メンバー全員が学ぶことになったことだと思われる。今日までのところ、いずれも初歩的な成果といわざるをえないが、下記に記すような歴史対話の可能性を示したという意味において、大きな意義を持つと思われる。

『未来をひらく歴史』の作成過程で、議論が最も白熱、平行線をたどったのは、日本の加害、中韓の被害という枠組みをどのように乗り越え、戦争被害者という存在から歴史にともに向き合い、共有するのか、という点である。それは東京大空襲や原爆の被害者と重慶爆撃の犠牲者とを同列で論じることができるのかをめぐって行われた激しい議論が一例といえる。

3国の議論がかみ合わなかった原因を分析すると、それが感情記憶や犠牲者数といった角度から往々にして行われ、肝心の東京や重慶の当時の日常というものがどのようなものであったのか、またそれがいかに破壊されたのか、というところまでを議論、共有することができなかったからだと思われる。それはたとえば被害国である中国側であっても、抗日戦争期の重慶の日常生活を論じることが容易ではなく、日本側にとってみればさらに難易度の高い課題であったと言ってよいだろう。

つまり上述した議論の迷走は、戦争被害者個人とその生活に3国の編集メンバーがたどりつけなかったことに起因しており、破壊された日常及び生活そのものを共有しないまま、『未来をひらく歴史』の編集、刊行の目標であった戦争の歴史を共有するというこ

とは、そもそも困難であったことを示しているのである。

これは歴史対話において、過去の歴史事実を共有するためには、まずその議論の土台として、日常生活を相互に認識しておくことが不可欠であることを示唆しており、それができなければ戦争被害者個人の尊厳回復や、歴史対話のあり方そのものを議論するに至らないことを意味している。よって日常というものをどれだけ個人レベルから克明に描くことができるのか、それを保障する多角的な研究が最も重要になる。また、日常をえがく、という行為は、描き手の主体性が問われることと同義であり、なぜそう描くのか、どうしてそうした研究手法を駆使して当時の日常を再現するのか、ということが問われることになる。これは実証研究の成果と課題を3国で共有するだけでは、必ずしも歴史対話を成立させるに至らないことを私たちに突きつけている。そこでは「実証以前」に各国の研究状況にとって、もしくは各国で暮らす国民として、また歴史と向き合う一個人として主体性を問い続ける意味を相互に把握、尊重しあうことから始めなければならなのである。

加害と被害という二元論的な議論や歴史叙述を克服し、複雑に重層化した歴史をひもとくためには、歴史と向き合う姿勢、主体性を問い続けることが欠かせない。それは私の言葉でいえば、歴史認識の自己点検と自己更新であり、歴史認識の共有、東アジアという存在やその歴史が、連帯・共有と自己・自国中心的な歴史理解、歴史像の押し付けと両義的に存在していることを意識的にとらえる思想的ないとなみである。

日中韓3国で共同編集・同時刊行された『未来をひらく歴史』

は、過去の戦争の歴史を共有する道筋を模索し、自己中心、自国中心の歴史認識を克服するための一例である。しかし、国家史を超えて関係史、地域史へと歴史や地域を把握する枠組みをいくら広げても、必ず枠組みの「内」と「外」にはラインが引かれ、そこからぼれ落ちる歴史、人びとの記憶、そしてそれらを生み出す日常生活が存在することは否定できない。よって、共通歴史教材を作成するという行為そのもののなかに、すでにそれを妨げる要素が内包されているといえるのである。それはいわば免疫源(抗原)から作り出される「ワクチン」と同じであり、決して歴史認識問題を解決する万能薬や特効薬ではないのである。よって自己中心、自国中心的な歴史認識、歴史観に誘う危うさと主体的に向き合うことができなければ、共通歴史教材の使い道を誤り、21世紀版のアジア主義、大東亜共栄圏構想の再来という「連帯」・「共有」を生み出す劇薬になってしまうのである。

共通歴史教材という存在、そしてその作成過程が明らかにした最大の成果は、それ自体が、二元論的ではなく両義的に存在しており、その仕組みを学ぶ実践的な空間を確保できる、ということだと思われる。それは、加害と被害、支配と従属、植民地化と近代化、戦争動員と戦争協力といったものが、それぞれ別々に存在して関係性を有しているのではなく、いずれも両義的に、多義的に存在していることを学ぶことが読者や学習者にとって可能となる。

つまり自国中心、自己中心的な歴史認識を克服するということは、つきつめれば自他国認識や自他認識を自己点検、自己更新

していくことを指し、歴史と向き合う個人の主体性を問い続ける行為なのである。その点検・更新履歴こそが、歴史認識の深まり、人間的な成長として培われ、国境を越えて共有される必要がある。よって『未来をひらく歴史』を、日本の戦争責任・戦後責任を問い、その歴史事実を共有するだけにとどめるのではなく、その活用方法、歴史対話のあり方を問い直す具体的な議論の場とすることが求められている。そのためには共通歴史教材の刊行を最終目的とするのではなく、それが歴史対話から導き出された到達点であり、また限界点でもあることを学ぶ姿勢が欠かせないのである。

『未来をひらく歴史』という歴史対話が明らかにしたことは、共通歴史教材の作成を、過去の克服だけに役立つのではなく、歴史の見方(研究手法)、描き方(歴史叙述)、そしてその担い手の育成(歴史教育)を、国境を越えて学び合う関係性をつくる今日的課題に取り組む必要性を改めて明確にしたことであろう。よって、東アジアとは何なのか、東アジア史とは、という問いには、それに答えるための手順と土台をつくることから始めなければならないのであり、何か合理的かつ固定的な概念で表現されたり、事前に用意されているものではないのである。

このように歴史対話とは、各国政府の歴史政策とは本質的に異なる次元で行われる個人的な思想的いとなみであり、あくまでも民間レベルで行われる研究、教育、叙述を通じた交流が基本になると考えられる。また、『未来をひらく歴史』を作成するうえで議論になった、時代区分、地域概念、方法論などは、東アジアや東アジア史のあり方を国境を越えて検討するうえで、避けて通れな

い論点であり、共通歴史教材の作成という具体的な議論の場を確保できる、という面において、今後も積極的に取り組んでいく必要があるといえるだろう。

#### 4. 共通歴史教材の作成から歴史対話論へ

共通歴史教材の作成は、各自の歴史認識の自己点検と自己更新の履歴を共有する場であり、歴史対話のあり方について国境を越えて問い続ける作業でもある。そこで求められるのは、各国において自国史の問い直しがどの程度おこなわれているのか、ということへの視野と、東アジアや東アジア史を模索、構築するための世界史像の主体的な形成をともなうことが欠かせない、ということである。とりわけ歴史認識問題を抱える東アジアにおいては、過去の戦争をいかに学ぶのか、という戦争学習と世界史像の主体的形成を結びつける必要がある。

ここで指摘した、東アジアや東アジア史の検討と戦争学習や世界史像の主体的な形成は、歴史対話という大きな一つの環として考える必要があるように思う。それは日本の若い世代にとって日本の戦争の歴史と向き合うことが難しい理由の一つに、自らの歴史認識や戦争観を点検・更新できるだけの東アジア認識、東アジア史像がない、ということがあるからだ。これを裏返せば東アジア史像や世界史像の主体的な形成のともなわない戦争学習は、歴

史対話に結びつかないことを意味している。

もう少し、具体的に論じてみよう。例えば日本の歴史教科書において「太平洋戦争」ではなく、「アジア太平洋戦争」という歴史用語が使われるようになったのは、2008年度からである。この「アジア太平洋戦争」という用語は、「太平洋戦争」と記述した場合、日本とアメリカの戦争がメインとなり、同時期の中国や東南アジアにおける支配や抵抗戦争について学ぶことを遠ざけかねないとして、歴史研究や歴史教育から提起され実現したものである。ところが世界史教科書において、アジア太平洋戦争において戦場となった太平洋に関する記述は、いずれの教科書もヨーロッパの大航海時代における植民地化、そしてその後の列強各国による再分割の部分に内容が著しく限定されており、その分量も数ページにとどまっているのが実状である。

日本の世界史教科書において、太平洋という地域の記述が具体化するのには、上原専禄によって地域世界が複合的に構成する構造全体、動態全体として提起された、13地域区分論に基づく『高校世界史』（実教出版）が、1978年に刊行されて以降である。ここでは伝統的な航海術や食生活、文化や伝説の継承、高度な文明を築いた古代遺跡の紹介など、太平洋で暮らす人びとの日常生活を歴史叙述に反映することが試みられ、生徒自身による世界史像の主體的な形成が目指されていた。しかし、こうした内容は、近年では限られた教科書にわずかに残るだけで、大幅に減少している。

1990年代の中頃以降、歴史修正主義の台頭や文部科学省による教科書検定の強化、そして教科書会社の自主規制などによって、

日本の歴史教科書における戦争記述が大幅に後退したことは周知の事実である。しかしむしろそれよりも大きな問題なのは、戦争記述や戦争学習を支える世界史像や東アジア史像の主体的な形成をうながす内容が、歴史研究の進展や歴史教育の教育実践の蓄積にも関わらず減少していることである。つまり若い世代にとって、太平洋の人びとの登場しないアジア太平洋戦争をいくら学んだところで、かつての戦争や日常生活と、自分たちの生きる現在とを結びつけ、自らの今日的課題として主体的に問題意識を深めていくことは難しく、まして東アジア史像や世界史像の主体的な形成をともなった歴史対話に取り組むことなどは、望むべくもないのが実状なのである。

こうした課題の原因は、これまで幾度となく指摘されてきているように、日本の歴史研究、歴史教育、歴史叙述におけるヨーロッパ中心史観、そしてそれを支えてきた日本史・西洋史・東洋史の三分研究体制と日本史・世界史の二分教授法に行き着くと思われる。

歴史教科書は歴史研究の成果と歴史教育における実践の蓄積、そしてそれらを反映させた歴史叙述の総体と位置づけられる。日本の世界史教科書で最大のシェアを今日まで維持してきた山川出版社の世界史教科書の場合、日本の戦後直後に構成された世界史像やそれを支える歴史観を、今日も残したままである。

この教科書の原型は、1949年に刊行された東京大学文学部史学会編『世界史概説』であり、これ以降、21世紀に入るまで、学習指導要領の変化や歴史研究の研究成果が盛り込まれるなどの影響

を受けているにも関わらず、章立てにめだつた変更はみられない。なかでも世界の一体化を近代ヨーロッパの成立にみる点、各地域の歴史をえがいたうえでそれらを結びつけていく展開になっている点、世界の一体化以降の内容がヨーロッパ中心に置かれている点など、ヨーロッパ中心史観で貫かれていることは半世紀以上、大きな変化はない。

よって日本の若い世代が直面しているのは、日本の戦争に関する事実を歴史教科書から歴史認識として深めることが難しいということと同時に、進んだヨーロッパと遅れた地域及びその歴史、という二元論的な歴史理解から抜け出ることが容易ではない、ということである。

今日の日本の若い世代は、世界各地の発展途上国が発展していくと、ヨーロッパやアメリカ、そして日本と同じ近代化の道筋をたどるであろうという意識と、そうした地域への差別や偏見とが矛盾しない一つの歴史認識として持ち合わせていることが少なくない。そのため世界史像の主体的な形成のともなわない歴史教科書や歴史教育の場合、日本の侵略を受けたアジアの国々は、戦前、戦後を問わず弱く遅れた存在であり、さらに戦争が終わると戦時中に甚大な被害をもたらされたにも関わらず、日本のような近代化のモデルを今日までめざしているという自国中心的な歴史認識に陥りかねないといえるだろう。

ここには戦場の諸相や占領・植民地下におかれた人びとへの視野を欠いて、進んだ強いものが歴史をつくり、遅れた弱いものが従うという構図が存在している。さらにたとえ両者の間で戦争な

どの矛盾が発生しても、その構造は変わるどころか、むしろ遅れた弱いものの側から強化している歴史がある、という認識になりかねない。つまり戦争学習と世界史像の主体的な形成が結びつかなければ、そして世界史教科書や歴史教育に存在するヨーロッパ中心史観、言い換えれば二元論的な歴史認識を根底から覆す仕組みと具体的な方法が学び手に用意されなければ、いくら日本の戦争犯罪を教えられたところで、アジアとの歴史対話を可能とする歴史認識を形成することは難しいのである。

これは歴史研究と歴史教育の関係性から考えるうえでも非常に重要である。日本の戦争犯罪研究は、1980年代以降、教科書問題や戦争被害者本人による証言などを契機として、大きな進展をみたといつてよい。しかし、そうした歴史研究の成果は、世界史像の主体的な形成と充分結びついてきたといえるだろうか。また歴史教育でも戦争学習を通じて戦争を知ることやアジアへの視野を育てることを意識しながら、そうした方法や視野から世界史像の形成へ、そしてそれを土台とした戦争犯罪研究の課題を提起してきただろうか。

とりわけ近年、日本の歴史研究では帝国意識というテーマが取り上げられることが増えている。それは世界史像や世界観を問い直す取り組みであり、歴史研究のあり方を根本的に考え直すものだといえる。しかし、そうした取り組みが歴史教科書や歴史教育のあり方への異議申し立てをともなわなければ、東アジアとは、東アジア史とは、といった問いに答えるための方法や手順を模索することは難しいだろう。

上述してきたような諸課題を、各自の点検と更新によって解決するための具体的な場を、国境を越えて提供する役割を担うのが、共通歴史教材の作成ということになるだろう。東アジアにおける共通歴史教材の作成は、歴史和解という目標をふまえつつ、さらに各国の研究、実践、叙述を問い直すことを通じて、東アジア、東アジア史のあり方を議論していくことに役立てられなければならない。

## 5. おわりに

本稿では、東アジアにおける共通歴史教材の到達点と課題、そして作成過程における論点から何を学ぶことができるのかについて、『未来をひらく歴史』を例に論じてきた。そこから見えてくるものは、共通歴史教材の作成や刊行を、歴史和解や歴史対話の具体例として分析を加えると同時に、各国の歴史研究、歴史教育、歴史叙述が抱える根本的課題にどのように向き合えばよいのか、またその延長線上にある東アジアとは、東アジア史像とは、という問いに応える糸口を与えてくれる存在として研究対象にする必要がある、ということであった。

今日、敗戦から60年余りがたつにも関わらず、日本の侵略戦争、占領・植民地支配の歴史をめぐる歴史認識問題は解決されるどころか、むしろアジアとの摩擦を強めている。すでに日本の人口の4分の3以上は戦争非体験世代である。それはアジア各地で

暮す人々の多くも、すでに戦争を知らない世代であることを意味している。今後、こうした戦争非体験世代同士が、日本の戦争責任・戦後責任をめぐる歴史認識問題を、どのように対話、克服、継承していくことが求められているのかを考えた場合、日本の侵略戦争という歴史事実について国境を越えて共有するだけでなく、戦後半世紀以上がたつ今日まで、どのように戦争記憶が継承されてきたのか、ということまでを視野に入れた対話が欠かせない。その際、異なる歴史認識や戦後史経験をふまえた議論を可能とする具体的な対話の土台が必要になる。

では、いったいどのような対話の土台を、日本や東アジア各国の研究者や教育者、そして各地で暮す一人ひとりが用意できるだろうか。まさに今日、アジアと向き合う姿勢、歴史認識を深める方法としての歴史対話のあり方が問われているとあってよいだろう。そうしたなか作成された共通歴史教材は、具体的な対話の場となりうるが、それがそのまま歴史対話を成立させるのではないことを改めて確認しておく必要がある。あくまでも作成過程において、自国中心的な歴史研究、歴史教育、歴史叙述を自己点検・自己更新することによって、アジアや過去の歴史と向き合う姿勢を問い続けることが、異質の他者と向き合い、自らの歴史認識を深めることを可能にするのである。よって歴史対話とは個人レベルで行われるべきものであり、それを同じように国家レベルの歴史政策として求め実現することとは、歴史対話のあり方を考えるうえで必ずしも一致しないというのが私の現在の考えである。この歴史対話から歴史政策へ、という道筋については、今後さら

に議論が必要になっていくであろう。

歴史対話のあり方を検討することは、歴史研究、歴史教育、歴史叙述いずれかの役割なのではなく、三位一体による対応が求められる、それぞれの存在意義や、歴史と向き合い現代社会を生きる私たちの主体性を問い続けていくことに他ならないのである。こうしたいとなみ全体を、一つの研究対象とし、歴史対話論という新たな学問研究分野として構築していくことを提起したい。それを本稿では、共通歴史教材の作成から歴史対話論へ、と表現した。



동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION



동북아시아역사재단

NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION

## 東アジアの知識交流と歴史記憶

2009年 10月 28日 第1版 印刷

2009年 11月 5日 第1版 発行

編 韓国東北亜歴史財団

出 版 韓国東北亜歴史財団

登 録 第312-2004-050号(2004年 10月 18日)

住 所 韓国 首爾特別市 西大門区 義州路 77 林光ビル

T E L 82-2-2012-6065

F A X 82-2-2012-6187

E-mail book@historyfoundation.or.kr

© 韓国東北亜歴史財団, 2009

ISBN 978-89-6187-145-7-93900

本書の内容の一部、あるいは全部を無断で複写、複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になりますので、必要の場合は、あらかじめ小社あて許諾を求めてください。